

山梨県北杜市

南沢遺跡

県営耕作放棄地解消・発生防止基盤整備事業
白州地区鳥原工区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2020

山梨県中北農務事務所
北杜市教育委員会

山梨県北杜市

みなみさわ
南沢遺跡

県営耕作放棄地解消・発生防止基盤整備事業
白州地区鳥原工区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2020

山梨県中北農務事務所
北杜市教育委員会



南沢遺跡 調査地点遠景 南東から撮影
(写真上方が1区、下方が2区)



1区全景



2区全景

例　　言

- 本書は、県営耕作放棄地解消・発生防止基盤整備事業白州地区鳥原工区ほ場整備に伴い北杜市教育委員会が平成 29 年度に実施した南沢遺跡発掘調査の報告書である。
- 調査地点は山梨県北杜市白州町鳥原 729 番地ほか 26 筆で、調査面積は 2,003 m²である。
- 発掘調査は北杜市が実施し、調査経費は山梨県中北農務事務所と北杜市が負担した。
- 現地における発掘調査は平成 29 年 12 月 11 日に着手し、平成 30 年 3 月 30 日に完了した。整理作業は平成 30 年 4 月 9 日に着手し、令和 2 年 3 月 31 日に完了した。
- 調査組織は以下の通りである。

調査主体 …… 北杜市教育委員会教育長 堀内正基
調査事務局 …… 北杜市教育委員会学術課
調査担当 …… 北杜市教育委員会学術課文化財担当 佐野隆
- 発掘調査において、調査支援業務を特定非営利法人茅ヶ岳歴史文化研究所に、出土木材の理化学分析業務をバリノ・サーヴェイ株式会社と株式会社パレオ・ラボに委託した。
- PJ-3 号住居出土炭化材の年代測定報告は、小林謙一氏（中央大学）から玉稿を賜り、第 4 章第 2 節に掲載した。
- 本書は佐野が執筆、編集した。
- 本調査に係る調査記録および出土品は北杜市教育委員会学術課（埋蔵文化財センター）が保管している。
- 本書の付属 DVD に以下の資料を収録した。本書と併せて参照して頂きたい。
 - 調査区全体図（遺構名入り）
 - 調査区全体図（遺構名なし）
 - 第 2 表 土器観察表
 - 第 3 表 石器観察表
 - 第 4 表 土坑ビット観察表
 - 第 6 表 種実等圧痕一覧表
 - 種実等圧痕が検出された土器実測図
 - 種実圧痕写真

凡　　例

- 調査地点の中心は、北緯 35 度 49 分 53 秒、東経 138 度 17 分 48 秒である。本書中の地図は国土地理院電子地形図のほか北杜市地理情報システム収録図を用いた。
- 報告書中の土壤および土器胎土の色調は、『新版標準土色帖』財團法人日本色彩研究所に拠った。
- 報告書中の遺構図および遺物実測図の縮尺は、各図版に示す。
- 土坑観察表中の断面形状の略記号は以下の形状を示す。



目 次

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と調査の方法

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の方法	1

第2章 遺跡の概要と環境

第1節 遺跡の概要	9
第2節 地理的環境	9
第3節 歴史的環境	9

第3章 縄文時代の遺構と遺物

第1節 壱穴住居	11
第2節 挖立柱建物	19
第3節 土坑とピット	20
第4節 遺構外出土の遺物	22
第5節 発掘調査で確認された扇状地堆積層	135

第4章 樹種同定、年代測定と種実圧痕調査

第1節 PJ-3号住居出土炭化材の樹種同定	136
第2節 PJ-3号住居出土炭化材の炭素14年代測定	138
第3節 扇状地堆積層出土炭化材の樹種同定と年代測定	143
第4節 種実等の圧痕調査	147

写真図版 1～32

151～182

抄録

奥付

第1章 調査に至る経緯と調査の方法

第1節 調査に至る経緯

山梨県中農務事務所と北杜市は、耕作放棄地の発生を防止するため北杜市白州町鳥原 729 番地(ほか 21,000 m²)では場整備を計画した。計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地「南沢遺跡」(集落跡・縄文時代)に該当する(第2図)ことから北杜市教育委員会学術課は、山梨県中北農務事務所、北杜市農政課と協議し、遺跡の時代と範囲、遺構の分布状況を確認するための試掘調査を実施することとした。

試掘調査は、平成 26 年 3 月 4 日から平成 26 年 3 月 31 日に実施し、計画地内で試掘坑 31 ヶ所を発掘した。その結果、縄文時代の住居跡 2 軒と土器、石器が検出された。試掘調査の方法と結果は次節で詳述する。

試掘調査の結果を受けて市学術課は中北農務事務所、市農政課と埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、全面的な遺跡の現状保存は困難であることから、着工前に記録保存のための発掘調査を実施することとした。

発掘調査は、平成 29 年 12 月 11 日に着手し平成 30 年 3 月 30 日に終了した。調査経費は 20,447,365 円で山梨県が 17,982,000 円を負担し、農家負担分に相当する調査経費の 10%、2,465,365 円を北杜市教育委員会が負担した。市教育委員会が負担した経費のうち 999,000 円は国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付を受けた。

平成 30 年度は出土品と調査記録の整理作業を行った。調査経費は 14,241,262 円で、山梨県が 12,816,000 円(90%)を負担し、北杜市教育委員会が 1,425,262 円(10%)を負担した。

令和元(平成 31)年度は発掘調査報告書原稿を作成し、報告書を印刷製本した。調査経費は 14,504,411 円で 13,053,970 円を山梨県、1,450,441 円を北杜市教育委員会が負担した。市教育委員会が負担した経費のうち 725,000 円は国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金の交付を受けた。

本件の文化財保護法等の手続きに係る公文書は以下のとおりである。

平成 26 年 1 月 6 日	中北農第 4757 号 埋蔵文化財の試掘調査の実施について(依頼)
平成 26 年 4 月 16 日	北杜学術第 47 号 埋蔵文化財の試掘調査の実施結果について(回答)
平成 29 年 11 月 1 日	中北農第 4836 号 埋蔵文化財発掘の通知について
平成 29 年 11 月 9 日	北杜学術第 547-1 号 埋蔵文化財発掘の通知について(進達)
平成 30 年 2 月 5 日	教学文第 2863 号 周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)
平成 30 年 2 月 9 日	北杜学術第 547-3 号 周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(伝達)
平成 29 年 12 月 11 日	北杜学術第 547-4 号 埋蔵文化財発掘調査の報告について
平成 30 年 3 月 30 日	北杜学術第 547-5 号 埋蔵文化財調査終了報告について
平成 30 年 4 月 5 日	北杜学術第 14 号 埋蔵物発見届
平成 30 年 4 月 5 日	北杜学術第 14-1 号 埋蔵文化財保管証
平成 30 年 4 月 5 日	北杜学術第 14-1 号 埋蔵文化財保管請証
平成 30 年 4 月 5 日	埋蔵文化財提出書
平成 30 年 4 月 13 日	教学文第 187 号 埋蔵文化財の認定について(通知)
平成 30 年 4 月 13 日	教学文第 187 号 埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属について(通知)

第2節 発掘調査の方法

平成 25 年度に実施した試掘調査は、ほ場整備の計画地 21,000 m²において、人力で 31 ヶ所の試掘坑を発掘し、埋蔵文化財の有無、分布範囲、遺構の時代を確認した。試掘坑は 2m × 2m で、試掘面積は 124 m²で、工事面積の 0.6% である(第4図)。

試掘調査の結果、縄文時代の住居跡と推測される遺物の集中2ヶ所を確認した。試掘調査時の地形から工区の中央に西から東へ延びる谷地形が想定され、試掘調査でも北側の尾根筋から南側へ下る地形が確認された。計画地は年代が不確かながら土石流による灰白色砂が厚く堆積していることも判明した。その厚さは計画地北側の尾根筋で数十cm、工区中央の谷内では2m以上に及ぶ。

以上の調査結果に基づき中北農務事務所と市学術課で協議し、記録保存のための発掘調査は、施工時に削平され、あるいは十分な遺構保護層が確保できないと見込まれる工区北側の尾根を中心に実施することとし、施工時の撤去が及ぼす、遺構保存のために十分な保護層が確保できる範囲は現状保存することとした。

調査範囲の表土剥取業は、0.8 m²/パックボーナーを用いて厚さ20~100cmの表土（耕作土および土石流堆積砂）を剥ぎ取り、遺構確認面である黄褐色砂質の地山を露出させた。表土剥ぎ取り後は人力で遺構を精査し、最終的に2,003 m²の調査区域を定めた。

調査の記録写真は中判カラーネガフィルム、35mmデジタルカメラを使用して撮影した。遺構等の微細図、断面図等は、オルソ合成した写真をデジタルトレースし、あるいは実測して1/10、1/20で作図した。遺跡の立地環境、遺構の配置を記録するため、無人航空機（ドローン）を用いて空中撮影した。

遺構形状と遺物の出土位置は、日本測地系2011による公共座標による基準点をもとに光波測量機で測量図化した。一部の遺構はオルソ合成した写真をデジタルトレースして作図した。

出土した遺物は全点注記を原則とし、一部微小な土器破片、石器は注記を省略、除外した。注記には南沢遺跡の遺跡番号6-004に遺構番号と遺物番号を記した。遺構は以下の略記号を用いた。

PJ	縄文時代の住居跡	DK	土坑（概ね直径60cm以上）	MZ	溝跡	SX	性格不明の遺構
HO	掘立柱建物跡	PT	ピット（概ね直径60cm未満の柱穴と思われる小穴）	SD	堆土跡	TR	試掘溝

出土した土器は接合復元したうえで、遺構の時期、性格を示す資料を抽出して実測図を作図し観察表を作成した。石器、金属製品も同様である。実測図等はデジタルトレースし、DTP編集して発掘調査報告書の印刷原稿を作成した。

出土土器の観察所見は第2表に記載した。石器の観察所見は第3表に記載した。土坑とピットの属性は、第4表に記載した（第2~第4表は付属DVDに収録）。遺構の時期は、山梨県史資料編2（山梨県1999）に従った。

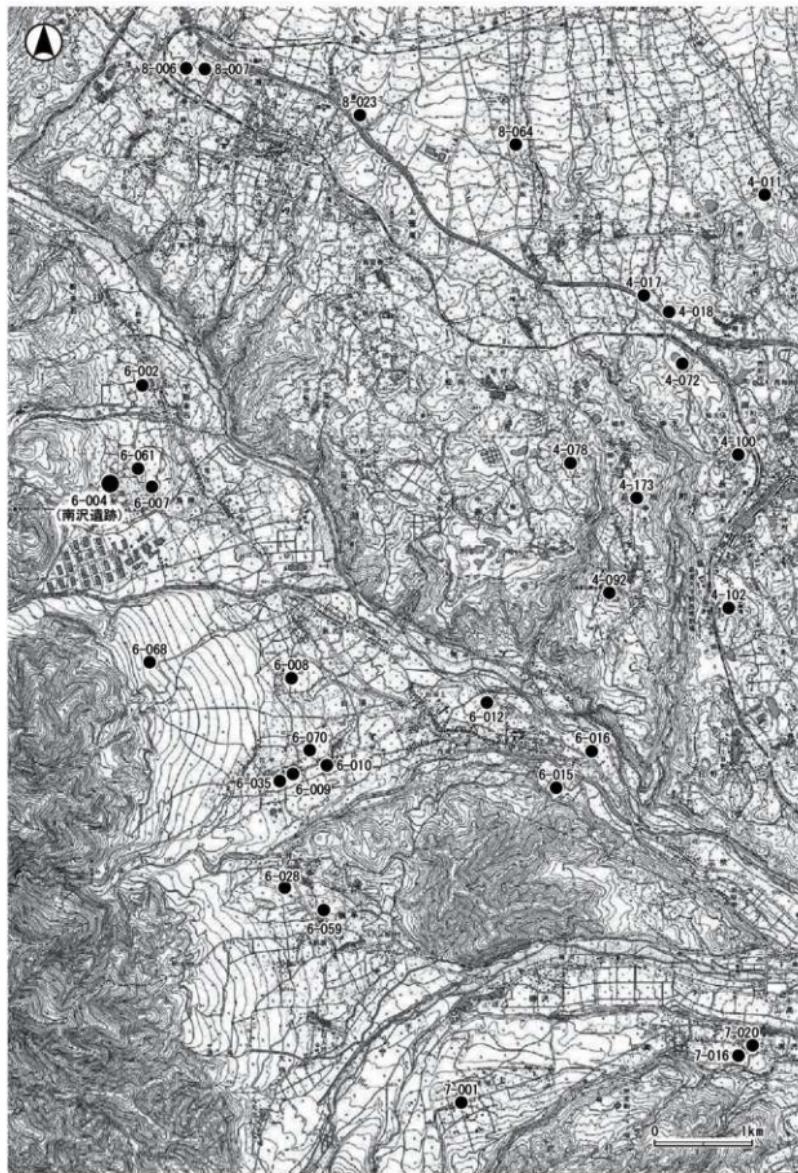
遺構の規模は以下の基準で計測した。

住居は、住居の平面形に照らして出入口一戸一奥壁を結ぶ線を主軸線とし、その長さを計測した。住居中心で主軸に直交する軸線を副軸線とし、その長さを計測した。土坑は、正円形の土坑は直径を示し、椭円形、不整円形の場合は、もっとも長い位置を長軸とし、遺構中心で長軸に直交する長さを短軸として計測した。掘立柱建物は、掘立柱建物を構成する柱穴の中心間の距離を柱間寸法として記載した。土器は遺構の時期、性格を示すと思われる個体、破片を抽出して図化し、遺構から出土した土器の総重量を明示した。石器の器種名は慣用された石器名称を使用した。不定形な石器、機能が不明な石器はあえて石器名称を特定せず、単に剥離のある剥片などと表現した。より多くの資料を図化し、遺跡出土の石器群の全体像を提示するため、3Dスキャナー画像を実測図に代えて使用した。3Dスキャナーはキーエンス社製 VL-300 を使用した。3次元情報を有するファイルを保存しております。必要なら提供可能であるが、データ容量が大きいため本報告書には添付していない。

定形的な石器、使用痕が認められる剥片等は全点を図化するよう努めたが、図化からもれた剥片、礫等も石器観察表に掲載し、全体像を提示することとした。石器の大きさは機能部の位置、石器の破損状況にかかわらず最も長い位置を長さ、最も幅広い位置を幅、最も厚い位置を厚みとして計測した。

土石流堆積層の形成年代を確認するため堆積層から採取した炭化木材片の樹種同定と年代測定をパリノ・サーザイエ株式会社に委託した。発掘調査で検出された焼失住居で採取した炭化木材の樹種同定を株式会社パレオ・ラボに委託した。

本調査にかかる諸記録、写真、出土品はすべて北杜市埋蔵文化財センターが保管している。



第1図 南沢遺跡の位置と周辺遺跡 (1/50,000)

語彙番号	語彙名	町名	時代	造像様	著者	発行年	報告書名	発行機関
4-011	稻屋敷	北村市 長坂町	式文中期後葉	笠穴住居 1軒。	小畠(津住之)・ 田中真貴	1987	「西原遺跡・附当十三塗遺跡」(第2次、 昭和52年調査)	長岡町教育委員会
4-017	西下屋敷	北村市 長坂町	式文中期後葉	土塁 7基 (5面台 1基・輪郭不明)、土坑 2基 (式文後葉 4・ 5世紀)、土塹 4基 (式文後葉 4・後葉期 6)、ビット 10基 (式文後葉 4・ 5世紀)、土塹 1基 (後葉期 6)、土坑 7基 (5面台 1基・輪郭不明)、 土塹 4基 (式文後葉 4・後葉期 6)、土坑 1基 (後葉期 6)、輪郭不明 の土塁 4基。	村松佳伸	2005	「西下屋敷遺跡」	北村市教育委員会 第5集
4-018	新田森	北村市 長坂町	式文中期後葉	笠穴住居 4軒 (式文後葉 4・中輪郭型 2・後葉期 2・後葉期 4・ 5世紀)、土塹 1基 (後葉期 4・輪郭不明)、輪郭不明 4軒。	村松佳伸	2005	「新田森遺跡」	北村市教育委員会 第6集
4-072	越中久保	北村市 長坂町	式文中期後葉	笠穴住居 4軒、加須利 1基 (式文後葉 2・後葉期 2・土坑 30基 (うち留保レ 申根 1基)、跡名舟 2 基)と輪郭不明のビット 20基。	小山山崎・ 吉田光男	2002	「越中久保遺跡」	長岡町教育委員会 第3集
4-076	東柴 4	北村市 長坂町	式文中期後葉	笠穴住居 1軒、土坑 8基、ビット 5基、石器遺物 1基。	小宮山隆	2001	「東柴 4 (第1回)」「(第2回 平成 20 年度年報)」	北村市文化財保存会 財团法人会
4-092	渋谷白樺 美術館前庭	北村市 長坂町	式文中期中葉	笠穴住居 1軒、土坑 3基 (うち前輪郭 1基)。	村松佳伸	2003	「渋谷白樺美術館前庭遺跡」	長岡町教育委員会 第5集
4-109	高松	北村市 長坂町	式文中期後葉	笠穴住居 1軒 (式文中期後葉 1・後葉期 1・土坑 10基、溝 1条 (式文後葉 中期)、跡名舟 2 基)と輪郭不明のビット 20基。	小山山崎・ 吉田光男	1999	「高松遺跡」(ひやま考古学 平成 10 年度年報)	北丘摩市立文化 財団法人会
4-102	酒看場 G 区	北村市 長坂町	式文中期前葉 ~中期中葉	井戸内 1基・柱 1基。	小宮山隆	1996	「酒看場遺跡 (G 区)」	長岡町教育委員会 第 11 集
4-102	酒看場	北村市 長坂町	式文中期初期 ~中期後葉	笠穴住居 (後葉期 2・後葉期後葉 3・中輪郭型 2・ 中輪郭型 4・中輪郭型 5・後葉期後葉 1・式文後葉 1・ 式文後葉 2・中輪郭 1・中輪郭 2・中輪郭 3・ 中輪郭 4)、土坑 1基 (後葉期後葉 1) と留保 1基。	保坂康夫	2005	「酒看場遺跡 (第 1 ~ 3 次)」(第 1 回)	山形県教育文化財博物館 収蔵品 第 5 集
			式文中期初期	笠穴住居 (後葉期 2・後葉期後葉 3・中輪郭型 2・ 中輪郭型 4・中輪郭型 5・後葉期後葉 1・式文後葉 1・ 式文後葉 2・中輪郭 1・中輪郭 2・中輪郭 3・ 中輪郭 4)、土坑 1基 (後葉期後葉 1) と留保 1基。	野代幸和	1997	「酒看場遺跡 (第 1 ~ 2 次)」	山形県教育文化財博物館 収蔵品 第 5 集
			式文中期初期	笠穴住居 (後葉期 2・後葉期後葉 3・中輪郭型 2・ 中輪郭型 4・中輪郭型 5・後葉期後葉 1・式文後葉 1・ 式文後葉 2・中輪郭 1・中輪郭 2・中輪郭 3・ 中輪郭 4)、土坑 1基 (後葉期後葉 1) と留保 1基。	保坂康夫・ 村松佳伸	1997	「酒看場遺跡 (第 3 次)」	山形県教育文化財博物館 収蔵品 第 5 集
			式文中期中葉	笠穴住居 (後葉期 2・後葉期後葉 3・中輪郭型 2・ 中輪郭型 4・中輪郭型 5・後葉期後葉 1・式文後葉 1・ 式文後葉 2・中輪郭 1・中輪郭 2・中輪郭 3・ 中輪郭 4)、土坑 1基 (後葉期後葉 1) と留保 1基。	保坂康夫・ 村松佳伸	1998	「酒看場遺跡 (第 3 次)」	山形県教育文化財博物館 収蔵品 第 5 集
			式文中期後葉	笠穴住居 (後葉期 2・後葉期後葉 3・中輪郭型 2・ 中輪郭型 4・中輪郭型 5・後葉期後葉 1・式文後葉 1・ 式文後葉 2・中輪郭 1・中輪郭 2・中輪郭 3・ 中輪郭 4)、土坑 1基 (後葉期後葉 1) と留保 1基。	保坂康夫・ 村松佳伸	1997	「酒看場遺跡 (第 4 次)」	山形県教育文化財博物館 収蔵品 第 5 集
			式文中期後葉	笠穴住居 (後葉期 2・後葉期後葉 3・中輪郭型 2・ 中輪郭型 4・中輪郭型 5・後葉期後葉 1・式文後葉 1・ 式文後葉 2・中輪郭 1・中輪郭 2・中輪郭 3・ 中輪郭 4)、土坑 1基 (後葉期後葉 1) と留保 1基。	保坂康夫・ 村松佳伸	1998	「酒看場遺跡 (第 5 次)」	山形県教育文化財博物館 収蔵品 第 5 集
			式文中期後葉	笠穴住居 (後葉期 2・後葉期後葉 3・中輪郭型 2・ 中輪郭型 4・中輪郭型 5・後葉期後葉 1・式文後葉 1・ 式文後葉 2・中輪郭 1・中輪郭 2・中輪郭 3・ 中輪郭 4)、土坑 1基 (後葉期後葉 1) と留保 1基。	保坂康夫・ 村松佳伸	1999	「酒看場遺跡 (第 6 次)」	山形県教育文化財博物館 収蔵品 第 5 集
4-173	健康村	北村市 長坂町	式文中期初期	埋壁 1基、土坑 1基、網状不明の内部 1基・溝 1条。	岩曾敬之助	1994	「健康村遺跡」	新潟県区民健康村 調査報告
6-002	板橋	北村市 白石町	式文中期後葉	式文中期後葉	小林 光	2000	「板橋遺跡」	白石町教育委員会
			式文中期後葉	式文中期後葉	小林 光・ 五味孝彦	2005	「板橋遺跡」	北村市教育委員会 第 4 集
			式文中期中葉	式文中期中葉	小野川 雄	2011	「板橋遺跡」	北村市教育委員会 第 5 集
			式文中期初期	式文中期初期	小野川 雄	2011	「板橋遺跡」	北村市教育委員会 第 5 集
			式文中期後葉	式文中期後葉	小野川 雄	2011	「板橋遺跡」	北村市教育委員会 第 5 集
			式文中期後葉	式文中期後葉	小野川 雄	2011	「板橋遺跡」	北村市教育委員会 第 5 集
			式文中期後葉	式文中期後葉	小野川 雄	2011	「板橋遺跡」	北村市教育委員会 第 5 集
6-007	上小原	北村市 白石町	式文中期後葉	式文中期後葉	松本 光	2000	「板橋遺跡」	白石町教育委員会
6-009	北原	北村市 白石町	式文中期中葉	式文中期中葉	松本 光・ 五味孝彦	2005	「北原遺跡」	北村市教育委員会 第 4 集
			式文中期後葉	式文中期後葉	佐野 勝	1989	「北原遺跡」	北村市教育委員会
			式文中期初期	式文中期初期	佐野 勝	1998	「北原遺跡 (第 2 次)」	北村市教育委員会 第 4 集
			式文中期後葉	式文中期後葉	佐野 勝	1997	「北原遺跡 (第 3 次)」	北村市教育委員会 第 4 集
6-008	北原	北村市 白石町	式文中期初期	笠穴住居 2軒。	松本 光	2000	「北原遺跡」	未報告
6-009	竹芋 1	北村市 白石町	式文中期中葉	式文中期中葉	佐野 勝	2016	「竹芋 1 遺跡」	北村市教育委員会 第 4 集
6-010	轟口	北村市 白石町	式文中期中葉	式文中期中葉	佐野 勝	2016	「轟口」	近江市立行方定
6-012	大久保	北村市 白石町	式文中期中葉	笠穴住居 2 軒。	村松佳伸	2009	「大久保 (近江) 遺跡」	近江市立行方定叢書 第 4 集
6-015	根古瀬	北村市 白石町	式文中期後葉	笠穴住居 12 戸。中輪郭型を主とした中輪郭型・後葉にかけての晩 期の土塁。	宇野 修	1985	「根古瀬遺跡」	白石町教育委員会
6-016	星教平	北村市 白石町	式文中期前半	土坑 1基 (式文中期 1・中輪郭 2) と土坑不明の土坑 20 基。	松本 光	1991	「星教平遺跡」	白石町教育委員会
6-020	上北川	北村市 白石町	式文中期後葉	笠穴住居 22 戸 + 2 戸。基礎敷設。網状不明の土坑 22 基。柱跡。灰 灰土跡。	松本 光・ 武田雄二	1993	「上北川遺跡」	白石町教育委員会
6-025	桜井 1	北村市 白石町	式文中期中葉	中輪郭型・後葉中期 住居 12 戸。	松本 光	2000	「桜井 1 遺跡」	未報告
6-059	吉瀬所東	北村市 白石町	式文中期前半	笠穴住居 1 戸。	松本 光	1999	「吉瀬所東遺跡」	白石町教育委員会

第1表 周辺遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	町名	時代	遺構数	編著者	発見年	報告書名	発行機関
6-061	新米石段 北村市 白糸町	城文中開墾業	蟹穴造居 4軒、土坑 2基。	折井 駿	1990	「新米石遺跡」	白糸町教育委員会	
6-062	大原 I 北村市 白糸町	城文中開墳業	土坑 1基。	杉本 実	1997	「大原 I 遺跡」[ハケ谷考古 平成 9年度年報]	北巨摩市町村文化財担当者会	
6-070	竹宇 3 北村市 白糸町	城文中開墳業	蟹穴造居 4軒。	坂口広太・ 佐野理	2007	「竹宇 3 遺跡」 北村市文化財担当者会	北村市教育委員会	
7-001	真原 A 北村市 武川町	城文中開墳業	蟹穴造居 2軒、土坑。		1997	「真原 A 遺跡」[ハケ谷考古 平成 9年度年報]		
			蟹穴造居 2軒、土坑 2基。	武田真人	1998	「真原 A 遺跡」[ハケ谷考古 平成 9年度年報]		
			蟹穴造居 1軒、土坑 2基。		1999	「真原 A 遺跡」[ハケ谷考古 平成 10年度年報]		
			蟹穴造居 4軒、土坑 10基。	平山進一・ 坂口広太	2003	「真原 A 遺跡」[ハケ谷考古 平成 14年度年報]	北巨摩市町村文化財担当者会	
			蟹穴造居 4軒、土坑 6基。		2004	「真原 A 遺跡」[ハケ谷考古 平成 15年度年報]		
			蟹穴造居 2軒、土坑 20基。(保存) (これまでの全調査で蟹穴造居 2軒、土坑約 30基)。	坂口広太	2006	「真原 A 遺跡 第 7-10 時期」[北村市文化財年報 不定期]	北村市教育委員会	
			蟹穴造居 1軒、土坑多数。		2007	「真原 A 遺跡」[北村市文化財年報 平成 19年度]	北村市教育委員会	
7-016	真原 B 北村市 武川町	城文中開墳業	蟹穴造居 1軒。					
			新道一隅内の住居 1軒。	平山進一	2002	「真原 B 遺跡」[ハケ谷考古 平成 19年度]	北巨摩市町村文化財担当者会	
7-020	真原 A 北村市 武川町	城文中開墳業	新道一隅内の住居 4軒。					
			蟹穴造居 1軒、土坑群。	武田真人	1999	「真原 A 遺跡」[ハケ谷考古 平成 10年度年報]		
			蟹穴造居 1軒、土坑 6基	平山進一・ 坂口広太	2004	「真原 A 遺跡」[ハケ谷考古 平成 15年度年報]	北巨摩市町村文化財担当者会	
8-006	沢の田 北村市 小瀬町	城文中開墳業	城文中時代の住居 6軒 (井戸 1軒・礎文 5軒)。城文中時代の土坑 10基 (窓枠 1軒・中耕跡 1軒)。	佐野健二	1984	「沢の田遺跡」	小瀬町教育委員会	
			城文中中開業					
			蟹穴造居 6軒、井戸 1軒。井戸 1軒・小窓文 5軒。城文中時代の土坑 10基 (窓枠 1軒・中耕跡 1軒)。					
8-007	中原 北村市 小瀬町	城文中開墳業	蟹穴造居 6軒 (中耕跡 1軒・窓枠 1軒)。城文中時代の土坑 10基 (窓枠 1軒・中耕跡 1軒)。	木本 健	1974	「山梨県中央道埋蔵文化財伝承地発掘調査報告書—北巨摩郡中原町(白糸河内)」	山梨県教育委員会	
			蟹穴造居 6軒 (中耕跡 1軒・窓枠 1軒)。城文中時代の土坑 10基 (窓枠 1軒・中耕跡 1軒)。		2001	「中原 300-1 号居跡」[ハケ谷考古 平成 12年度年報]	北巨摩市町村文化財担当者会	
			蟹穴造居 6軒 (中耕跡 1軒)。	佐野健二	2003	「中原 300-1 号居跡」[ハケ谷考古 平成 14年度年報]		
8-023	上平出 北村市 小瀬町	城文中開墳業	蟹穴造居 6軒 (中耕跡 1軒)。城文中時代の土坑 6基 (中耕跡 1軒・窓枠 1軒)。	木本 健	1974	「山梨県中央道埋蔵文化財伝承地発掘調査報告書—北巨摩郡上平出町(白糸河内)」	山梨県教育委員会	
			蟹穴造居 6軒 (中耕跡 1軒・窓枠 1軒)。城文中時代の土坑 6基 (中耕跡 1軒・窓枠 1軒)。					
8-064	雅八田 北村市 小瀬町	城文中開墳業	蟹穴造居 1軒。	佐野健二・ 鈴木 兼	1992	「西の入道跡・雅八田遺跡」 山梨県埋蔵文化センター 調査結果報告書	山梨県教育委員会	

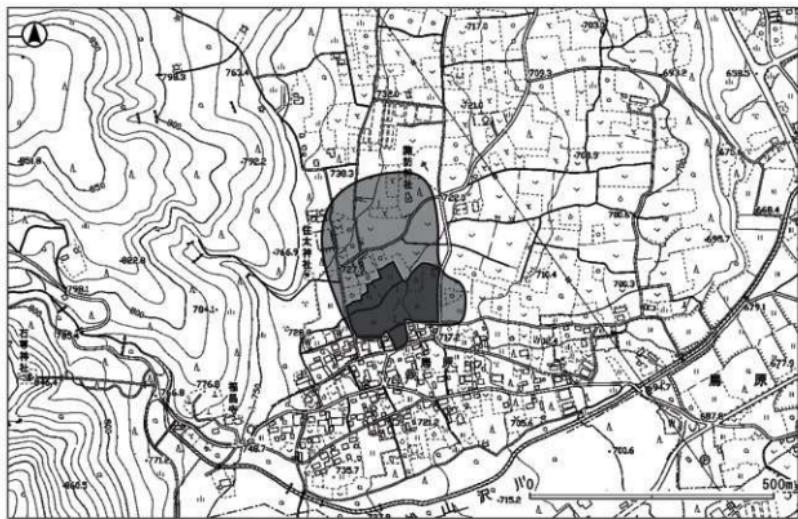
第 1 表 周辺遺跡地名表



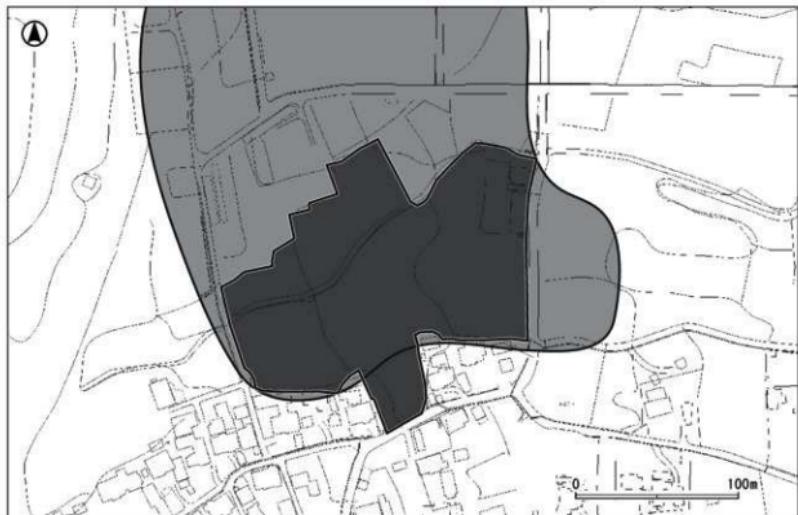
1 区の造構検出状況を南東から撮影。写真右下の落ち込みは PJ019 号住居。現状保存した造構。



2 区 PJ012 号住居の発掘作業状況を西から撮影。写真上方は現状保存区域とした農地。



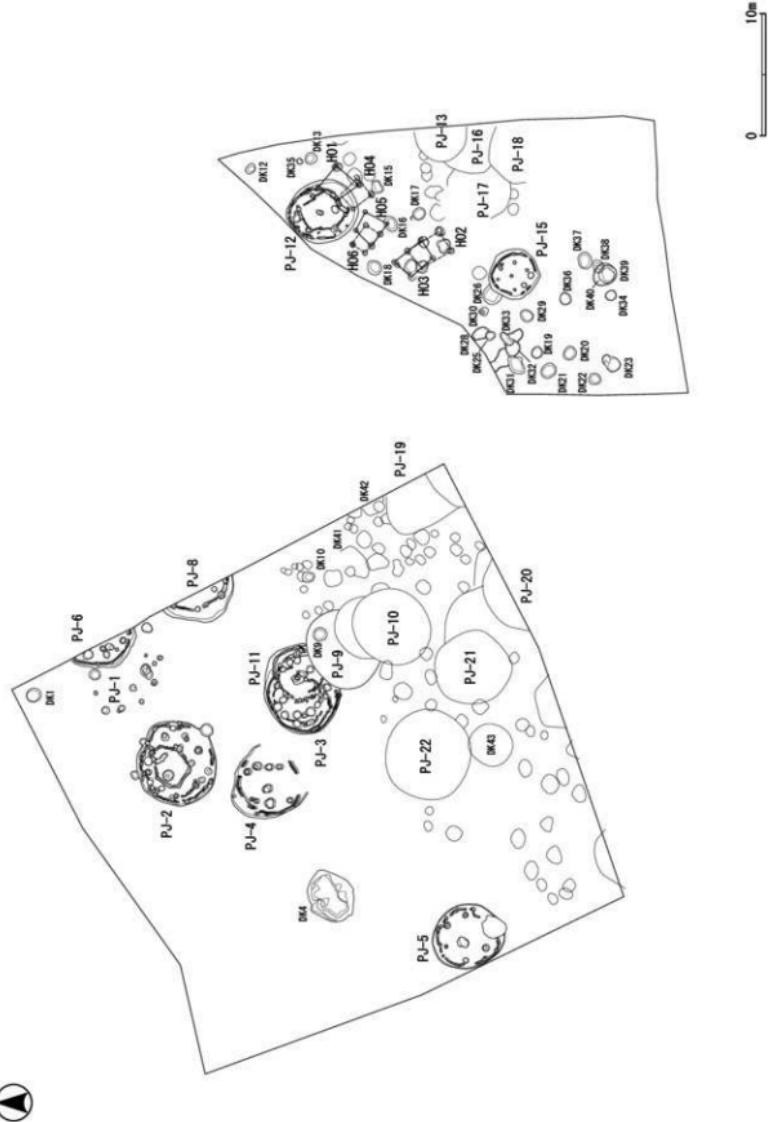
第2図 調査地点の位置 (1/10,000)



第3図 埋蔵文化財包蔵地範囲（薄いグレー）と工事範囲（濃いグレー）(1/3,000)



第4図 工区と調査区位置図 (1/1,200)



第5図 調査区全体図 (1/400)

第2章 遺跡の概要と環境

第1節 遺跡の概要

周知の埋蔵文化財包蔵地「南沢遺跡」は、縄文時代を主体とする集落跡である。試掘調査では弥生時代、古墳時代、平安時代の土器破片も出土した。本遺跡は昭和47年に旧白州町教育委員会が作成した遺跡一覧表に、南沢遺跡および南沢南遺跡で掲載され、昭和53年作成の一覧表には南沢遺跡で掲載されている。これまでに発掘調査された履歴はない。

本遺跡の東側300mには縄文時代中期中葉から末葉を主体とする集落跡「上小用遺跡」がある。同遺跡は平成10年度から平成12年度にかけて発掘調査され、多数の住居跡が重複する拠点的な居住地跡であることが確認された。

本報告書で調査成果を報告する発掘調査は、南沢遺跡の最初の調査である。検出された遺構は、縄文時代の堅穴住居18軒、縄文時代と思われる掘立柱建物6棟、縄文時代を主とする土坑40基、溝跡1条である。出土した土器は縄文時代中期中葉の藤内式、井戸尻式を主体とし、中期前葉築沢式、中期末葉曾利式、後期初頭称名寺式、弥生時代の条痕土器、古墳時代の土師器、中世鍋磁器が含まれる。出土品の総量はテンバコ35箱分であった。

土木工事の計画地の大半で遺跡の現状保存措置を講じたが、遺構を精査、確認した調査区内でも遺構を調査せずには現状保存できた箇所があった。実際に発掘調査したのは堅穴住居9軒と掘立柱建物6棟、土坑40基である。

第2節 地理的環境

南沢遺跡は、富士川上流部の釜無川右岸の高位段丘面、標高720mに位置する。遺跡一帯は南アルプスの前衛、巨摩山地に発する松山沢川の扇状地で、遺跡は扇央部を中心分布する。松山沢川は花崗岩体からなる巨摩山地を侵食し、遺跡一帯に大量の土砂を供給した。南沢遺跡の遺構は黄褐色に風化した粘性がある砂質地山を掘り込み、花崗岩粒子が多く混じる黒褐色土が埋積している。現在も遺跡一帯の農業用水路には多量の花崗岩質砂が流れ込み、定期的な浚渫作業が必要である。

調査地点は、調査前に水田および畠地として利用されていた。耕作土の下位には厚さ1m以上に及ぶ灰白色砂層が堆積していた。松山沢川もしくはその北側に隣接する旧河道が供給した扇状地堆積物であり、第3章第5節に記したとおり縄文時代晩期末葉から弥生時代後期にかけて複数回発生した土石流により形成されたものと推測される。同様の堆積物は本遺跡から南南東へ3.8kmにある堰口遺跡でも確認されている。堰口遺跡では縄文時代中期中葉の遺構を覆い、当該堆積層の上面で平安時代の遺構が構築されていた。供給河川は異なるが、南沢遺跡の堆積層と同じ気象イベントにより形成された可能性が高い。

第3節 歴史的環境

遺跡が所在する北杜市白州町は釜無川右岸の巨摩山地にあたり、大小河川の扇状地が連続している。現代に至るまで多くの土砂災害を経験した土地柄であるが、縄文時代前期から後晩期に至る遺跡が多数、知られている(第1図、第1表)。

釜無川上流部には縄文時代前期前葉から後葉の遺跡が多い。白州町下教来石には中越式期の板橋遺跡(6-002)があり、さらに北、長野県富士見町には坂平遺跡が知られる。南沢遺跡の南南東3.8kmには中越式期、神之木式期、有尾式期、諸磯式期の堰口遺跡(6-010)、さらに先には上北田遺跡(6-028)があった。

これらの前期の諸遺跡にもかかわらず釜無川右岸の白州町域では、前期末葉から中期初頭に遺跡、遺構が確認されない漸絶期が認められ、武川町黒澤地内で五領ヶ台Ⅱ式期の集落跡、実原(さねばら)A遺跡(7-020)が知られるに過ぎない。

南沢遺跡が位置する鳥原集落の高位段丘面はごく緩やかに東に傾く緩斜面で、平坦な地形が広がっている。中期前葉になると鳥原段丘面に上小用遺跡をはじめ大小の縄文時代の居住地跡が形成される。現時点での前期の諸遺

跡と中期前葉以降の遺跡との関係性は不明である。

上小用遺跡（6-007）は貉沢式期1軒、藤内式期1軒、井戸尻式期9軒、曾利式期40軒が発掘調査されている。南沢遺跡と上小用遺跡は指呼の間に隣接し、井戸尻式期に南沢遺跡が主体となり、曾利式期に上小用遺跡が主体となる補完的な関係にあると思われる。

南沢遺跡の南南東3.8kmにある竹宇1遺跡（6-009）は、中期前葉貉沢式期1軒、中葉井戸尻式期11軒、末葉曾利式期16軒の住居跡が発掘調査されている。

堰口遺跡（6-010）では、中期前葉新道式期から中期中葉藤内式期の住居7軒と曾利II式期の住居1軒が発掘調査され、竹宇3遺跡では曾利II式期の住居2軒が確認されている。

南沢遺跡から南東へ4.5kmに白須大久保遺跡（6-012）がある。井戸尻式期の住居2軒、曾利式期の住居7軒が調査されている。

さらに南方、尾白川右岸河段丘上に根古屋遺跡（6-015）がある。曾利I式期から曾利V式期の集落跡で、昭和59年に团体営圃場整備事業に伴い住居12軒が発掘調査されている。

釜無川右岸は中期前葉から中葉段階に堰口遺跡に集住的な居住地が形成され、井戸尻式期後半から曾利II式期に同様の居住地が上小用遺跡、竹宇1遺跡、白須大久保遺跡に出現し、曾利式期後半には上小用遺跡と竹宇1遺跡に収斂していく大まかな変遷がうかがえる。

釜無川右岸で内容が具体的に知られる後期の遺跡は限られる。竹宇1遺跡の西側に隣接する桜井1遺跡（6-035）で平成26年度に開発行為に伴って実施した試掘調査では、縄文時代中期中葉から後期中葉までの住居12軒と土坑が確認されている。遺跡発見の経緯から竹宇1遺跡と桜井1遺跡は別個の名称で周知されているが、中期段階では同一の集落を形成したとみてよい。

晩期では、南沢遺跡から南東6kmに屋敷平遺跡（6-016）が知られる。晩期末葉氷I式から氷II式期の遺跡で住居1軒と多数の土坑が確認されている。

以上が南沢遺跡周辺の主要な縄文時代遺跡である。遺跡は比較的に標高の低い釜無川右岸の段丘面に立地する遺跡と、巨摩山地裾の扇状地のやや標高の高い地点に立地する遺跡とがあり、前期から中期、あるいは中期から後期と反復利用される規模の大きな集落遺跡は扇状地に展開する。これらの集落遺跡の相互関係や土地利用状況は今後の研究課題である。



2区を西から撮影
(写真左上の囲みが上小用遺跡)

第3章 縄文時代の遺構と遺物

第1節 壺穴住居

本調査で検出された壺穴住居のうち現状保存した箇所を除き、実際に発掘調査した9軒の調査所見を報告する。調査区域は農道を挟んで2ヶ所に分かれた。便宜上、北西側の調査区を1区、南東側調査区を2区と呼び分け、遺構の位置を記載した。

PJ-1号住居（第6～8図、写真図版2）

- 位 置**：1区北東角に位置する。
- 重 複**：PJ-6号住居と重複し、本住居が古い。
- 規 模**：ぼんやりと黒い落ち込みを確認し発掘したが壺穴はほとんど残らず、柱穴のみが検出された。
- 床 面**：硬化面および塊状は検出されなかった。
- 周 溝**：検出されなかった。
- 炉 跡**：検出されなかった。
- 柱 穴**：9基のビットを検出した。PT1、PT3、PT4、PT16、PT19、PT14、PT20号ビットの7基が主柱穴で、PT18、PT10の2基が出入口施設に係る柱穴と思われる。ひときわ大きいDK2号土坑、PT9号ビット、PT2号ビットは貯蔵穴と思われる。
- 遺 物**：壺穴が残らないため遺物量は少ない。柱穴で囲まれた範囲から出土した土器は本住居に伴うものと判断し、図示した。出土した土器の総量は2,292gである。出土した石器は打製石斧4点、剥離のある剥片1点、砂岩製ハンマー1点、砂岩等の剥片3点である。
- 時 期**：第7図134、136の土器から藤内式4段階から井戸尻式1段階に位置づけられると思われる。

PJ-2号住居（第9～28図、写真図版3～5）

- 位 置**：1区の北東寄りに位置する。
- 重 複**：土坑の可能性がある円形の落ち込みと重複する。
- 規 模**：主軸6.7m、副軸6.8mで、壺穴は深さ15cmが残る。
- 埋 床**：黒褐色土が水平に堆積し、自然に埋没したと考えられる。
- 周 溝**：床を囲む小溝、壁に沿った2重の小溝を検出した。
- 炉 跡**：住居中心から北西に寄った位置に円形に扁平縁を置き並べ、炉体土器を埋設した炉を検出した。炉石には花崗岩、台石と思われる安山岩の扁平梢円礫、石棒破片と思われる安山岩、板状節理の安山岩（鉄平石）、頁岩礫が使用されていた。炉石で囲まれた内部は浅いビット状に掘りくぼめられ、底面と壁面に被熱は認められなかった。
- 柱 穴**：2重の周溝から想定されるように本住居は1回の拉張建替えを経ている。
- 新しい段階の柱穴は奥壁側からPT42、PT28、PT34、PT26、PT25、PT24、PT23、PT32、PT31号ビットの9基と考えられる。住居南側のビットの掘り方が大きい。
- 古い段階の柱穴は奥壁側からPT41、PT27、PT49、PT45、PT30号ビットの5基にPT34、PT32号ビットを加えた7基と考えられる。
- いくつかのビットの底面で柱の加重により硬化し光沢を生じたアタリ痕が確認された。また多くのビットで柱根のような土層断面を認めたが、黄褐色粘質土ブロックを含み、柱が抜き取られた空間に埋土が埋積したと判断することが妥当と思われる。

拡張建替えは炉の位置を変更せざ、南側に大きく床面積を広げるように行われ、北側の奥壁沿いで柱穴位置がほとんど変わらない。

柱穴間に挟まれた DG5 号、DG6 号土坑、PT29、PT32 号ピットの 4 基は貯蔵穴と思われる。

PT33、PT48 号ピットは 37cm、56cm と深い。局所的に柱を更新したか、もしくは抜き取り痕と思われる。

遺物：竪穴は浅かったが床面上から埋土下層で多くの土器破片と石器、礫が出土した。

出土した土器の総量は 52,137g で、図示したとおり大型破片が多く、完形個体は皆無であった。土器は破片が住居内の広い範囲に散らばって出土しており、破損した土器をその場に廃棄した状況ではなく、撒き散らしたように思われた。

また井戸尻式土器に混じって曾利 IV 式土器 3 個体の破片が出土した。曾利 IV 式土器は住居中心の径 2m 範囲に散らばって出土した。曾利式期の遺構は確認されず、後世の擾乱も見いだせなかつた。本住居内には柱穴として組み合わなかつた浅いピットがいくつか検出されている。これらが曾利 IV 式期の住居の柱穴である可能性は排除できないが、曾利 IV 式期の骨鉢は検出されなかつた。

出土した石器は、石槍 1 点、黒曜石製石礫 3 点、両極石器 1 点、打製石斧 31 点、大型粗製石匙 10 点、磨石類 8 点、台石 3 点、礫石器 8 点、ハンマー 1 点、剥離のある剥片 17 点、黒曜石核 1 点、黒曜石原石 2 点である。このほか花崗岩、ホルンフェルス、砂岩、砂泥交疊岩の礫 22 点、安山岩、砂岩、石英岩、ホルンフェルス、黒曜石の剥片と碎片 48 点が出土した。黒曜石剥片は数点のみで、多くがホルンフェルス、砂岩、頁岩などである。住居の炉、西壁際と南西壁際の 2 ヶ所で石柱状の棒状角礫 3 点が出土した。

炉内の埋土と掘り方埋土に炭化種実が含まれていた。土嚢袋 5 袋を採取し水洗選別して炭化物を回収した。実体顕微鏡で簡易に観察した結果、炭化したササゲ属アズキ亜属種子 1 点、種未同定の種子数粒、堅果類外皮、クルミ核破片、油脂状光沢がある炭化物が含まれ、細片化した炭化材 49.4g があつた。

時期：炉全体器および埋土出土土器から本住居は井戸尻式 2 段階に位置づけられると思われる。

PJ-3 号住居（第 29 ~ 43 図、写真図版 6 ~ 9）

位置：1 区中央に位置する。

重複：PJ-9 号住居に切られ、PJ-11 号住居を切る。

規模：住居中心と炉を通した主軸方向の長さは PJ-9 号住居を現状保存したため不明である。推定で 6m 程度と思われる。主軸に直交する東西軸の長さは 6m である。竪穴は深さ 35 cm であった。

埋土：黒褐色土がレンズ状に堆積した埋土で、自然に埋積したと思われる。埋土中に大型の炭化材、焼土の塊が検出されたことから、焼失住居と推測される。

床面：黄褐色土の地山を平坦に掘り込み、床面としている。住居中心から炉の周辺で硬く踏みしまっていた。建替えにより埋められた古い柱穴、貯蔵穴の上面には黄褐色土の貼床が施されていた。全体に植物の根による擾乱が広がり、周溝、小ピットの検出で迷う場面があつた。

周溝：竪穴の壁に沿って同心円状に複数状の小溝を検出した。

炉跡：住居中心から北西寄りで炉全体器を埋設した石圍炉を検出した。炉石は花崗岩と安山岩の扁平円礫、亜角礫が用いられ、4 点が原位置を留めていた。炉全体の形状から炉石はほかに 2 点ないし 3 点があつたと思われる。石皿が炉石に転用され、伏せた状態で利用されていた。炉の周囲と炉全体器の外周で地山が被熱、焼土化していた。灰の堆積、炭化物の集積は検出されなかつた。

石围炉の北西側で床面が被熱、焼土化した箇所を検出した。焼土化した範囲は 40 cm × 50 cm 程度であり、被熱、焼土化の程度は、石围炉内の焼土化と同等であった。焼土に伴う掘り込みは検出されなかつた。

炉内埋土を水洗選別し炭化材等を回収したところ、炭化材断片 70.2g のほかに、クルミ核破片、堅果類果皮破片、種未同定の種子を数点ずつ検出した。

柱穴：本住居内で検出されたビット数、周溝数から当時の建築に加え、最低 2 回の建替えが想定される。古い柱穴の上面に貼床が施されていたことから、拡張を繰り返したと判断され、最も大きな住居プランが最新の居住段階となる。

当初建築時の柱穴は、PT60、PT64、PT68、PT98、PT116 号ビットの 5 基の組み合わせと推測される。さらに PT93、PT94、PT95、PT97 号ビットの 4 基が貯蔵穴と思われる。古い柱穴は検出されていない。

次に 1 回目の拡張を行った段階の柱穴は、PT58、PT60、PT69、PT74、PT80、PT118 号ビットの 6 基の組み合わせと推測される。この段階の貯蔵穴は検出されていない。最新段階へと継続的に利用された可能性があろう。

2 回目の拡張、すなわち最新、最終段階の柱穴は、PT58、PT60、PT62、PT63、PT67 号ビットの 5 基の組み合わせと推測される。さらに PT59、PT61、PT75、PT76 号ビットの 4 基が貯蔵穴と思われる。PT75 号と PT76 号ビットの 2 基の貯蔵穴のさらに南東側に、さらに 2 基の柱穴が想定されるが、PJ-9 号住居を現状保存したため、存在は確認されていない。

3 段階の居住が想定されるが石匂戸の位置は変更されず継承されたと推測される。

遺物：住居床面上に炭化材と焼土がまばらに出土した。土器破片と石器はそれらの上位に堆積した黒褐色土中で出土している。PT94 号ビットなどの貯蔵穴から土器、石器が出土した。

出土した土器の総量は 23,933g である。大型破片、半完形に復元できる個体はおおむね床面から 10 cm から 20 cm ほど浮いて出土した。

石器の出土状況も土器と同様で、柱穴、貯蔵穴から出土した石器、剥片もある。また石柱状の棒状礫と石皿が住居南西部分の床面で出土した。出土石器の内訳は、石織 5 点、両極石器 3 点、石錐 1 点、石匙 2 点、打製石斧 22 点、磨石類 4 点、石皿 5 点、台石 1 点、磨製石斧 2 点、剥片石器 3 点、礫石器 4 点、剥離のある剥片 18 点、剥離のある礫 1 点、摩耗のある礫 1 点、管玉 1 点、黒曜石原石 1 点、石英岩石核 2 点、黒曜石、砂岩、石英岩等の砂片・剥片 46 点、礫 4 点である。

本住居の床面上に炭化材と焼土を検出した。炭化材は床面に密着したものから床面から 10 cm 程度浮いた位置で出土したものまでがあった。炭化材の総量は多くないが、おおむね住居中心に近いものは低い位置で出土し、中心から離れるとやや浮いた位置で出土する傾向が観察された。炭化材は放射状に検出されたことから重木など屋根部材と考えられる。

焼土も同様で、炭化材を覆うように検出される焼土も観察された。住居内で出土した土器の大きな破片はこれらの炭化材、焼土のさらに上位で出土した。

炭化材のうち出土位置から同一材ではないと識別できる、状態が良好な試料 24 点を対象に樹種を同定した。その結果は第 4 章に報告したが、すべてがクリ材であった。

時期：炉体土器（第 33 図 049）から本住居は戸井戸式 2 段階に位置づけられると思われる。埋土から出土した土器も同様の時期である。

PJ-11 号住居（第 44 ~ 45 図、写真図版 9 ~ 10）

位置：1 区中央に位置する。

複数：PJ-3 号住居、PJ-9 号住居と重複する。本住居がもっとも古い。

規模：本住居は東壁の一部が残るのみである。周溝から推定される規模は、住居中心と炉を通した主軸方向の長さは PJ-9 号住居が未調査のため不明、主軸に直交する東西軸の長さは 4.6m である。竪穴は深さ 35 cm であった。

埋土：PJ-11 号住居本来の埋土は東壁沿いにごく一部が残るのみであったが、PJ-3 号住居とともに検出した

時点では、PJ-3 号住居と PJ-11 号住居を識別できず、断面を観察、図化できずに掘り上げてしまった。したがって埋土は PJ-3 号住居と同様の黒褐色土を基調としたと考えられる。

- 床** 面：床面は PJ-3 号住居と同レベルで検出された。黄褐色の地山を平坦に掘り込み床面とし、炉の周辺では硬く踏みしまった。
- 周** 溝：東壁沿いで 2 ~ 3 条の小溝を検出した。北側から西側にかけては断片的で 1 ~ 2 条程度しか検出できなかった。
- 炉** 跡：住居中心からやや北西に寄った位置で炉体土器を埋設した石圍炉と焼土を検出した。炉は浅いくぼみを作り、炉石は、6 点の花崗岩亜角礫の炉石が、炉体土器を閉むように置かれていた。炉周辺の床面は焼土化していた。
炉内埋土を水洗選別し炭化材等を回収したところ、炭化材断片 42.9g のほかに、クルミ核破片、堅果類果皮破片、種未同定の種子を検出した。
- 柱** 穴：周溝から 1 回ないし 2 回の建替えが想定されるが、検出された柱穴は見合った数にならなかった。PT101、PT100、PT99、PT66、PT117、PT102、PT92 号ビットなどが主柱穴になると思われる。また PT65 号ビット、PT96 号ビットの 2 基は貯蔵穴であろう。
- 遺** 物：埋土の大半が PJ-3 号住居に切られて失われているため、出土した土器は小破片のみで、石器数も多くない。土器 062 は炉体土器で、土器 055 は貯蔵穴と思われる PT96 号ビットで出土した。石器は黒曜石、石英岩、ホルンフェルス、砂岩の剥片 8 点のみである。
- 時** 期：炉体土器から本住居は井戸尻式 1 段階と思われる。

PJ-4 号住居（第 46 ~ 49 図、写真図版 10 ~ 11）

- 位** 置：1 区中央に位置する。
- 重** 複：北西角部で検出された壁と周溝とがやや離れている。
- 規** 模：南東側が削平され壁、周溝が検出されなかつた。推定される主軸線は南北方向とみられ、軸長は 5m 程度、直交する軸長は 5.5m で、竪穴の深さは深いところで 10 cm 程度であった。
- 埋** 土：竪穴が浅いため埋土断面図の作成は省略した。黒褐色土を基調とする埋土であった。
- 床** 面：黄褐色の地山を平坦に掘り込んで床面としている。炉の周囲が踏みしまってやや硬化していた。遺構の南東部分は床面、周溝が検出できず、埋土と地山由来の黄褐色土が入り乱れ、古い攪乱あるいは風倒木痕のように思われた。
- 周** 溝：北壁から西壁にかけて小溝を検出した。南側で断片的な小溝を検出した。
- 炉** 跡：住居のほぼ中心に浅い凹みを伴う石围炉を検出した。炉石は砂岩、花崗岩、黄色く風化した頁岩の亜角礫 4 点を五角形に置き並べたもので、炉石 1 点が失われている。炉底はごく弱く被熱し、わずかに焼土化していた。
炉内埋土を水洗選別し炭化材等を回収したところ、炭化材断片 29.7g のほかに、クルミ核破片、堅果類果皮破片、種未同定の種子を少量検出した。
- 柱** 穴：柱穴と考えられるビットが 6 基、貯蔵穴が 2 基検出された。DK8 号土坑、PT39 号ビットの 2 基が貯蔵穴、残る 6 基が主柱穴である。北壁沿いの 4 基は建替えに伴い、掘り直された柱穴であろう。拡張したか縮小したかは判断できなかつた。
- 遺** 物：土器および石器は、床面で出土した台石を除き、薄い理土中から散発的に出土した。
出土した土器の総量は 3,638g で、遺構の時期を端的に示すような出土状況は認められなかつた。強いて言うなら柱穴 PT46 号ビットで出土した土器（第 47 図 066）が、遺構の廃棄時期に近い可能性がある。
石器の内訳は、打製石斧 5 点、石匙 2 点、磨石類 2 点、台石 1 点、ハンマー 1 点、棒状縄 1 点、剥

離のある剥片 5 点、黒曜石、ホルンフェルス、砂岩、頁岩の剥片・碎片 11 点、砂岩礫 1 点である。

時 期：屈折底（第 47 図 064）、PT46 号ビット出土の円文突起から推測すると、本住居は井戸尻式 2 段階には廃絶し埋積し始めたと考えられる。

PJ-5 号住居（第 50 ~ 54 図、写真図版 11 ~ 12）

位 置：1 区西端に位置する。

重 複：大きな円形土坑状の擾乱に切られる。

規 模：主軸長 5.8m、直交軸長 5.2m、竪穴の深さはもっとも深い西壁沿いで 20 cm である。

埋 土：黒褐色土を基調とする自然埋積したと思われる埋土で、植物根などにより細かな擾乱が混じる。埋土が浅いため断面実測図は省略した。埋土最下層は黒褐色土主体で黄褐色土が斑に混じり、やや硬く踏みしまった感触であった。明瞭な貼末ではないかと竪穴掘削時に床面を平坦に均した痕跡かもしれない。

床 面：黄褐色地山まで掘り下げたところ、床面は凹凸が残り、平坦ではなかった。埋土最下層が床面とみられる。炉跡の周囲に不明瞭ながら、やや踏みしまった凸部が残った。

周 溝：南東壁沿いの擾乱付近以外の壁沿いに小溝を検出した。

炉 跡：住居中心からやや北西寄りに浅い凹みとわずかな焼土を検出し、炉跡と判断した。

柱 穴：5 基のビットを検出した。PT50、PT51、PT52、PT53、PT54 号ビットが主柱穴である。

遺 物：床面上と埋土最下層で土器破片、半完形陶体が出土した。出土した土器の総量は 12,815g である。

出土した石器の内訳は、両極石器 1 点、打製石斧 11 点、石匙 1 点、磨石類 2 点、剥離のある剥片 4 点、黒曜石、チャート、石英岩、砂岩、頁岩、ホルンフェルス、砂泥交疊岩の剥片・碎片 16 点、礫 3 点である。

時 期：出土土器から本住居は井戸尻式 2 段階には廃絶していたと考えられる。

PJ-6 号住居（第 55 ~ 56 図、写真図版 12 ~ 13）

位 置：1 区北東端に位置する。大半が調査区外である。

重 複：なし

規 模：遺構の 3/4 が調査区外のため規模は不明である。竪穴は深さ 30 cm が残る。

埋 土：黒褐色土を基調とする自然埋積したと思われる埋土で、植物根などの擾乱により層理は不分明であった。上位に黄灰色砂層（2 層）、擾乱により遺構と認識できなくなった包含層（3 層）が堆積する。

第 4 層から土糞袋 2 袋分の埋土を採取し、水洗選別したところ炭化材のほかに微量なタルミ核破片と堅果類果皮破片を回収した。

床 面：黄褐色の地山を平坦に掘り込み、床面としている。調査範囲で硬く踏みしまった箇所は確認されなかった。

周 溝：壁沿いに小溝を検出した。PT4、PT20、PT21 号ビットの小ビットは周溝に伴う施設と考えられる。

炉 跡：調査範囲で検出されなかつた。

柱 穴：DK3 号土坑は形状から貯蔵穴と推測される。ほかは柱穴であろう。4 基のビットがまとまって検出されていることから建替えが想定される。

遺 物：土器破片と石器が埋土から散漫に出土した。出土した土器の総量は 1,534g で小破片のみである。

出土した石器の内訳は、石槍 1 点、打製石斧 4 点、磨石類 2 点、台石 1 点、黒曜石、頁岩、チャート、石英岩、ホルンフェルスの剥片・碎片 7 点である。台石は PT11 号ビット上面で出土した。

時 期：埋土出土の土器破片から推定すると、本住居は井戸尻式 3 段階には廃絶していたと考えられる。

PJ-7号住居（第57図）

1区PJ-6号住居とPJ-8号住居の中間に位置する。焼土があり、土器、石器がまとめて出土したことから住居と考えたが、精査の結果、炉跡、柱穴が検出されなかった。

PJ-8号住居（第58～78図、写真図版13～15）

- 位** 置：1区東端に位置する。遺構の2/3は調査区外である。
- 重** 複：なし
- 規** 模：遺構の2/3が未発掘のため規模は不明である。竪穴は深さ50cmが残る。
- 埋** 土：埋土断面図の第5層から9層までが住居埋土である。レンズ状の層理が確認され、自然埋積したと考えられる。第6層中から多量の土器破片が出土した。第1層は表土直下の砂質土層、第2層はシルト粒土層、第3層と第4層は砂層で扇状地堆積層である。
床面直上の埋土に炭化物が多くいたため土囊袋2袋を探取し水洗選別したところ、炭化したクリ1点、クルミ核破片、発泡した油脂状光沢のある炭化物塊1点、炭化材細片が回収された。
- 床** 面：黄褐色粘質の地山を平坦に掘り込んで床面としている。調査範囲で硬く踏みしまった箇所は確認されなかった。植物根等の小さな攪乱が斑状にみられた。
- 周** 溝：柱穴をつなぐように小溝を検出した。
- 炉** 跡：調査範囲で検出されなかった。
- 柱** 穴：PT55、PT56、PT57号ピットの3基が柱穴である。DK11号土坑は底面が広いフラスコ状で、貯蔵穴と考えられる。
- 遺** 物：第6層中から投棄されたと思われる多量の土器破片、大形土器破片、半完形個体が、20cm以上の高低差をもって折り重なるように出土した。人面装飾突起がある土器（第67図117）の大形破片は人面が上を向くように出土し、その上に小形深鉢（第69図133）が載っていた。目鼻の表現がない人面装飾突起土器（第59図102）は、土器117よりも10cmほど下位で、やはり人面が上を向いて出土した。床面に密着して出土した土器はなかった。出土した土器の総量は92,607gである。
土器破片とともに石器も多量に出土した。剥片の一部に剥離がある石器が多い。器種を判断しかねる場合があり単に剥離のある剥片と分類した。出土した石器の内訳は、石鏃2点、両極石器1点、打製石斧35点、石匙7点、剥離のある剥片31点、磨石類5点、ハンマー3点、磨製石斧1点、礫器3点、石英岩石核1点、黒曜石、石英岩、ホルンフェルス、頁岩、砂岩、泥岩、砂泥交互岩、安山岩、緑色岩の剥片・碎片58点、砂岩、石英岩、ホルンフェルス、泥岩、花崗岩礫13点である。
- 時** 期：埋土中に多量に投棄された土器からみると、本住居は井戸尻式2段階には廃絶し埋積途上にあったと考えられる。

PJ-9号住居（第79～80図）

- 位** 置：1区中央に位置する。現状保存し未調査である。
- 重** 複：PJ-3号住居、PJ-11号住居を切る。
- 遺** 物：遺構確認面で出土した土器破片と打製石斧5点、石匙1点、剥離のある剥片2点、ハンマー2点、台石1点、剥片、礫が出土した。
- 時** 期：PJ-3号住居より新しく、限られた土器破片から判断すると井戸尻式期に位置づけられると思われる。

PJ-10号住居（第81～82図、写真図版16）

- 位** 置：1区南寄り、PJ-9号住居の南側に位置する。現状保存し未調査である。
- 遺** 物：遺構確認面で土器破片と土偶破片、打製石斧4点、石匙1点、剥離のある剥片3点、剥片が出土した。

時 期：限られた土器破片から判断すると井戸尻式期と推測される。

PJ-12号住居（第83～90図、写真図版16～17）

位 置：2区北端に位置する。

重 複：HO-1号掘立柱建物跡、HO-4号掘立柱建物跡と重複する。

規 模：炉を通る主軸長5.6m、直交軸5.1mの楕円形で、竪穴は深さ45cmが残る。

埋 土：下層から第4層黄褐色砂質土、第3層暗褐色シルト粒土、第2層黒褐色シルト粒土、第1層黒褐色シルト粒土がレンズ状に層理をなして堆積している。自然に埋積した埋土と考えられる。

床 面：黄褐色粘質の地山を平坦に掘り込み、床面としている。炉周辺がやや硬く踏みしまっていたが、貼床は検出されなかった。

周 溝：柱穴をつなぐように小溝が検出された。東壁から北壁、西壁沿いに小ピットを伴う小溝を検出した。

炉 跡：住居中心部で炉体土器を深く埋設した炉を検出した。炉体土器の周囲の床面は被熱し焼土化していた。炉体土器に隣接して検出されたPT119号ピットは、埋土断面の観察から炉体土器を埋設し直した古い掘り方と判断した。

炉体土器内の埋土囊袋1袋を採取し水洗選別したところ、ササゲ属アズキ亜属とみられる炭化マメ断片数点、タデ科種子2点、球状、微小粒で種不明の種子多数、堅果類果皮断片、クルミ核破片、炭化材断片8.9gが回収された。

柱 穴：住居内で多数の土坑とピットを検出した。形状と深さ、埋土色調から柱穴を想定すると、PT71号、PT73号、PT78、PT108、PT72、PT106、PT77号ピットが主柱穴と思われる。PT77号ピットとPT106号ピットが近接するのは柱の更新を経た結果と思われる。PT70号ピットとDK24号土坑は貯藏穴と思われる。床面で検出されたほかのピットはHO-01号掘立柱建物跡、HO-04号掘立柱建物跡の柱穴と考えた。

遺 物：炉に埋設された炉体土器1点、貯藏穴DK24号土坑から出土した浅鉢形土器のほか埋土から土器破片と石器が出土した。出土した土器の総量は19.099gである。

出土した石器の内訳は、石錐1点、両極石器3点、打製石斧18点、石匙3点、磨石類2点、台石1点、剥離のある剥片11点、礫器2点、ハンマー1点、黒曜石原石2点、黒曜石、砂岩、ホルンフェルス、頁岩、石英岩、チャートの碎片・剥片41点、砂岩など礫10点である。

時 期：三角押文が施された炉体土器などから本住居は新道式1段階に建設され、パネル文土器が出現する新道式2段階以降に廃絶、埋設したと推測される。

PJ-13号住居（第91図、写真図版18）

位 置：2区東端に位置する。現状保存し未調査である。

遺 物：遺構確認面で土器破片が出土した。

時 期：遺構確認面で出土したわずかな土器破片から井戸尻式期に位置づけられる。

PJ-14号住居（第91図）

2区中央、PJ-12号住居とPJ-15号住居の中間で土器、石器がまとまって出土したことから住居と考えたが、精査の結果、炉跡、柱穴は検出されなかった。

PJ-15号住居（第92～96図、写真図版18～20）

位 置：2区中央に位置する。

重 複：DK26号土坑と重複する。

規 模：炉を通る北西～南東の主軸長は4.1m、直交軸は3.9m、竪穴の深さは30cmが残る。

- 埋床周炉跡**
土：黒褐色土と暗褐色土がレンズ状に堆積する。自然埋積したと思われる。
面：黄褐色粘質の地山を平坦に掘り込んで床面としていた。硬く踏みしまった箇所は確認されなかった。
溝：北壁から東壁、南壁沿いに小溝を検出した。西壁沿いは断片的な小溝が検出された。
跡：住居中央からやや北西寄りにごく浅い凹みと埋設された炉体土器を検出した。炉体土器の傍らの一部床面が弱く被熱し焼土化していた。
炉体土器内の埋土を水洗選別したところ、炭化したクルミ核断片、堅果類果皮断片、マメ科のような種子1点、炭化木片3.5gが回収された。
- 柱穴**
穴：PT87、PT88、PT89、PT90号ピットの4基が主柱穴と思われる。PT104、PT105号ピットはごく浅いが対称的な位置にあり、4基の柱穴との配置も均衡がとれていて補助的な支持材であったと思われる。PT87号ピットは袋状土坑で貯藏穴と思われる。
- 遺物**：炉体土器（第93図159）以外の土器破片と石器はいずれも埋土中、床面から10cm以上浮いて出土した。北西壁際で出土した台石（第95図794）のみが床面に近い位置で出土した。
出土した土器の総量は、8,016gである。土器159は炉体土器。残りの土器破片は埋土下層で出土した。出土した石器の内訳は、石鏃2点、搔器1点、打製石斧6点、磨石類1点、台石1点、ハンマー1点、頁岩、砂岩などの剥離のある剥片10点、黒曜石残核1点、頁岩、黒曜石などの剥片・碎片13点、砂岩と花崗岩の礫3点である。
- 時期**：炉体土器から本住居は貉沢式3段階に建築されたと思われる。

PJ-16号住居

- 位**：置：2区東端に位置する。現状保存し未調査である。
時：期：不明であるが中期前葉から中葉と推測される。

PJ-17号住居

- 位**：置：2区東端に位置する。現状保存し未調査である。
遺物：中期中葉土器破片、礫器、剥片が出土した。
時：期：遺構確認面で出土したわずかな土器破片から推測すると中期中葉に位置づけられる。

PJ-18号住居（第97図）

- 位**：置：2区東端に位置する。現状保存し未調査である。
遺物：遺構確認面で打製石斧2点、磨石類1点が出土した。
時：期：土器破片が出土せず時期は不明であるが、中期中葉と推測される。

PJ-19号住居（第98図）

- 位**：置：1区南東角に位置する。現状保存し未調査である。
遺物：遺構確認面で土器破片、打製石斧6点、剥離のある剥片4点、剥片、礫が出土した。
時：期：出土した土器から中期中葉と思われる。

PJ-21号住居（第99～100図）

- 位**：置：1区南端に位置する。現状保存し未調査である。
遺物：遺構確認面で土器破片、打製石斧5点、石匙2点、剥離のある剥片11点、剥片5点、礫1点が出土した。
時：期：出土した土器から中期中葉と思われる。

PJ-22号住居（第101図）

位 置：1区中央南寄りに位置する。現状保存し未調査である。
遺 物：遺構確認面で土器破片、打製石斧5点、石匙2点、剥離のある剥片11点、剥片、礫が出土した。
時 期：出土した土器から中期中葉と思われる。

第2節 掘立柱建物

6基の掘立柱建物を検出した。柱間寸法は構成ピットの最も深い箇所の中心間で計測した。

H0-1号掘立柱建物（第102図、写真図版20）

位 置：2区PJ-12号住居南東に重複する。
重 複：PJ-12号住居と重複する。PT113号ピットがPJ-12号住居床面で明瞭に確認できず、床面を少し掘り下げて検出できることから、本遺構が旧いと思われる。
規 模：PT78、PT113、PT121号ピットとDK14号土坑の4基で構成される1間四方で、柱間寸法は最短1.9m、最長2.7mでややばらつきがある。ピットの深さは確認面から35cm、50cmとややばらつく。徳雄にPJ-12号住居床面で検出されたPT78号ピットとPT113号ピットの2基はPJ-12号住居の豊穴が45cmと深いことから、本来のピットの深さはさらに深くなり、PT121号ピット、DK14号土坑との差が大きい。
遺 物：DK-14号土坑から土器小片4点、ホルンフェルス剥片1点が出土した。
時 期：わずかな土器破片とPJ-14号住居との重複関係から本遺構は新道式期かそれ以前と推測される。

H0-2号掘立柱建物（第103図、写真図版20）

位 置：2区中央やや北寄りに位置する。
重 複：H0-3号掘立柱建物と重複する。新旧関係は不明である。
規 模：PT82、PT83、PT85、PT86号ピットの4基で構成される1間四方で、柱間寸法は長辺2.8mと3.1m、短辺1.9mである。ピットの深さは29cmから51cmとややばらつきがある。
遺 物：遺物は出土しなかった。
時 期：不明であるが形状、規模はH0-01号掘立柱建物に類似する。

H0-3号掘立柱建物（第103図、写真図版21）

位 置：2区中央北寄りに位置する。
重 複：H0-2号掘立柱建物と重複する。新旧関係は不明である。PT111号ピットと重複し、本遺構が旧い。
規 模：PT107、PT110、PT111、PT112号ピットの4基で構成される1間四方で、柱間寸法は長辺が2.9mと2.4m、短辺が1.9mと1.7mである。ピットの深さは17cmから30cmである。
遺 物：PT107号ピットで三角押文を施文した土器破片1点が出土した。
時 期：わずかな土器片から推測すると本遺構は中期前葉の新道式期に位置づけられると思われる。柱間寸法はH0-1号掘立柱建物、H0-2号掘立柱建物に類似する。

H0-4号掘立柱建物（第104図、写真図版21）

位 置：2区PJ-12号住居南に位置する。
重 複：PJ-12号住居、H0-1号掘立柱建物と重複する。新旧関係は不明である。
規 模：PT79、PT114、PT128号ピットの3基で構成される。残るピット1基は精査したが検出できなかつたが

1間四方の形状と思われる。柱間寸法は2辺が1.8mである。ピットの深さは38cm、46cm、52cmである。

遺物：土器、石器ともに出土しなかった。

時期：不明である。柱間寸法はほかの掘立柱建物に類似する。

HO-5号掘立柱建物（第104図、写真図版21）

位置：2区PJ-12号住居南西に位置する。

重複：HO-6号掘立柱建物と重複する。新旧関係は不明である。DK16号土坑を切る。

規模：PT122、PT123、PT124、PT125号ピットの4基で構成される1間四方で、柱間寸法は1.7mから2.2mである。ピットの深さは15cmから44cmである。

遺物：土器、石器ともに出土しなかった。

時期：不明である。柱間寸法はほかの掘立柱建物に類似する。

HO-6号掘立柱建物（第104図、写真図版22）

位置：2区PJ-12号住居南西に位置する。

重複：HO-5号掘立柱建物と重複する。新旧関係は不明である。

規模：PT126、PT127、PT129、PT130号ピットの4基で構成される1間四方で、柱間寸法は長辺が2.0mと1.9m、短辺が1.4mと1.3mである。ピットの深さは15cmから34cmである。

遺物：土器、石器ともに出土しなかった。

時期：不明である。ほかの掘立柱建物よりやや小ぶりだが長辺の柱間寸法がほかの建物の短辺寸法に類似する。

第3節 土坑とピット

南沢遺跡の今次発掘調査で土坑40基、ピット130基が検出された。これらのうち住居等の貯蔵穴、柱穴と判断された遺構は前節で報告したとおりである。本節では住居外で検出された土坑とピットのうち特筆すべき遺構について報告する。遺構の属性は付属のDVDに収録した第4表土坑・ピット観察表に記載した。

DK-12号土坑（第111図、写真図版22）

2区北東角に位置する。黒褐色土が埋積し、曾利IV式土器破片と被熱した打製石斧2点が出土した。

DK-13号土坑（第112図、写真図版22）

2区北東角に位置する。黒褐色土が堆積する円形土坑で、貉沢式土器破片が出土した。

DK-16号土坑（第105図、写真図版23）

2区北寄りに位置する。HO-5号掘立柱建物の柱穴PT125号ピットと重複し、本遺構が古い。土坑端から石匙1点が出土した。

DK-17号土坑（第105図、写真図版23～24）

2区中央北寄り、HO-2号掘立柱建物の東側に位置する。黒褐色土が堆積する円形土坑で、一抱えある大きな花崗岩礫とその下から粗大な打製石斧が出土した。井戸尻式末もしくは曾利式初頭と思われる土器破片を伴う。

DK-19 号土坑（第 105 図、写真図版 24～25）

2 区中央西寄りに位置する。暗褐色土が堆積する円形土坑で、土坑底面から磨石 1 点、楔状の亜角礫 1 点が出土した。

DK-21 号土坑（第 106 図、写真図版 25）

2 区南西角に位置する。暗褐色土が堆積する円形土坑で、壁際で井戸尻式と思われる土器小破片が出土した。

DK-23 号土坑（第 106 図、写真図版 26）

2 区南西角に位置する。暗褐色土が堆積する円形土坑でピット状の遺構が接続する。井戸尻式土器が横倒しになって出土した。

DK-26 号土坑（第 106 図、写真図版 26～27）

2 区中央、PJ-15 号住居北西壁に重複する。遺構確認面は攪乱で荒れていて明瞭に新旧関係を確認できなかった。土坑の中央、底面からやや浮いて 3 点の石器が一部重なりながら出土した。土器は出土せず時期は不明である。

DK-27 号土坑（第 107 図、写真図版 27～28）

2 区中央北寄り、HO-6 号掘立柱建物の柱穴 PT107 号ピットと重複する。新旧関係は確認できなかった。井戸尻式と思われるバネル文土器破片と底部破片、打製石斧 2 点、石皿 1 点、剥片 1 点が出土した。

DK-29 号土坑（第 107 図、写真図版 28）

2 区、PJ-15 号住居の西側に位置する。暗褐色土が堆積した円形土坑で、壁際で粗大な打製石斧が出土した。中期と思われる土器小片が伴う。

DK-31 号土坑（第 112 図、写真図版 29）

2 区西端に位置する。DK32 号土坑、MZ-1 号構跡と重複する。黒褐色土が堆積した不整形土坑で、剥片 1 点、中期と思われる土器小片が出土した。

DK-32 号・DK-33 号土坑（第 108 図、写真図版 29～30）

2 区西端に位置する。焼土粒子と炭化材片が混じる黒褐色土が堆積する不整形土坑で、炭化材がまとまって出土した。32 号、33 号と名称を付したが明瞭に土坑が分離されるわけではなく、炭化材は両遺構をまたいで検出された。さらに MZ-1 号構跡とも連絡し遺構のまとまり、広がりが不明瞭であった。土器、石器は出土しなかった。

炭化材は板状で樹種同定したところケヤキと同定された。併せて炭素年代測定し、2968-2960calBP (2 σ) の年代値を得た。当地域の晩期前葉から中葉頃の年代観に相当する。

DK-34 号土坑（第 108 図、写真図版 30）

2 区南端に位置する。黒褐色土が堆積する円形土坑で、石皿破片、井戸尻式土器破片、曾利 II 式土器破片が出土した。

DK-38 号土坑（第 112 図、写真図版 31）

2 区南端に位置し、DK39 号土坑、DK40 号土坑と重複する。本土坑が新しいようにみえたが遺構確認面が荒れていて不明瞭であった。井戸尻式土器破片、平出 III 類 A 土器破片、研磨石が出土した。

DK-39 号土坑（第 109 ~ 111 図、写真図版 31）

2 区南端に位置し、DK38 号土坑、DK40 号土坑と重複する。本土坑は DK38 号土坑に切られ、DK40 号土坑を切る。多数の縄が埋土で出土し、その中に石皿破片、台石破片、打製石斧などが混じっていた。井戸尻式土器破片を伴う。

DK-40 号土坑（第 109 図）

2 区南端に位置し、DK38 号土坑、DK39 号土坑に切られる。貉沢式か新道式と思われる土器破片が出土した。

DK-41 号土坑（第 112 図）

1 区南東端、PJ-10 号住居の東に位置する。遺構確認して現状保存した遺構である。確認面で井戸尻式土器破片（075）が出土した。

PT-111 号ピット（第 112 図）

2 区、HO-2 号掘立柱建物、HO-3 号掘立柱建物と重複する。新旧関係は不明である。円形土坑で石魁が出土した。

第 4 節 遺構外出土の遺物（第 113 ~ 第 117 図）

遺構外から縄文時代の土器、石器が出土した。観察所見は付属 DVD に収録した第 2 表土器観察表と第 3 表石器観察表に記載した。

出土した土器は遺構の時期と重なり、縄文時代中期前葉から中葉が主であるが、若干、曾利式、加曾利 E 式土器なら新しい時期の土器もみられる。今回の発掘調査はごく限定的であったが中期末葉の遺構が遺跡内に存在するのであろう。

遺構が検出されなかった時期の土器も出土している。弥生時代初頭と思われる土器（第 114 図 009）、弥生時代か古墳時代の甕、碗（第 114 図 217）、平安時代の甲斐型土師器などである。これらは縄文時代中期中葉の遺構がある尾根筋の南側にあたる谷地形の黒色土の堆積層から出土しているものが多い。

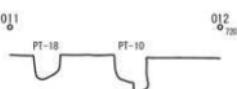
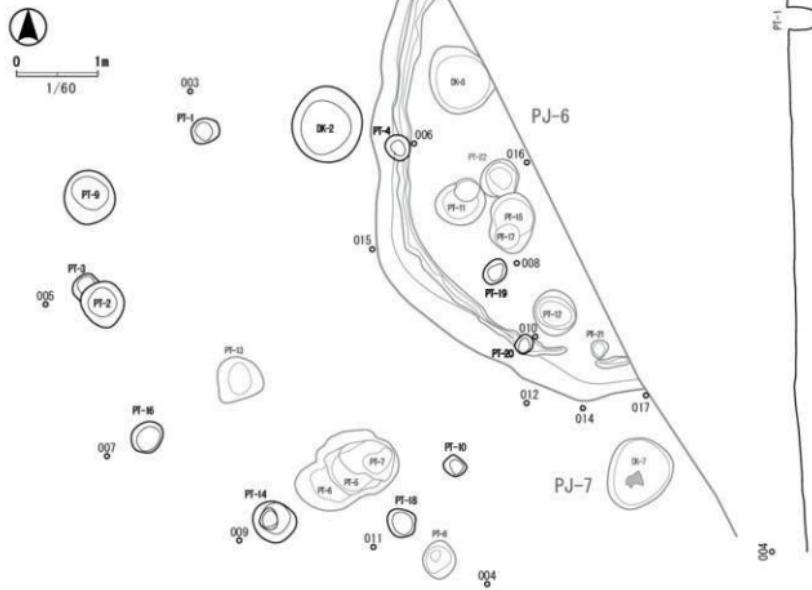
PJ-1



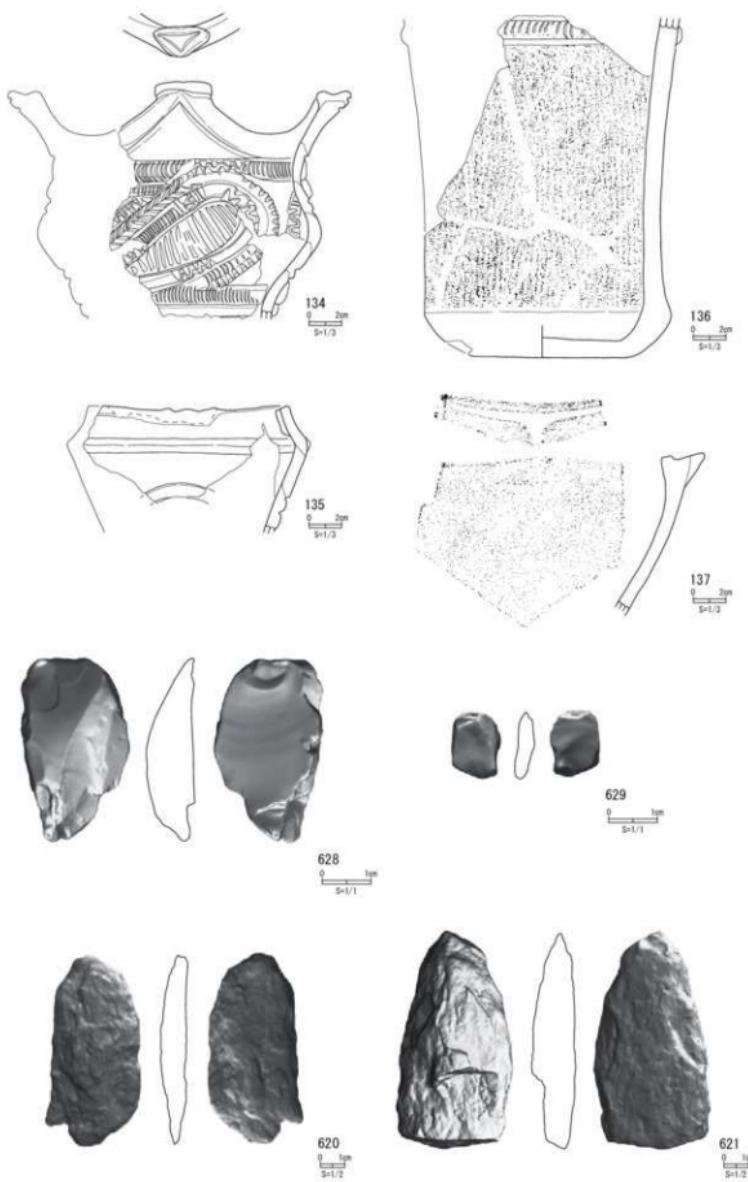
1/60

0 1m

003



第6図 PJ-1号住居



第7図 PJ-1号住居出土遺物



622
0 1cm
5=1/2

623
0 1cm
5=1/2

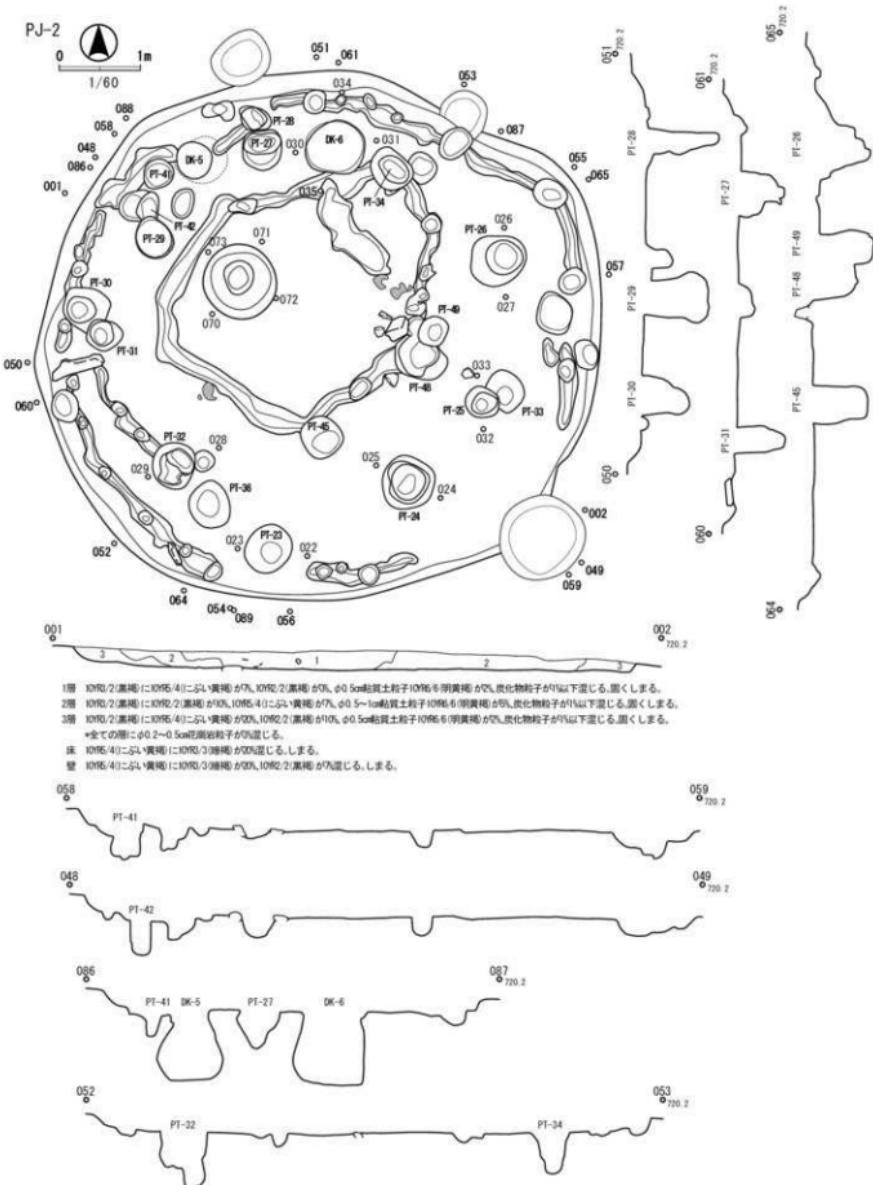


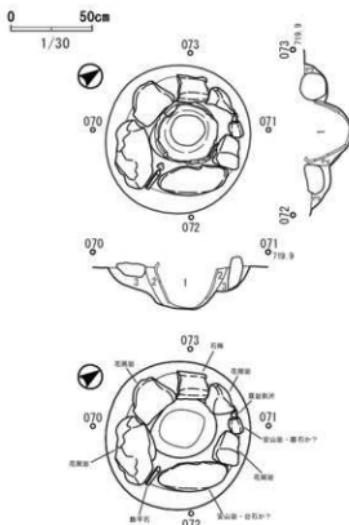
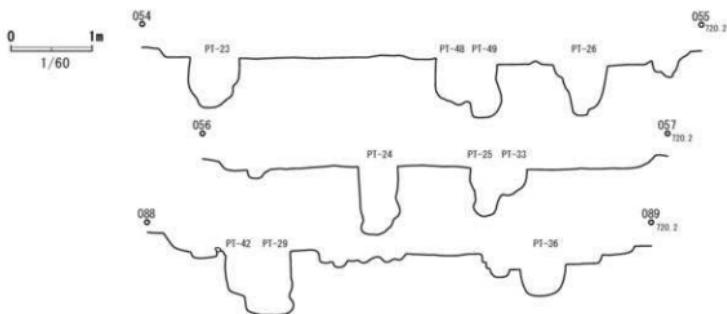
624
0 1cm
5=1/2



625
0 1cm
5=1/2

第8図 PJ-1号住居出土遺物





- 1層 10R2/3(縦隔)に10R6(6明黄緑)が9%、10R2/2(黒緑)が5%、炭化物粒子が5%混じる。
2層 10R6/3(5明黄緑)に10R2/3(縦隔)が5%混じる。しまる。
3層 10R4/3(5明黄緑)に10R2/3(縦隔)が9%、炭化物粒子が5%混じる。しまる。

PT-23

- 1層 10R4/2(灰黄緑) 砂っぽい粘質土に
10R2/2(黒緑)が5%、約0.5mmの黄土粒子
10R6/6(明黄緑)が5%混じる。しまる。
2層 10R4/3(5明黄緑)に10R5/3(5明黄緑)
が5%、10R2/2(黒緑)が10%混じる。しまる。
3層 10R6/4(5明黄緑) 砂っぽい粘質土に
10R4/3(5明黄緑)が15%、10R4/2(灰黄緑)
7%、10R2/2(黒緑)が10%混じる。固くしまる。
4層 10R4/4(8) 粘質土に10R2/3(黒緑)が5%
混じる。固くしまる。
5層 10R2/2(黒緑)に10R4/4(8) 粘質土とが5%、
10R5/3(5明黄緑)が7%混じる。固くしまる。
地山 10R6/6(明黄緑) 砂っぽい粘質土。固くしまる。

PT-24

- 1層 10R2/2(黒緑)に10R5/6(黄緑) 砂っぽい粘質土
が5%混じる。しまる。
2層 10R5/6(黄緑)に10R5/4(5明黄緑)が5%混じ
る。やわらしまる。
3層 10R4/2(灰黄緑)に10R5/6(黄緑) 砂っぽい粘質
土とが5%、10R2/2(黒緑)が5%混じる。固くしまる。
4層 10R2/2(黒緑)に10R5/2(黄緑)が5%、10R6/6(明黄
緑)が10%混じる。しまる。
5層 10R5/6(灰黄緑)に10R5/4(5明黄緑)が5%混
じる。固くしまる。
6層 10R5/6(灰黄緑) 砂っぽい粘質土に10R2/2(黒緑)
が5%混じる。固くしまる。
7層 (柱)10R2/2(黒緑)に10R5/4(5明黄緑)が
10%混じる。固くしまる。
地山 10R6/6(明黄緑) 砂っぽい粘質土。固くしまる。

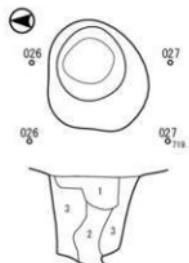
PT-25

- 1層 (柱)10R2/2(黒緑)に10R4/2(灰
緑)が5%、10R6/6(明黄緑) 粘質土が
5%、炭化物粒子が5%以下混じる。しま
る。
2層 10R4/2(灰黄緑)に10R5/1(黒緑)が5%、
10R6/6(明黄緑) 粘質土とが5%、炭化物
粒子が5%以下混じる。しまる。
* 全体に約0.5mmの花崗岩粒が5%以下混
じる。
地山 10R6/6(明黄緑) 砂っぽい粘質土。固
くしまる。

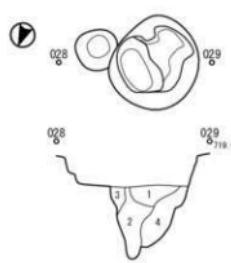
第10図 PJ-2号住居

0
50cm
1/30

PT-26



PT-32



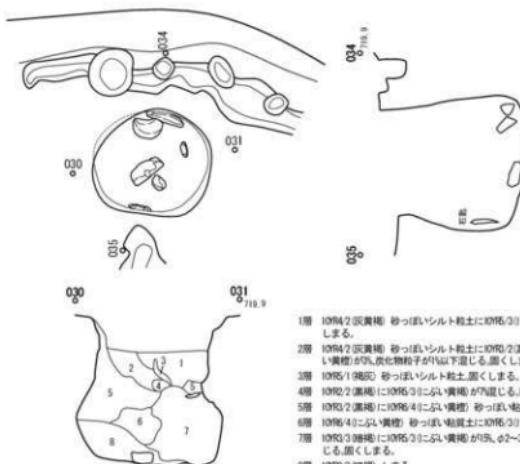
- (1層) 10R4.2(灰黃褐色) | 10R6.6(明黃褐色) が5%、10YR2.2(黑褐色) が5%、炭化物粒子が5%以下混じる。しまる。
 (2層) 10R4.2(灰黃褐色) | 10R6.6(明黃褐色) 粘質土が15%、10YR2.2(黑褐色) が10%、炭化物粒子が5%以下混じる。ややしまる。
 (3層) 10R6.6(灰黃褐色) 粘質土に10R6.2(灰黃褐色) が15%、10YR2.2(黑褐色) が5%、炭化物粒子が5%以下混じる。しまる。
 * 全層に2~5cmの泥炭岩層が5%以下混じり、砂質である。

地山 10R6.6(明黃褐色) 砂っぽい粘質土、固くしまる。

- (1層) 10R4.2(灰黃褐色) 砂っぽいシルト粘土に10R5.3(こぶし黃褐色) が5%混じる。固くしまる。
 (2層) 10R4.2(灰黃褐色) 砂っぽいシルト粘土に10R2.2(黑褐色) が15%、10R6.4(こぶし黃褐色) 砂っぽい粘質土が10%混じる。しまる。
 (3層) 10R4.2(灰黃褐色) 砂っぽいシルト粘土に10R6.4(こぶし黃褐色) 砂っぽい粘質土が5%、10R2.2(黑褐色) が5%混じる。しまる。
 (4層) 10R6.3(暗褐色) | 10R4.2(灰黃褐色) 砂っぽいシルト粘土・10R5.3(こぶし黃褐色) が10%混じる。固くしまる。
 地山 10R6.6(明黃褐色) 砂っぽい粘質土、固くしまる。

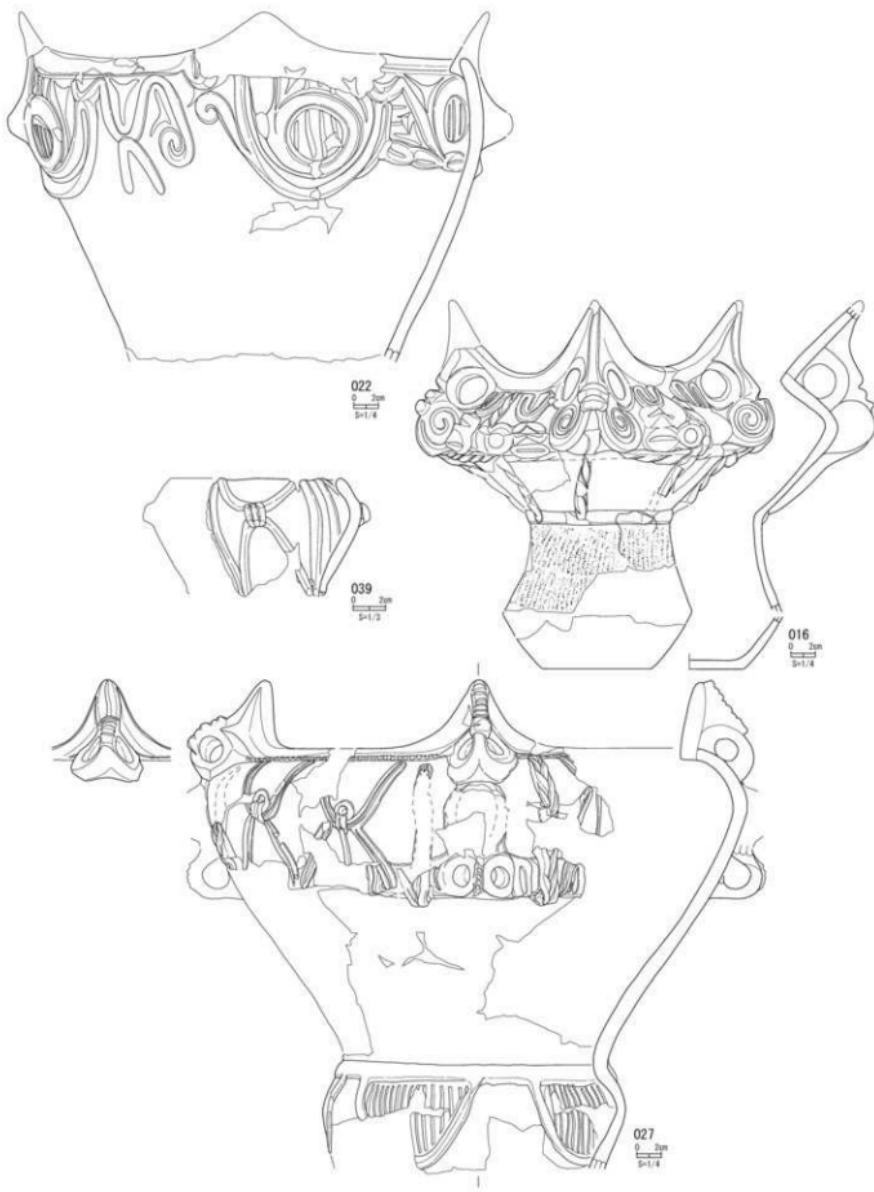
DK-6

Ⓐ

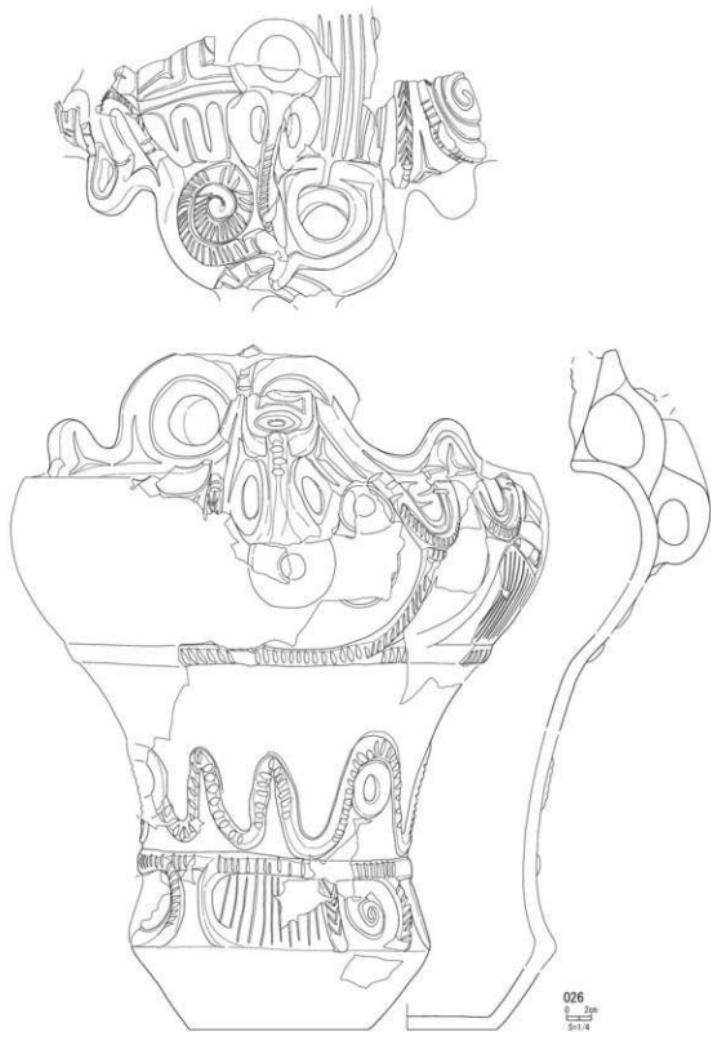


- (1層) 10R4.2(灰黃褐色) 砂っぽいシルト粘土に10R5.3(こぶし黃褐色) が5%、10R2.2(黑褐色) が5%混じる。固くしまる。
 (2層) 10R4.2(灰黃褐色) 砂っぽいシルト粘土に10YR2.2(黑褐色) が15%、約0.5m粘質土粒子10R6.4(こぶし黃褐色) 5%、炭化物粒子が5%以下混じる。固くしまる。
 (3層) 10R5.1(暗褐色) 砂っぽいシルト粘土、固くしまる。
 (4層) 10R2.2(黑褐色) | 10R5.3(こぶし黃褐色) が5%混じる。固くしまる。
 (5層) 10R2.2(黑褐色) | 10R6.4(こぶし黃褐色) 砂っぽい粘質土が5%混じる。しまる。
 (6層) 10R6.4(こぶし黃褐色) 砂っぽい粘質土に10R6.3(こぶし黃褐色) が5%混じる。固くしまる。
 (7層) 10R6.3(暗褐色) | 10R5.3(こぶし黃褐色) が5%、約2~3m粘質土ブロック10R6.6(明黃褐色) が5%混じる。固くしまる。
 (8層) 10R5.3(暗褐色) 砂っぽい粘質土、固くしまる。

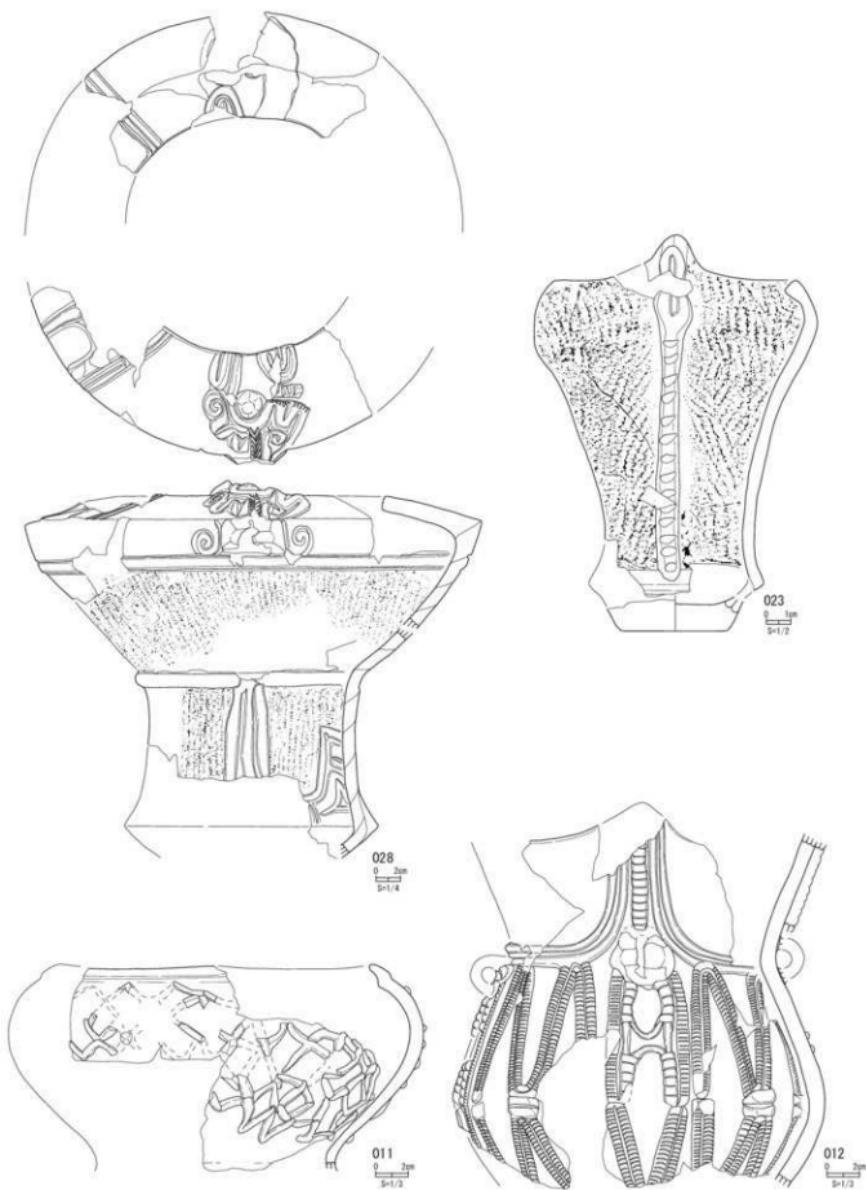
第 11 図 PJ-2 号住居



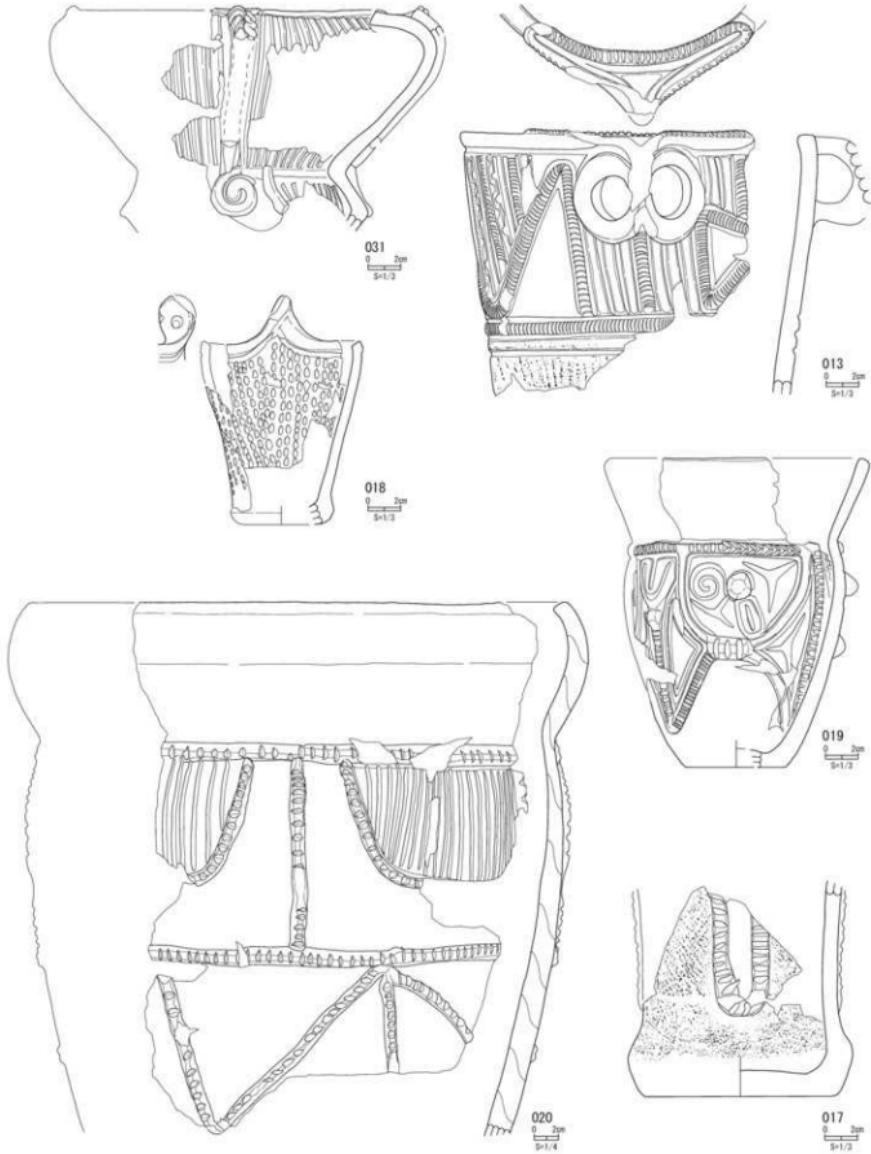
第12図 PJ-2号住居出土遺物



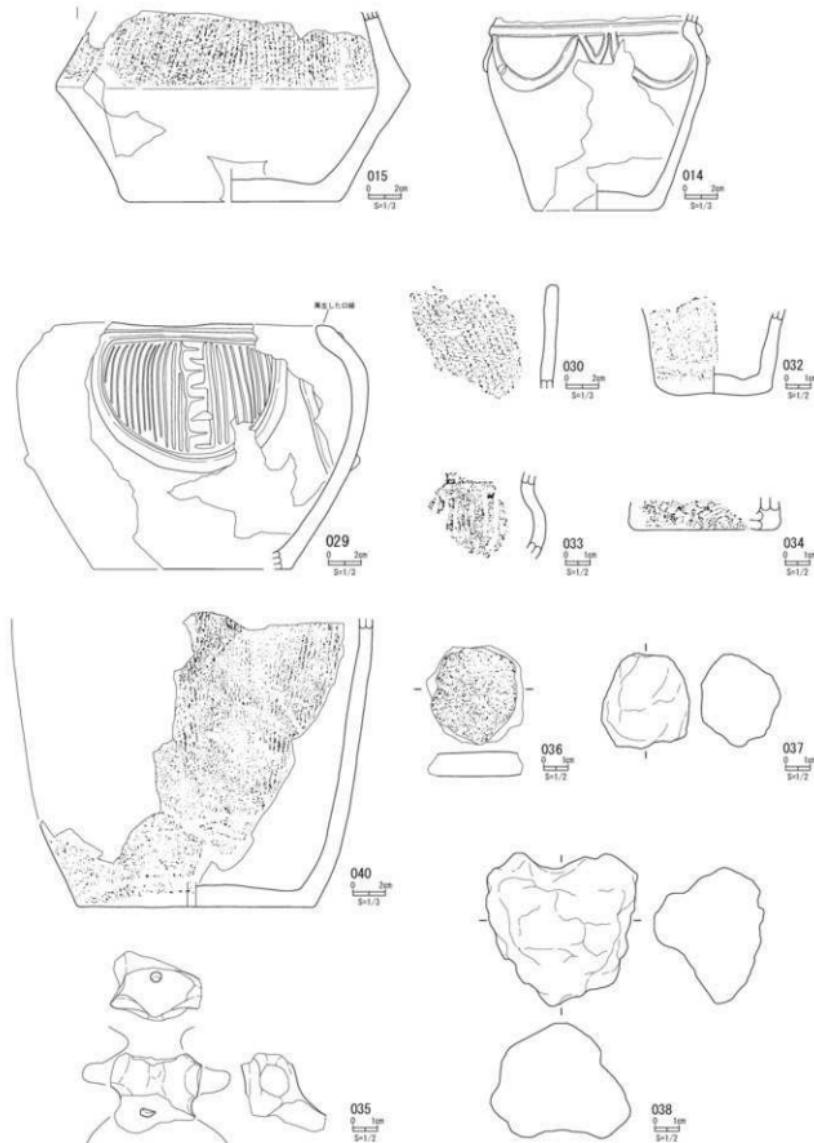
第13図 PJ-2号住居出土遺物



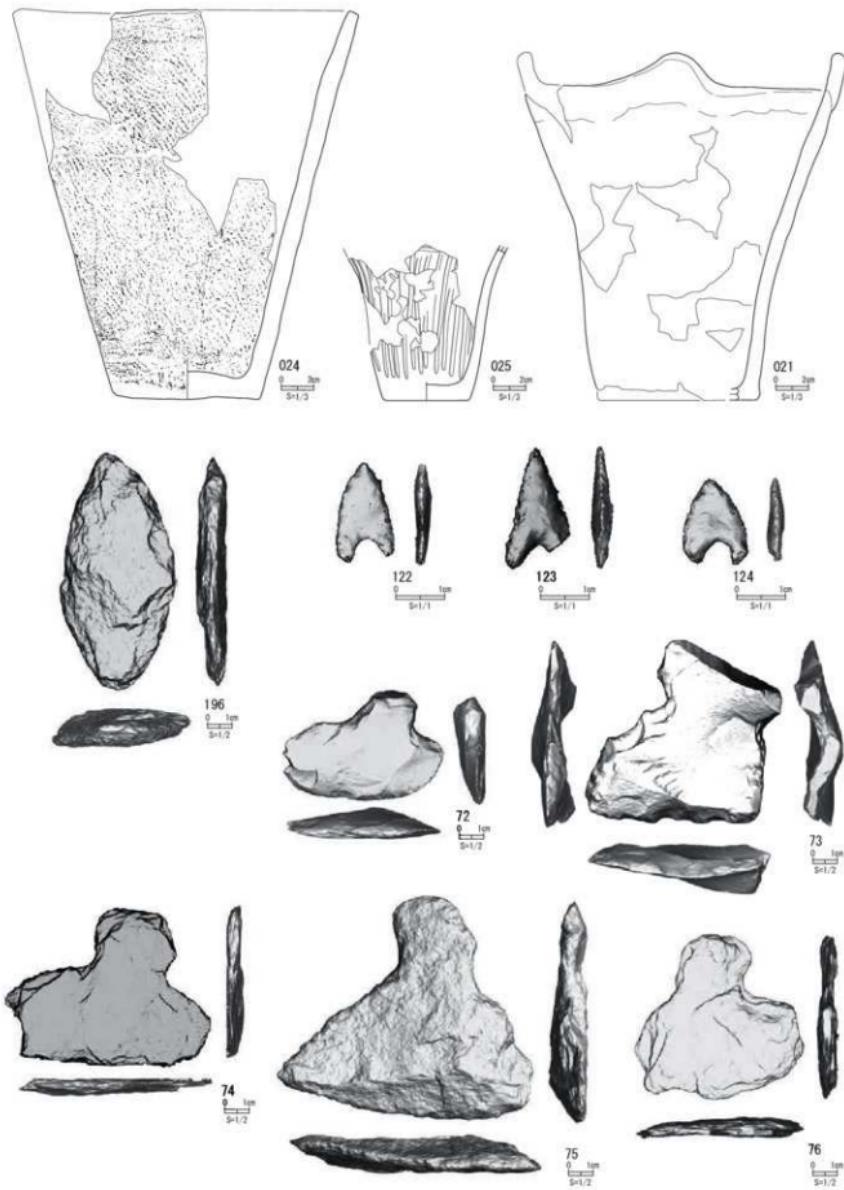
第14図 PJ-2号居住出土遺物



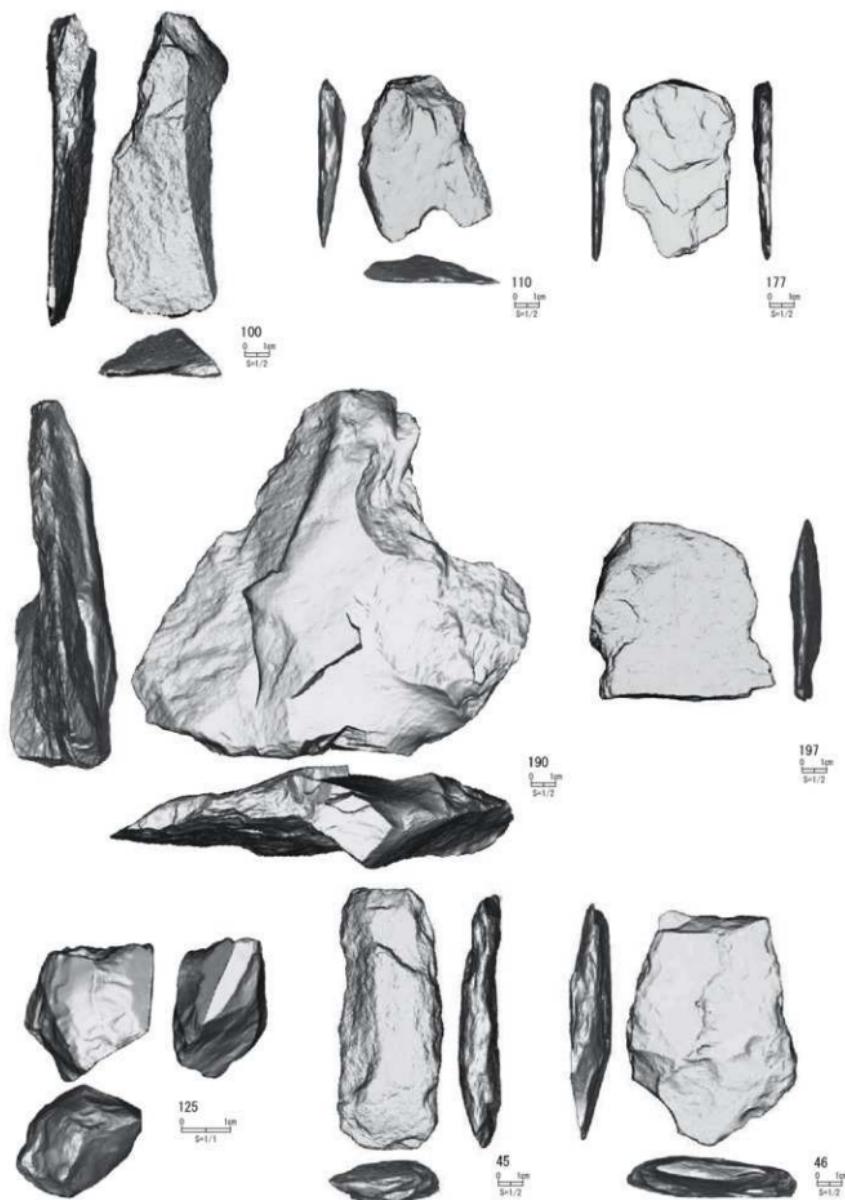
第15図 PJ-2号住居出土遺物



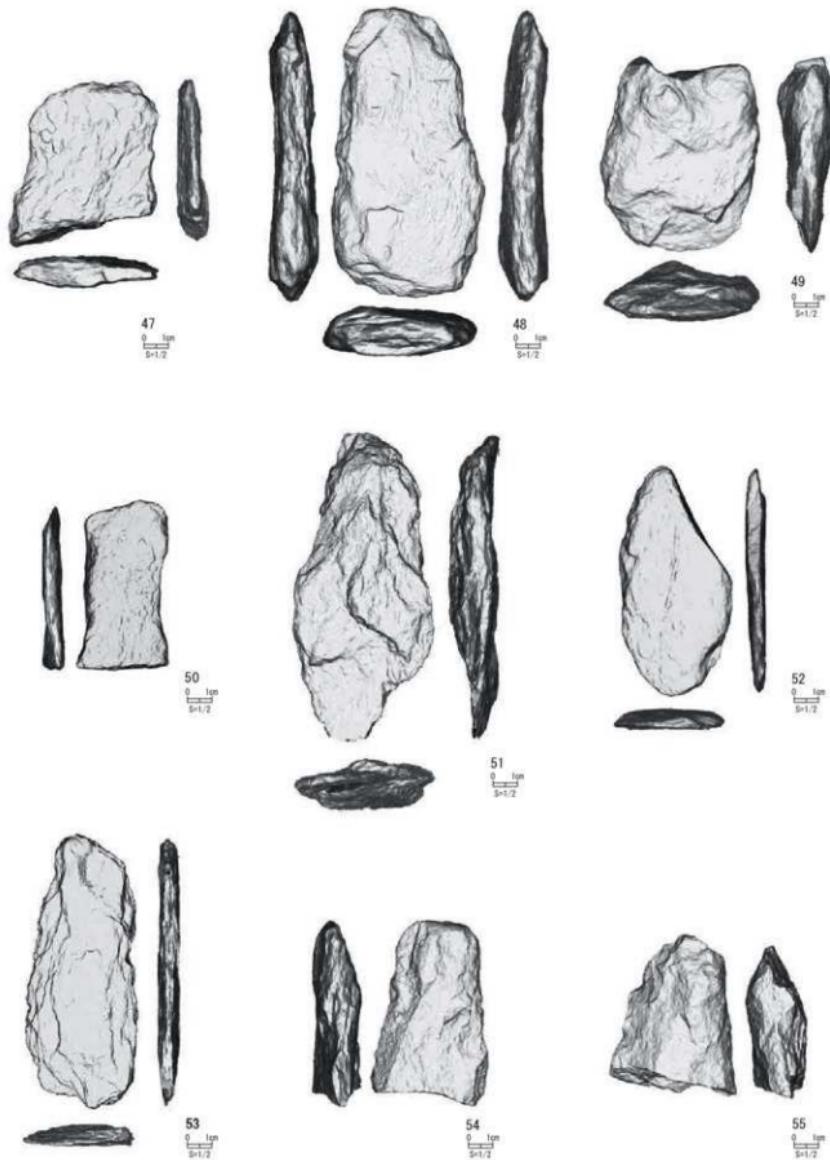
第16図 PJ-2号住居出土遺物



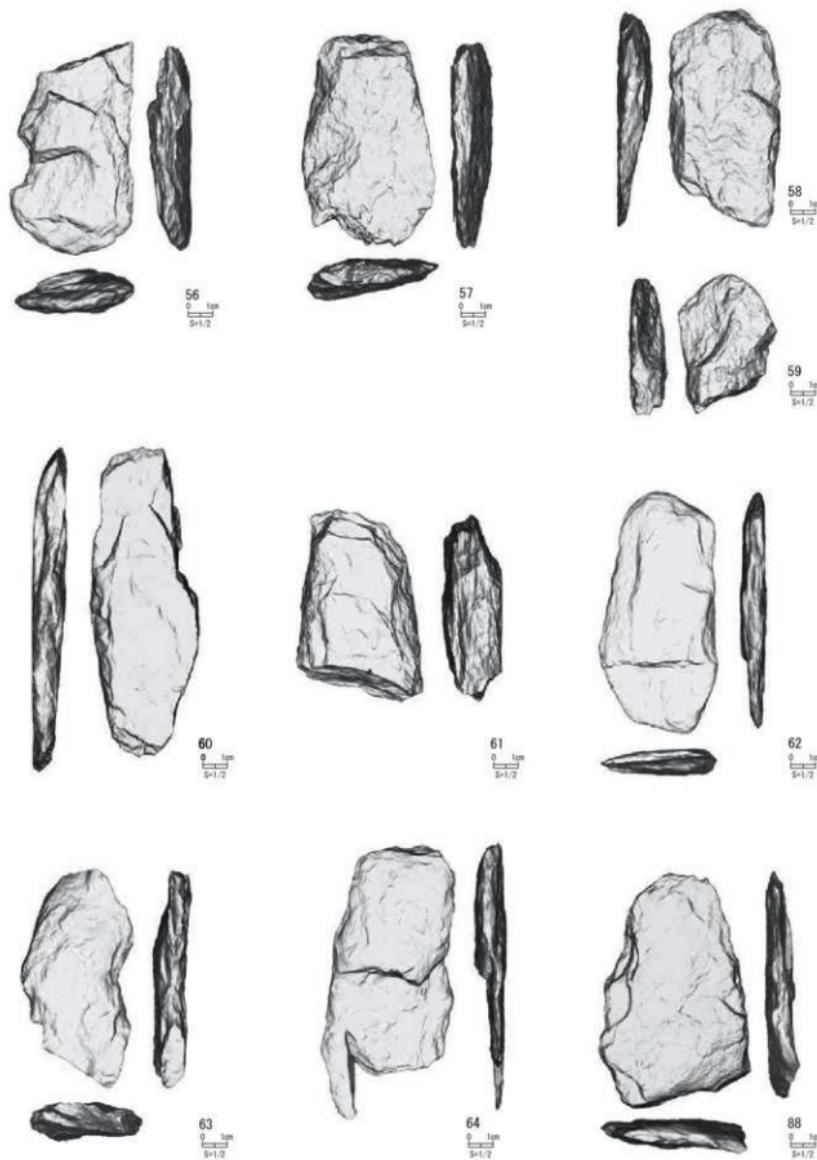
第17図 PJ-2号住居出土遺物



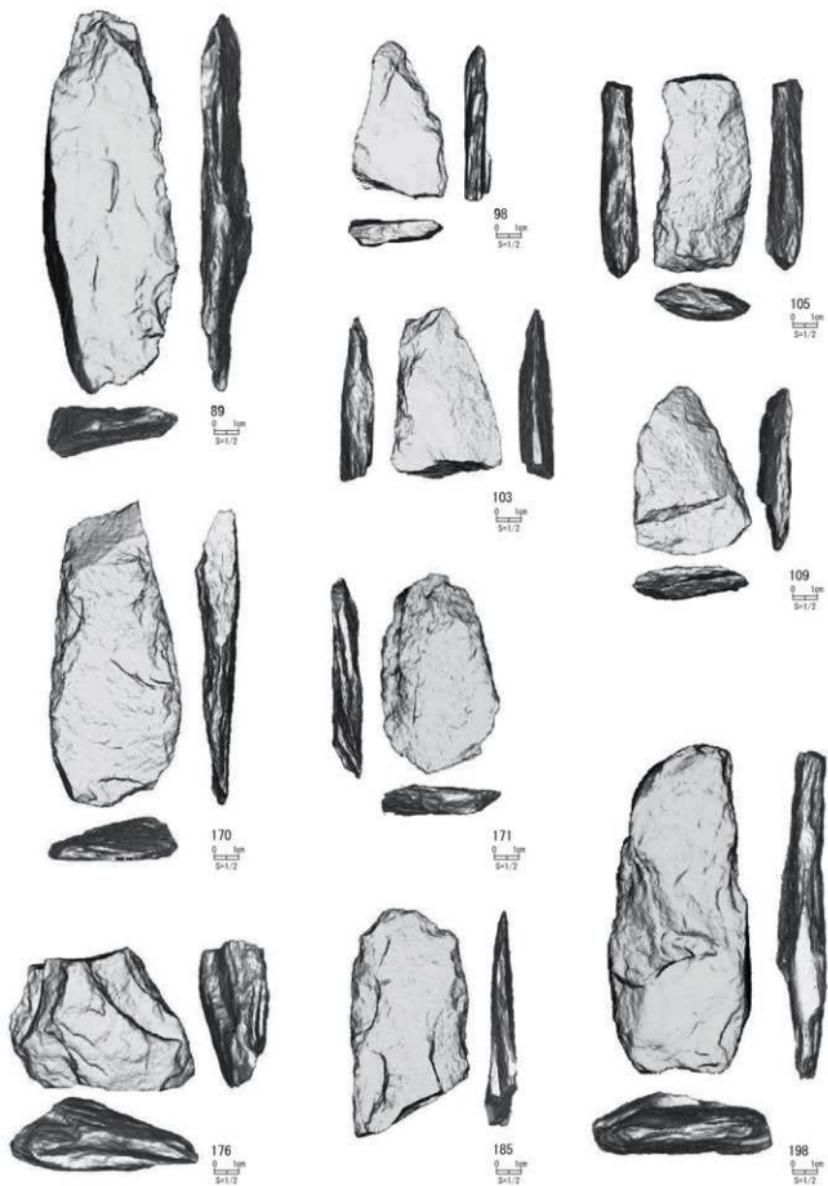
第18圖 PJ-2號住居出土遺物



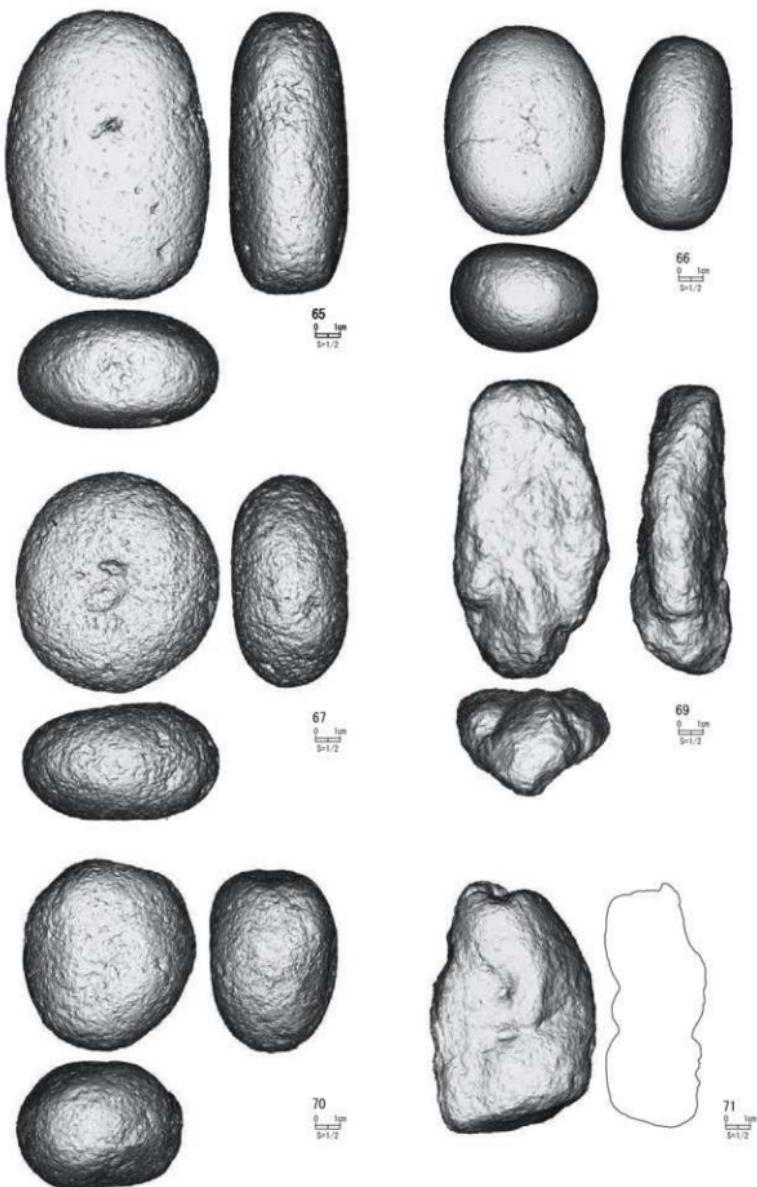
第19図 PJ-2号住居出土遺物



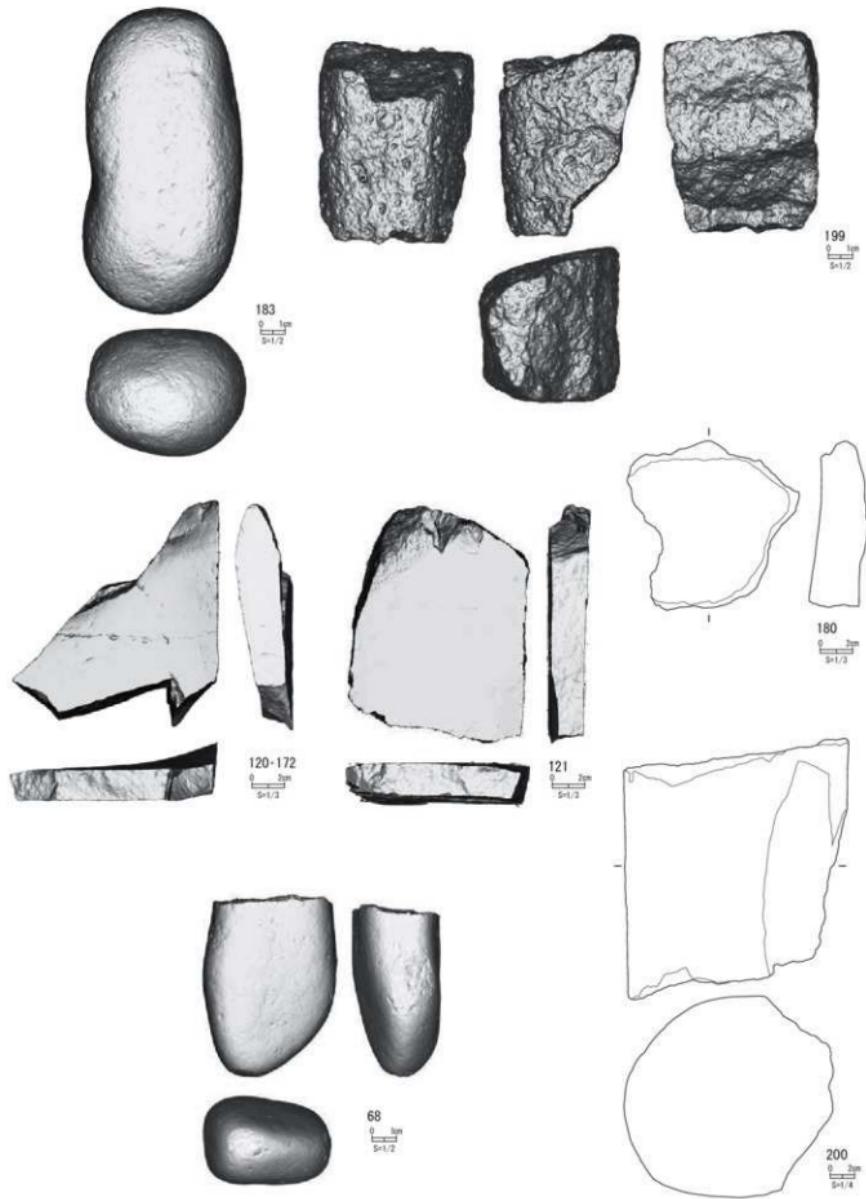
第20圖 PJ-2號居住出土遺物



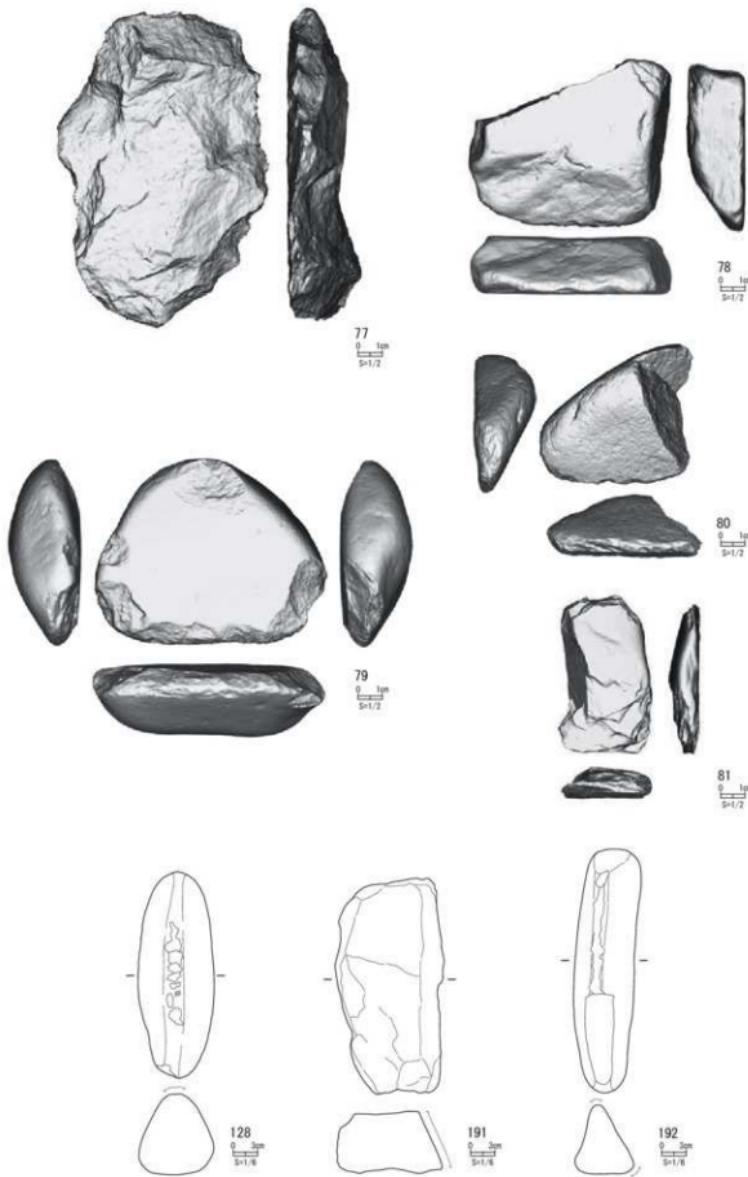
第21図 PJ-2号住居出土遺物



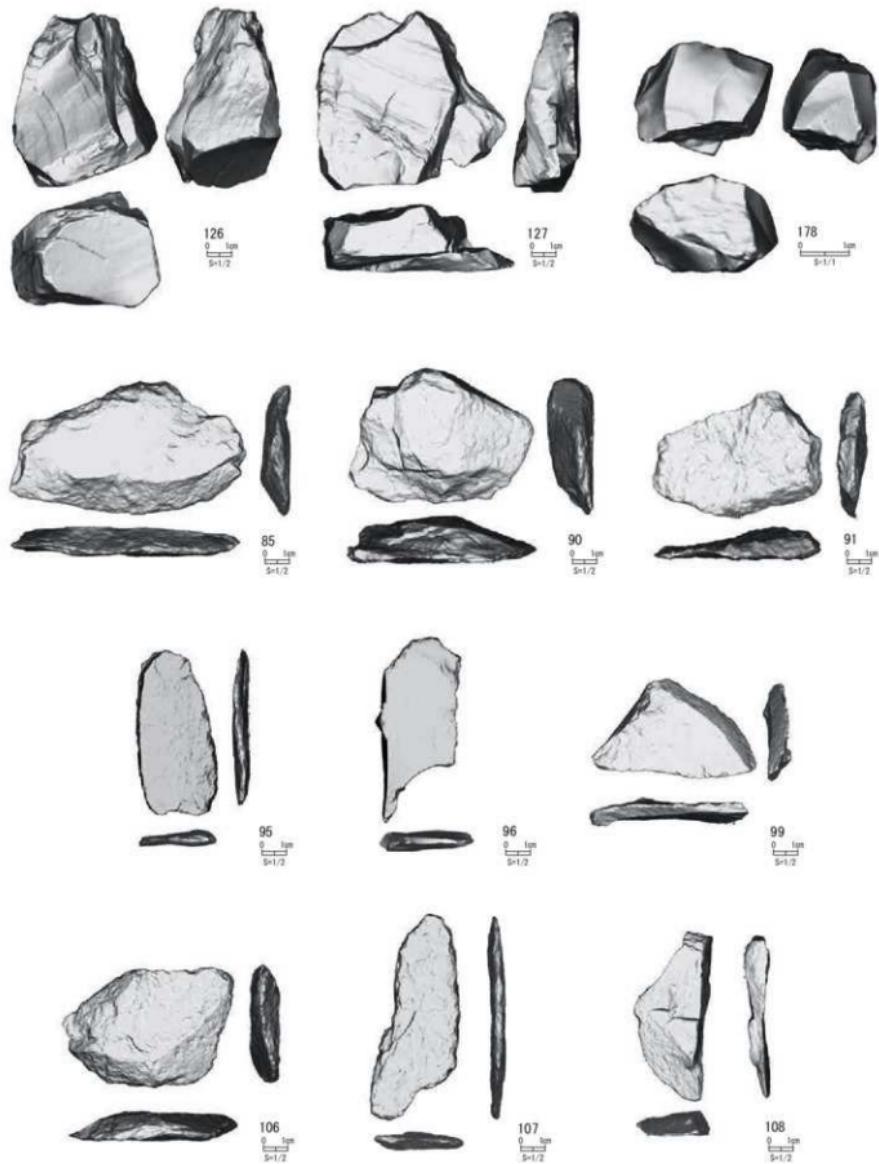
第22図 PJ-2号住居出土遺物



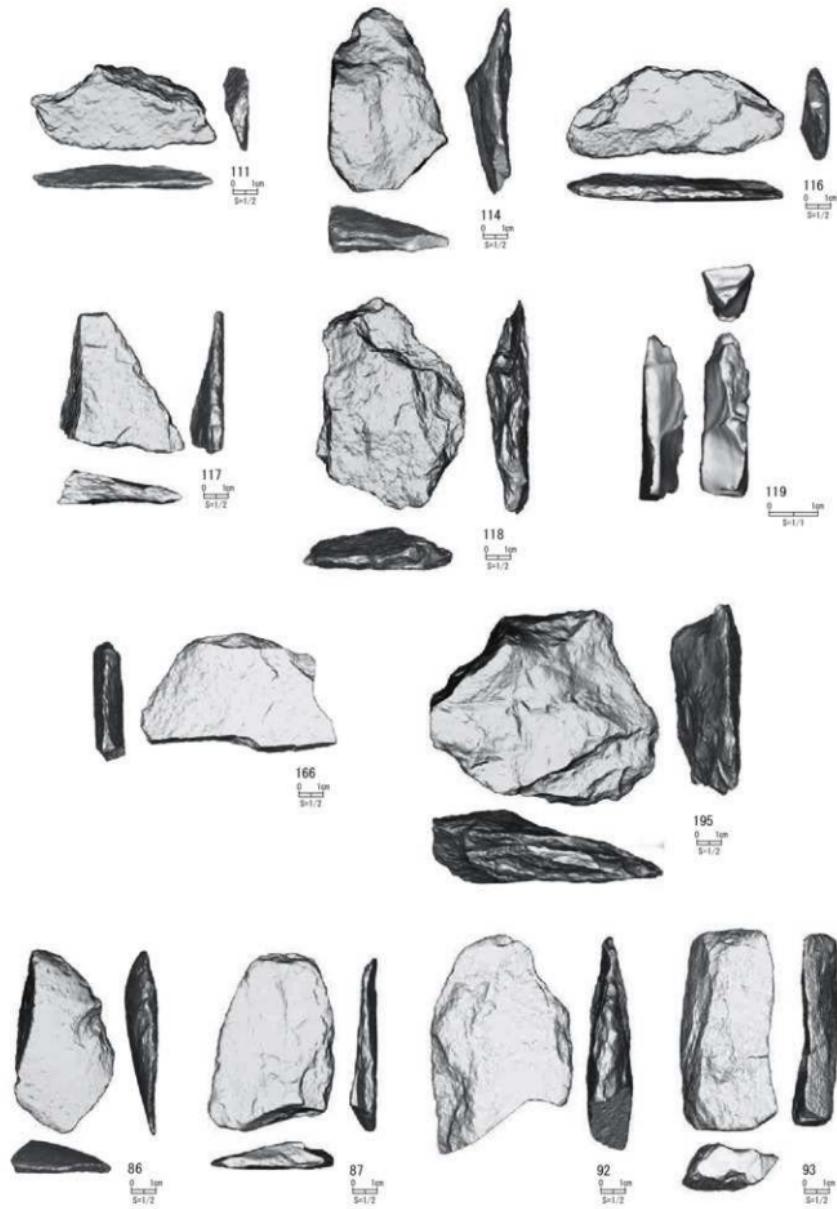
第23図 PJ-2号住居出土遺物



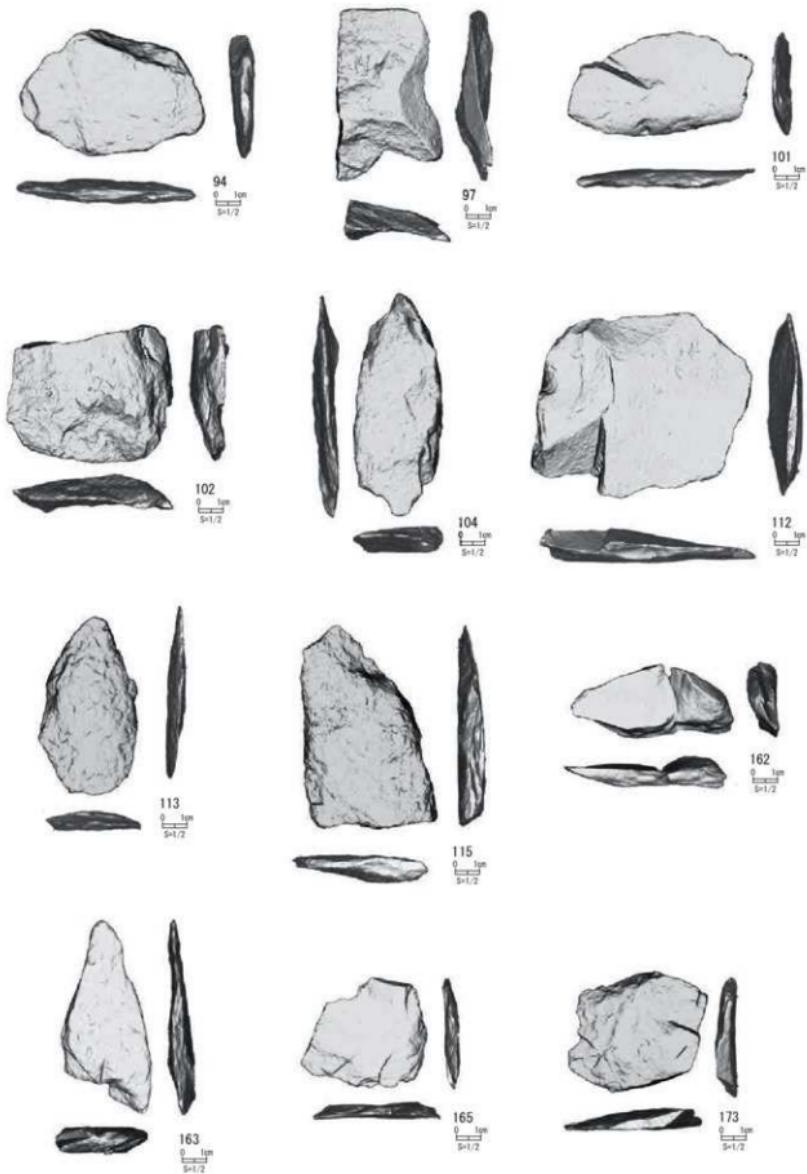
第24图 PJ-2号居住出土遗物



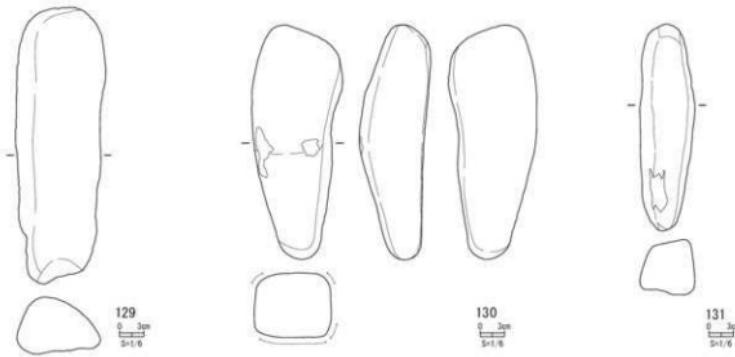
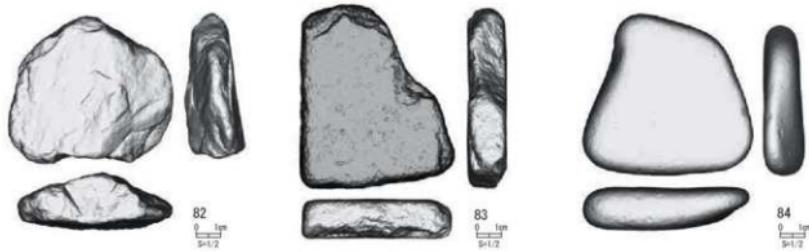
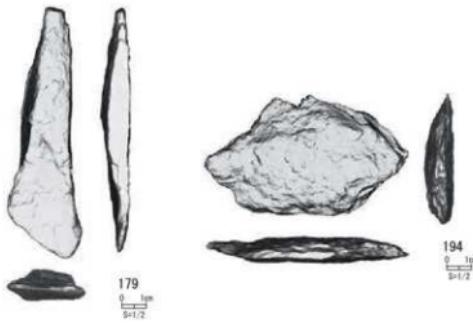
第25図 PJ-2号住居出土遺物



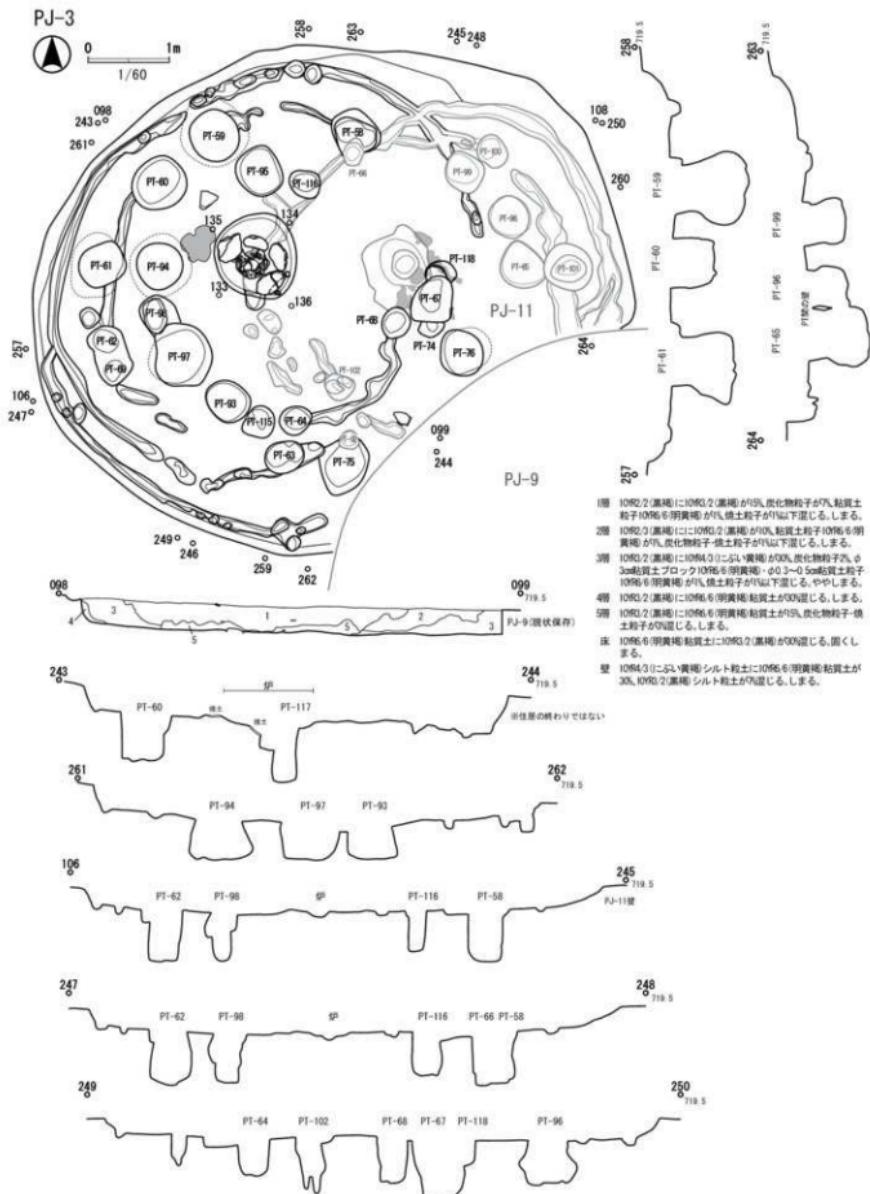
第26圖 PJ-2號居住出土遺物



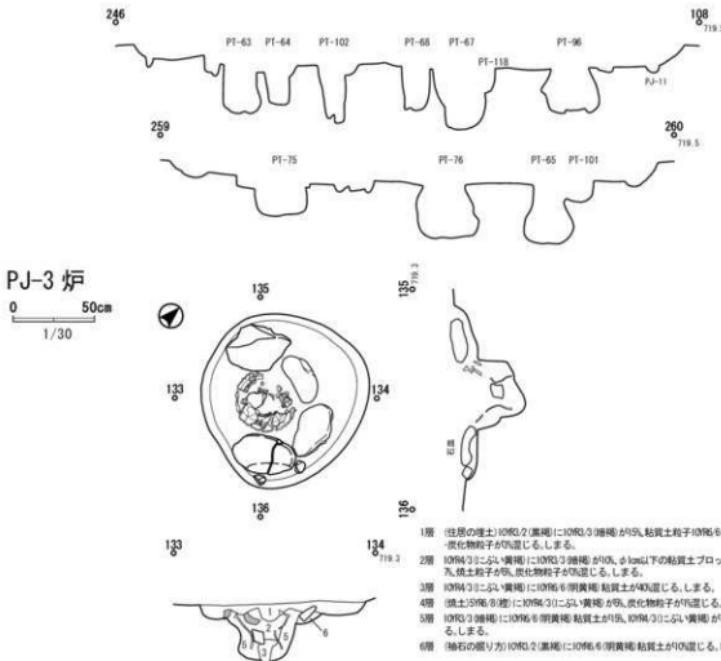
第27図 PJ-2号住居出土遺物



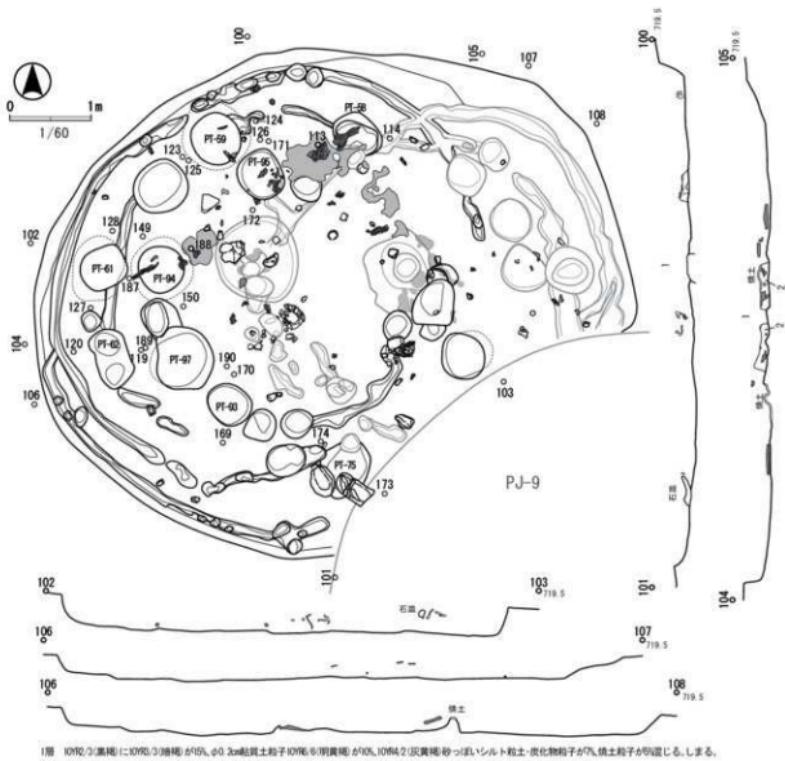
第28图 PJ-2号住居出土遗物



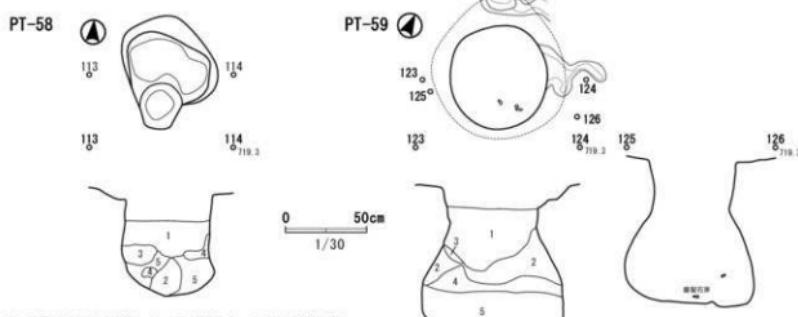
第29図 PJ-3号住居



第30図 PJ-3号住居



1層 IOR4/3(黒場)にIOR4/3(黒場)が約5%、 $\phi 0.3\text{cm}$ 粘質土粒子10%で6% (明黄場)が約10%、IOR4/2(灰黄場)が約5%、白いシート粘土・炭化物粒子が約5%、埴土粒子が約5%混じる。しまる。
2層 IOR4/3(こだい 黄場)に炭化物粒子が約5%、IOR4/3(黒場)が約5%、焼土粒子が約10%、 $\phi 0.3\text{cm}$ 粘質土粒子10%で6% (明黄場)が約5%混じる。しまる。



1層 (住居の埋土) 10YR5/2(黒褐色)に約3m以下の粘質土ブロック10YR5を明黄褐色が10%、炭化物粒子が3%、焼土粒子が1%混じる。ややしまる。

2番 (柱底) 10RF/2(黒堀)に炭化物粒子がなく、粘土質粒子(10RFも同じ箇所)が付着する。ややしまる。(覆ぐされてしまった)

38 10F6.2(高質土)に0.1m以下のおきに以下の粘質土ブロック10F6.6(明黄地)が90%混じる。しまる
49 10F6.6(明黄地) 粘質土に10F6.2(高級)が10%混じる。しまる。

5層 (埋め戻した土) 10/80.2(高周)に10/96.6(明黄禪) 粘質土が7%、10/95.4(こいし黄禪)が9%混じる。しまる。

越山（10月6日明賣場）絶賛土画くしまる。

1層 NH₄⁺/2(黒褐色)に粘質土粒子10%を(明黄褐色)が10%、炭化物粒子が4%、填土粒子が4%混じる。しまる。(住居の堆土が沈んだもの)

2番 初段(2/黒曜)に10%5/4(にらし青褐色)が15%、粘質土粒子10%6/6(明青褐色)が10%、炭化物粒子が1%混じる、ややしまる。

3層 10mm(明礬磚) 粘質土. しまる.

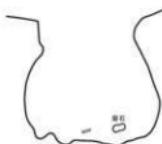
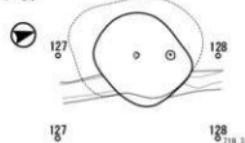
4番 101番/4(にぶい黄緑)に101番/6(原)

5層 10MΩ/1(黒端子) + 10MΩ/2(黒端子) 方式

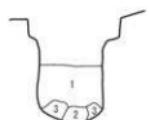
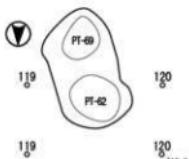
地山 1095.6(明萬曆) 粘質土.圓くし

第31図 PJ-3号住居遺物・焼土・炭化材出土状況 PJ-3号住居内ヒット

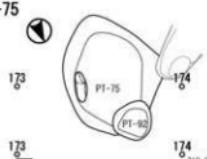
PT-61



PT-62



PT-75



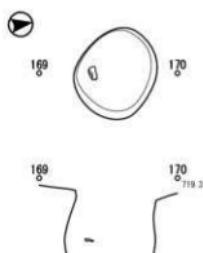
1層 10%6.2(黒褐色) 粘質土で20%, 10%3.1(黒褐色) が9%, 褐化物粒子が1%混じる。しまる。

2層 10%0.1(黒褐色) に10%4.3(こいしや黄褐色) が混じる。しまる。(種ぐれしてしまった)

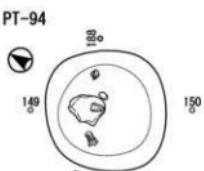
3層 10%0.2(黒褐色) に粘質土粒子10%6.6(明黄色) が混じる。しまる。

地山 10%6.6(明黄色) 粘質土。固くしまる。

PT-93



PT-94



1層 10%6.6(明黄色) 粘質土に10%0.2(薄褐色) が20%, 褐化物粒子が6%, 黄土粒子が1%以下混じる。固くしまる。

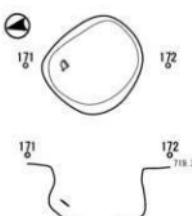
2層 10%0.3(薄褐色) に約3cm粘質土粒子10%6.6(明黄色) が5%混じる。固くしまる。

3層 10%2.1(黒褐色) に10%0.3(薄褐色) が20%, 10%6.6(明黄色) が10%, 褐化物粒子が5%混じる。固くしまる。

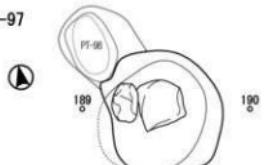
4層 10%0.2(黒褐色) に10%0.3(薄褐色) が5%, 10%6.6(明黄色) が10%, 褐化物粒子が5%混じる。固くしまる。

地山 10%6.6(明黄色) 粘質土。固くしまる。

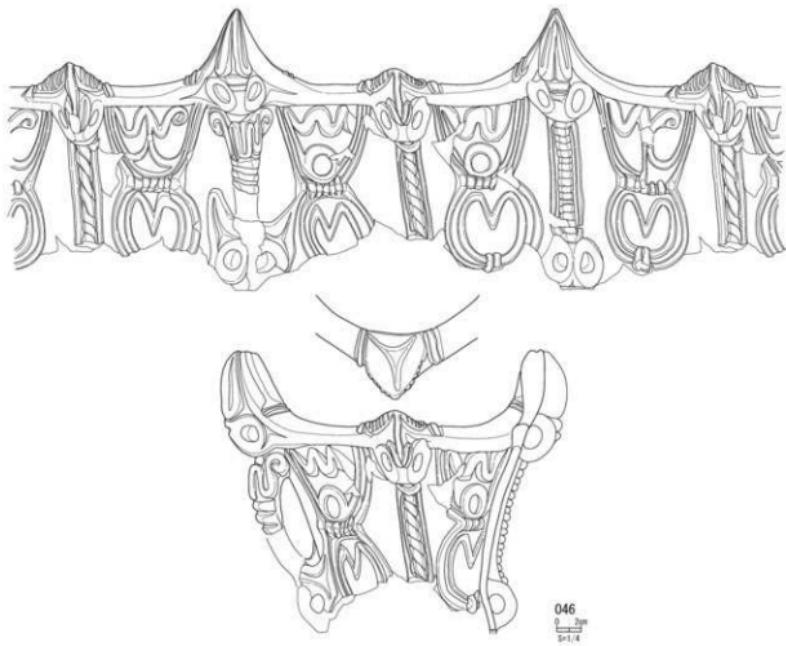
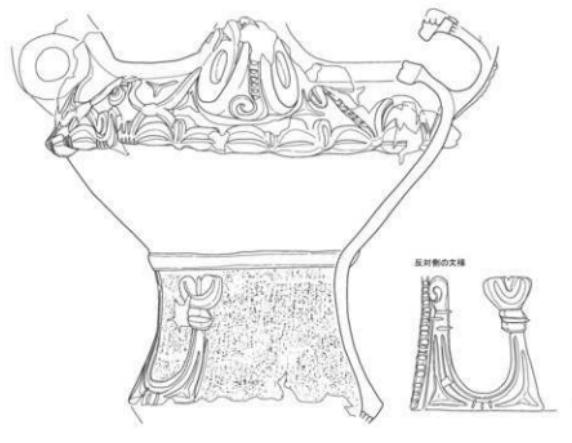
PT-95



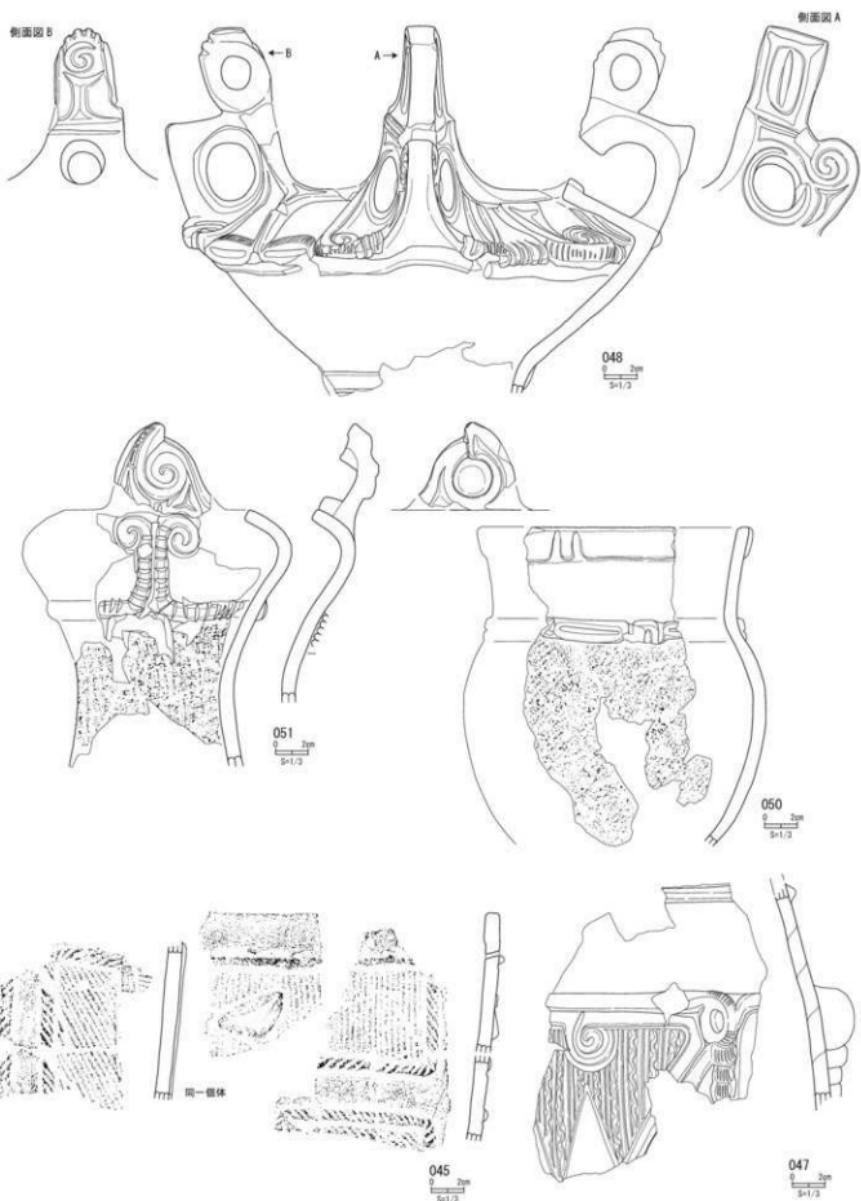
PT-97



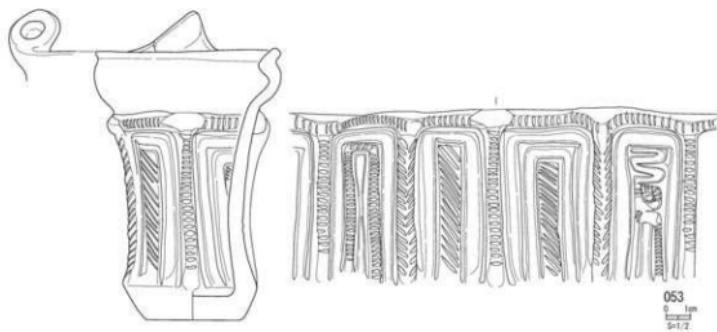
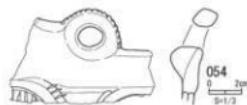
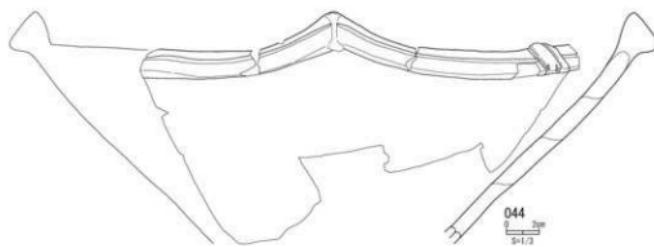
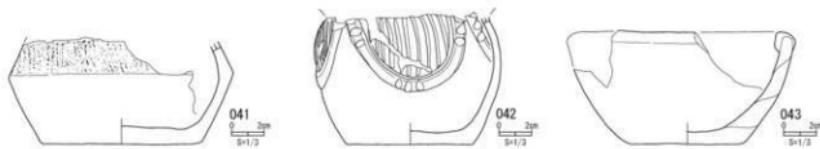
第32図 PJ-3号住居内ビット



第33図 PJ-3号住居出土遺物



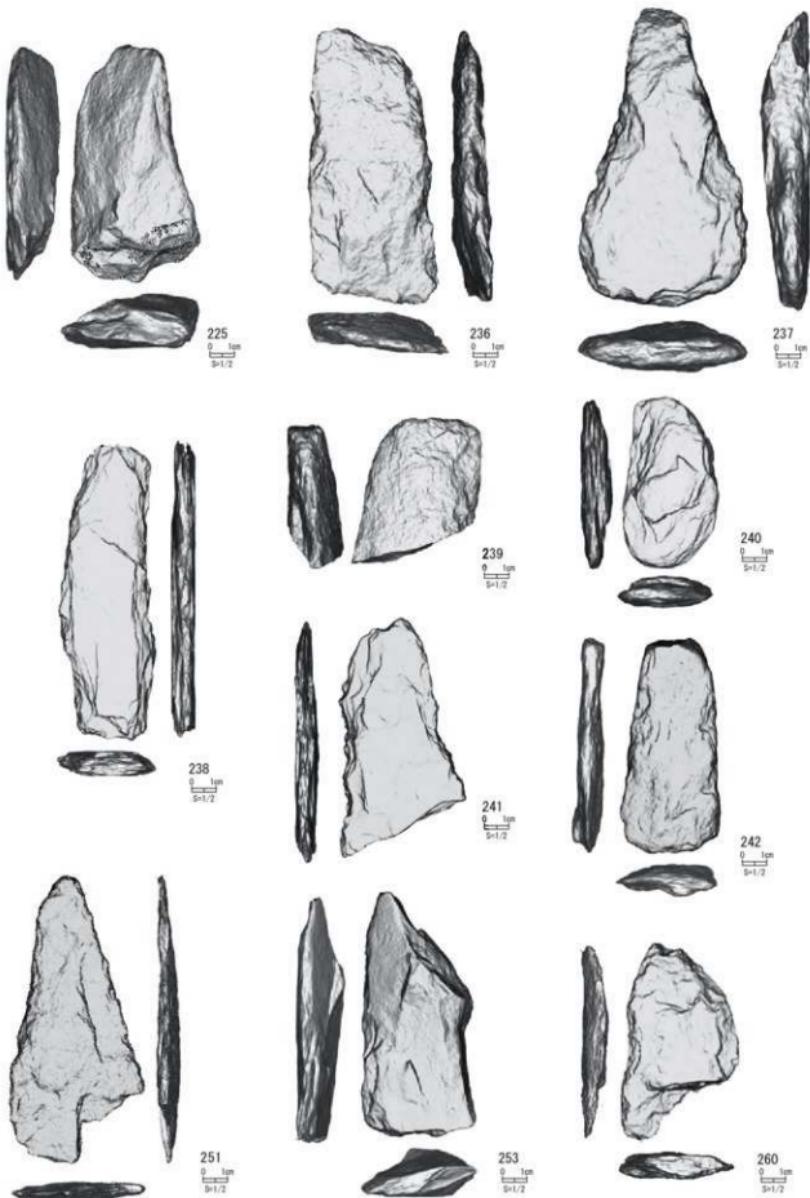
第34図 PJ-3号住居出土遺物



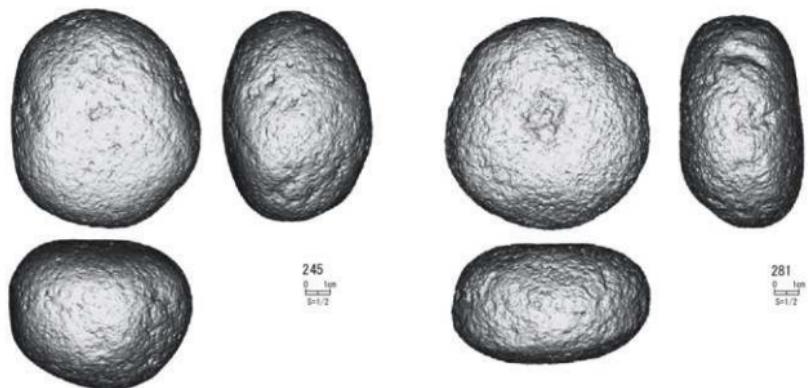
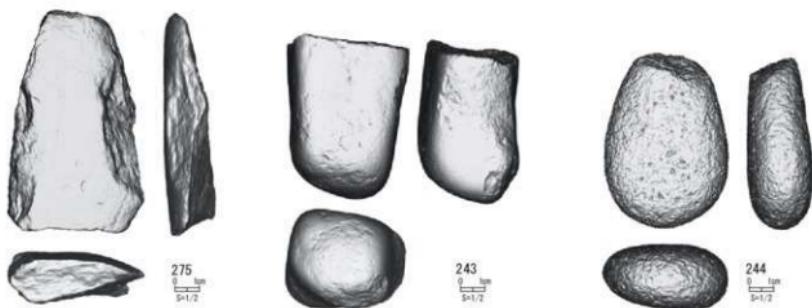
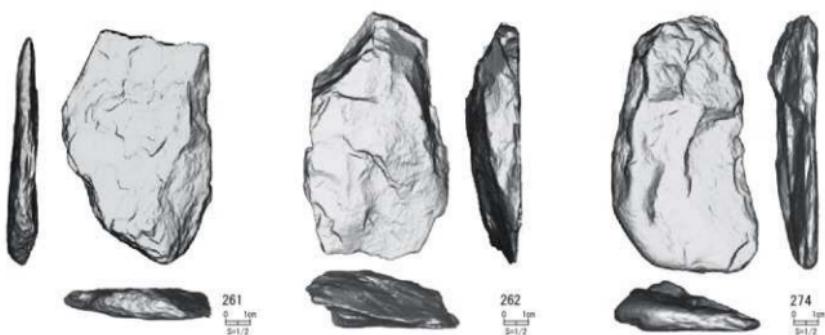
第35図 PJ-3号住居出土遺物



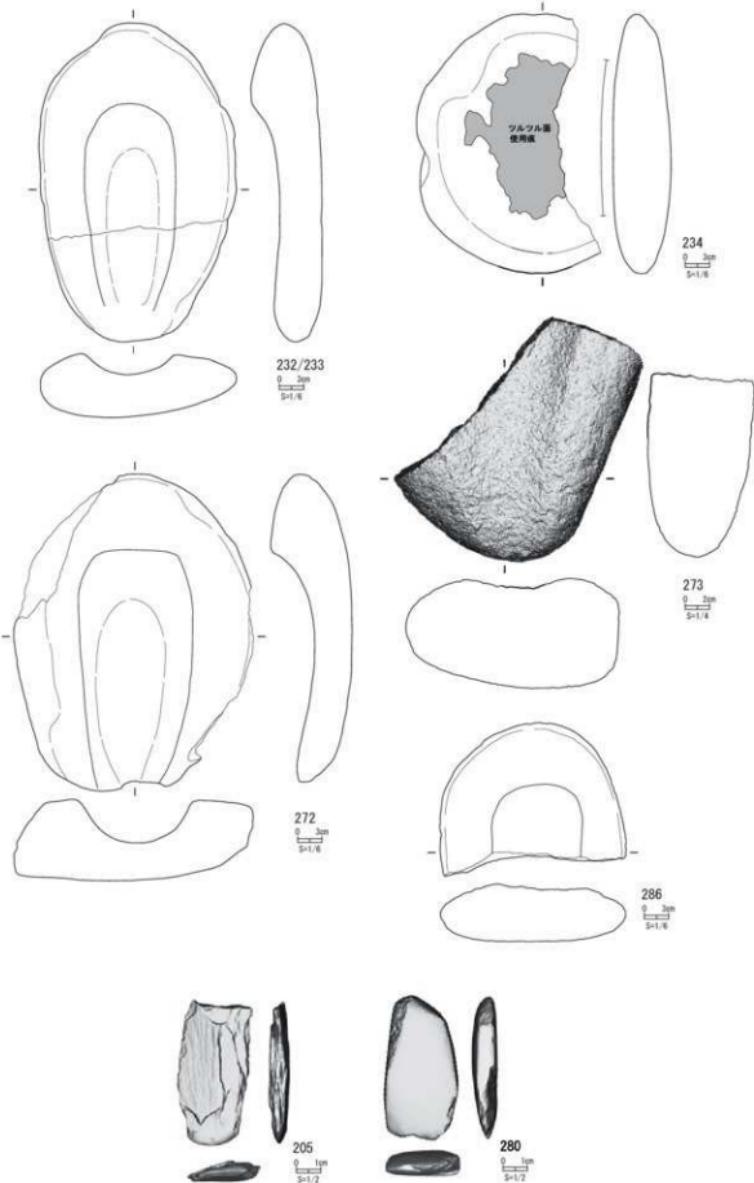
第36図 PJ-3号住居出土遺物



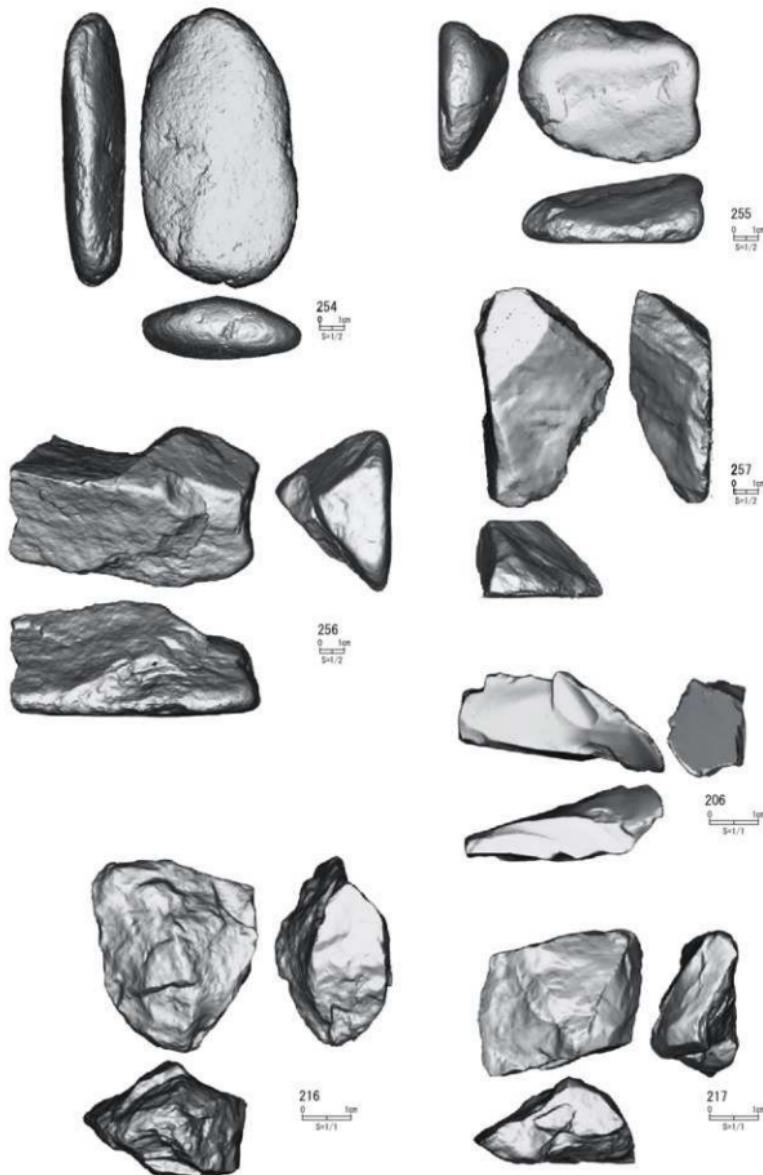
第37図 PJ-3号住居出土遺物



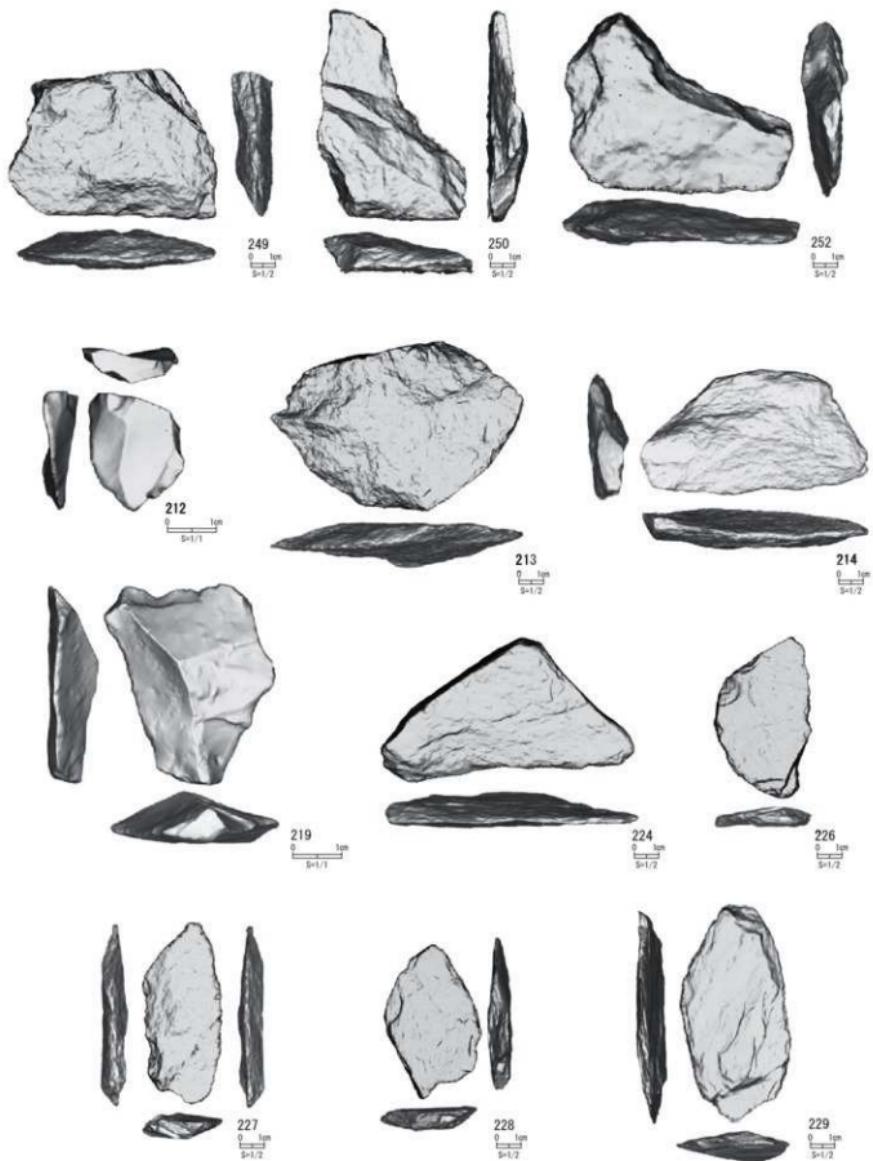
第38圖 PJ-3號住居出土遺物



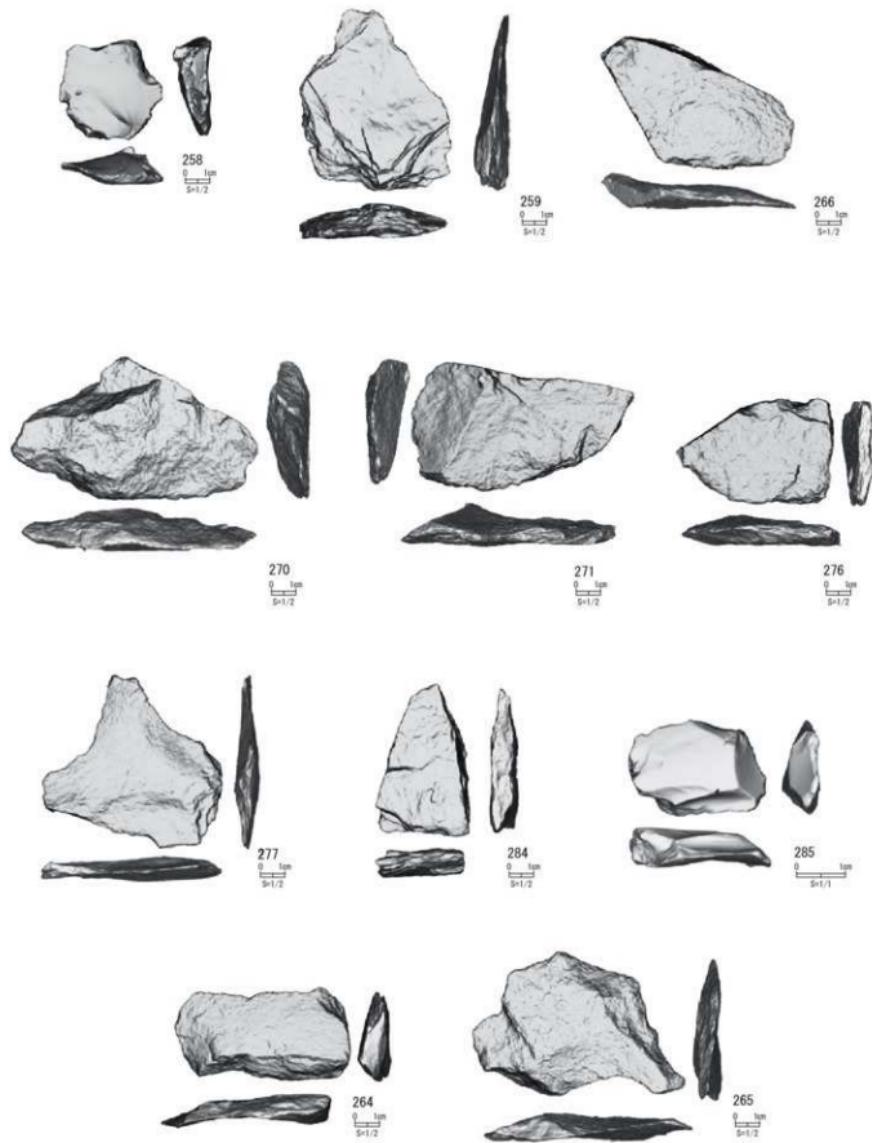
第39図 PJ-3号住居出土遺物



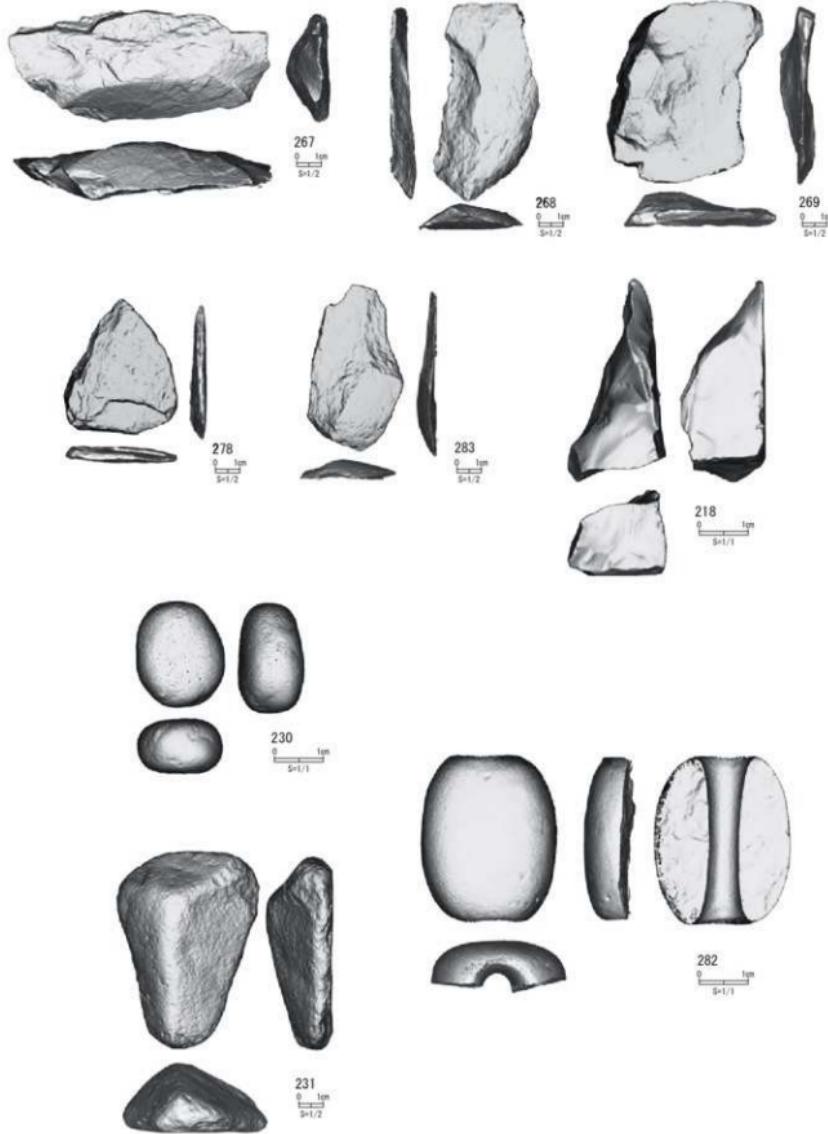
第40図 PJ-3号住居出土遺物



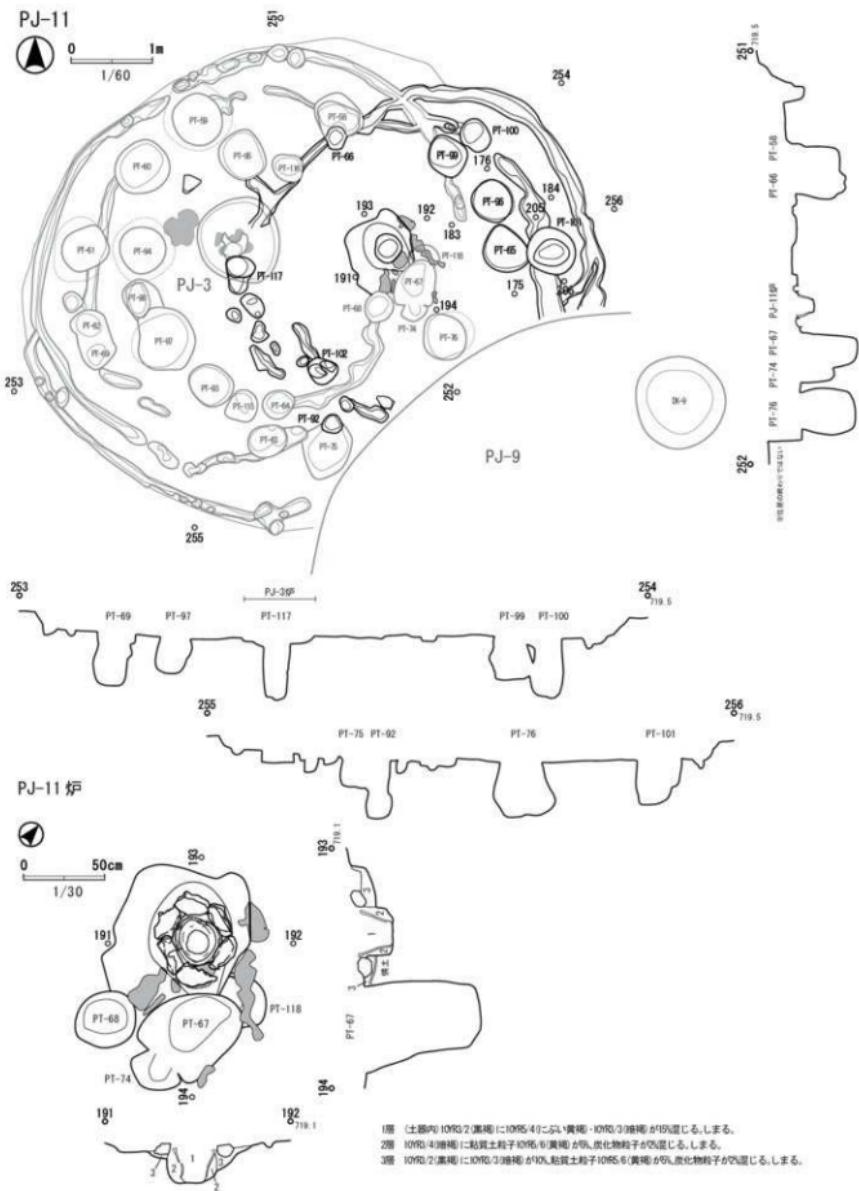
第41図 PJ-3号住居出土遺物



第42図 PJ-3号住居出土遺物



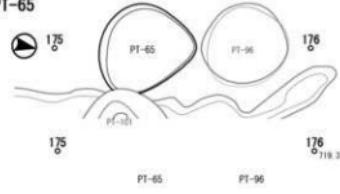
第43図 PJ-3号住居出土遺物



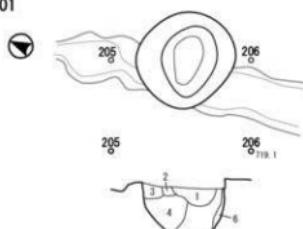
第44図 PJ-11号住居

0 50cm
1/30

PT-65



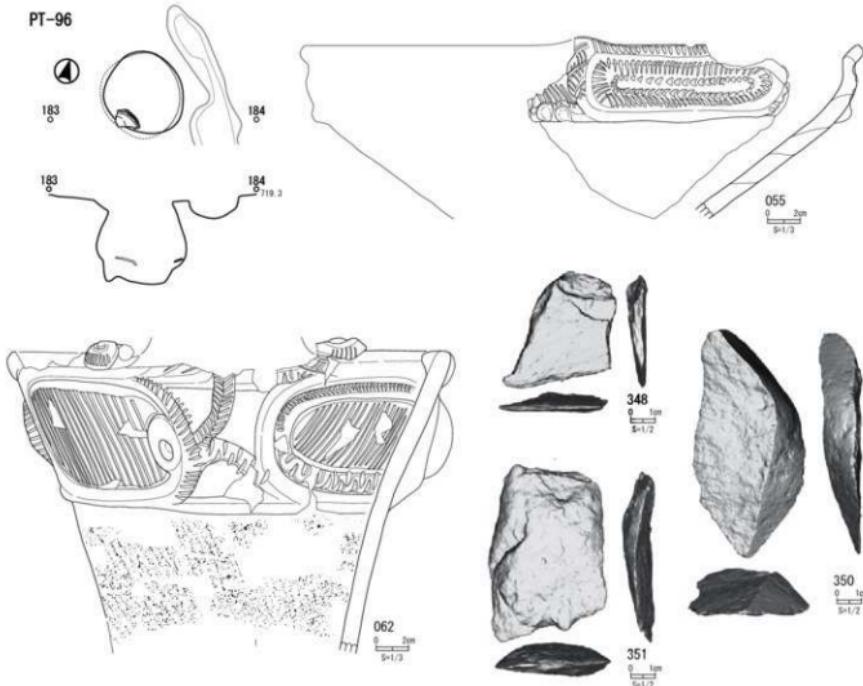
PT-101



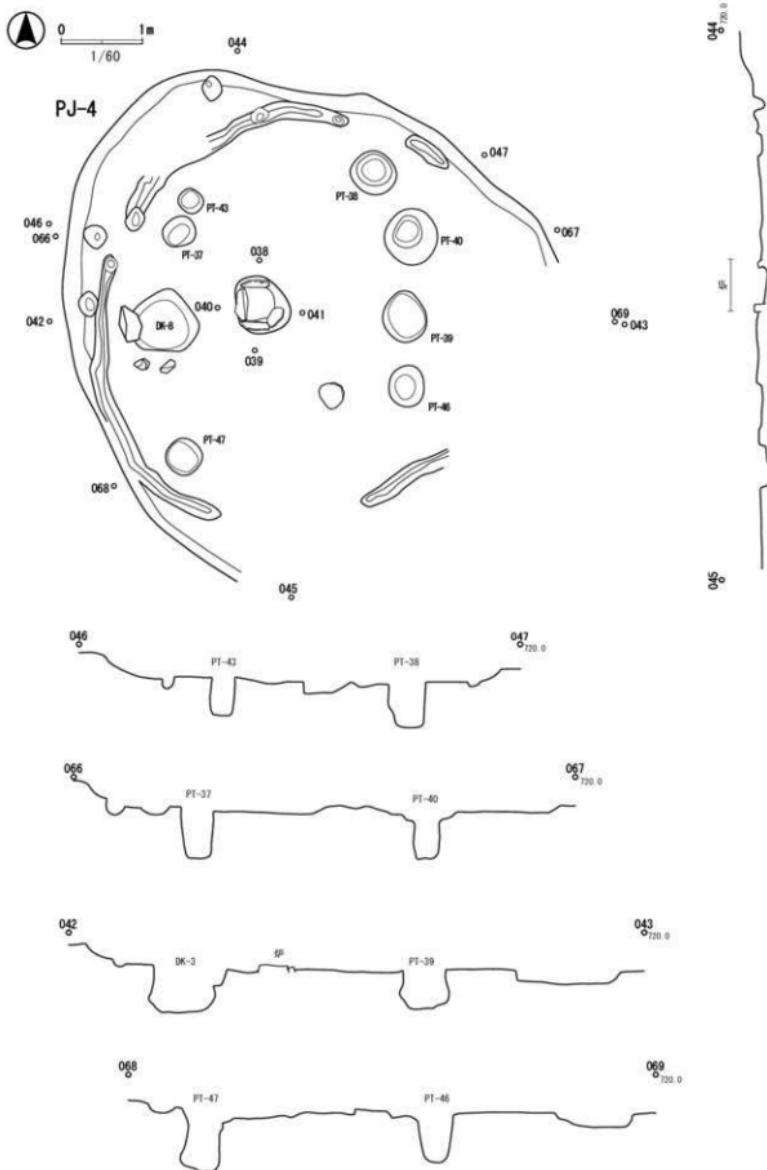
- 1番 10m2.3(黒帯)に10m2.3(暗緑)が90%、炭化物粒子が5%混じる。しめる。
2番 費り土)10m6.6(明黄緑) 粘質土に10m2.3(暗緑)が90%混じる。固くしまる。
3番 10m2.3(暗緑)に10m2.3(黒帯)が90%、10m2.3(黄緑)が5%粘質土粒子10m6.6(明黄緑)が10%、炭化物粒子が5%混じる。しめる。
4番 10m2.3(黒帯)に10m2.3(暗緑)が90%、10m2.3(黄緑)が5%混じる。しめる。
5番 地山 10m6.6(明黄緑) 粘質土を固くしまる。

- 1番 後から入った土)10m2.3(暗緑)に5%以下粘質土ブロック10m6.6(明黄緑)が5%、炭化物粒子が5%混じる。しめる。
2番 費り土)10m2.3(明黄緑) 粘質土に10m2.3(黄緑)が10%、10m2.3(暗緑)が90%混じる。固くしまる。
3番 費り土)10m2.3(暗緑)に10m2.3(黄緑)が10%、10m2.3(明黄緑) 粘質土が5%、炭化物粒子が5%混じる。固くしまる。
4番 混め廻した土)10m2.3(黄緑)に10m2.3(明黄緑) 粘質土が90%、10m2.3(黄緑)が10%、炭化物粒子が5%混じる。しめる。
5番 地山)10m2.3(暗緑)に10m2.3(黄緑)が90%、10m2.3(黒帯)が5%、炭化物粒子が5%混じる。しめる。
6番 10m2.3(明黄緑) 粘質土に10m2.3(黄緑)が10%混じる。固くしまる。
地山 10m2.3(明黄緑) 粘質土を固くしまる。

PT-96

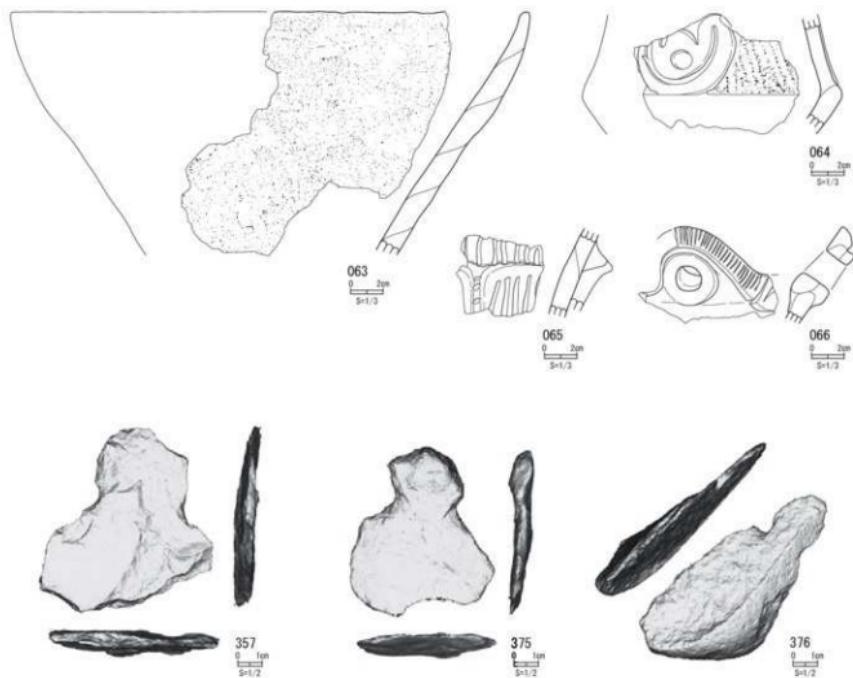
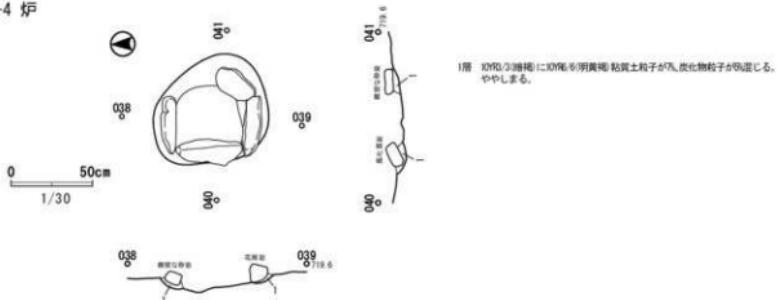


第45図 PJ-11号住居・出土遺物

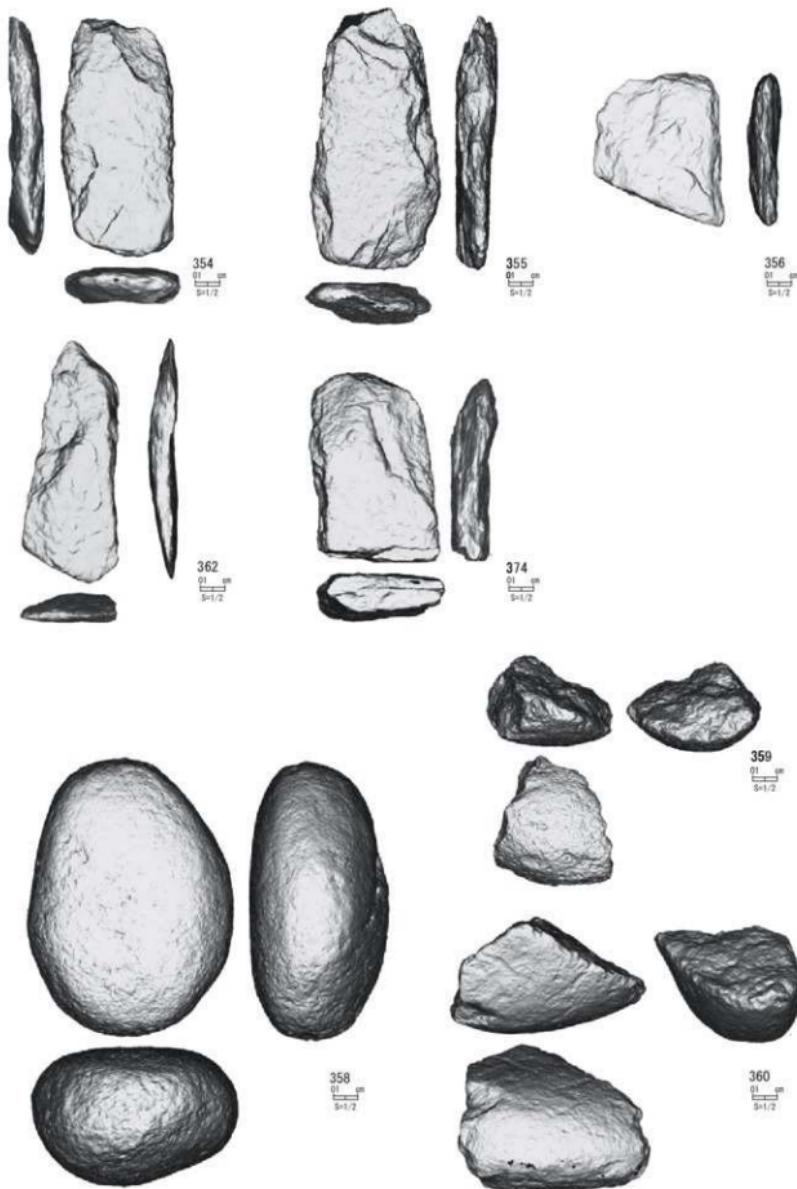


第46図 PJ-4号住居

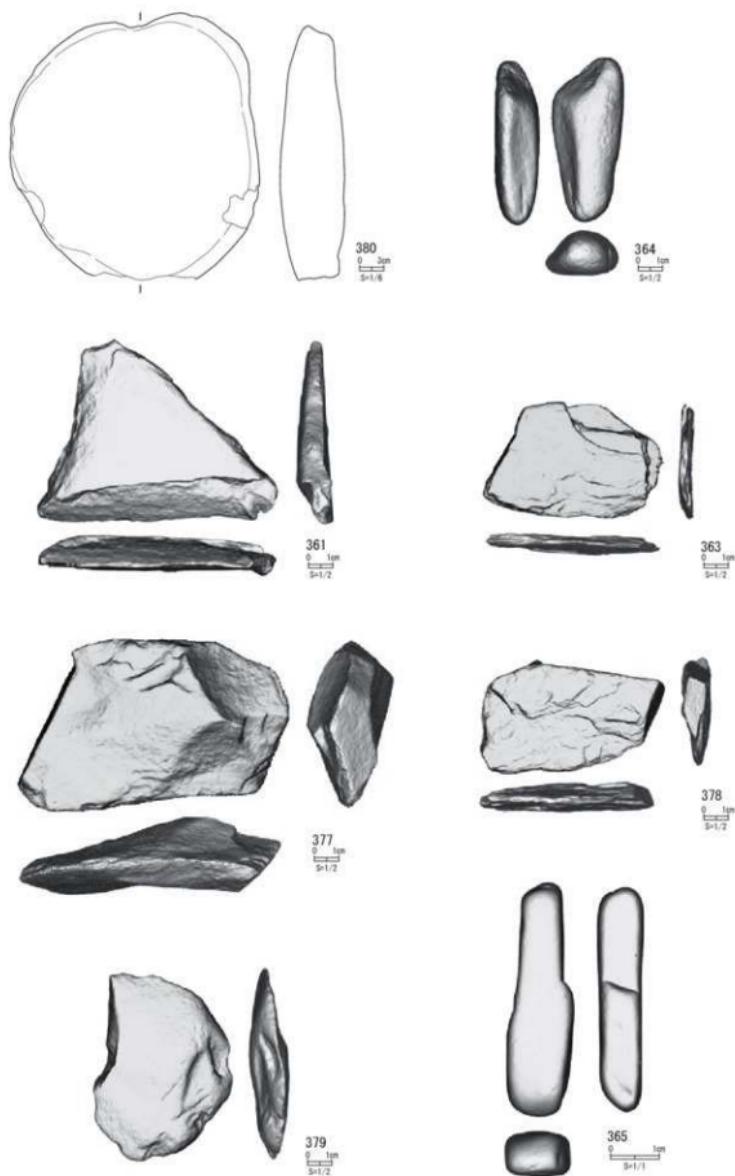
PJ-4 炉



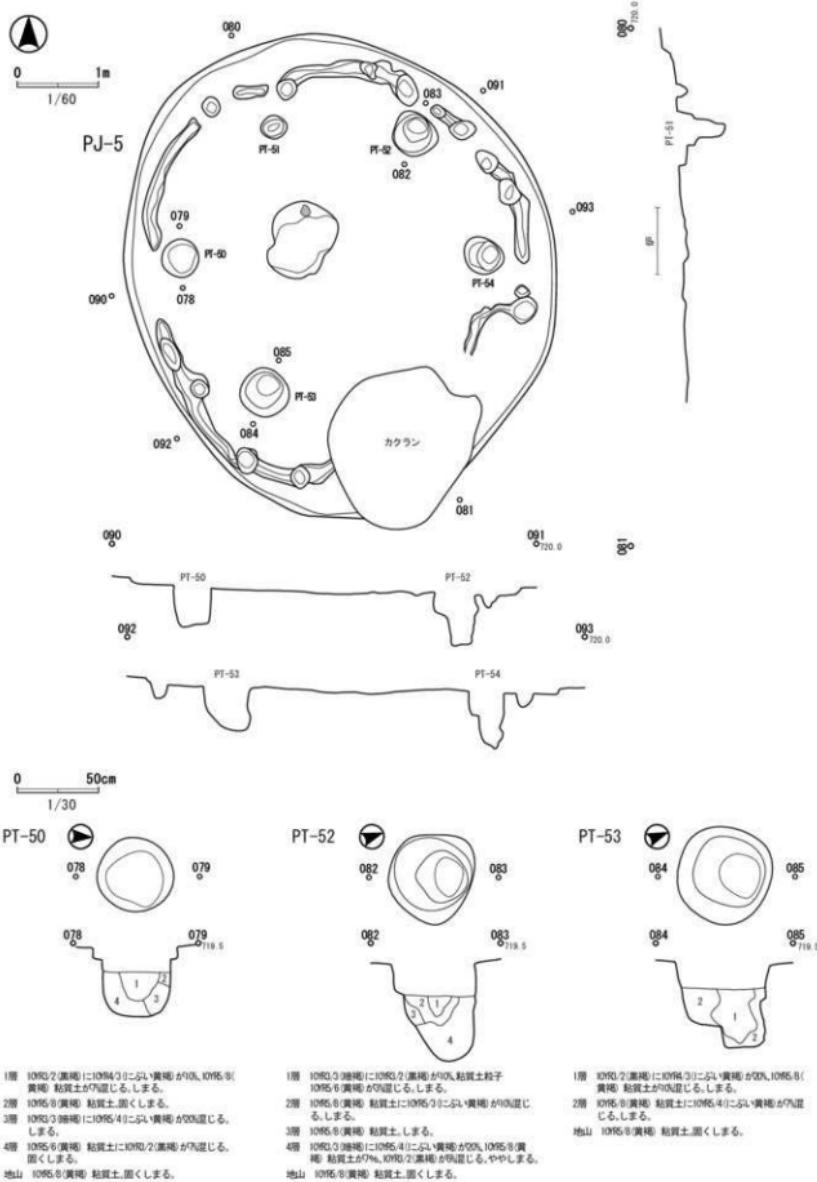
第47図 PJ-4号住居炉・出土遺物



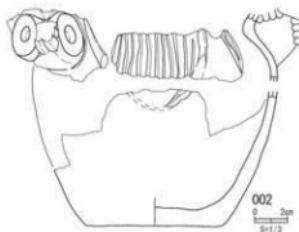
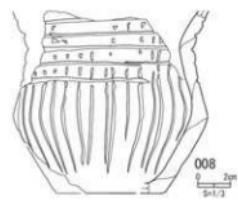
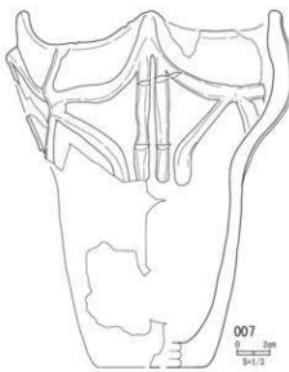
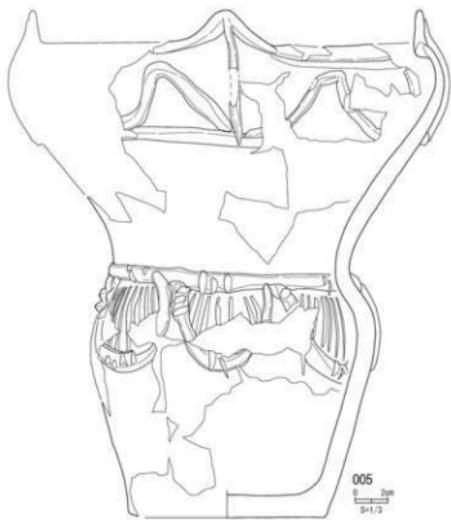
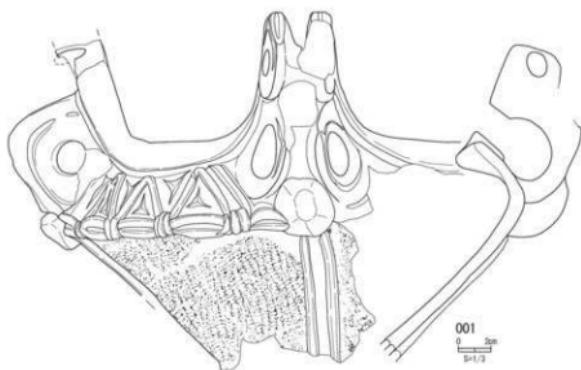
第 48 図 PJ-4 号住居出土遺物



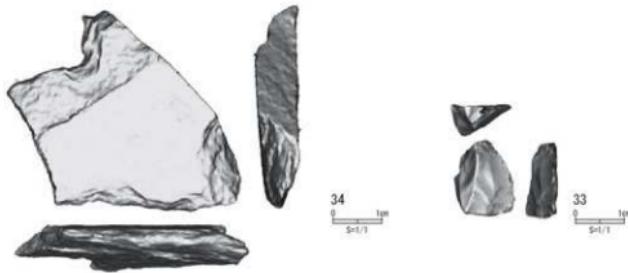
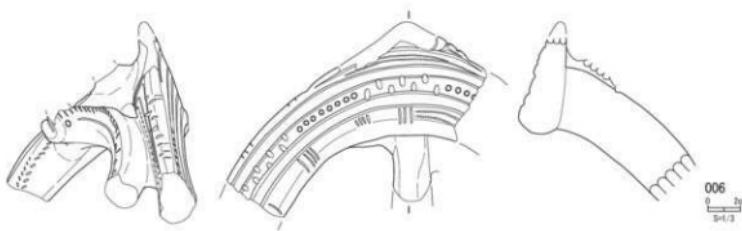
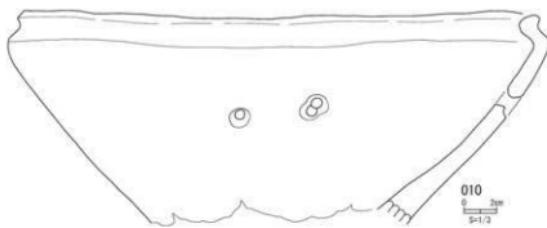
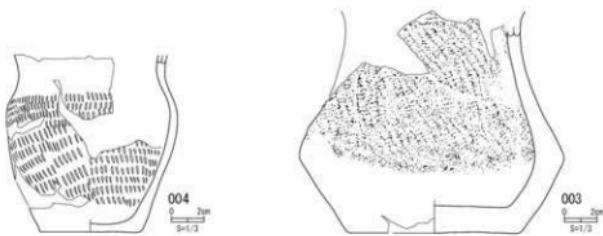
第49図 PJ-4号住居出土遺物



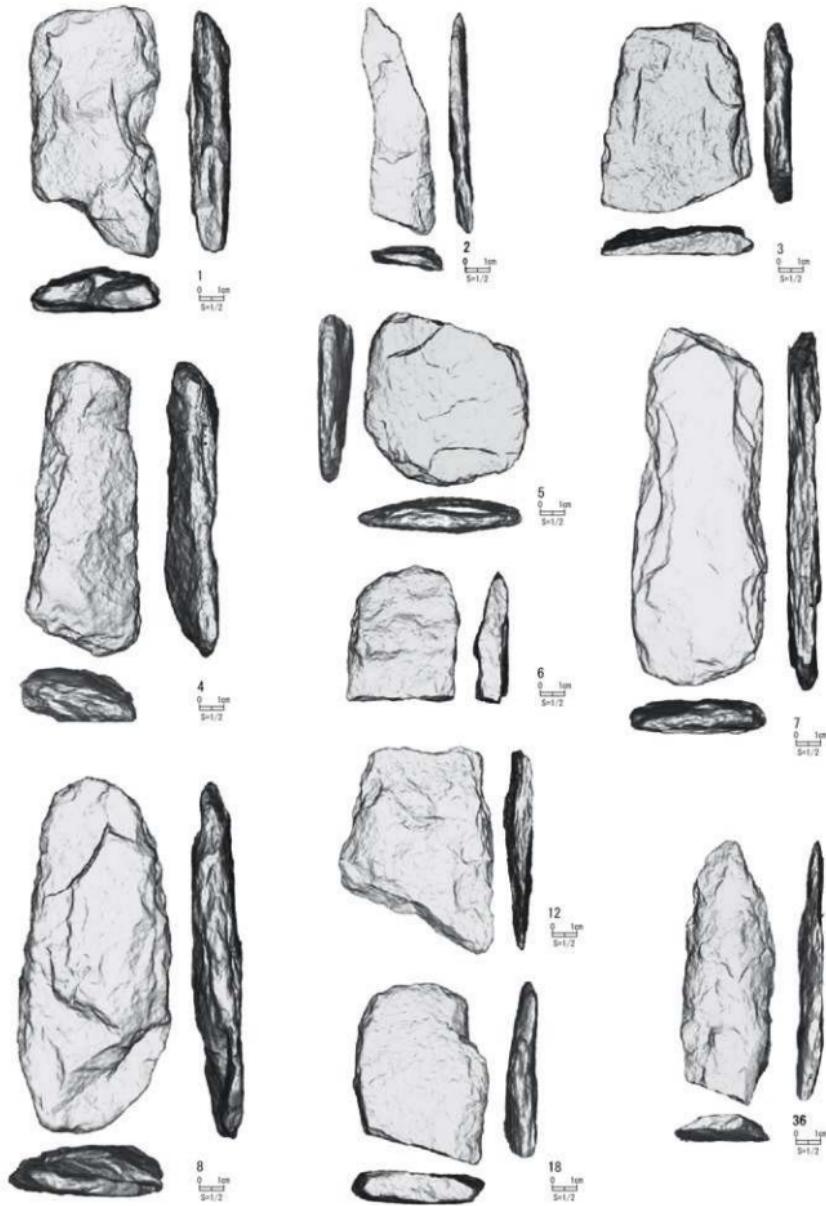
第50図 PJ-5号住居 住居内ピット



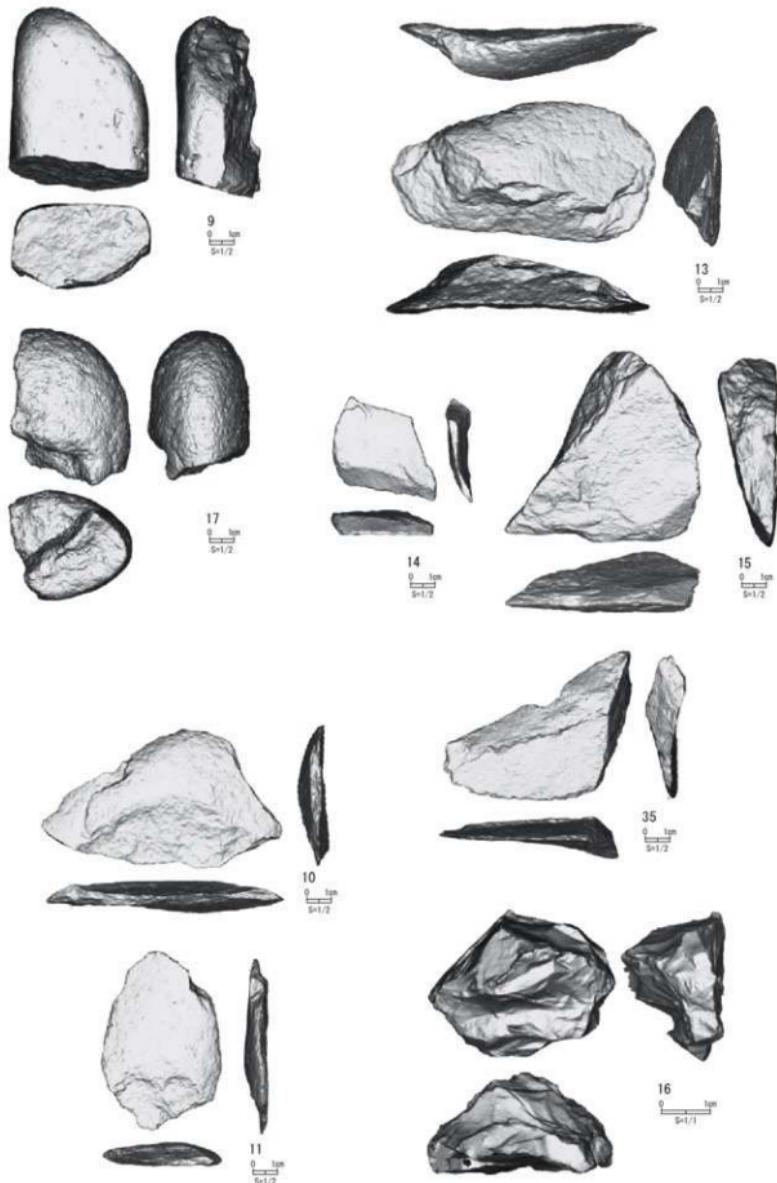
第 51 図 PJ-5 号住居出土遺物



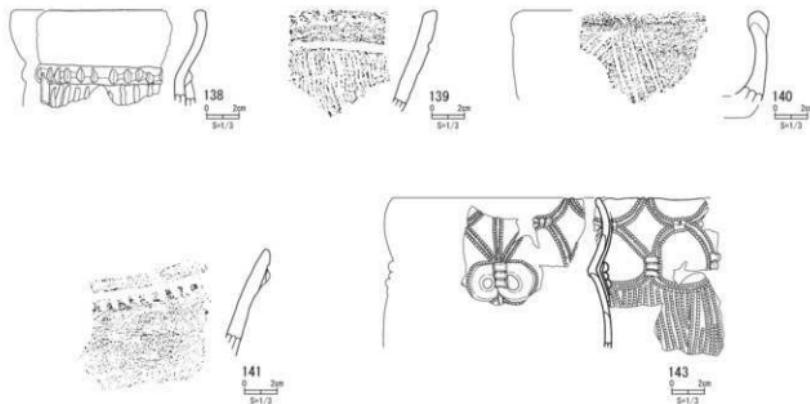
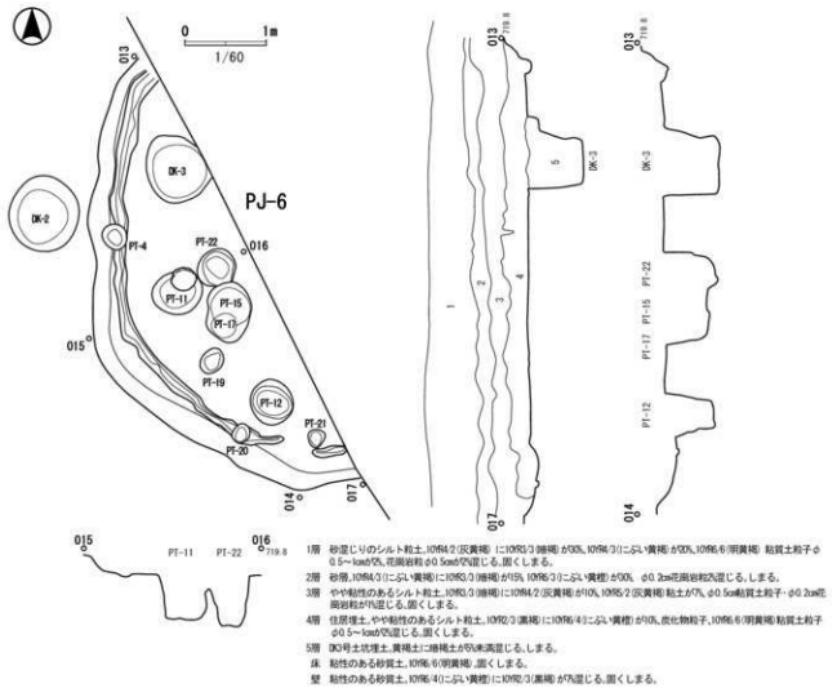
第 52 圖 PJ-5 号住居出土遺物



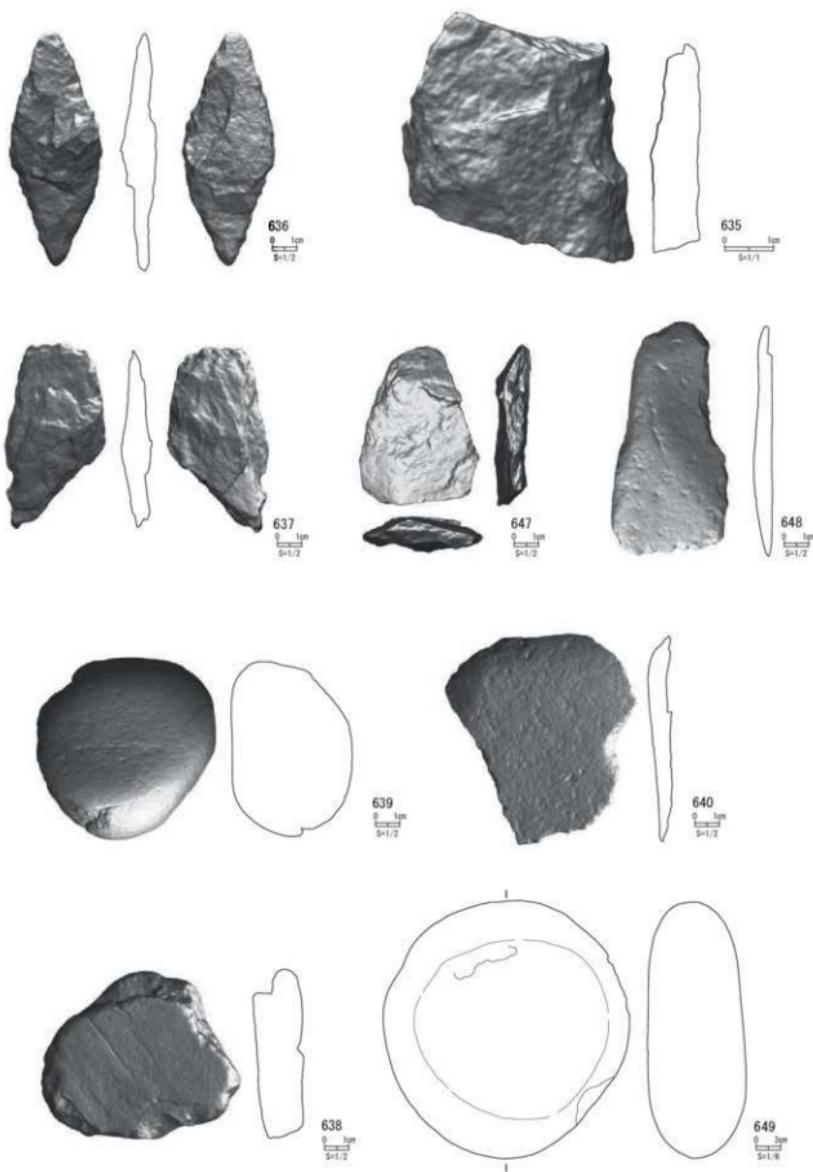
第53図 PJ-5号住居出土遺物



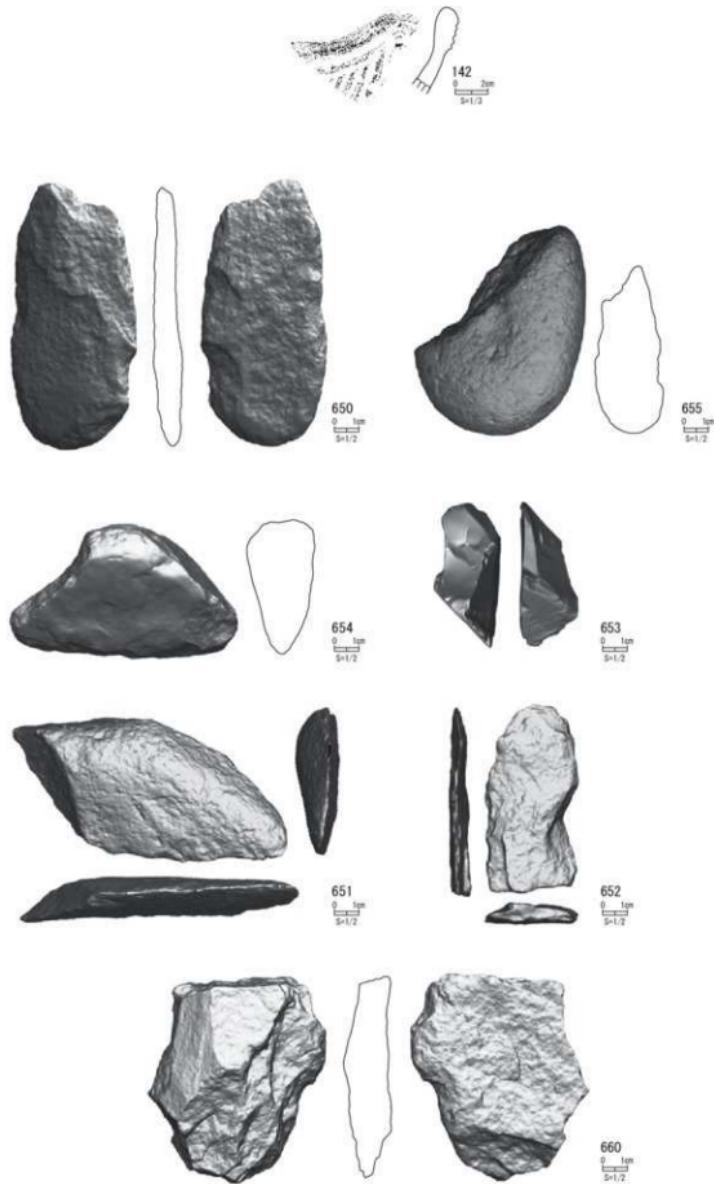
第54図 PJ-5号住居出土遺物



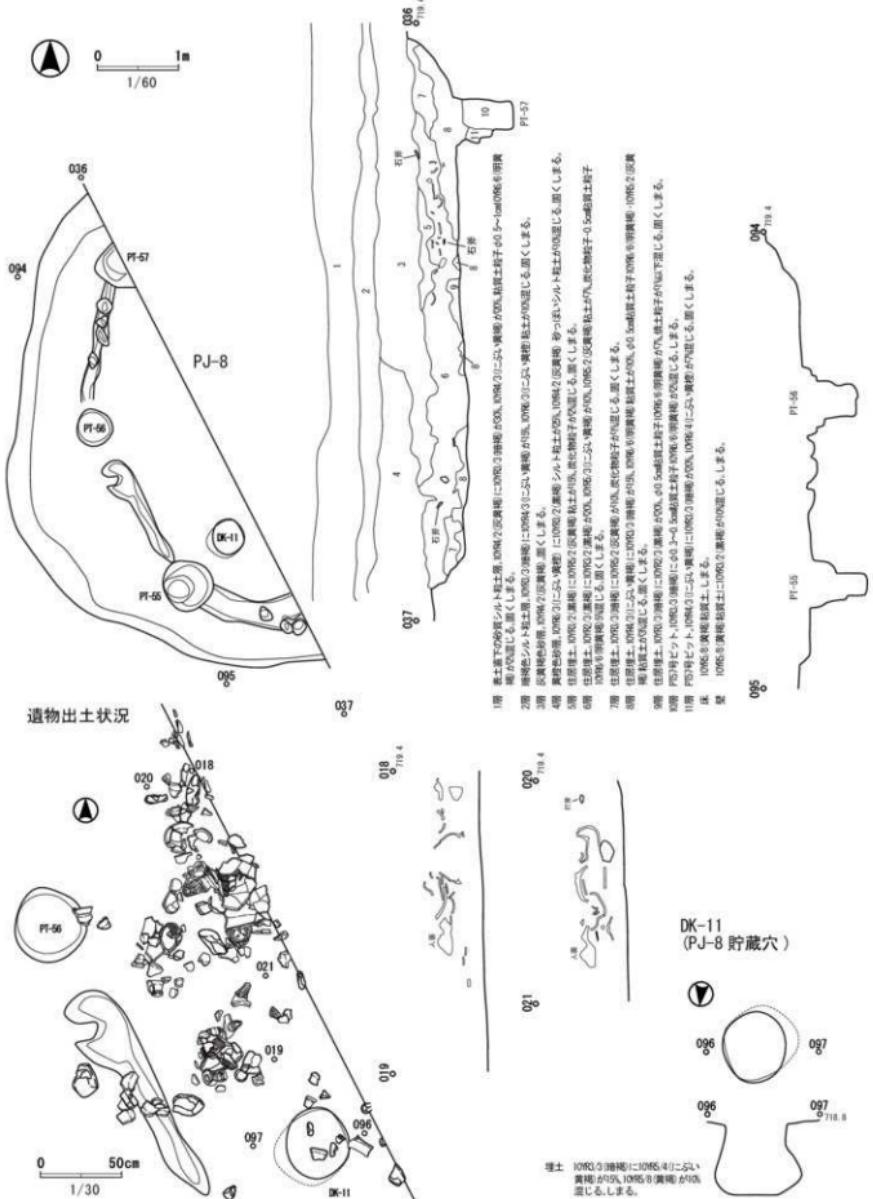
第55図 PJ-6号住居・出土遺物



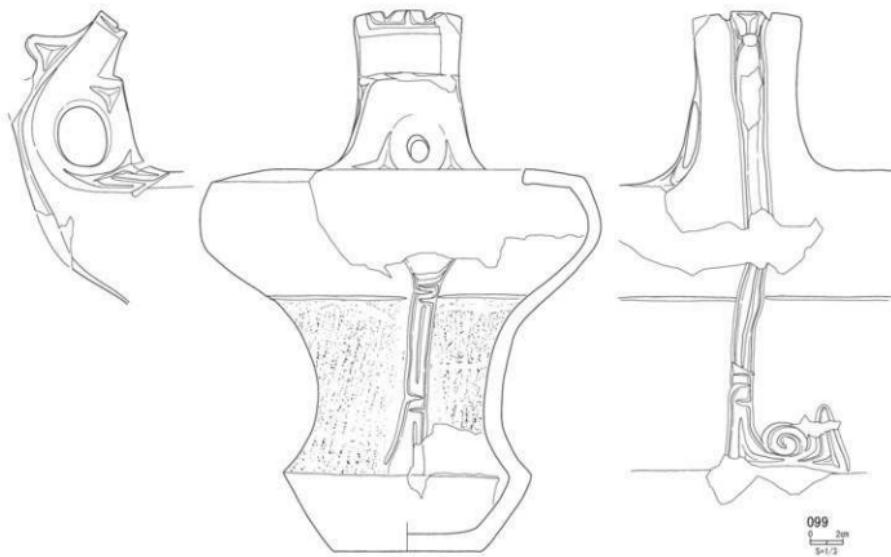
第 56 図 PJ-6 号住居出土遺物



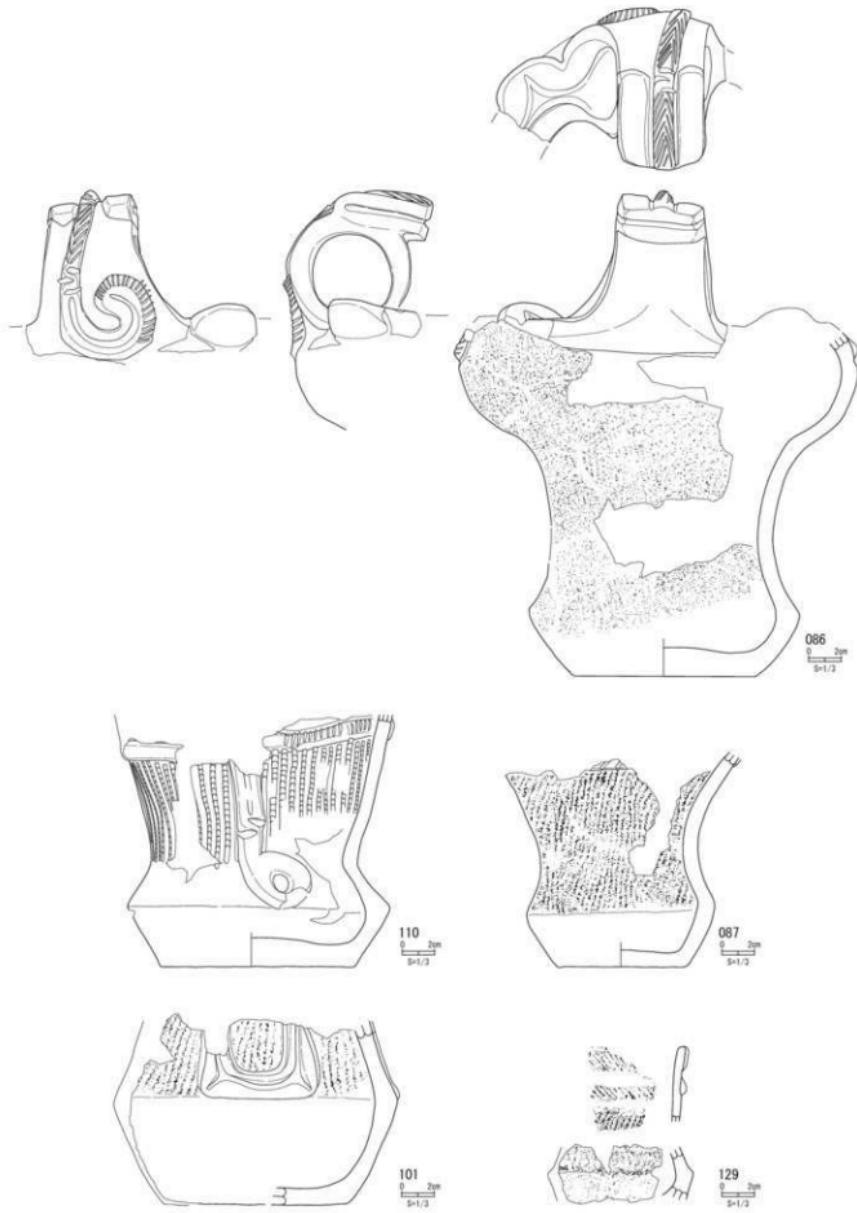
第 57 図 PJ-7 号住居出土遺物



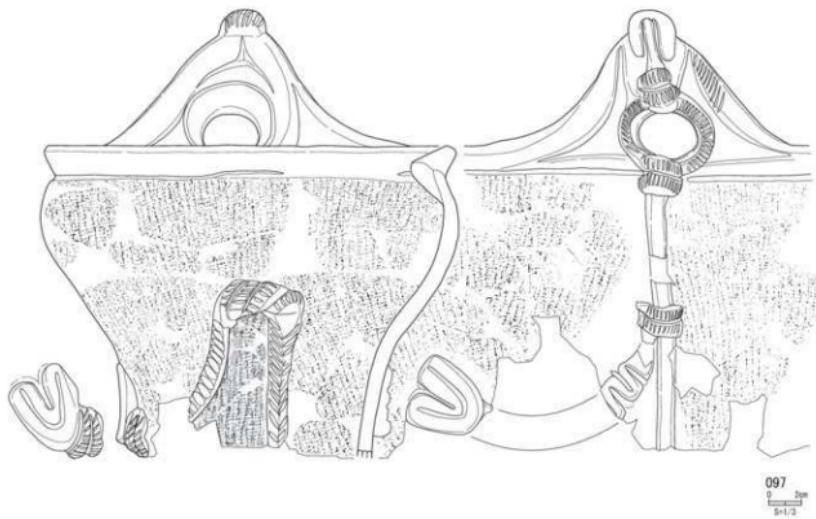
第58図 PJ-8号住居



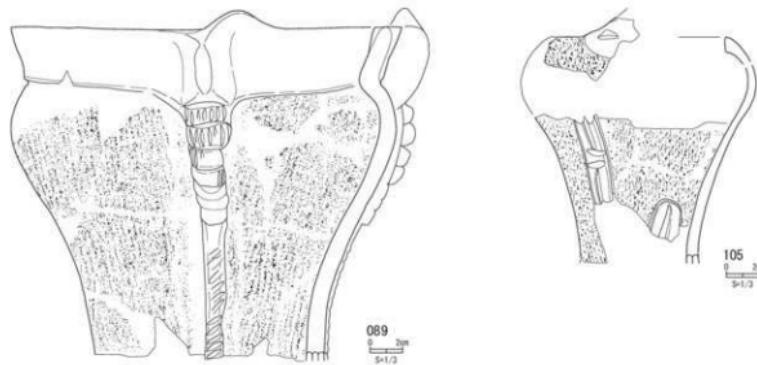
第 59 図 PJ-8 号住居出土遺物



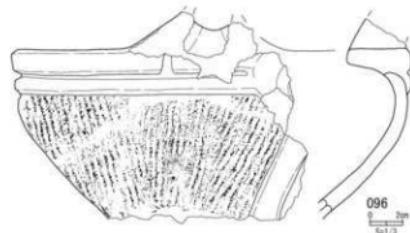
第 60 図 PJ-8 号住居出土遺物



097
0 2mm
3-1/2



089
0 2mm
3-1/2

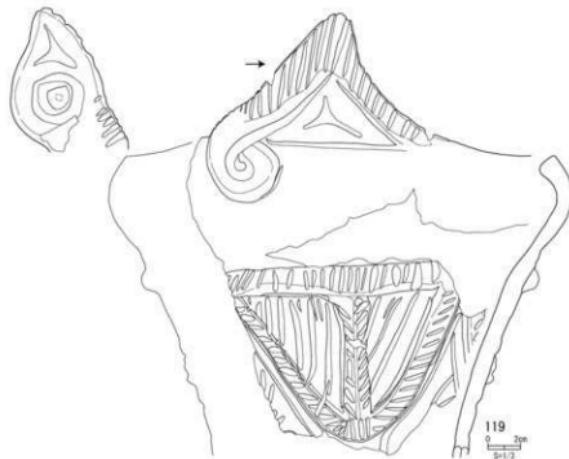
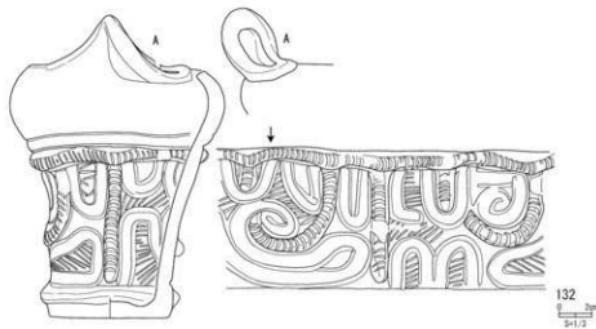
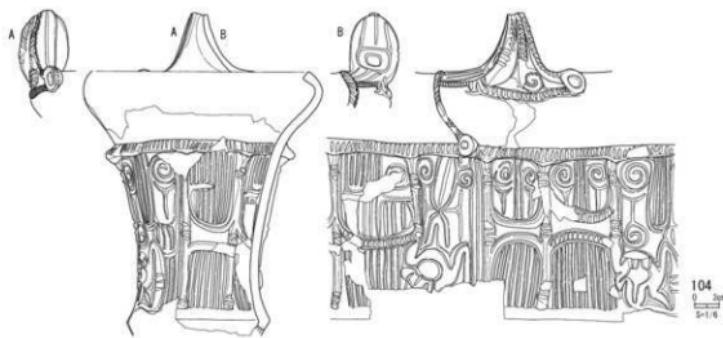


096
0 2mm
3-1/2

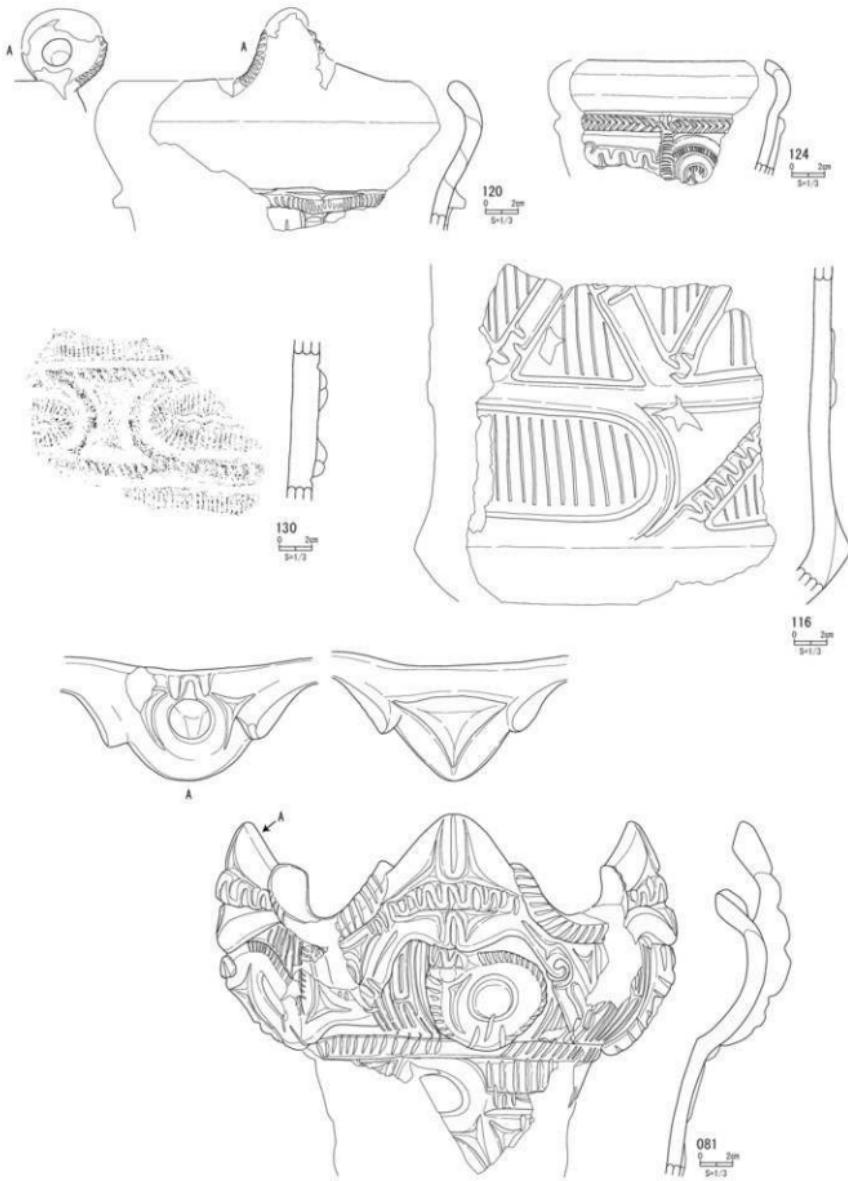
第 61 図 PJ-8 号住居出土遺物



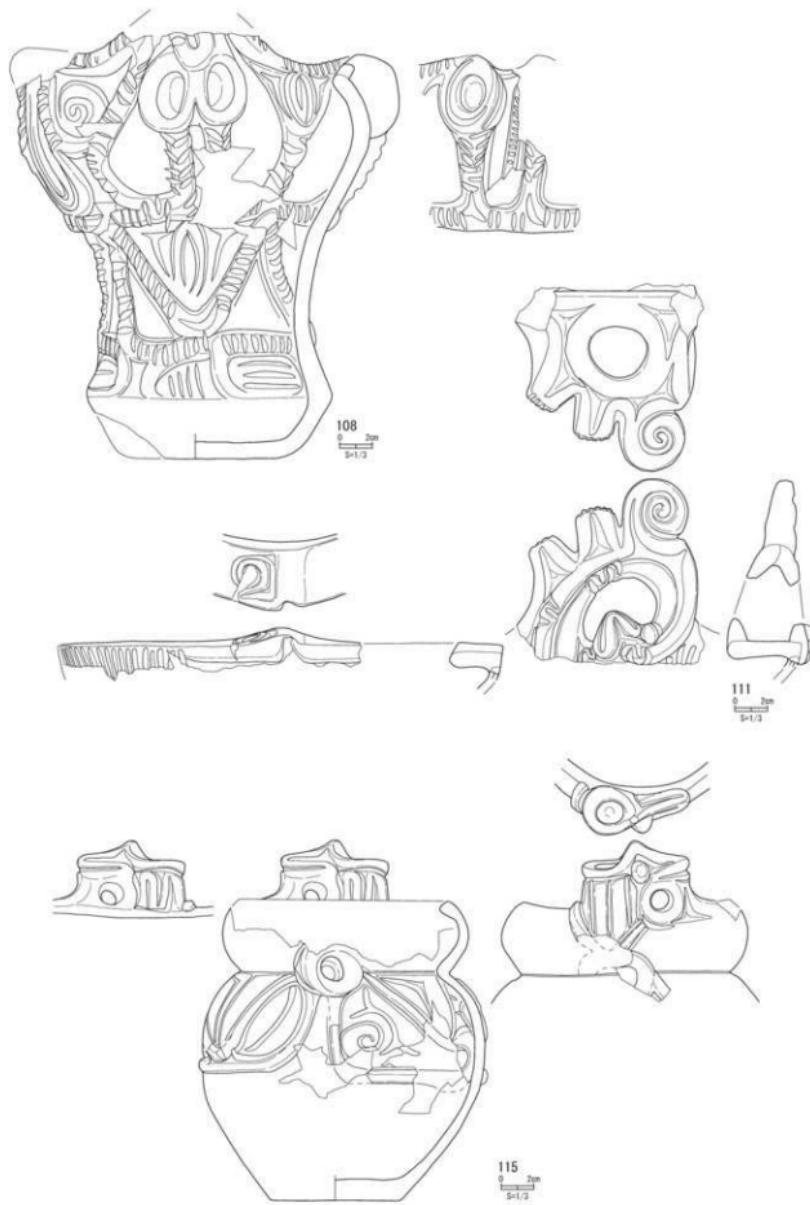
第62図 PJ-8号住居出土遺物



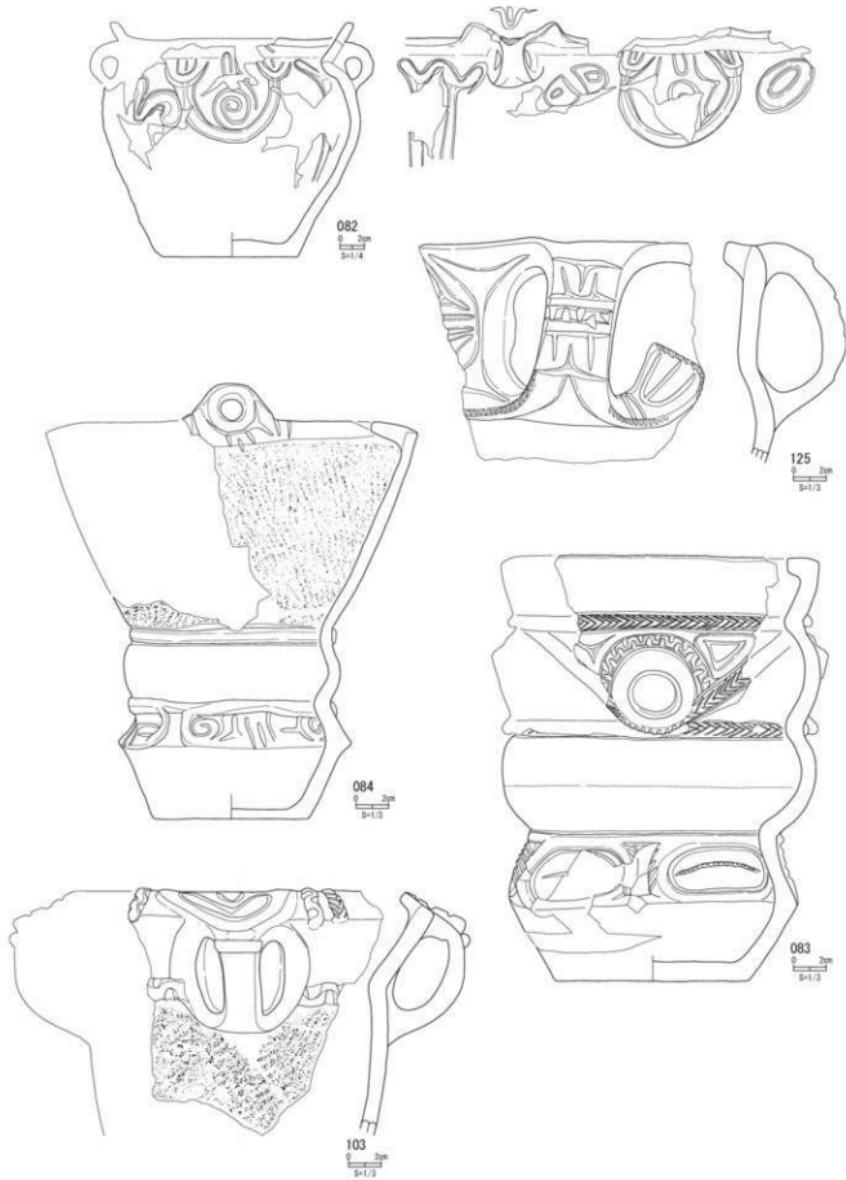
第 63 図 PJ-8 号住居出土遺物



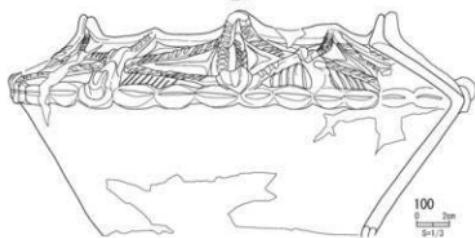
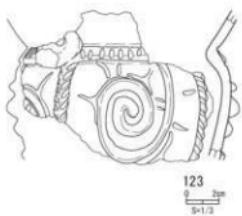
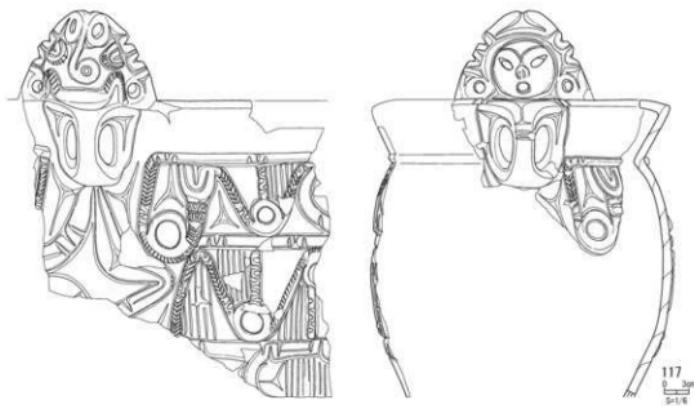
第 64 図 PJ-8 号住居出土遺物



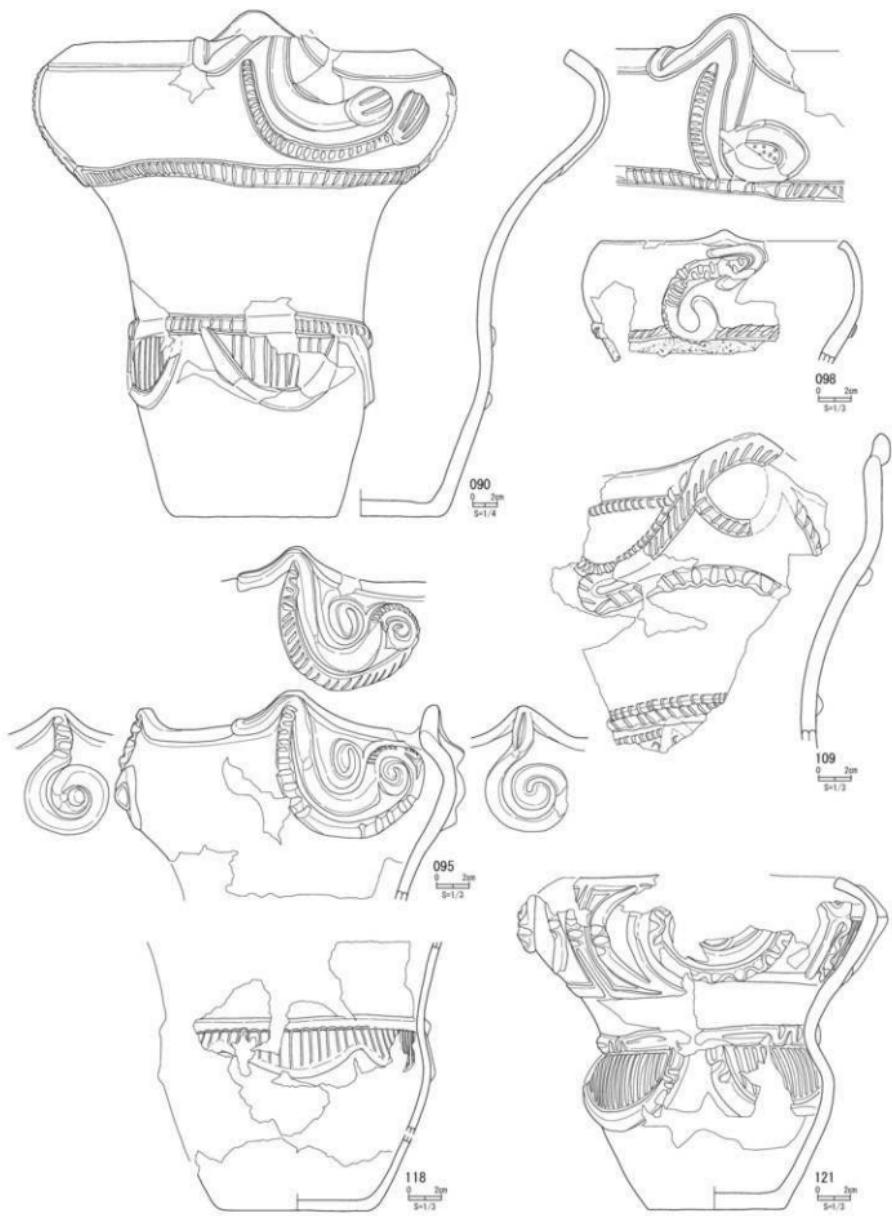
第65図 PJ-8号住居出土遺物



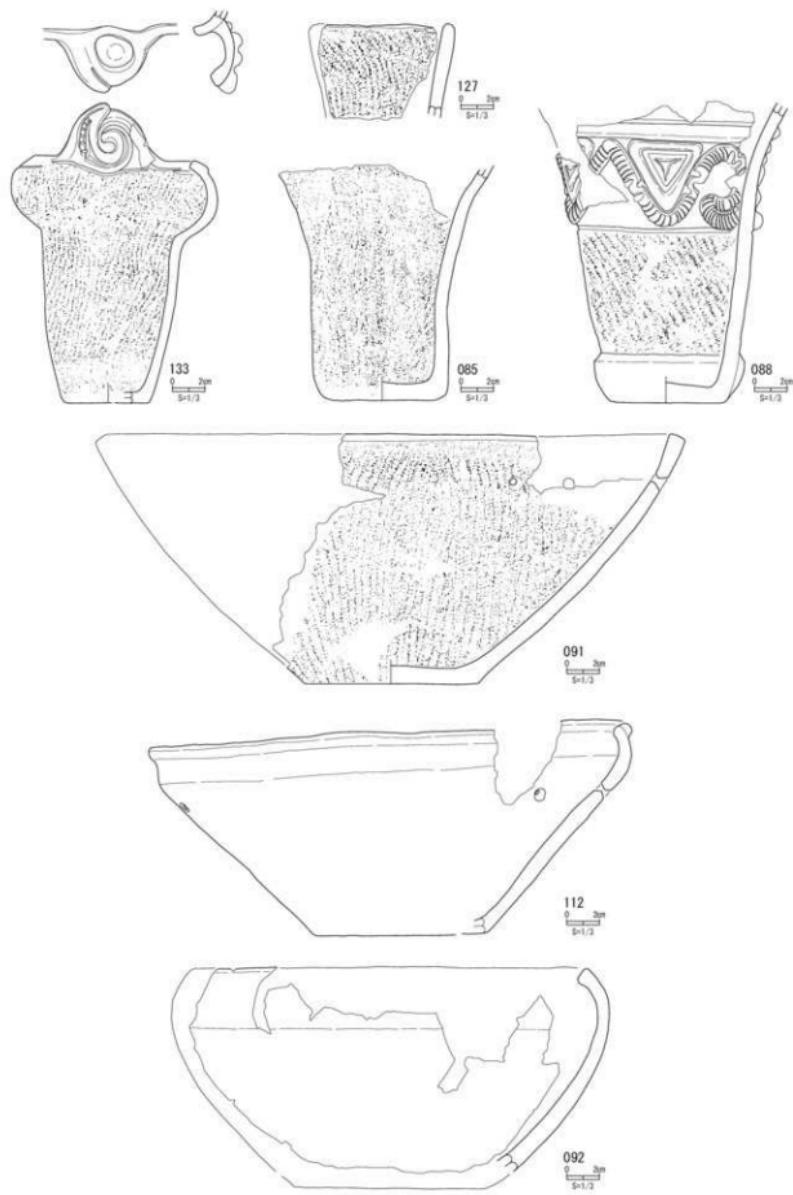
第 66 図 PJ-8 号住居出土遺物



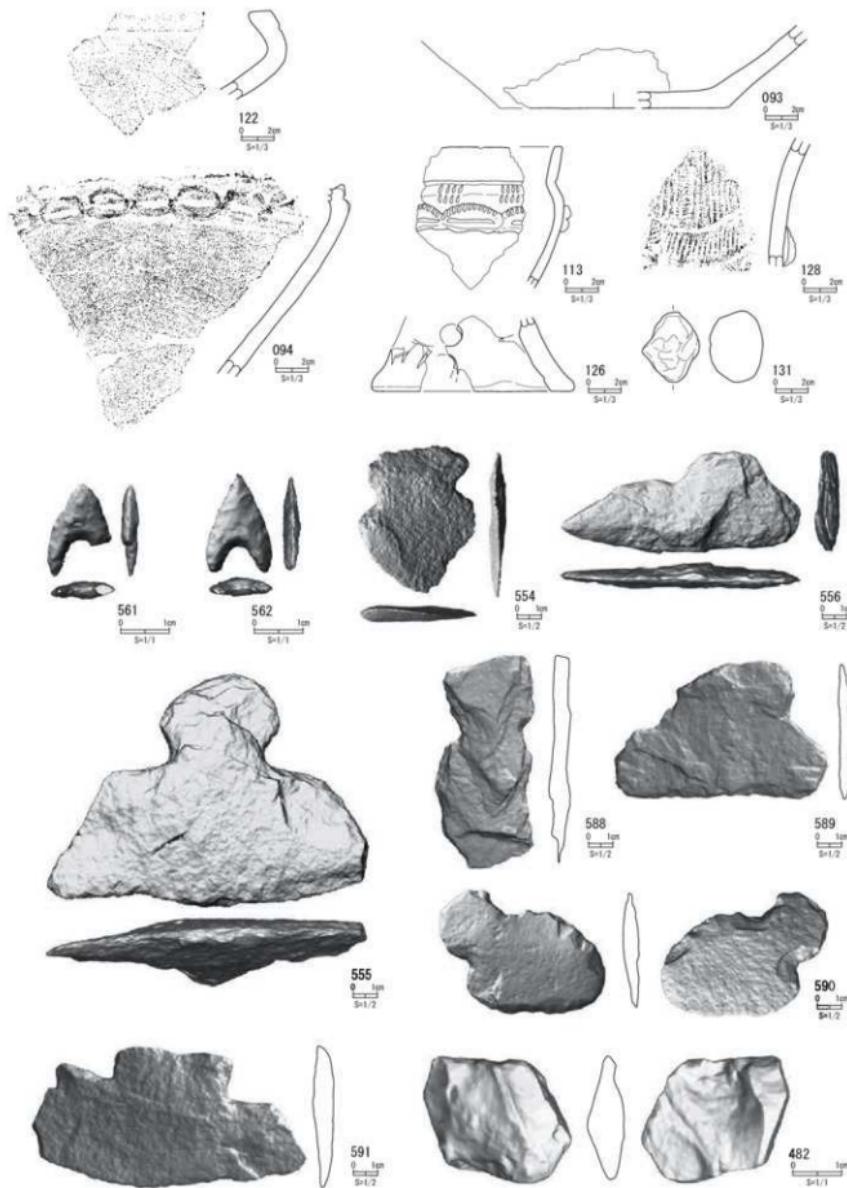
第 67 図 PJ-8 号住居出土遺物



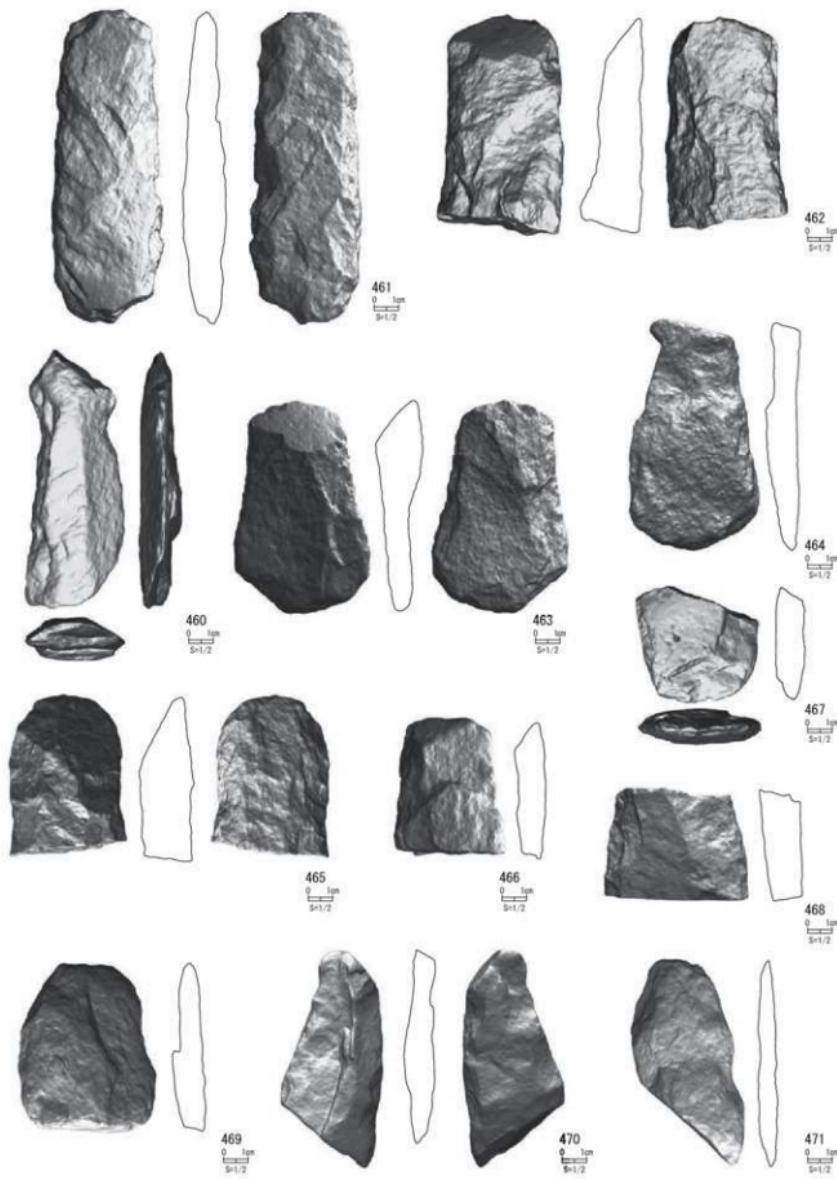
第 68 图 PJ-8 号住居出土遗物



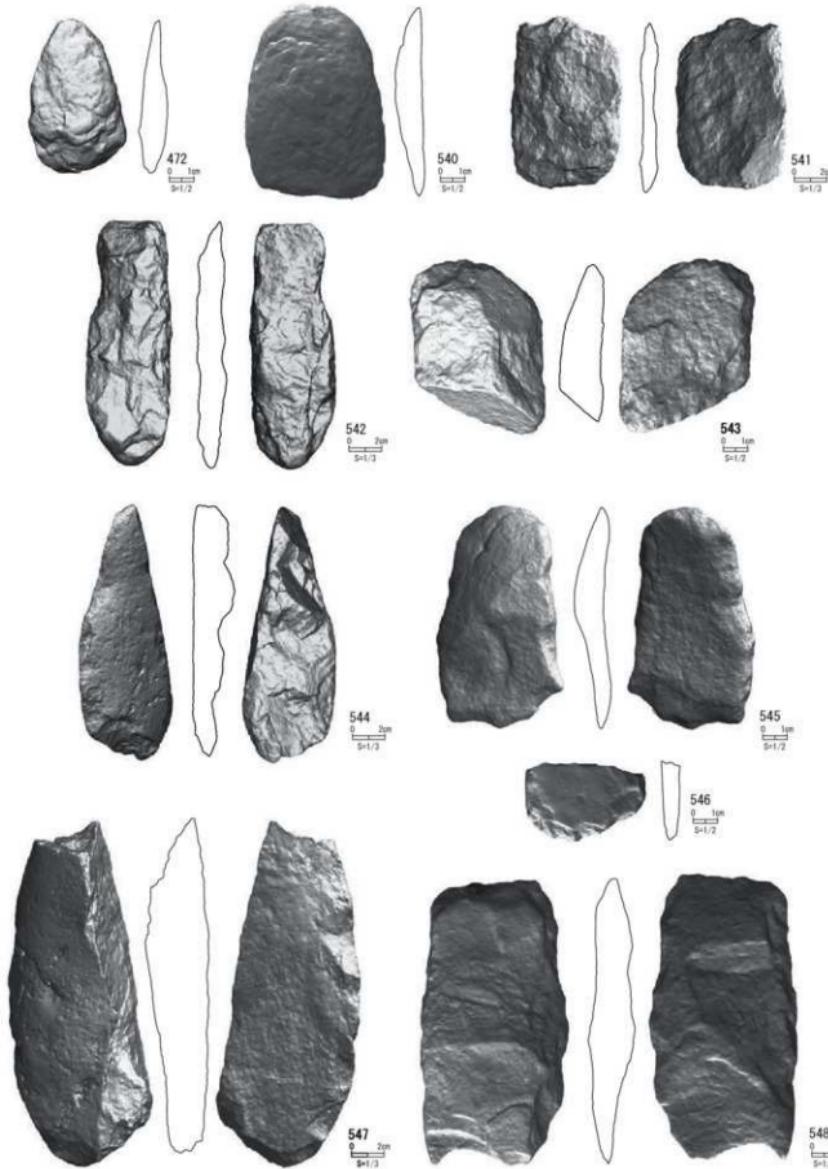
第 69 図 PJ-8 号住居出土遺物



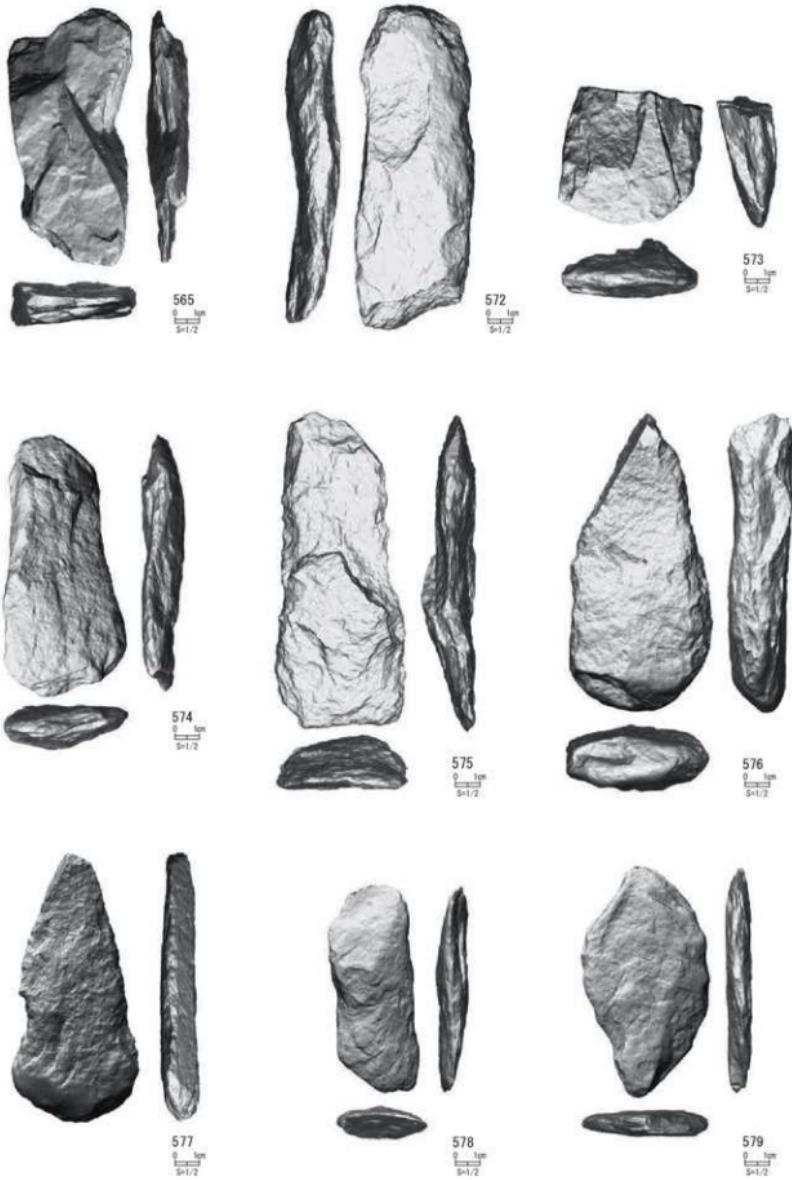
第 70 図 PJ-8 号住居出土遺物



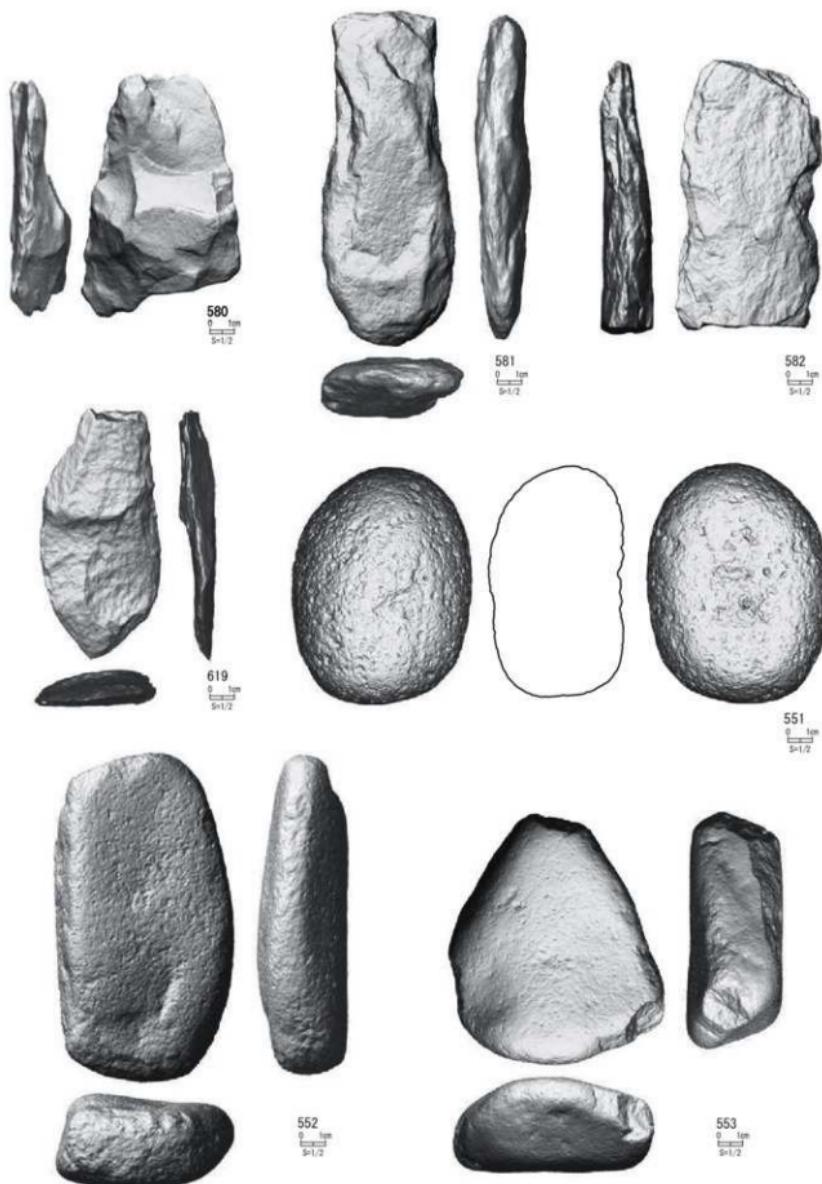
第71図 PJ-8号住居出土遺物



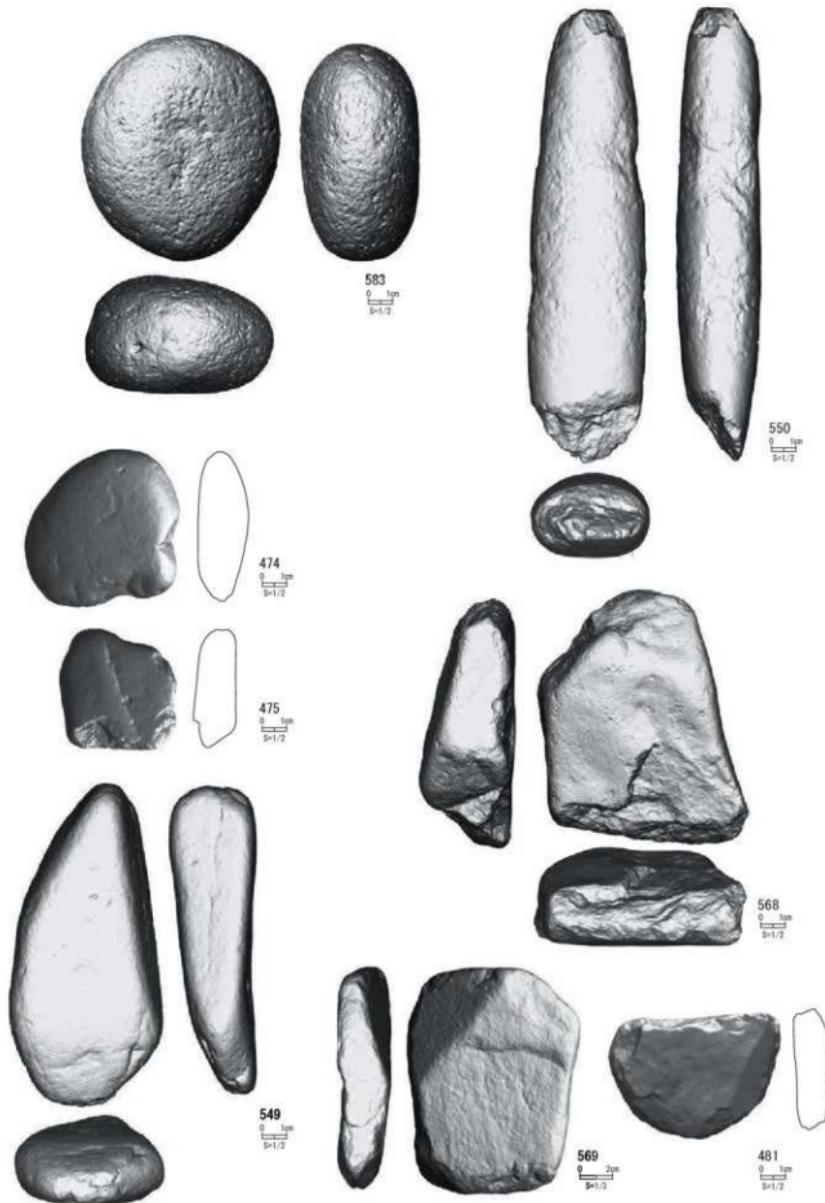
第 72 圖 PJ-8 号住居出土遺物



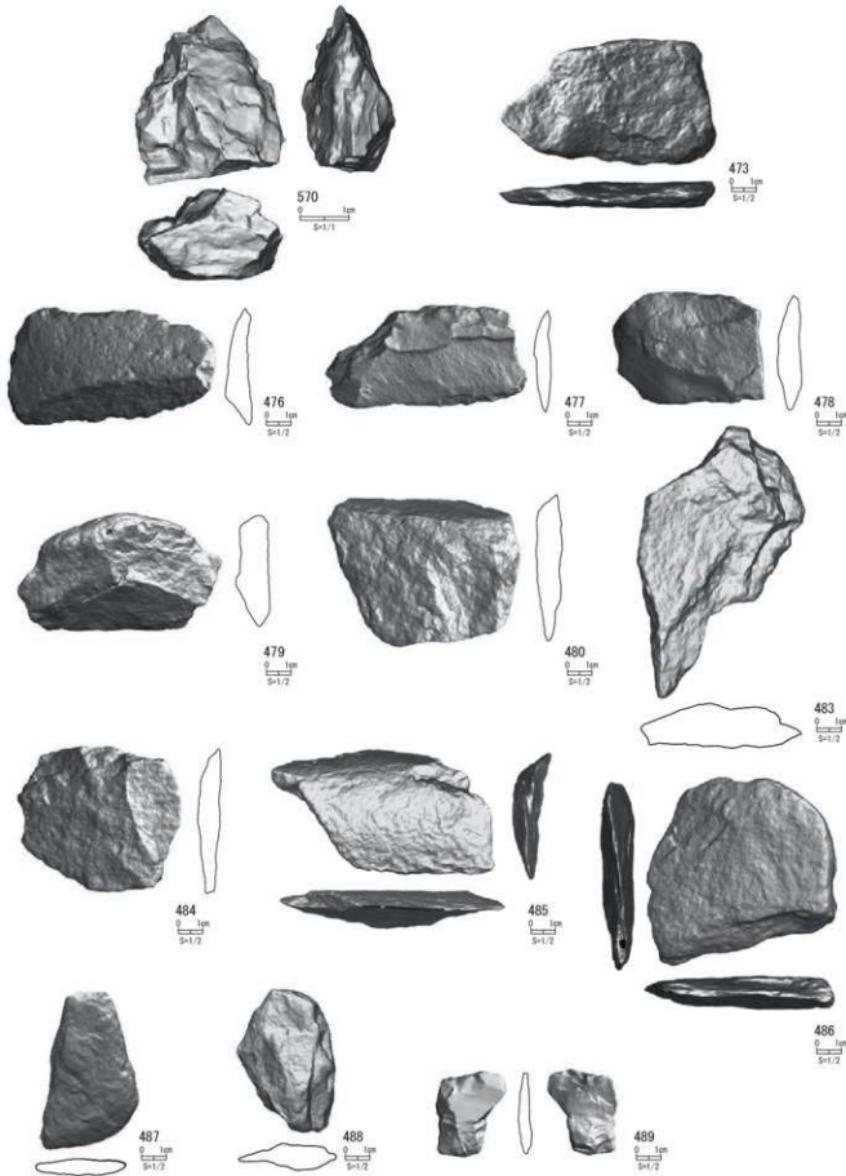
第 73 図 PJ-8 号住居出土遺物



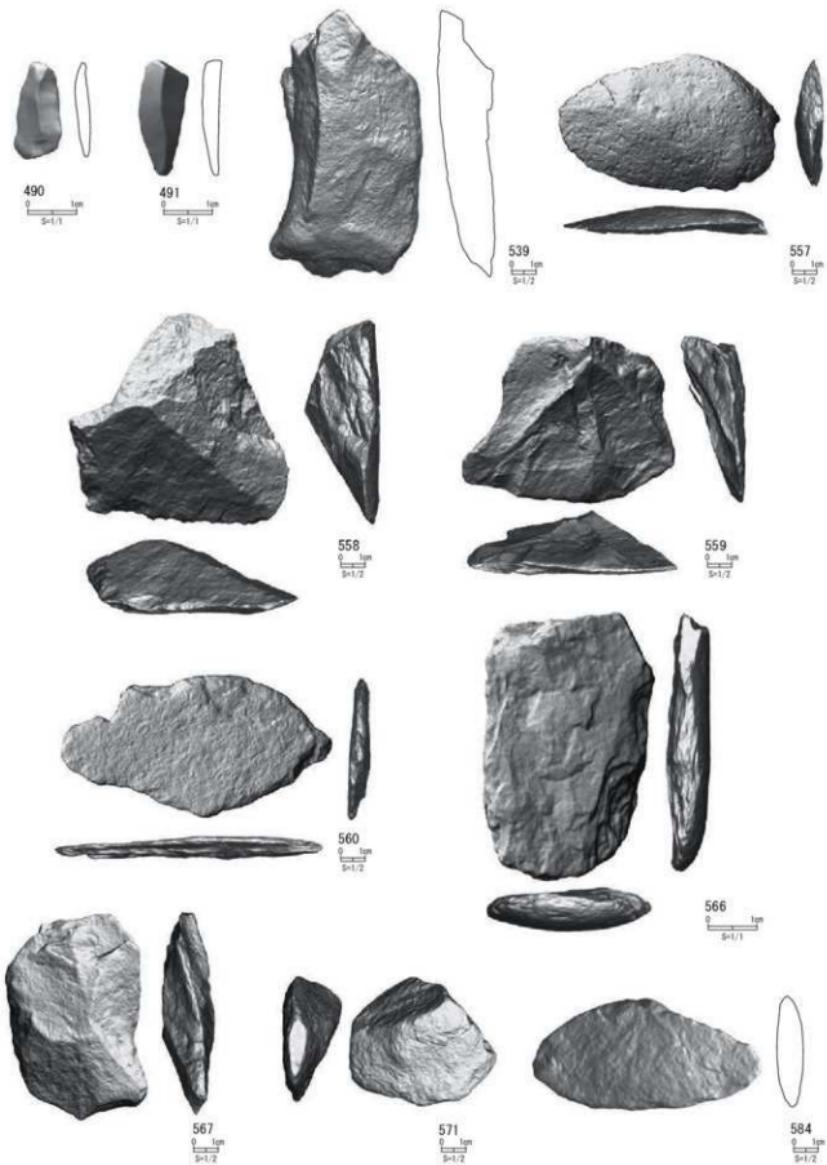
第 74 図 PJ-8 号住居出土遺物



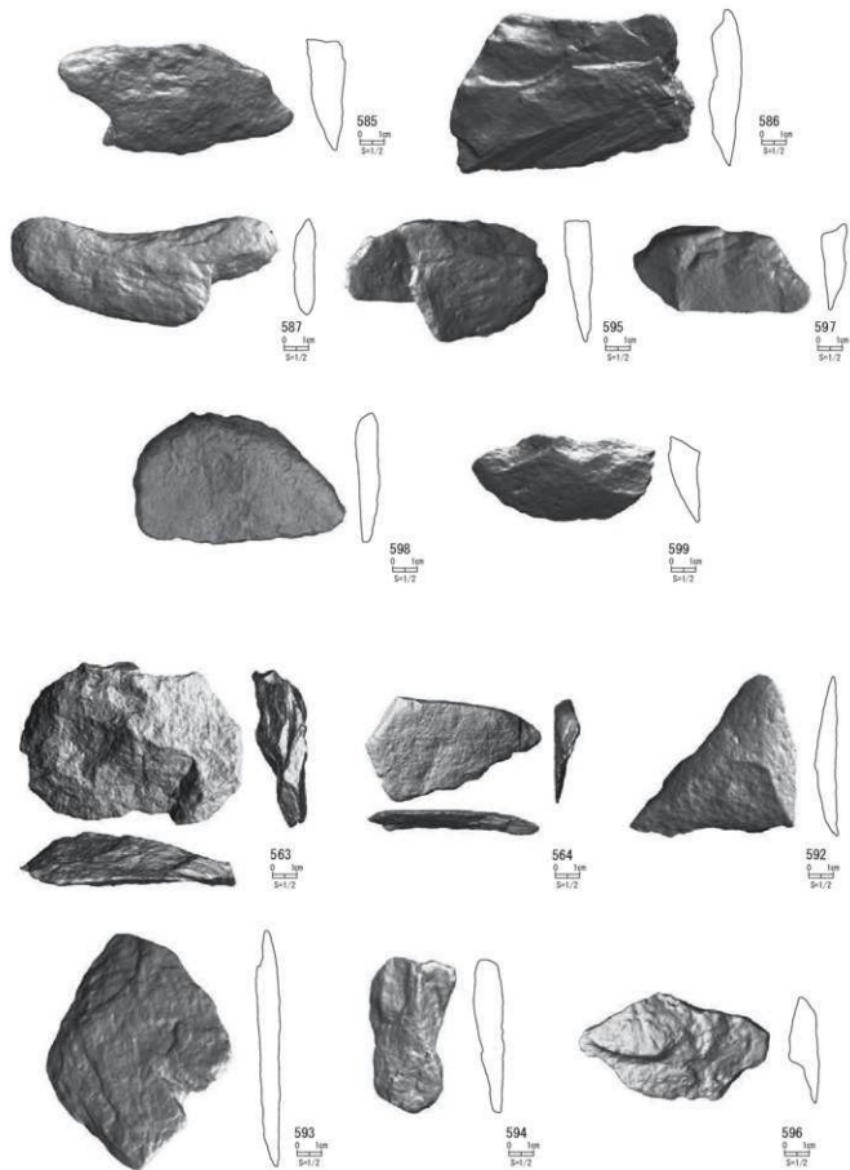
第 75 図 PJ-8 号住居出土遺物



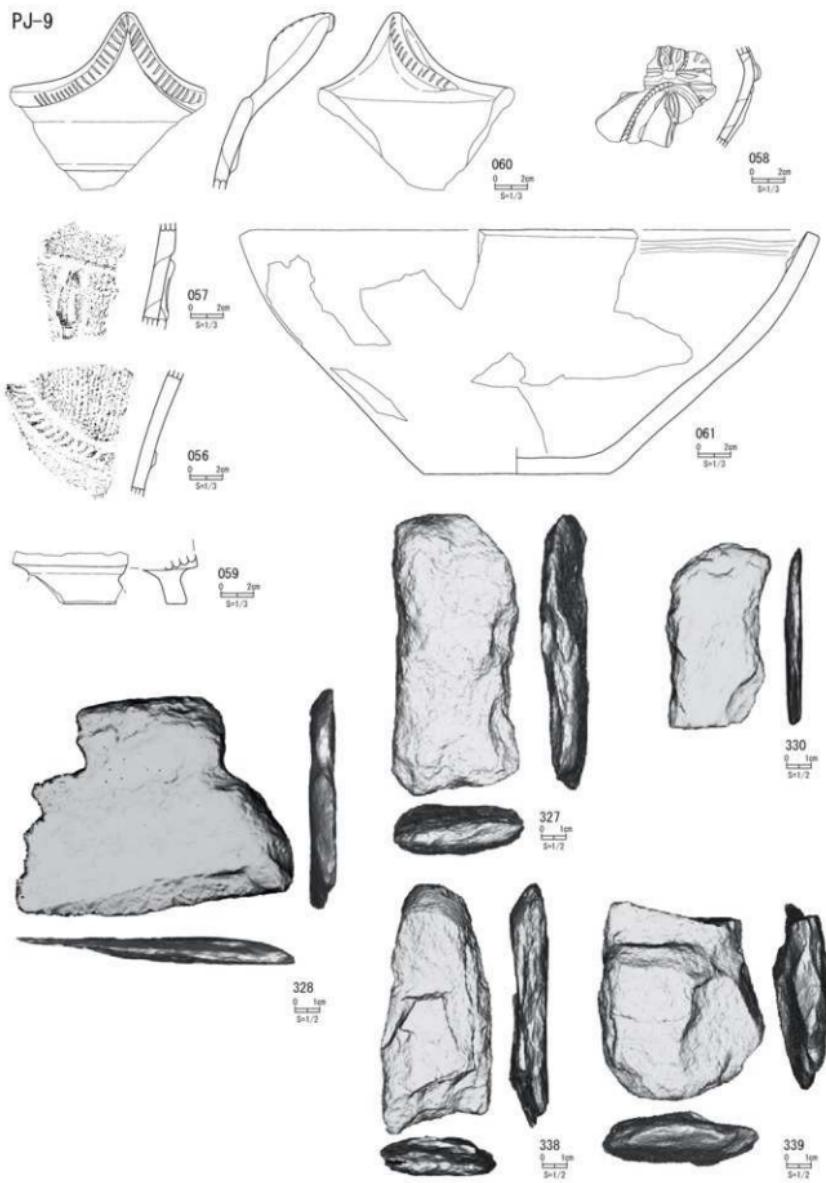
第 76 図 PJ-8 号住居出土遺物



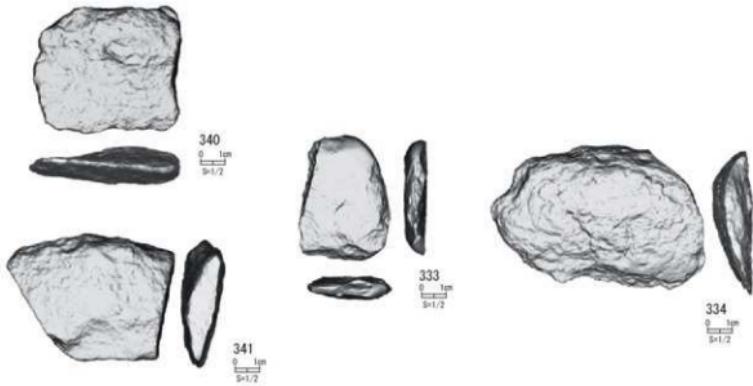
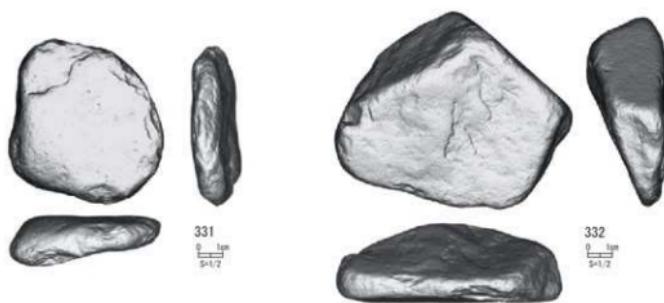
第 77 図 PJ-8 号住居出土遺物



第78図 PJ-8号住居出土遺物

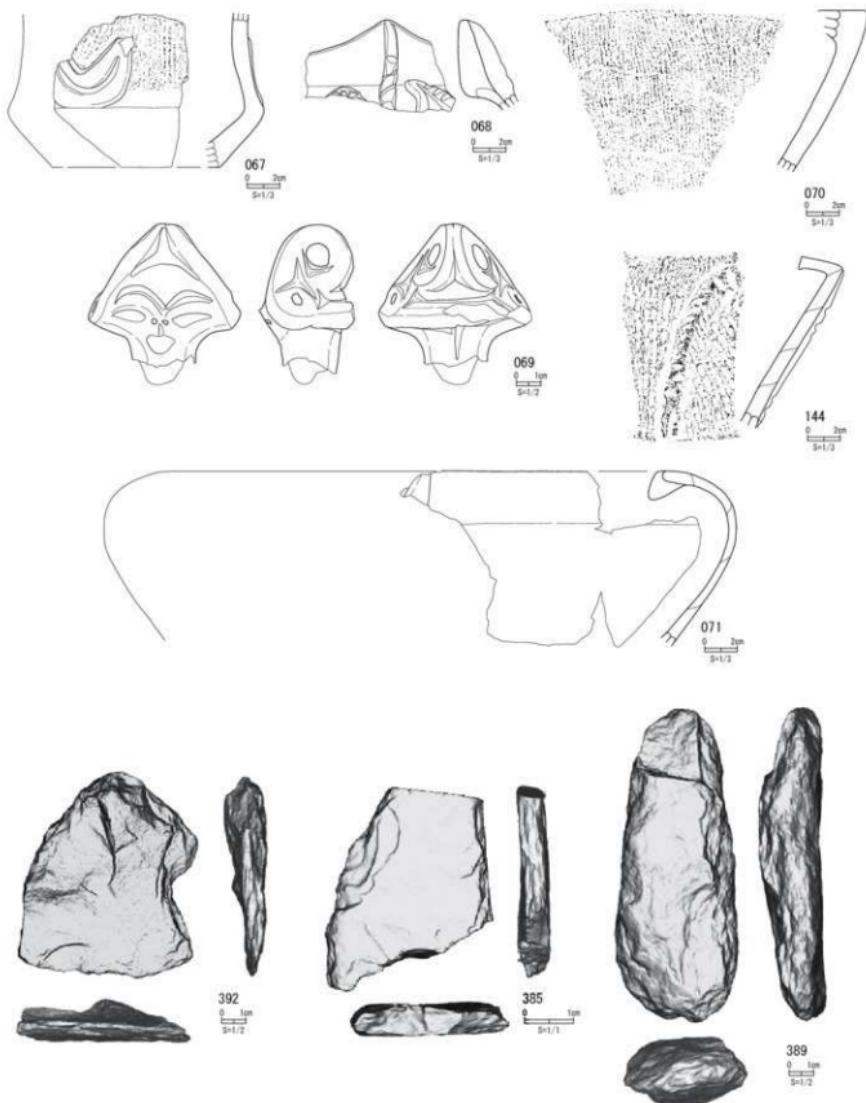


第79図 PJ-9号住居出土遺物

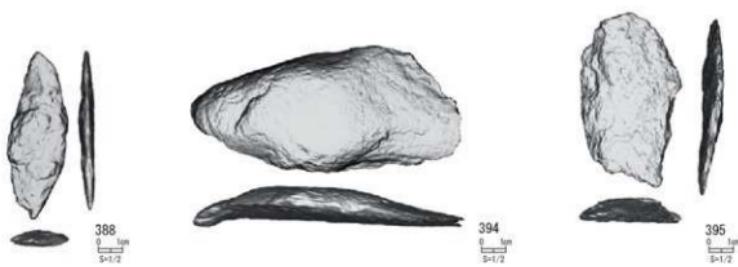
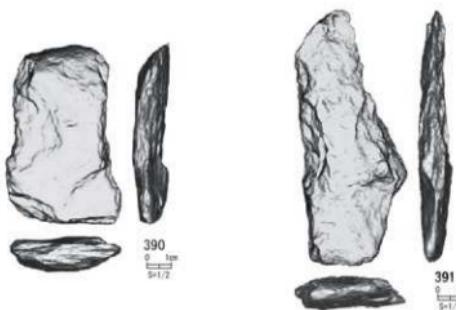


第 80 図 PJ-9 号住居出土遺物

PJ-10

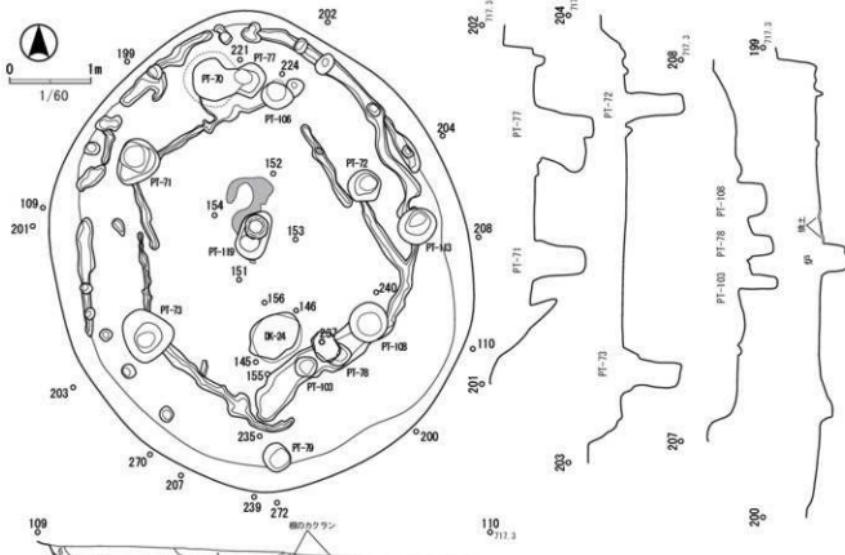


第 81 図 PJ-10 号住居出土遺物



第 82 図 PJ-10 号住居出土遺物

PJ-12



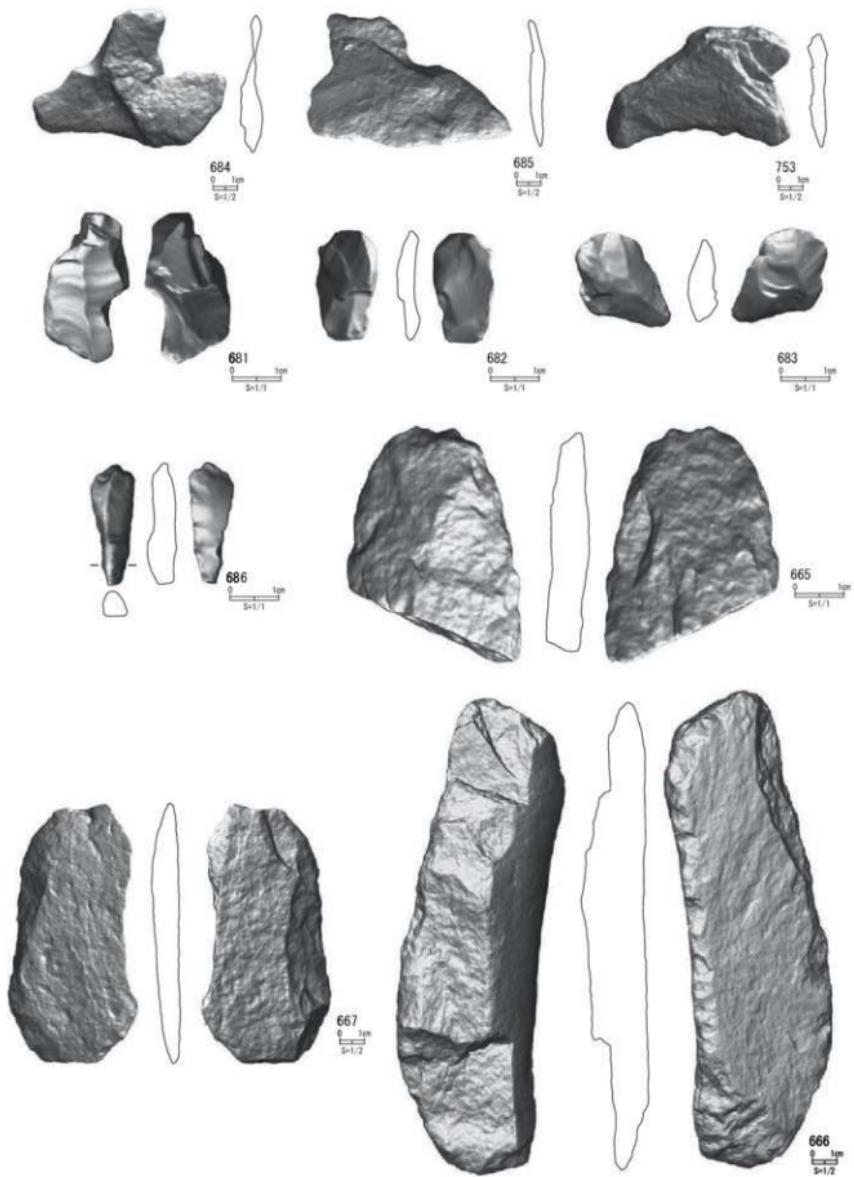
- 1層 シルト粘土・10%2/2(黒泥)に10%2/2(黒泥)が9%, 有机物粒子が9%, 粘土粒子が9%, 0.3m粘土粒子10%6.6(明黄褐)が9%以下混じる。しまる。
 2層 シルト粘土・10%2/2(黒泥)に10%1/1(黒)が9%, 10%4/1(こい)黄褐)が9%, 有机物粒子が9%, 0.3~0.5m粘土粒子10%6.6(明黄褐)が9%, 粘土粒子が9%以下混じる。しまる。
 3層 シルト粘土・10%1/1(黒)に10%2/2(黒泥)が4%, 10%4/3(こい)黄褐)が9%, 有机物粒子が9%, 0.3~0.5m粘土粒子10%6.6(明黄褐)が9%以下混じる。しまる。
 4層 砂質シルト粘土・10%4/1(こい)黄褐)に10%1/1(黒)が9%, 0.1~0.3m粘土粒子10%6.6(明黄褐)が9%, 有机物粒子が9%, 0.3~0.5m粘土粒子10%6.6(明黄褐)が9%, 有机物粒子が9%以下混じる。しまる。
 5層 シルト粘土・10%1/1(黒)に10%1/1(黒)が9%, 0.3~0.5m粘土粒子10%6.6(明黄褐)が9%, 有机物粒子が9%以下混じる。しまる。
 6層 砂質シルト粘土・10%4/1(こい)黄褐)に10%2/2(黒泥)が9%, 0.3~0.5m粘土粒子10%6.6(明黄褐)が9%, 有机物粒子が9%以下混じる。しまる。
 7層 粘土質土・10%6.6(明黄褐)に10%2/2(こい)黄褐)が9%, 有机物粒子が9%以下混じる。しまる。
 8層 粘土質土・10%6.6(明黄褐)に10%2/2(こい)黄褐)が9%, 0.1~0.3m粘土粒子10%6.6(明黄褐)が9%, 有机物粒子が9%以下混じる。しまる。
 9層 粘土・粘土質土・10%4/3(こい)黄褐)に10%6.6(明黄褐)が9%, 0.3~0.5m粘土粒子10%6.6(明黄褐)が9%混じる。しまる。
 地 屋 粘土質土・10%6.6(明黄褐)に10%4/1(こい)黄褐)が9%, 10%6.4(こい)黄褐)が9%, 10%2/3(黒泥)が10%, 有机物粒子が9%以下混じる。固くしまる。

- 炉**
- 1層 10%6.2(黒泥)に10%2/3(黒泥)が9%, 0.3m粘土粒子10%6.6(明黄褐)が9%, 有机物粒子が9%, 粘土粒子が9%以下混じる。やわらか。
 2層 10%6.1(黒)に0.5m粘土粒子10%6.6(明黄褐)が9%, 粘土粒子が9%混じる。やわらか。
 3層 (掘り方) 10%2/2(黒泥)に10%2/3(黒泥)が9%, 0.2~0.3m粘土粒子10%6.6(明黄褐)が9%, 0.5~0.8m粘土粒子10%6.6(明黄褐)が9%, 粘土粒子が9%以下混じる。やわらか。
 4層 10%6.6(明黄褐)・粘土質土・10%2/2(黒泥)が9%, 0.1m粘土粒子10%6.6(明黄褐)が9%, 有机物粒子が9%以下混じる。固くしまる。
 5層 10%6.2(黒泥)に10%2/3(こい)黄褐)が9%, 0.1m粘土粒子10%6.6(明黄褐)が9%, 有机物粒子が9%以下混じる。やわらか。
- DK-24**
- 1層 10%6.1(黒泥)に10%2/1(黒)が9%, 0.3~0.5m粘土粒子10%6.6(明黄褐)が9%, 有机物粒子が9%以下混じる。やわらか。
 2層 0.5~0.8m粘土粒子10%6.6(明黄褐)に10%2/1(黒)が9%, 10%2/1(黒)が9%, 有机物粒子が9%以下混じる。やわらか。
 3層 10%6.1(黒泥)に0.2~0.3m粘土粒子10%6.6(明黄褐)が9%, 10%2/1(黒)が9%, 有机物粒子が9%以下混じる。やわらか。
 4層 10%6.6(明黄褐)・粘土質土・10%5.1(地灰)が9%, 有机物粒子が9%以下混じる。しまる。
- 地山**
- 10%6.6(明黄褐)・粘土質土・固くしまる。

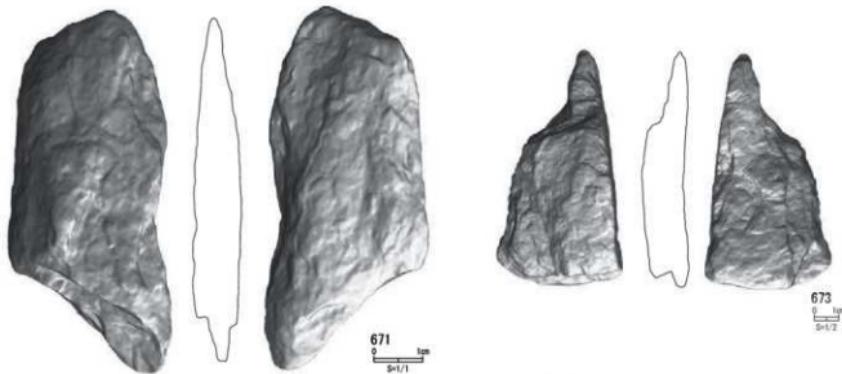
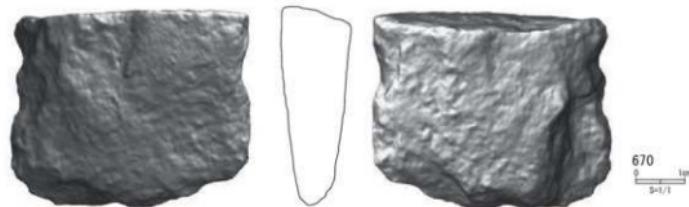
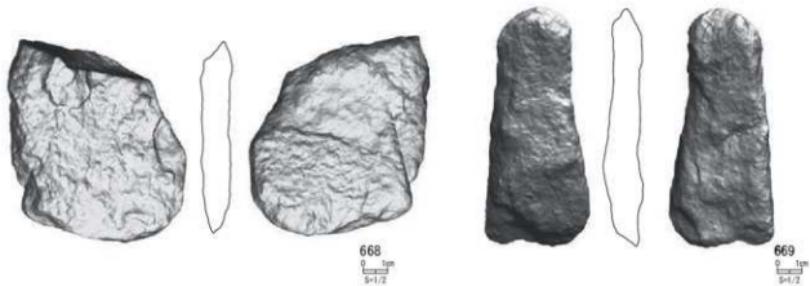
第83図 PJ-12号住居



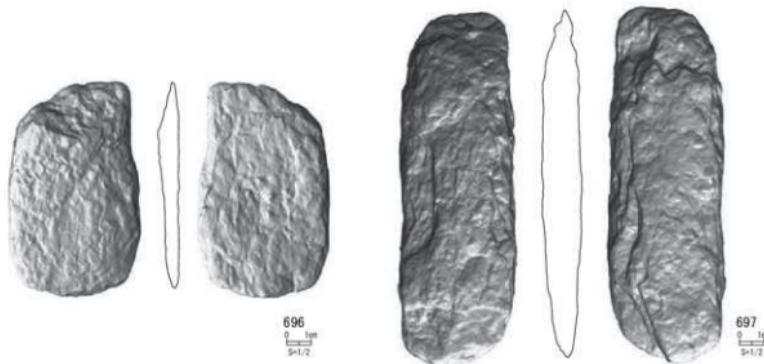
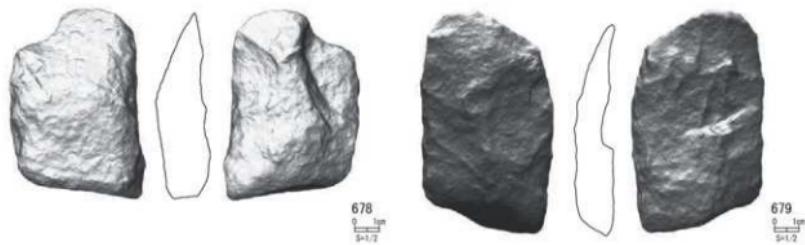
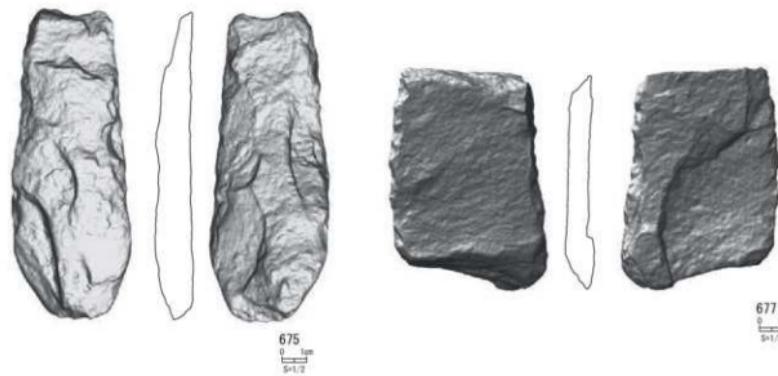
第84図 PJ-12号住居出土遺物



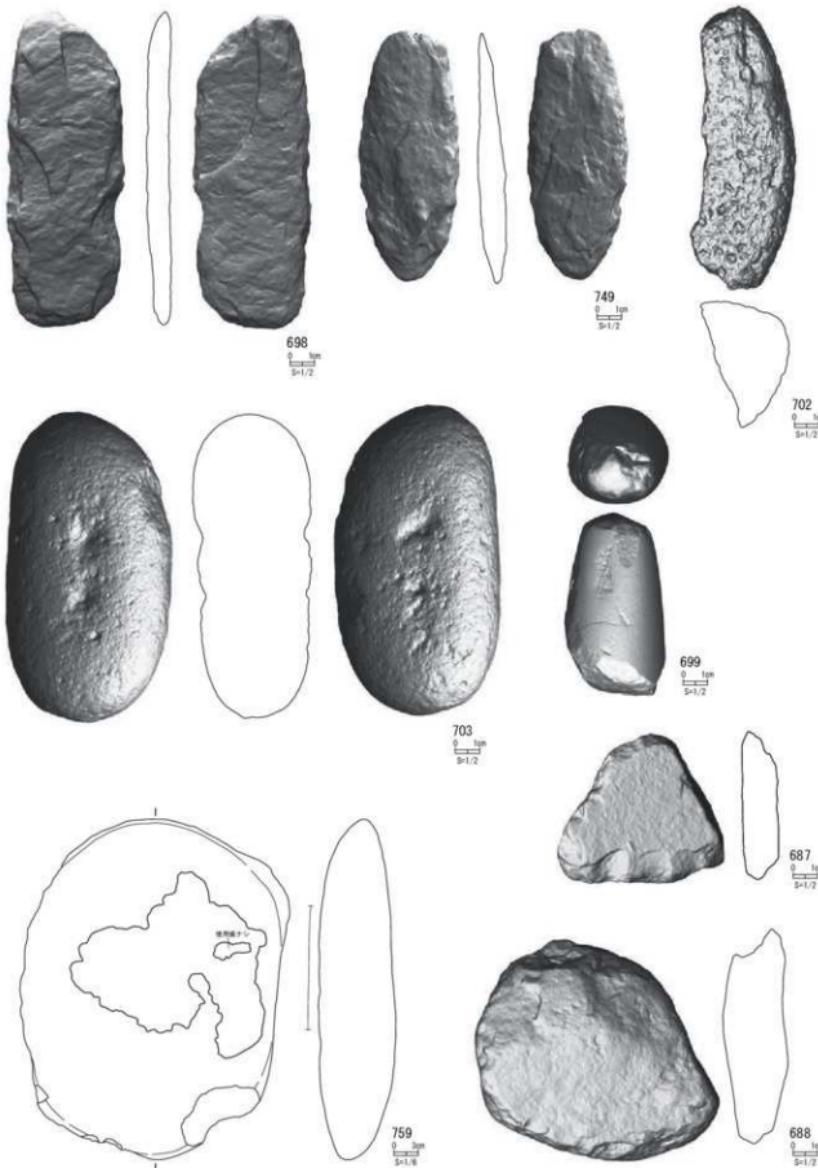
第 85 図 PJ-12 号住居出土遺物



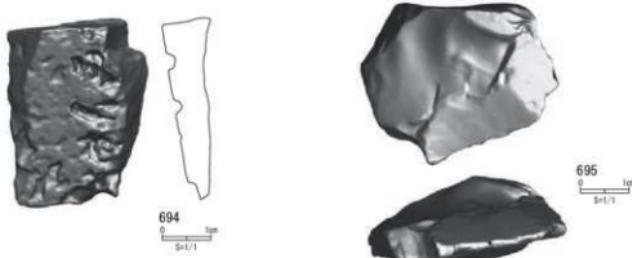
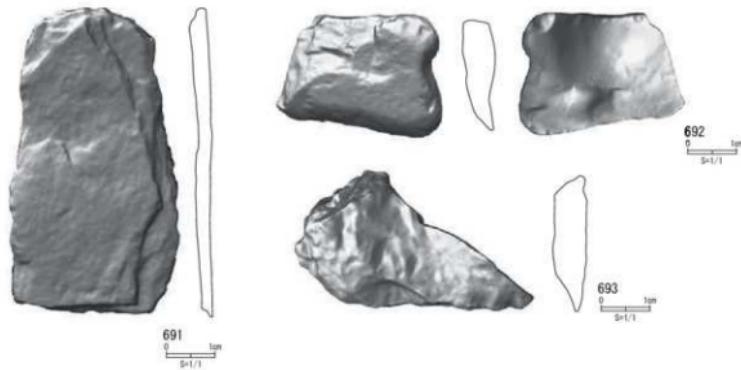
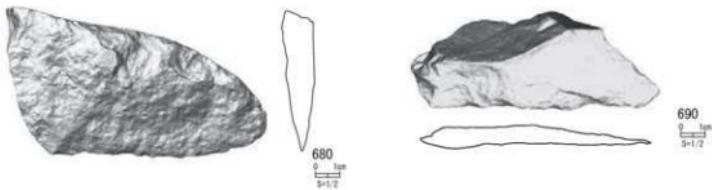
第 86 図 PJ-12 号住居出土遺物



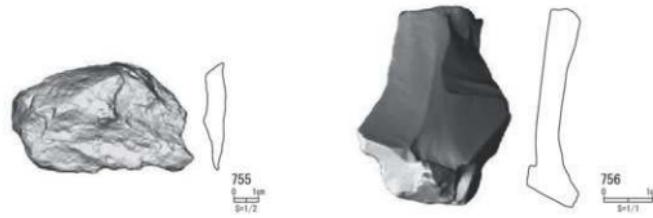
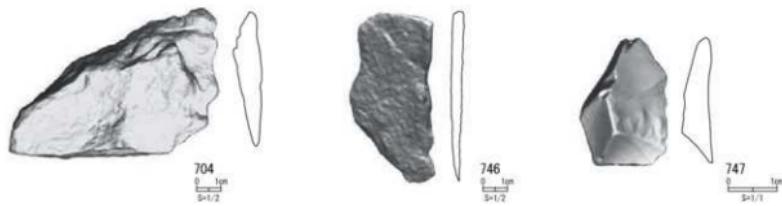
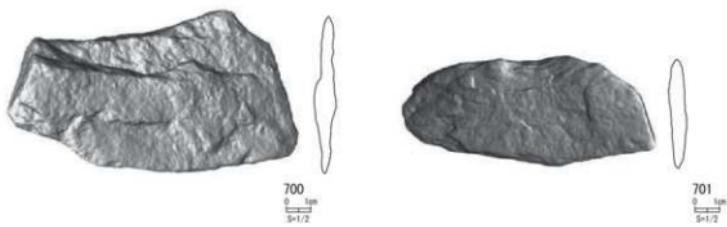
第 87 図 PJ-12 号住居出土遺物



第 88 図 PJ-12 号住居出土遺物

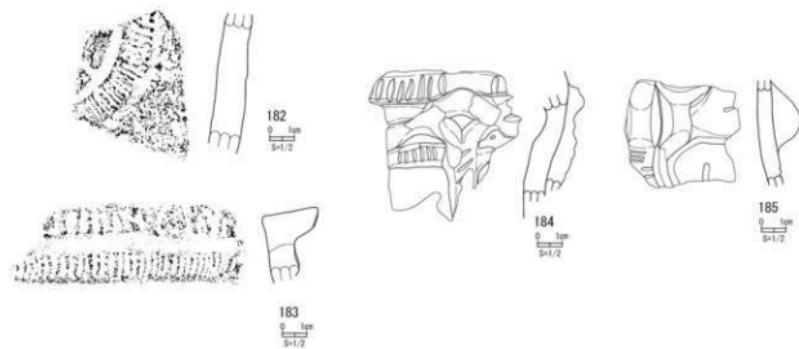


第89図 PJ-12号住居出土遺物

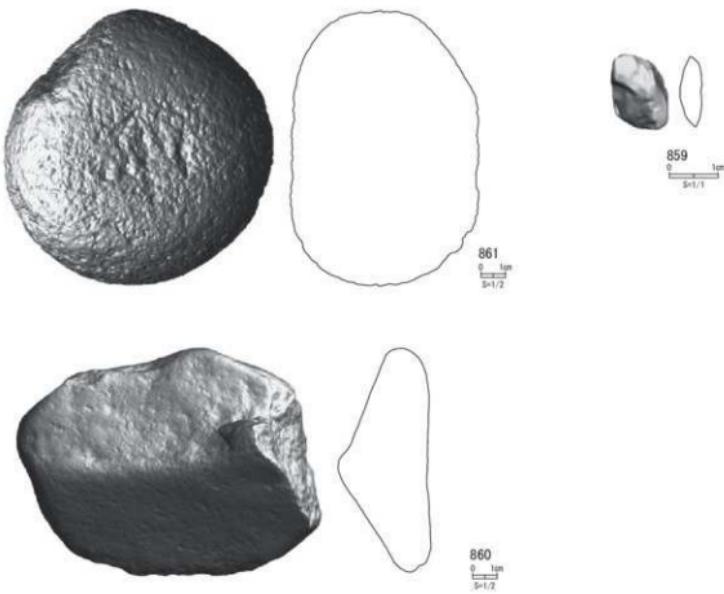


第90図 PJ-12号住居出土遺物

PJ-13

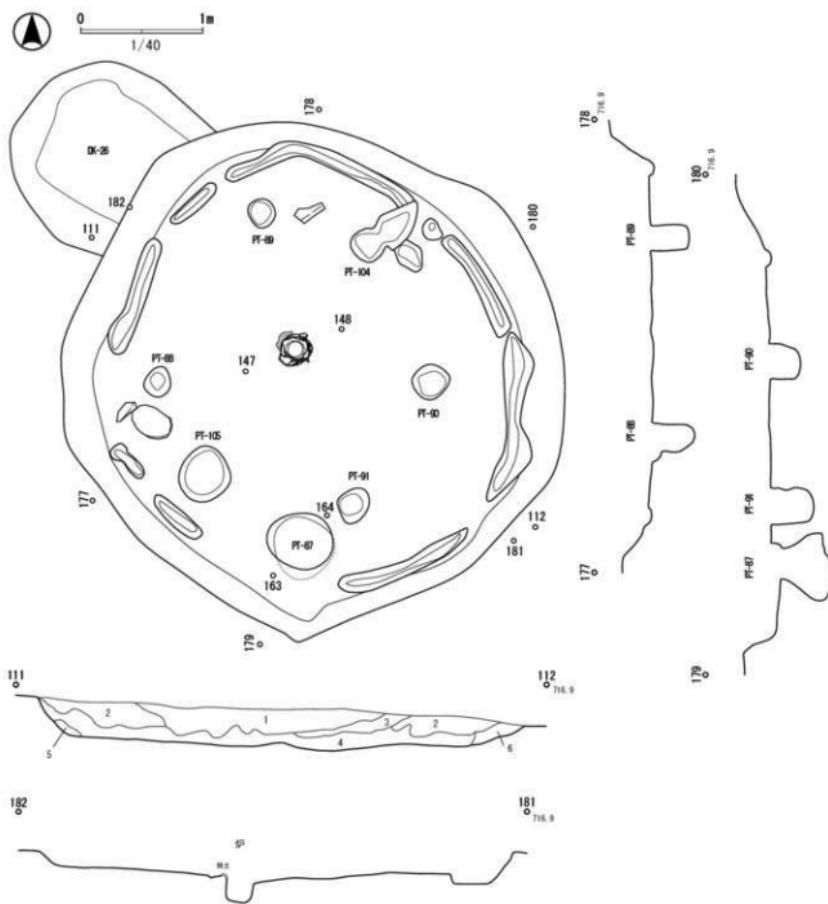


PJ-14



第 91 図 PJ-13 号住居出土遺物 PJ-14 号住居出土遺物

PJ-15

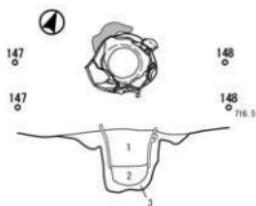


- 1層 シルト粘土、10%2(2層構造)に10%4(2層構造)が10%、10%6(2層構造)砂混じりの粘質土が5%、粘土粒子が5%混じる。固くしまる。
 2層 シルト粘土、10%2(2層構造)に10%4(2層構造)が5%、10%5(2層構造)砂混じりの粘質土が5%、5%3cm粘質土粒子10%6(2層構造)が5%混じる。固くしまる。
 3層 砂混じりの粘質土、10%2(2層構造)に10%4(2層構造)が5%、10%5(2層構造)粘質土が5%、粘土粒子が5%混じる。固くしまる。
 4層 シルト粘土、10%2(2層構造)に10%4(2層構造)が5%、10%5(2層構造)粘質土が5%、粘土粒子が5%混じる。固くしまる。
 5層 粘質土、10%5(2層構造)に10%4(2層構造)が10%混じる。固くしまる。
 6層 粘質土、10%6(2層構造)に10%3(2層構造)が5%、10%5(2層構造)粘質土が5%混じる。固くしまる。
 床 粘質土、10%6(2層構造)に10%2(2層構造)が5%混じる。固くしまる。
 壁 粘質土、10%6(2層構造)に10%2(2層構造)が5%混じる。固くしまる。

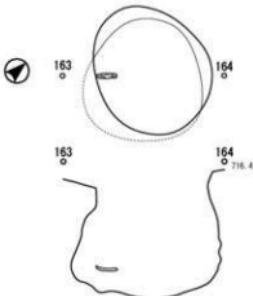
第 92 図 PJ-15 号住居

0 50cm
1/20

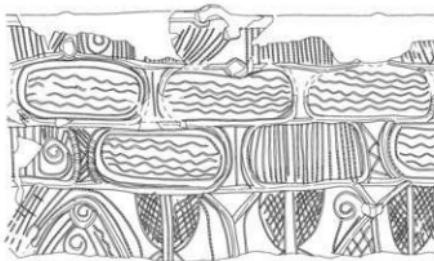
炉



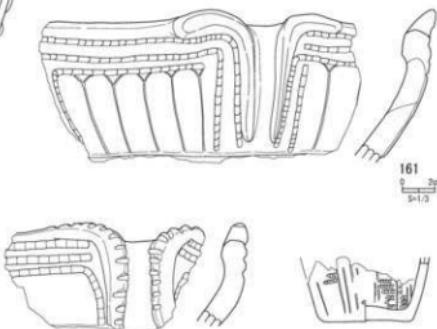
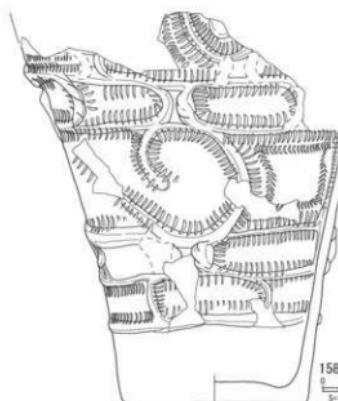
PT-87



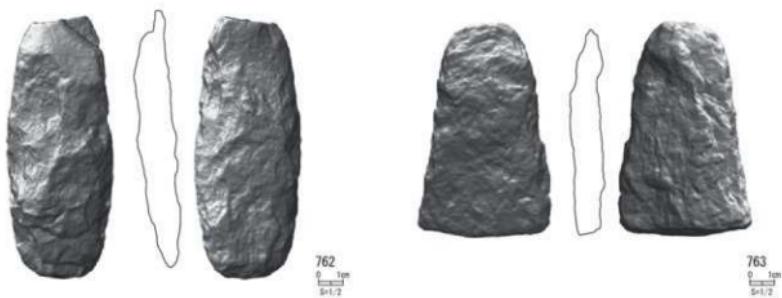
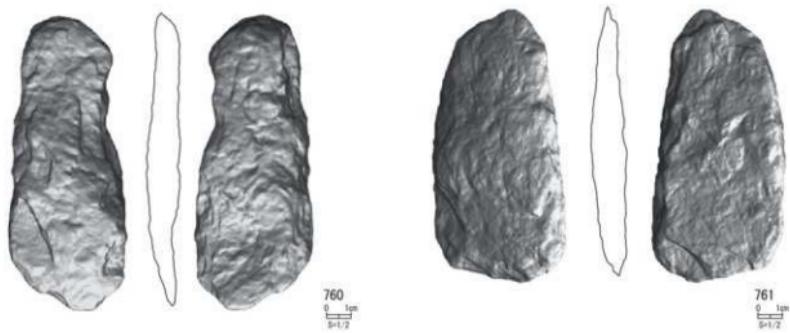
- 1層 1096.3(黒褐色)にφ0.3~0.5cm粘土粒子10%6(暗黄褐色)-10%4(こぶし黄褐色)が分布する。しる。
2層 1095.9(こぶし黄褐色)に10%4.3(こぶし黄褐色)が分布する。しる。
3層 1094.9(黒褐色)に10%2.3(黒褐色)が3%, φ0.3~0.5cm粘土粒子10%6(暗黄褐色)があり、粘土粒子が沈降する。固くしる。
地山 1096.6(暗黄褐色)、固くしる。



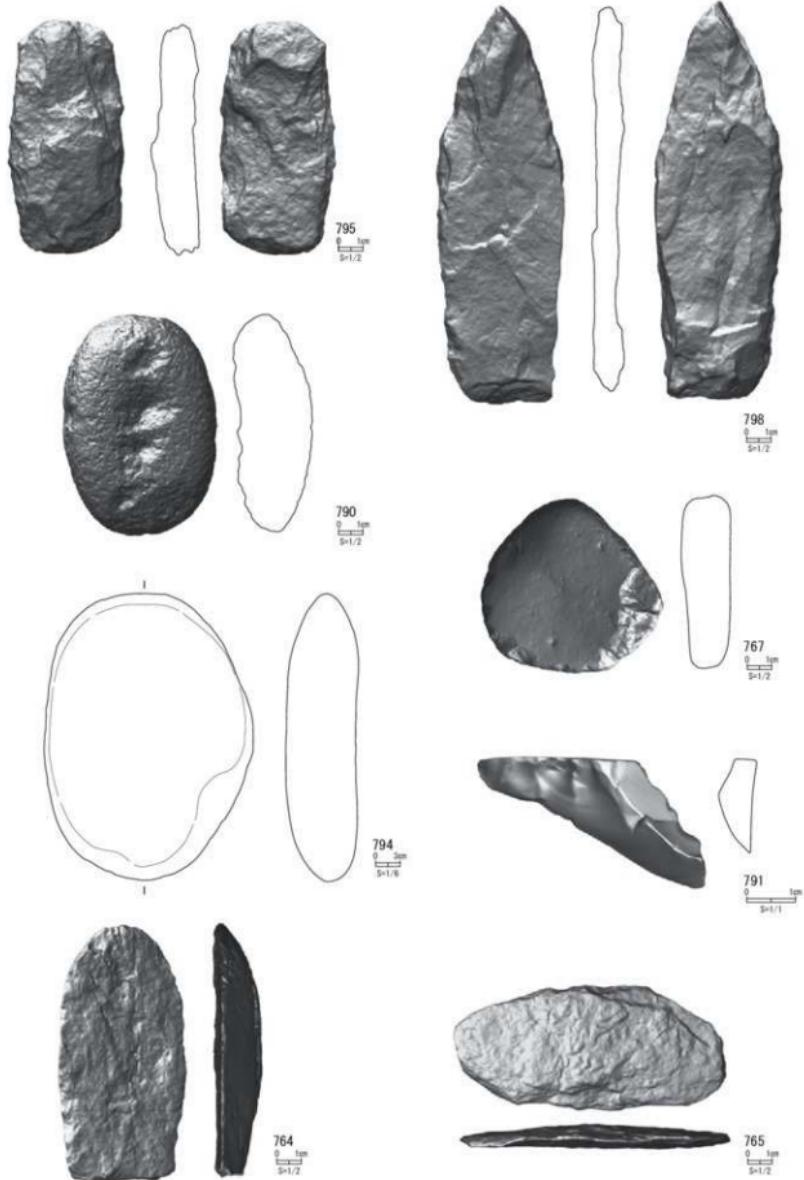
159
3-1/2



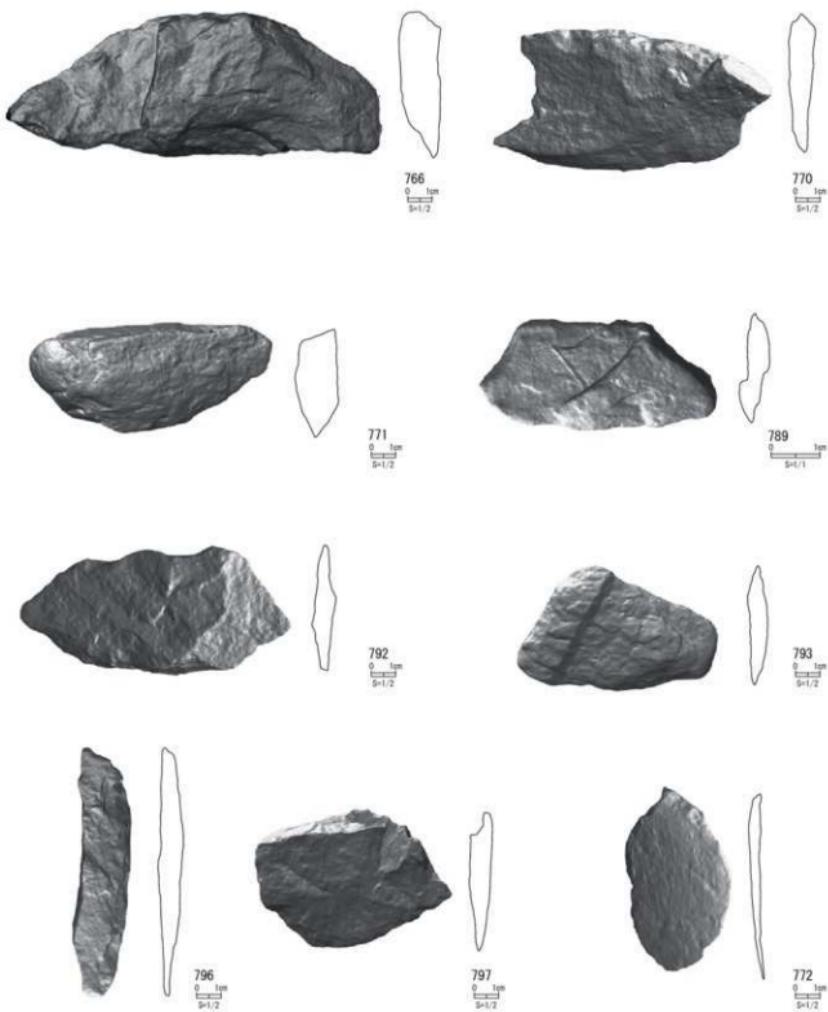
第93図 PJ-15号住居出土遺物



第94図 PJ-15号住居出土遺物

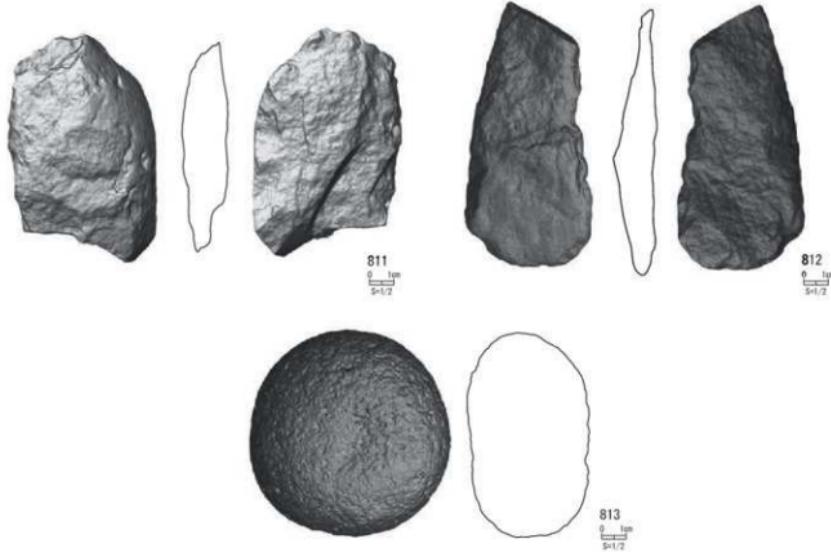


第95図 PJ-15号住居出土遺物



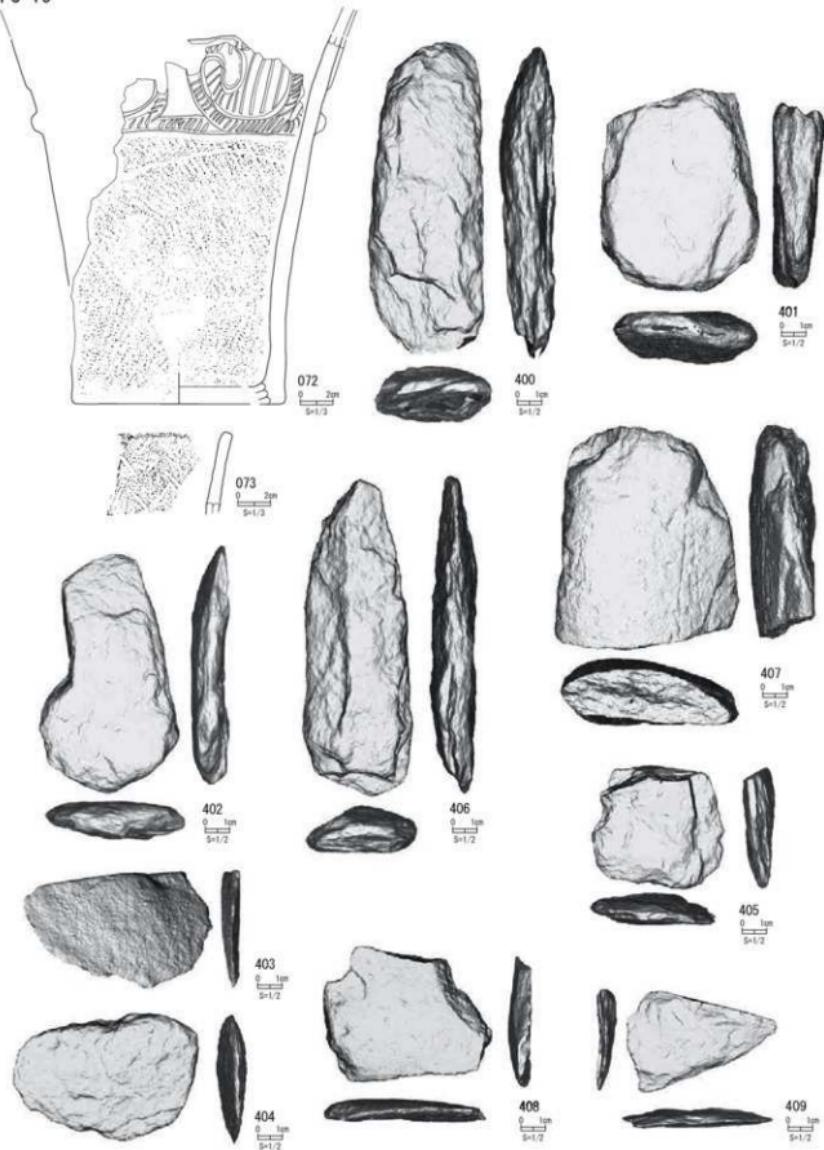
第96図 PJ-15号住居出土遺物

PJ-18



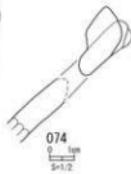
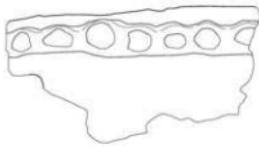
第 97 図 PJ-18 号住居出土遺物

PJ-19



第98図 PJ-19号住居出土遺物

PJ-21



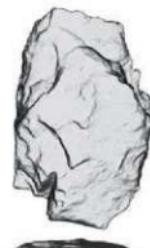
074
0 1mm
5x1/2



423
0 1mm
5x1/2



424
0 1mm
5x1/2



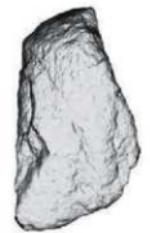
425
0 1mm
5x1/2



420
0 1mm
5x1/2



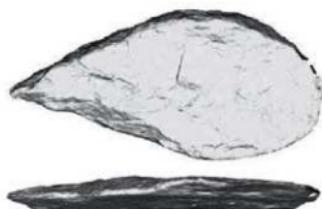
422
0 1mm
5x1/2



430
0 1mm
5x1/2



431
0 1mm
5x1/2

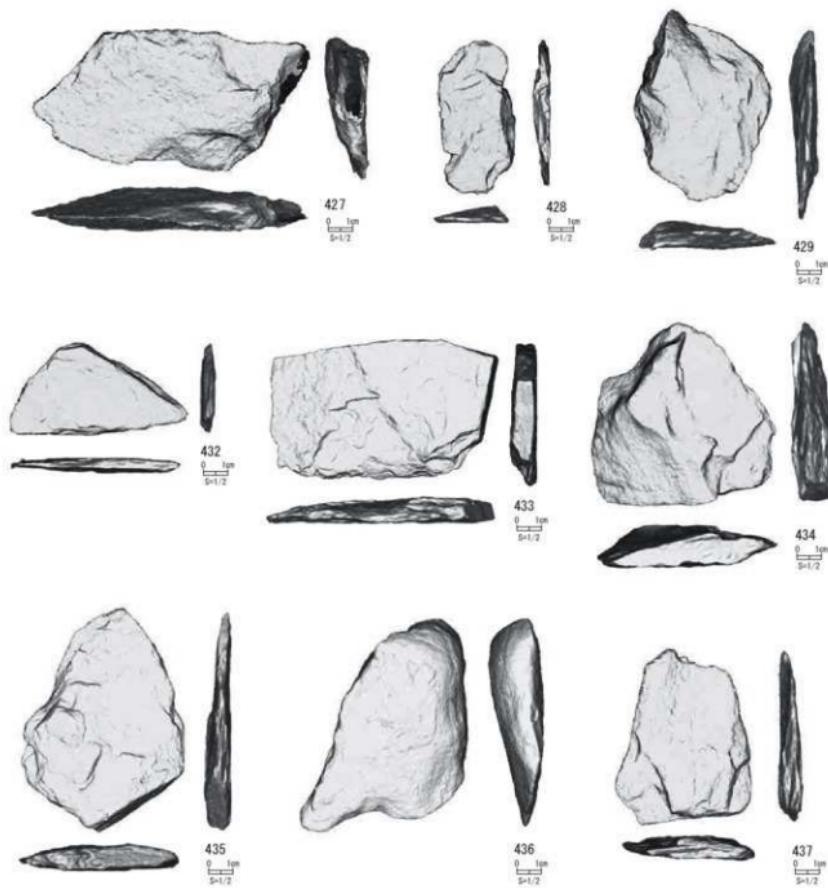


421
0 1mm
5x1/2

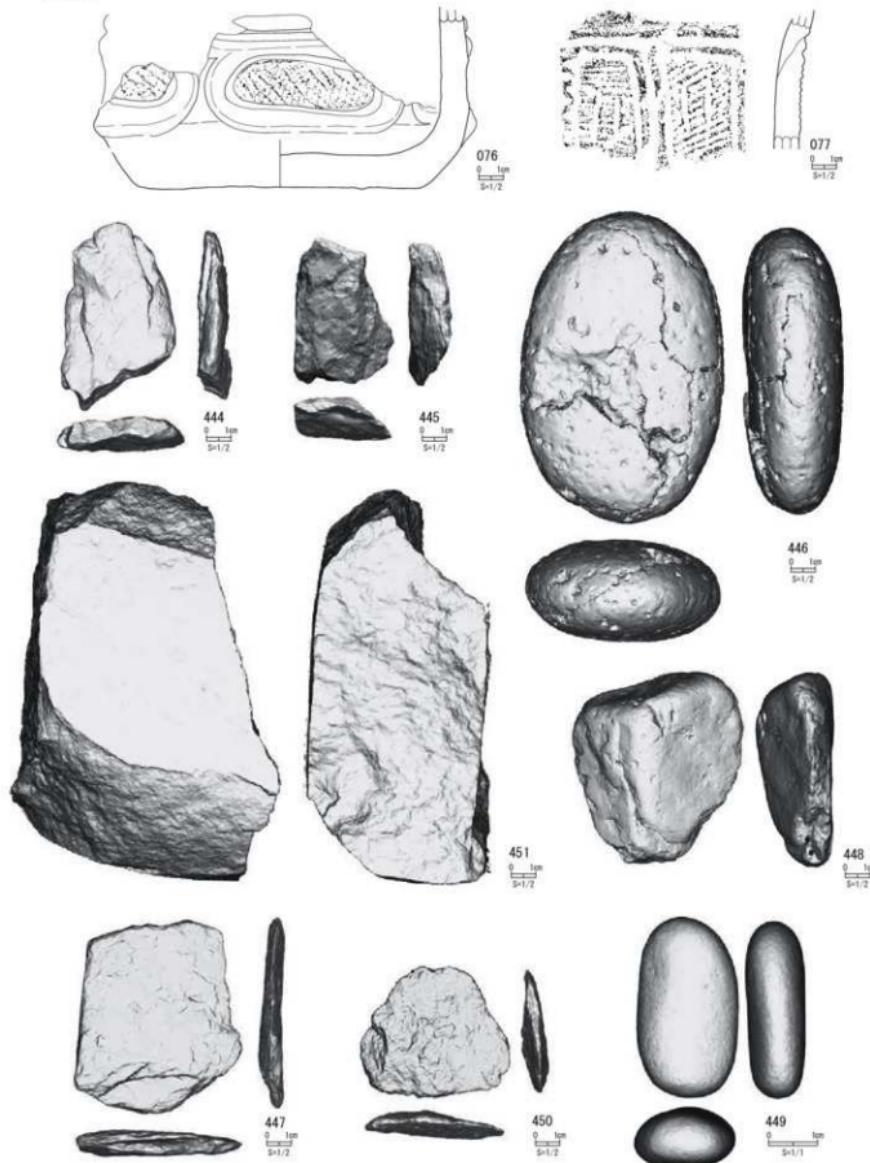


426
0 1mm
5x1/2

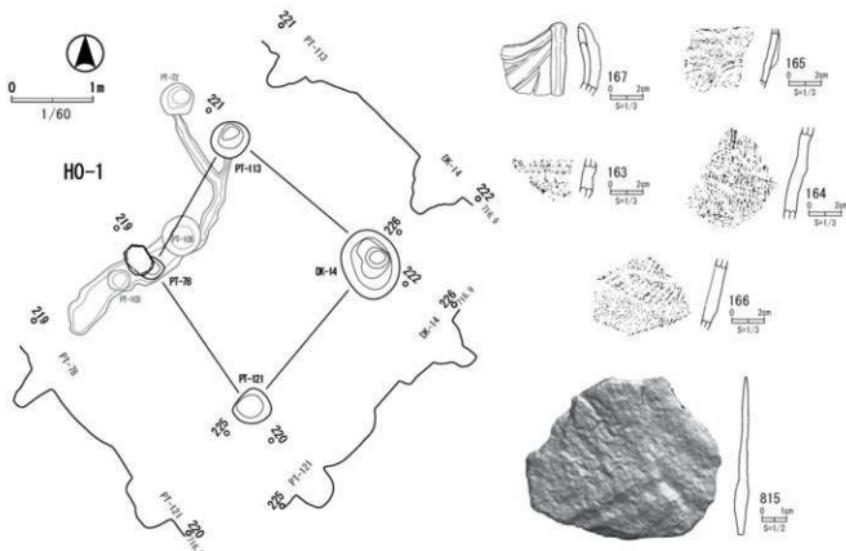
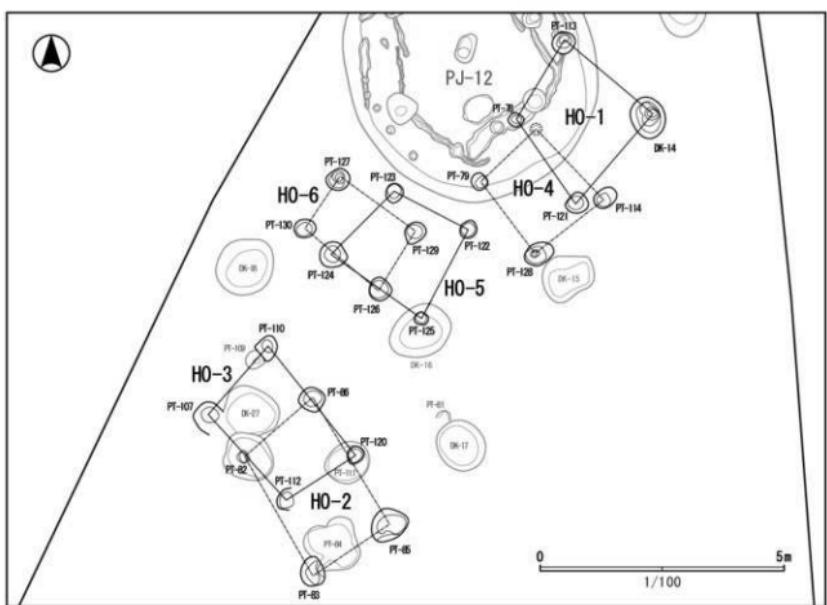
第99図 PJ-21号住居出土遺物



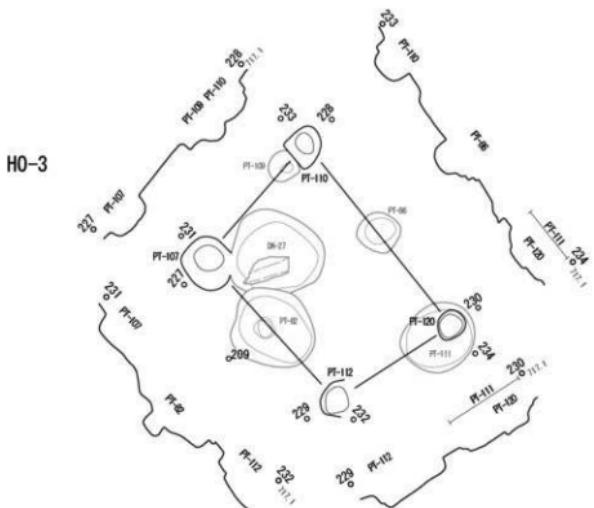
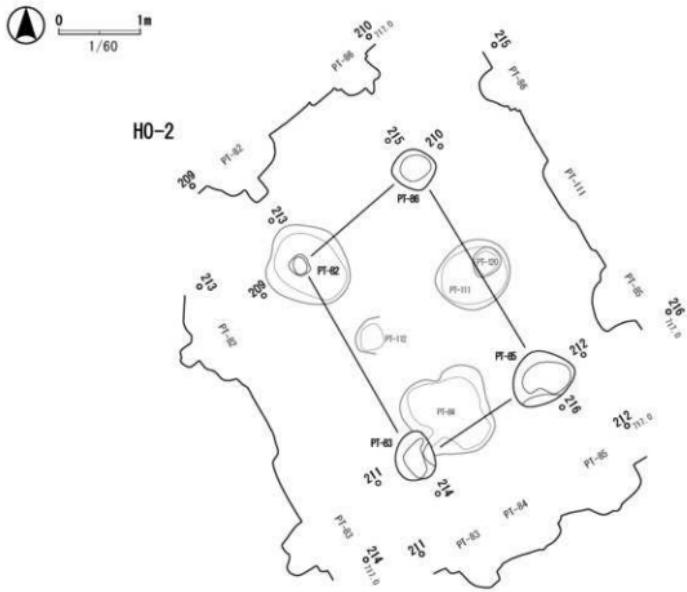
第 100 図 PJ-21 号住居出土遺物



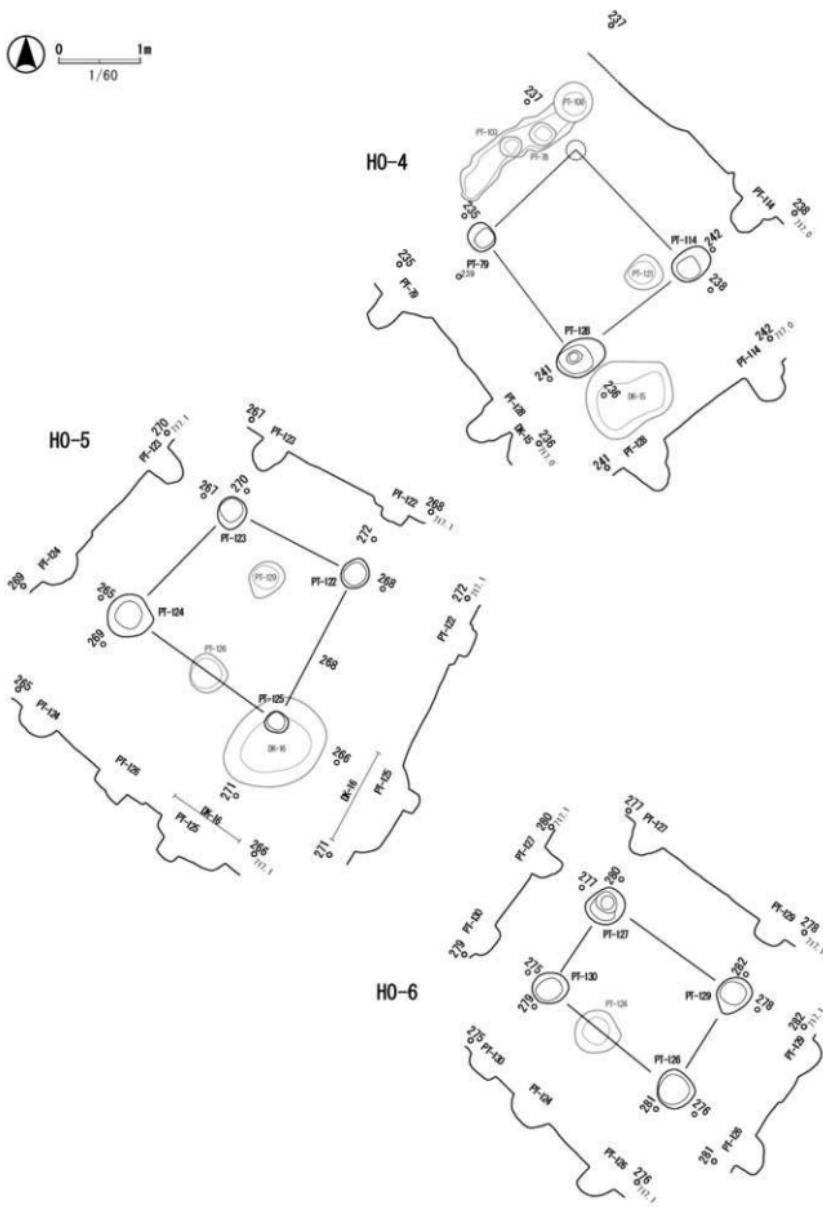
第 101 図 PJ-22 号居住出土遺物



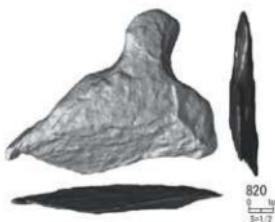
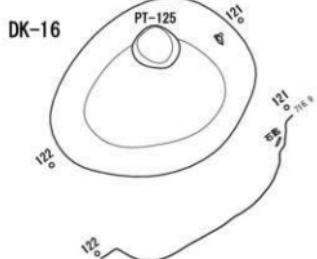
第 102 図 掘立柱建物全体図 H0-1 号掘立柱建物



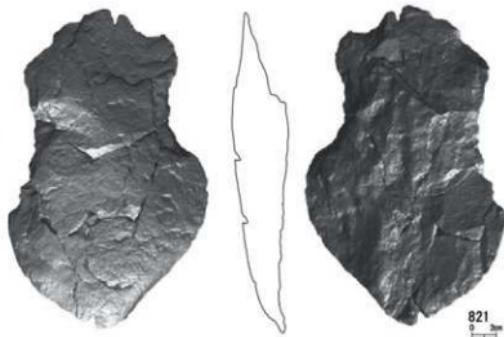
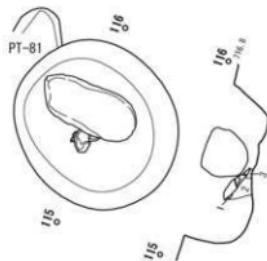
第 103 図 H0-2 号掘立柱建物 H0-3 号掘立柱建物



第104図 H0-4号掘立柱建物 H0-5号掘立柱建物 H0-6号掘立柱建物



DK-17



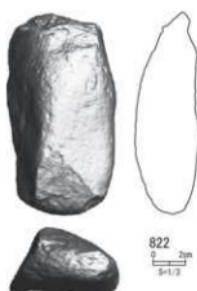
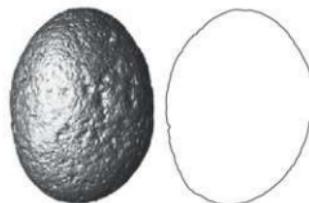
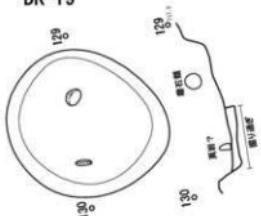
1図 地土が混じったに長い黄褐色の土。

2図 1095-4に長い黄褐色。

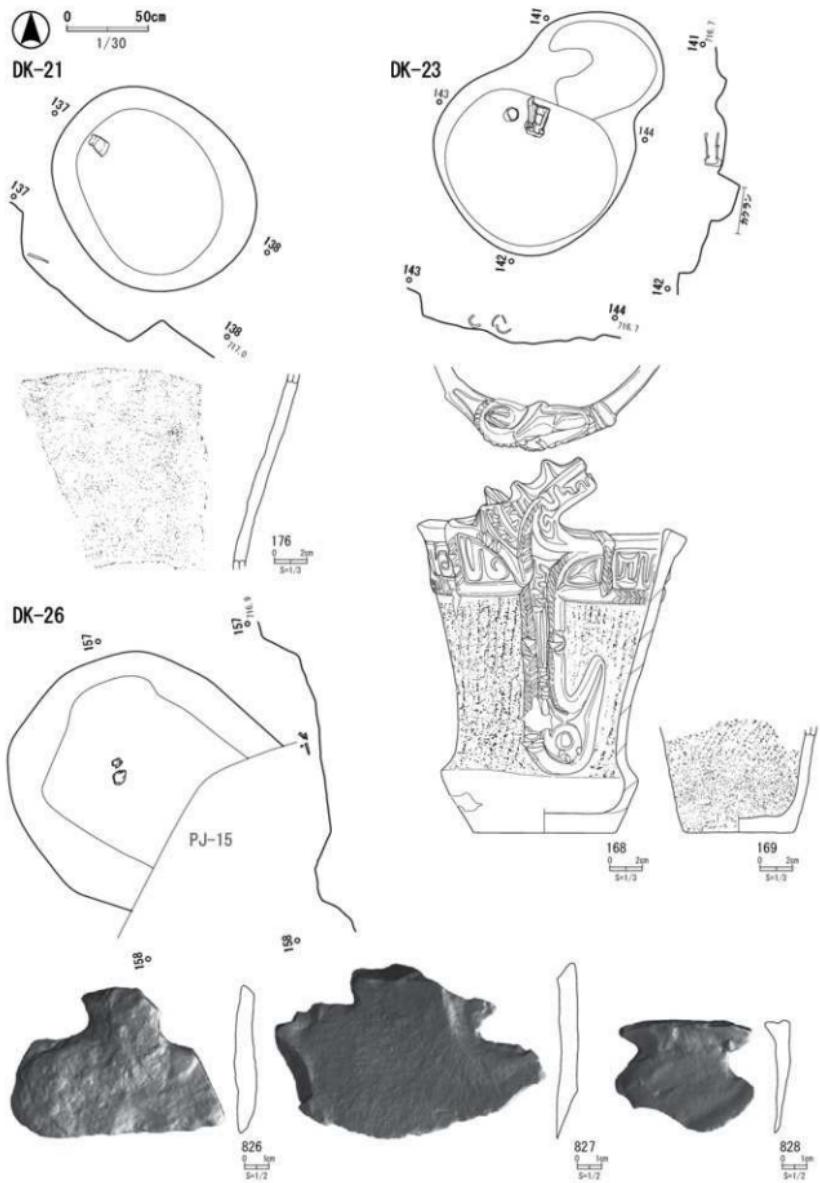
3図 地が混じったに長い黄褐色の土。

地山 1096-6(明黄褐色) 粘土質、固くしまる。

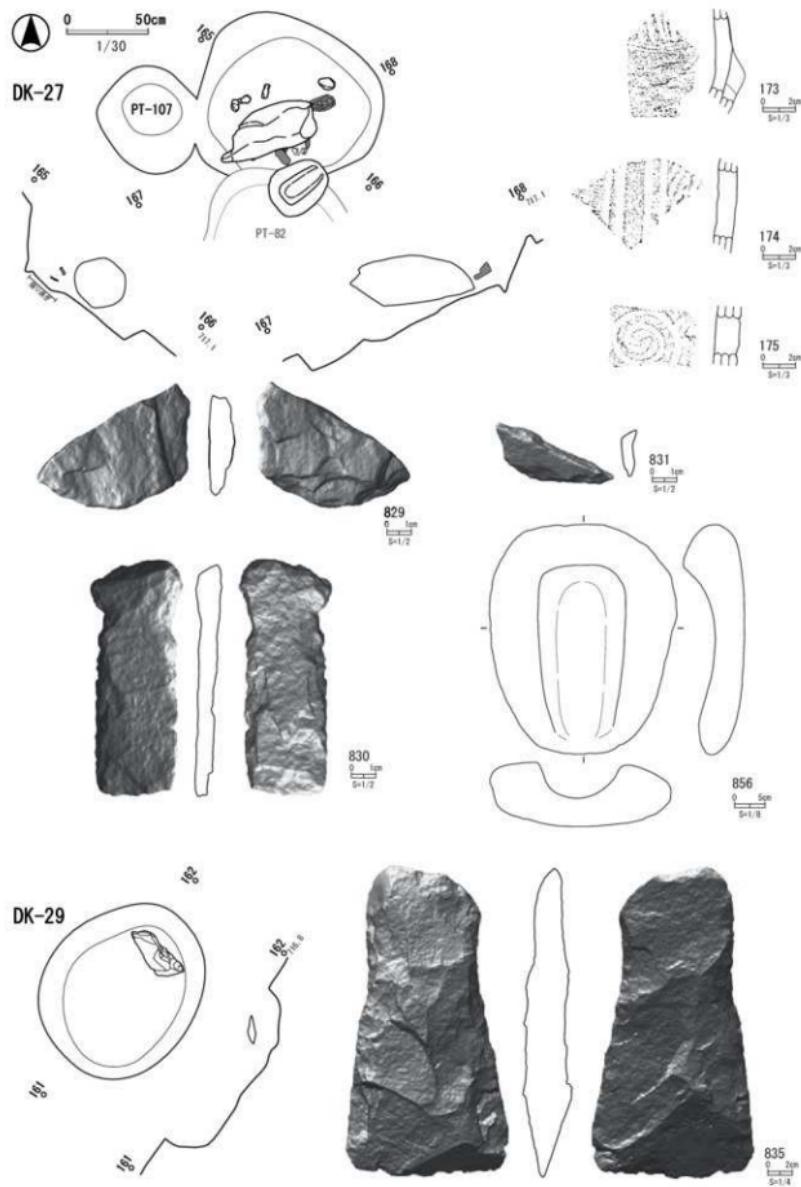
DK-19



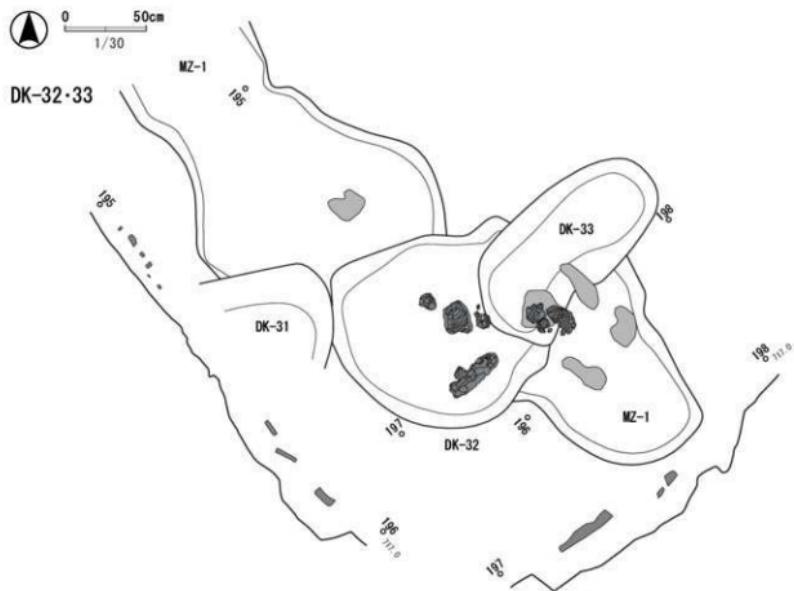
第105図 DK-16号土坑・出土遺物 DK-17号土坑・出土遺物 DK-19号土坑・出土遺物



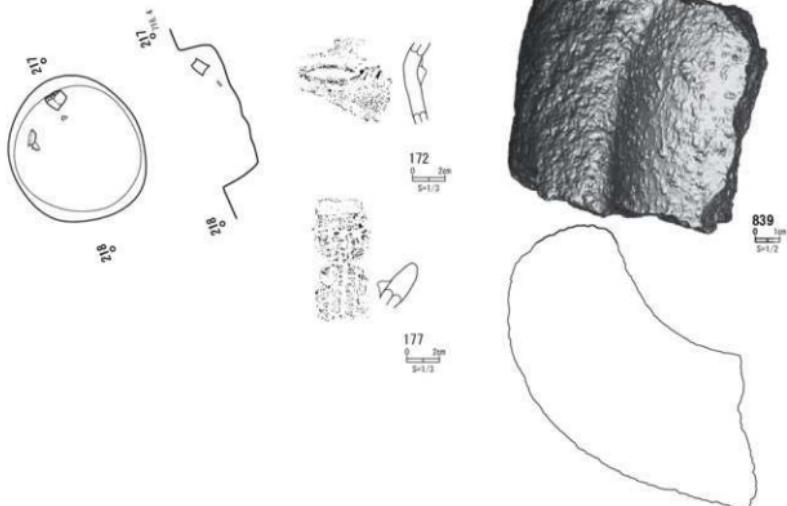
第 106 図 DK-21 号土坑・出土遺物 DK-23 号土坑 DK-26 号土坑・出土遺物



第107図 DK-27号土坑・出土遺物 DK-29号土坑・出土遺物



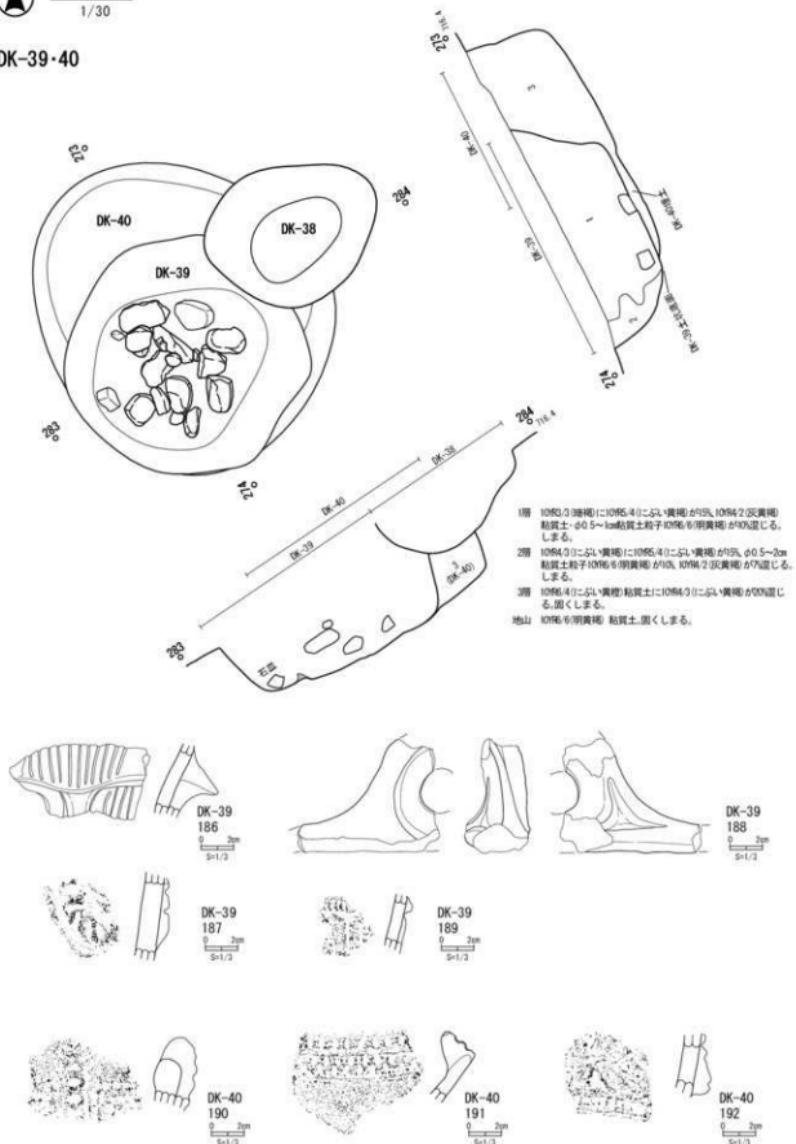
DK-34



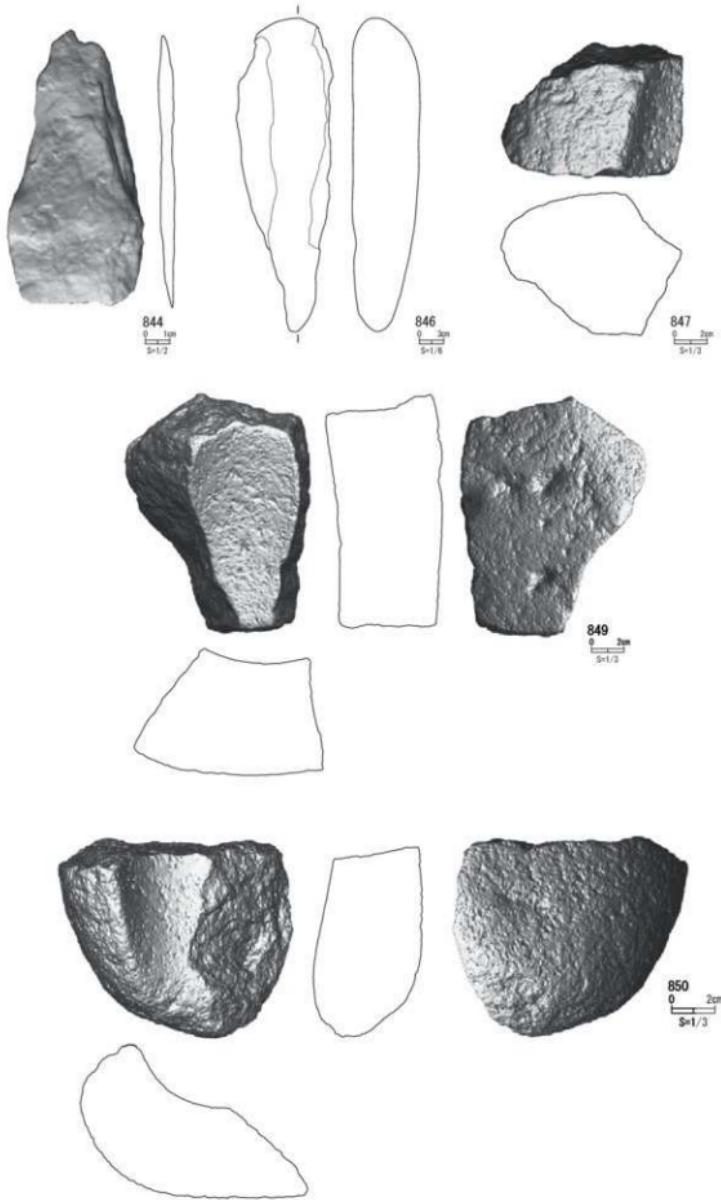
第 108 図 DK-32・33 号土坑 DK-34 号土坑・出土遺物



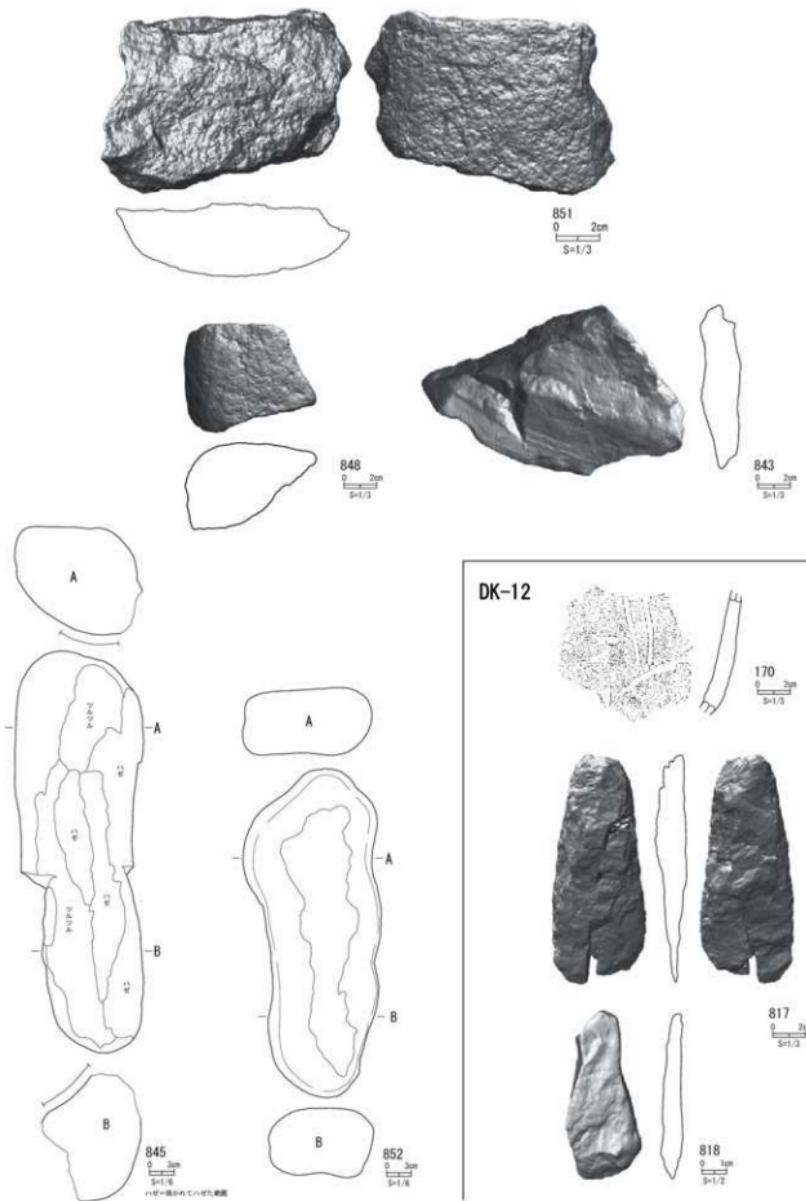
DK-39・40



第109図 DK-39・40号土坑・出土遺物

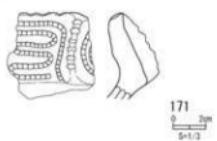


第 110 図 DK-39 号土坑出土遺物



第 111 図 DK-39 号土坑出土遺物 DK-12 号土坑出土遺物

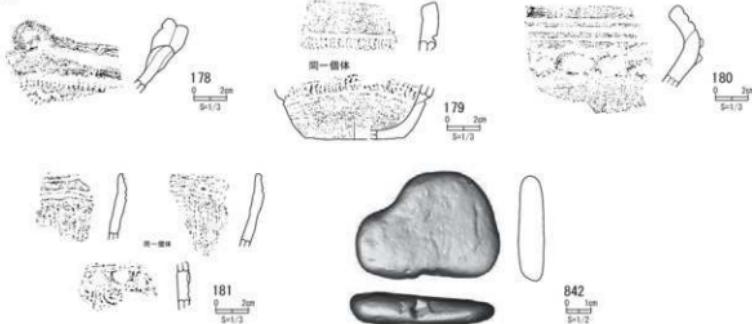
DK-13



DK-31



DK-38



DK-41

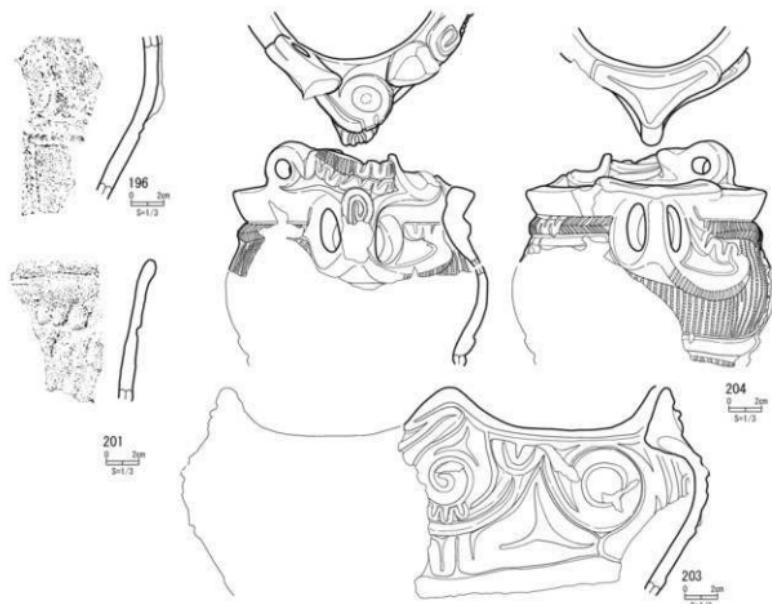
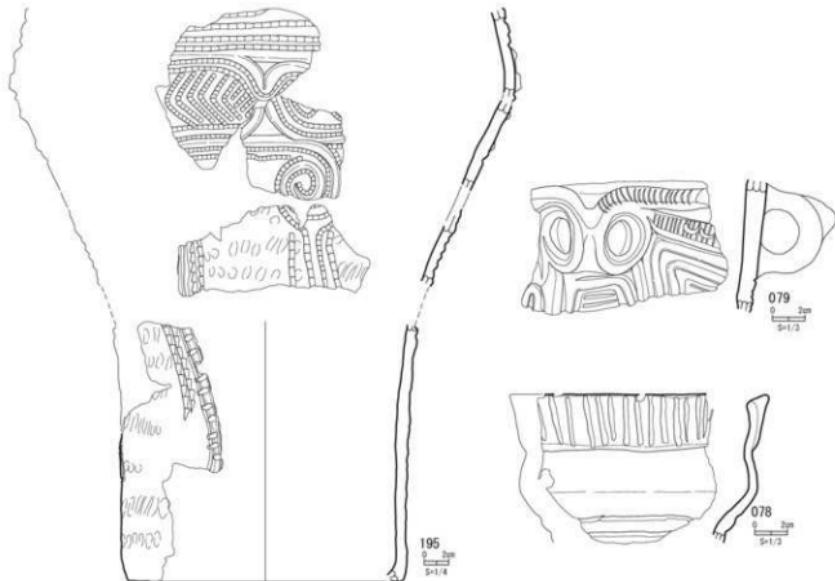


PT-111

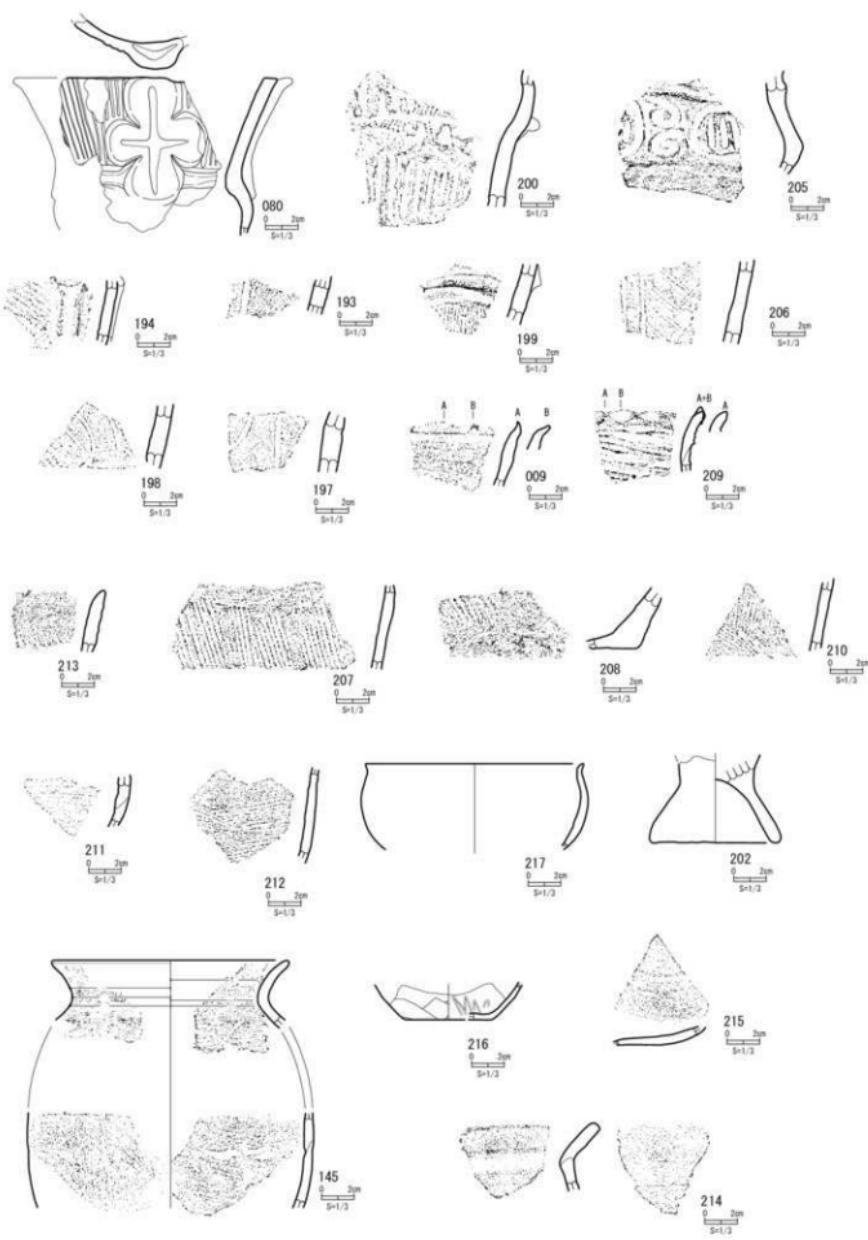


第 112 図 DK-13 号・23 号・31 号・38 号・41 号土坑出土遺物

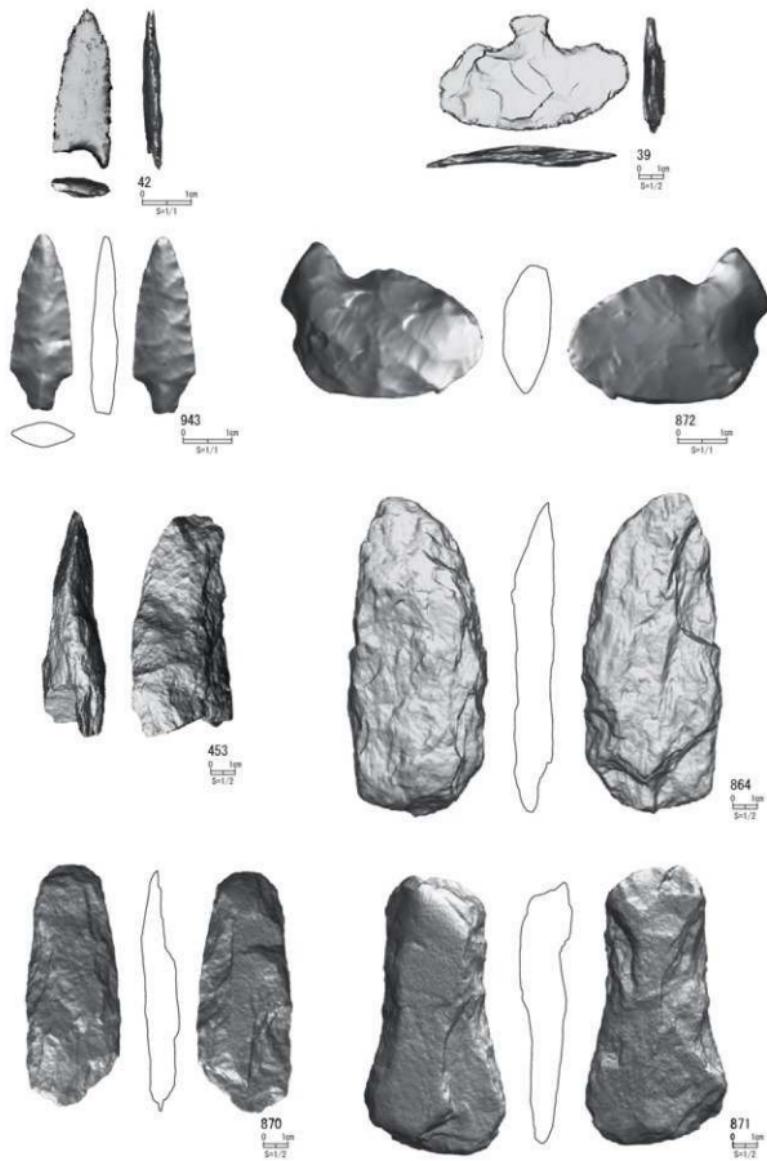
PT-111 号 ピット・出土遺物



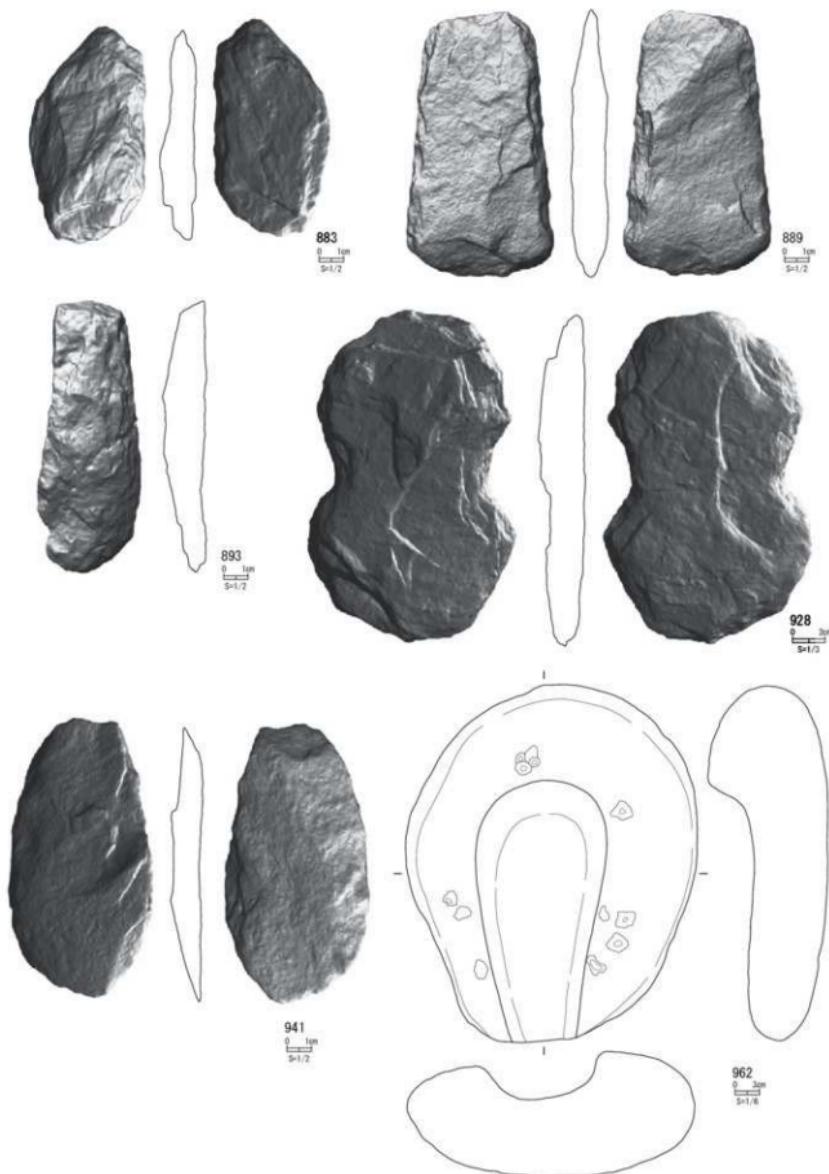
第 113 図 遺構外出土遺物



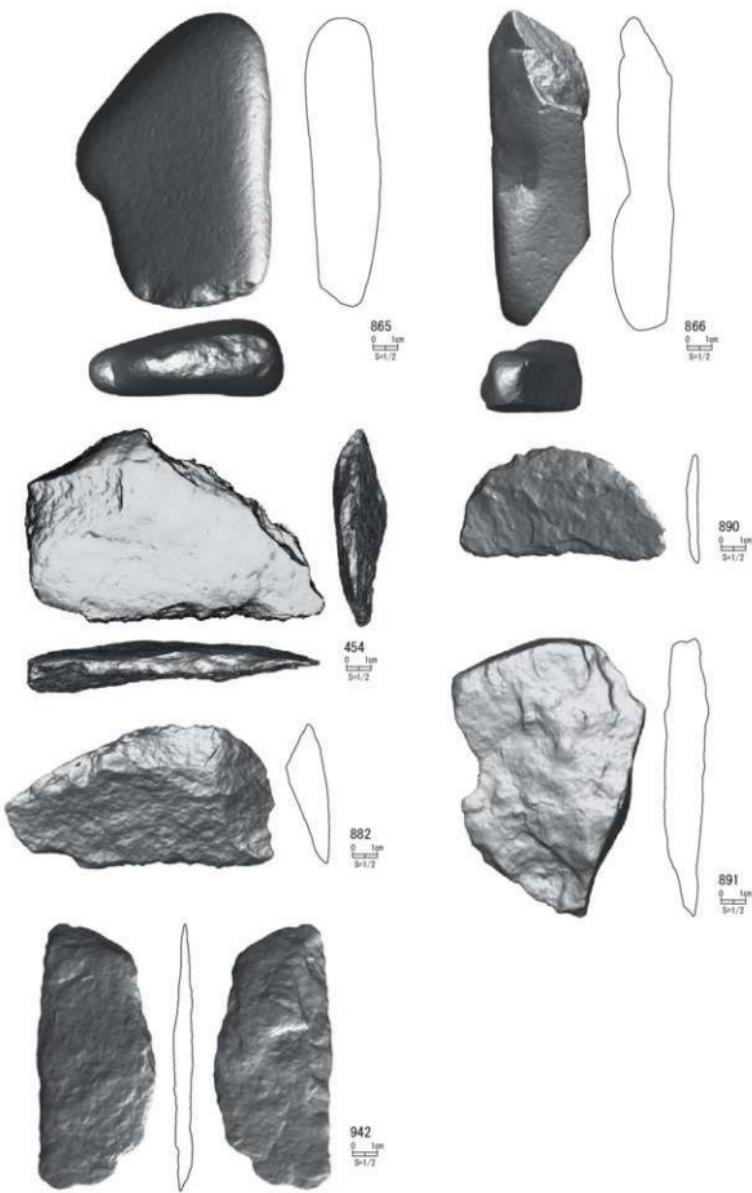
第 114 図 遺構外出土遺物



第 115 図 遺構外出土遺物



第 116 図 遺構外出土遺物



第 117 図 遺構外出土遺物

第5節 発掘調査で確認された扇状地堆積層（第118図、写真図版32）

南沢遺跡が所在する白州町島原は巨摩山地の東麓にあたり、釜無川の上位段丘面上に巨摩山地に発する小河川が扇状地を形成していて、現在も水田の農業用水路に風化花崗岩由来の白い砂が堆積し、定期的に水路を浚渫しなければならない。

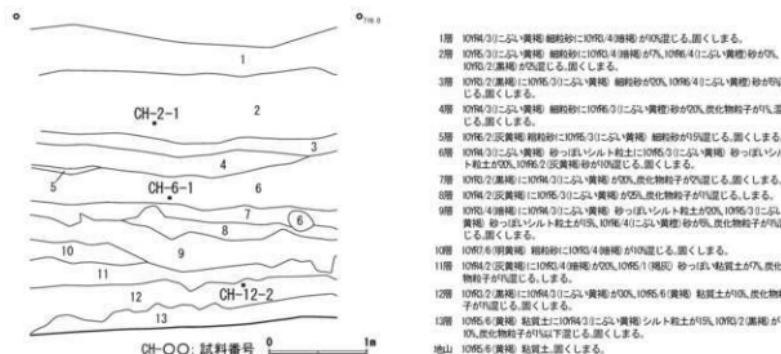
今次調査で南沢遺跡の縄文時代中期の居住地跡を覆う厚さ2mほどの扇状地堆積層を検出した。第118図に示した土層図は2区調査区の南西角の調査区境界断面で作図したものである。耕作土直下の1層と2層が黄褐色砂層、3層は土壤化した黒褐色砂質層、4層と5層、6層は黄褐色砂層、7層が土壤化した黒褐色砂質層という具合に、3層、7層、12層の土壤化した黒褐色砂質層が挟在しながら砂層が堆積している。13層は土器破片、炭化物粒子が混じる漸移層でその下位が黄褐色地山となる。

南沢遺跡から南へ3.8km地点にある堰口遺跡でも、縄文時代前期と中期中葉の遺構を覆う扇状地堆積層が検出された。堰口遺跡の砂質堆積層は厚さが数十cm程度で、堆積層を掘り込んで平安時代の集落跡が営まれていたことから扇状地堆積層の大まかな年代観が得られている。

南沢遺跡ではより厚く、層位が分別できる堆積層が検出され、より詳細な年代観が得られる見込みがあることから層位ごとに微小な炭化物試料を採取し、炭素年代測定を行った。その結果、12層中の炭化物は3,350～3,210calBP (2σ)、6層中の炭化物は2,125～2,000calBP (2σ)、2層中の炭化物は1,877～1,737calBP (2σ)の年代値が得られた。これらの年代値は12層が縄文時代後期後葉、6層が弥生時代中期後半、2層が弥生時代後期後半に相当する。

東京湾沿岸でのアルケノン古水温分析によると4.3kaイベントといわれる縄文時代後期初頭の寒冷期以降、古墳時代中期頃に至るまでは、海洋表層水温が激しく上昇、下降を繰り返し、あたかも縄文時代前期をピークとした温暖な安定期と律令制時代の寒冷な安定期のあいだの調整期の様相を示している(Kajita et al. 2020)。日本では「弥生の小海退」と呼ばれる涼冷・多雨な気候が支配的な時期に相当し、列島各地で扇状地の発達など地形環境の変化が生じたという。南沢遺跡が立地する巨摩山地東麓においても微地形の発達の過程が確認されたことは、当該地域で縄文時代後期から古墳時代の遺跡が少ないと関連する可能性があり、地域史を理解するうえで重要である。

Hiroto Kajita,Naomi Harada,Yusuke Yokoyama,Miyako Sato,Nanako Ogawa,Yosuke Miyairi,Chikako Sawada,Atsushi Suzuki,Hodaka Kawahata 2020 'High time-resolution alkenone paleotemperature variations in Tokyo Bay during the Meghalayan: Implications for cold climates and social unrest in Japan' 'Quaternary Science Reviews' 230



第118図 扇状地堆積層

第4章 樹種同定、年代測定と種実圧痕調査

第1節 PJ-3号住居出土炭化材の樹種同定

黒沼保子（株式会社パレオ・ラボ）

1.はじめに

北杜市に所在する南沢遺跡の縄文時代中期の住居跡から出土した炭化材について、樹種同定を行った（第4章第2節第119図）。

2.試料と方法

試料は、縄文時代中期（井戸尻式2段階、勝坂3式期）のPJ-3号住居から出土した炭化材24点である。遺構は焼失住居で、炭化材は垂木などの建築部材と推測されている。試料は、現場で一部分が採取された炭化材であるため、今回は形状の確認や、残存径および残存年輪数の計測は行わなかった。

樹種同定は、カミソリまたは手で3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、試料台に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VHX-D510）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3.結果

樹種同定の結果、広葉樹のクリのみが確認された。結果の一覧を表1に示す。以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1) クリ *Castanea crenata Siebold et Zucc.* ブナ科 図版1 1a-1c (No.3)、2a-2c (No.8)、3a (No.13)、4a (No.22)、5a (No.24)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。

クリは暖帯から温帯下部に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。

4.考察

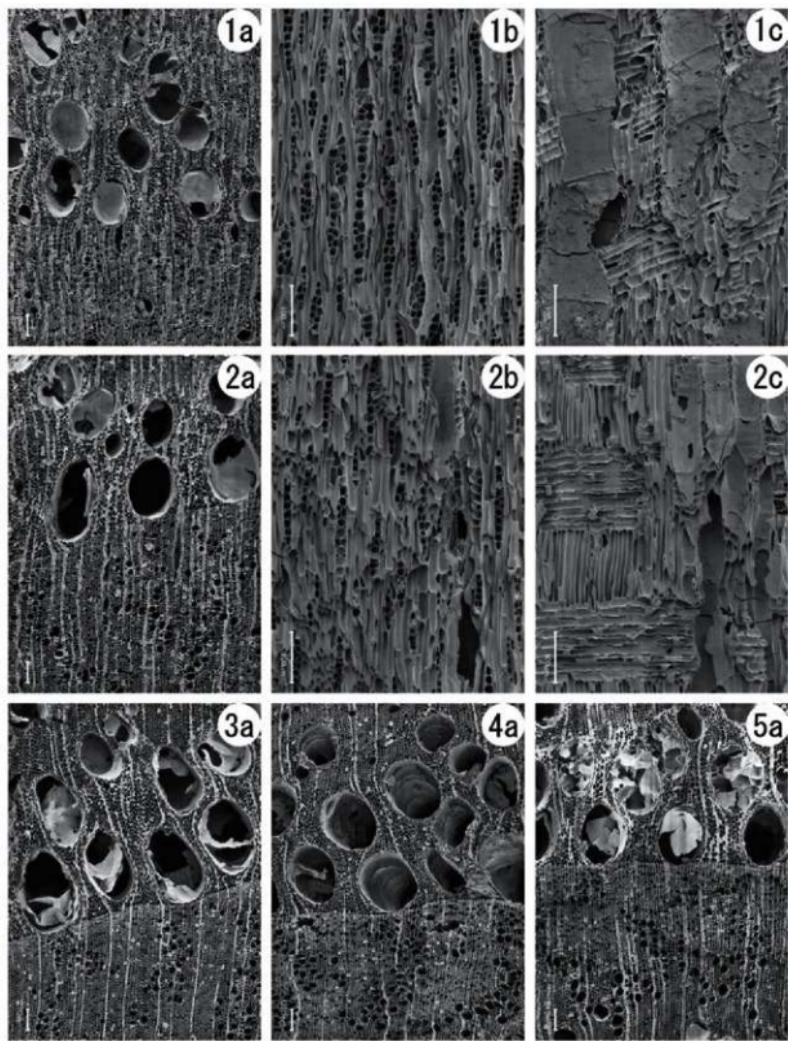
縄文時代中期（井戸尻式2段階、勝坂3式期）のPJ-3号住居から出土した炭化材のうち、今回分析を行った試料はいずれもクリであった。クリの材は、重硬で保存性が高く、加工はそれほど困難ではない（平井、1996）。建築部材としては非常に有用な材である。北杜市で樹種が確認されている縄文時代中期の住居跡出土の炭化材の例をみると、社口遺跡ではクリと、クリまたはコナラ節が多く、海道前C遺跡ではクリが多くオニグレミやトチノキも確認されている（伊東・山田編、2012）。今回の南沢遺跡の試料ではクリのみが確認されたが、周辺地域の木材利用傾向と矛盾していない。

引用文献

- 平井信二(1996)木の大百科。394p、朝倉書店。
伊東隆夫・山田昌久編(2012)木の考古学
—出土木製品用材データベース—。449p、海青社。

表1 樹種同定結果一覧

No.	試料注記	樹種	備考
1	6-004-2017	PJ003-63	クリ 節
2	6-004-2017	PJ003-64	クリ -
3	6-004-2017	PJ003-65	クリ -
4	6-004-2017	PJ003-66	クリ -
5	6-004-2017	PJ003-67	クリ -
6	6-004-2017	PJ003-68	クリ -
7	6-004-2017	PJ003-69	クリ -
8	6-004-2017	PJ003-70	クリ -
9	6-004-2017	PJ003-71	クリ -
10	6-004-2017	PJ003-72	クリ -
11	6-004-2017	PJ003-73	クリ -
12	6-004-2017	PJ003-74	クリ -
13	6-004-2017	PJ003-75	クリ -
14	6-004-2017	PJ003-76	クリ 節
15	6-004-2017	PJ003-77	クリ -
16	6-004-2017	PJ003-78	クリ -
17	6-004-2017	PJ003-81	クリ -
18	6-004-2017	PJ003-82	クリ -
19	6-004-2017	PJ003-83	クリ -
20	6-004-2017	PJ003-84	クリ -
21	6-004-2017	PJ003-85	クリ -
22	6-004-2017	PJ003-86	クリ -
23	6-004-2017	PJ003-87	クリ -
24	6-004-2017	PJ003-88	クリ -



図版1 炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. クリ (No. 3) 、2a-2c. クリ (No. 8) 、3a. クリ (No. 13) 、4a. クリ (No. 22) 、5a. クリ (No. 24)

a : 横断面、b : 接線断面、c : 放射断面

第2節 PJ-3号住居出土炭化材の炭素14年代測定

中央大学 小林 謙一

山梨県北杜市（旧白州町）南沢遺跡PJ-3号住居出土炭化物試料の分析結果について、報告する。本測定は、東京大学総合研究博物館年代測定室との共同研究として実施した。

1. 分析試料と前処理

試料は2018年3月18日に北杜市埋蔵文化財センターにて佐野隆氏の立ち会いの下に小林が採取した。勝坂3式期（新地平編年（小林ほか2004）9b期併行か）の土器を伴うPJ-3号堅穴住居の火災によると思われる炭化材3本から年輪ごとに採取した。すべてクリの樹幹材である。C10（22年輪を数える）からは最外年輪（1～5年輪）、11～15年輪、21～22年輪、C11（16年輪を数える）からは最外年輪（1～5年輪）、11～15年輪、C13（12年輪を数える）からは最外年輪（1～5年輪）、11～12年輪をブロックで採取した。

前処理は2018年9月19～21日に、国立歴史民俗博物館年代実験室で小林が以下の手順でおこなった。

アセトン中で5分間の超音波洗浄を行った後、クロロホルムとメタノールを容量2対1で混合した溶媒（M混合）による30分間の還流を2回おこなった。次いで、アセトン中で5分間の超音波洗浄を2回おこなった。この操作で、油分や接着剤などの成分が除去されたと判断できる。

酸-アルカリ-酸（AAA: Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、1mol/l (M) の塩酸 (HCl) を用いて80°Cで60分の処理を2回おこなった。アルカリ処理では1回目は0.01Mの水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、2回目は0.1M、3回目以降は1Mを用いて各60分の処理をおこない、溶液に着色がほぼなくなるまで繰り返した。少ない試料は4回、殆どの試料は5回のアルカリ処理をおこなった。さらに、1Mの塩酸 (HCl) を用いて60分の処理を2回おこなった。最後に純水により30分の洗浄を4回おこない中和していることを確認し、試料を回収した。測定試料の前処理の結果は下記の通りである。すべて60～30パーセントの回収率があり、測定に適した良好な遺存状態と捉えられる。

2. 炭素精製およびグラファイト化

炭素精製からAMS測定は東京大学総合研究博物館年代測定室に委託し、2018年11月21日にプロジェクトID:P-18086bとして報告を受けた。

試料は、銀カップに秤量し、elementar社製 vario ISOTOPE SELECT 元素分析計に導入し、燃焼後、精製された二酸化炭素を真空ガラスラインに導入し、あらかじめ鉄触媒約2mgを秤量したコック付き反応管に水素ガス（炭素モル数の2.2倍相当）とともに封入して、650°Cで6時間加熱して実施した（Omori et al. 2017）。

表1 分析試料と前処理の状況

試料番号	試料注記	備考	採取mg	処理mg	回収mg	回収率
YMS-C10-1		22年輪の1-5年輪	357	36	22.48	62.40%
YMS-C10-11	P.J3住 75	11-15年輪	103	23	12.04	52.30%
YMS-C10-21		21-22年輪	132	30	15.72	52.40%
YMS-C11-1	6-004-2017	16年輪の1-5年輪	247	24	7.52	31.30%
YMS-C11-11	P.J3住 74	11-15年輪	931	35	14.25	40.70%
YMS-C13-1	6-004-2017	12年輪の1-5年輪	363	67	30.97	46.20%
YMS-C13-11	P.J3住 64	11-12年輪	1068	44	21.36	48.60%

表2 グラファイト化の結果

資料番号	グラファイトID	試料重量	グラファイト化率	グラファイト重量	Fe重量	C/Fe比
YMS-C10-1	GR-7115	1.88 mg	97.40%	1.13 mg	2.03 mg	0.557
YMS-C10-11	GR-7116	1.90 mg	71.20%	8.33 mg	2.07 mg	0.402
YMS-C10-21	GR-7117	1.96 mg	79.20%	0.95 mg	1.91 mg	0.497
YMS-C11-1	GR-7118	1.93 mg	75.00%	0.87 mg	2.05 mg	0.424
YMS-C11-11	GR-7119	1.84 mg	85.70%	0.96 mg	1.90 mg	0.505
YMS-C13-1	GR-7120	1.86 mg	82.30%	0.93 mg	1.95 mg	0.477
YMS-C13-11	GR-7121	1.92 mg	81.00%	0.94 mg	1.96 mg	0.48

3. AMS 测定結果

グラフィカル化した炭素試料における放射性炭素同位体比の測定は、東京大学総合研究博物館が所有する加速器質量分析装置(AMS)を用いて測定した。慣用 14C 年代(BP 年代)を算出するために、同位体比分別の補正に用いる δ_{13C} 値は AMS にて同時測定した値を用いている(Stuiver and Polach 1977)。

表 4 推定される較正年代と注記 (cal BP 表記)

資料番号	較正年代 (1SD)	較正年代 (2SD)	較正データ
YMS-C10-1	4970 cal BP (15.2% 4952 cal BP)	5036 cal BP (10.3% 5010 cal BP)	IntCal13
	4941 cal BP (53.0% 4879 cal BP)	4979 cal BP (5.1% 4867 cal BP)	
YMS-C10-11	4966 cal BP (12.3% 4852 cal BP)	5034 cal BP (7.7% 5013 cal BP)	IntCal13
	4941 cal BP (55.9% 4879 cal BP)	4978 cal BP (7.7% 4866 cal BP)	
YMS-C10-21	5213 cal BP (11.8% 5194 cal BP)	5277 cal BP (7.9% 5168 cal BP)	IntCal13
	5050 cal BP (16.7% 5028 cal BP)	5126 cal BP (2.2% 5106 cal BP)	
YMS-C11-1	5021 cal BP (9.7% 4973 cal BP)	5071 cal BP (6.4% 4960 cal BP)	IntCal13
	4927 cal BP (0.4% 4920 cal BP)	5039 cal BP (6.5% 5029 cal BP)	
YMS-C11-11	4974 cal BP (15.0% 4855 cal BP)	4981 cal BP (7.8% 4870 cal BP)	IntCal13
	4839 cal BP (46.6% 4880 cal BP)	5035 cal BP (20.2% 5010 cal BP)	
YMS-C11-11	4979 cal BP (16.6% 4856 cal BP)	5040 cal BP (9.4% 4876 cal BP)	IntCal13
	4833 cal BP (31.5% 4884 cal BP)	5003 cal BP (6.4% 5015 cal BP)	
YMS-C13-1	4964 cal BP (11.0% 4850 cal BP)	5033 cal BP (6.4% 5015 cal BP)	IntCal13
	4942 cal BP (56.4% 4879 cal BP)	4977 cal BP (8.9% 4866 cal BP)	
YMS-C13-11	5041 cal BP (83.5% 4860 cal BP)	5045 cal BP (0.5% 4876 cal BP)	IntCal13
	4896 cal BP (2.7% 4800 cal BP)	4898 cal BP (2.0% 4894 cal BP)	

較正年代の算出には、OxCAL4.2 (Bronk Ramsey, 2009) を使用し、較正データには IntCal13 (Reimer et al. 2013) を用いた。

ウイグルマッチングをおこなうには樹齢が短く、測定年輪数が少ないため、適さないが参考まで OxCAL4.3.2 (Ramsey2009:2017バージョンアップ) の combine プログラムを用いてウイグルマッチングをおこなう。C10 は 4975 ~ 4930 cal BP に 60.9% の確率で含まれる年代、C11 は 4975 ~ 4870 cal BP に 78.9% の確率で含まれる年代、C13 は 4975 ~ 4865 cal BP に 83.7% の確率で含まれる年代である。おおむね合致した年代を含み、これまでの測定結果からの実年代比定に照らすと勝坂 3 式後半（新地平 9bc 期）から曾利 1a 式期（新地平 10a 期）に相当（小林 2019）し、勝坂 3 式後半の年代として整合的である。

本稿は、東京大学測定試料について東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室が報告した稿に、小林が前処理の状況および年代の考察を追記し、まとめ直した稿である。測定は 2019 年度日本学術振興会科学研究費助成事業（基盤 B）「東アジア新石器文化の実年代体系化による環境変動と生業・社会変化過程の解明」（研究代表者 小林謙一 課題番号 18H00744）の経費による。試料前処理には国立歴史民俗博物館坂本稔、箱崎真隆、AMS および IRMS 測定には東京大学米田穣教授、尾寄大真および大森貴之特任研究員ほか各氏の教示・協力を戴いた。

引用文献

- 小林謙一・中山真治・黒尾和久 2004 「多摩丘陵・武藏野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定（補）」『シンポジウム縄文集落研究の新地平3—勝坂から曾利へ—』（発表要旨・資料） 縄文集落研究グループ・セツルメント研究会
小林謙一 2019 『縄文時代の実年代講座』同成社

表 3 放射性炭素年代測定の結果

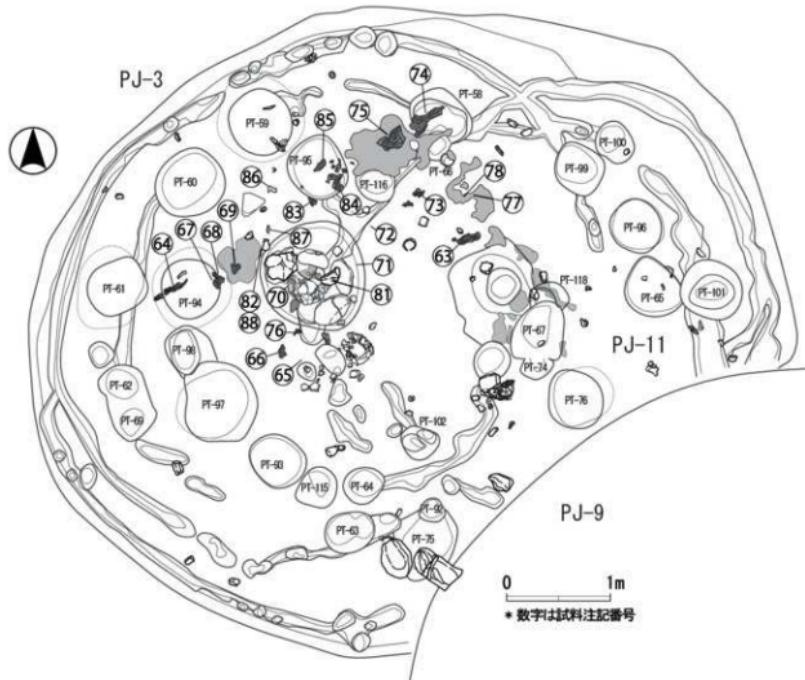
資料番号	測定 ID	14C 年代	補正用 δ_{13C}
YMS-C10-1	TKA-19931	4384 ± 20 BP	-29.1 ± 0.4 ‰
YMS-C10-11	TKA-19932	4380 ± 20 BP	-27.6 ± 0.4 ‰
YMS-C10-21	TKA-19933	4440 ± 22 BP	-27.0 ± 0.6 ‰
YMS-C11-1	TKA-19934	4391 ± 20 BP	-29.8 ± 0.4 ‰
YMS-C11-11	TKA-19935	4401 ± 20 BP	-27.9 ± 0.4 ‰
YMS-C13-1	TKA-19936	4378 ± 20 BP	-24.9 ± 0.5 ‰
YMS-C13-11	TKA-19937	4410 ± 20 BP	-19.1 ± 0.5 ‰

14C 年代の誤差は 1 標準偏差を示す。

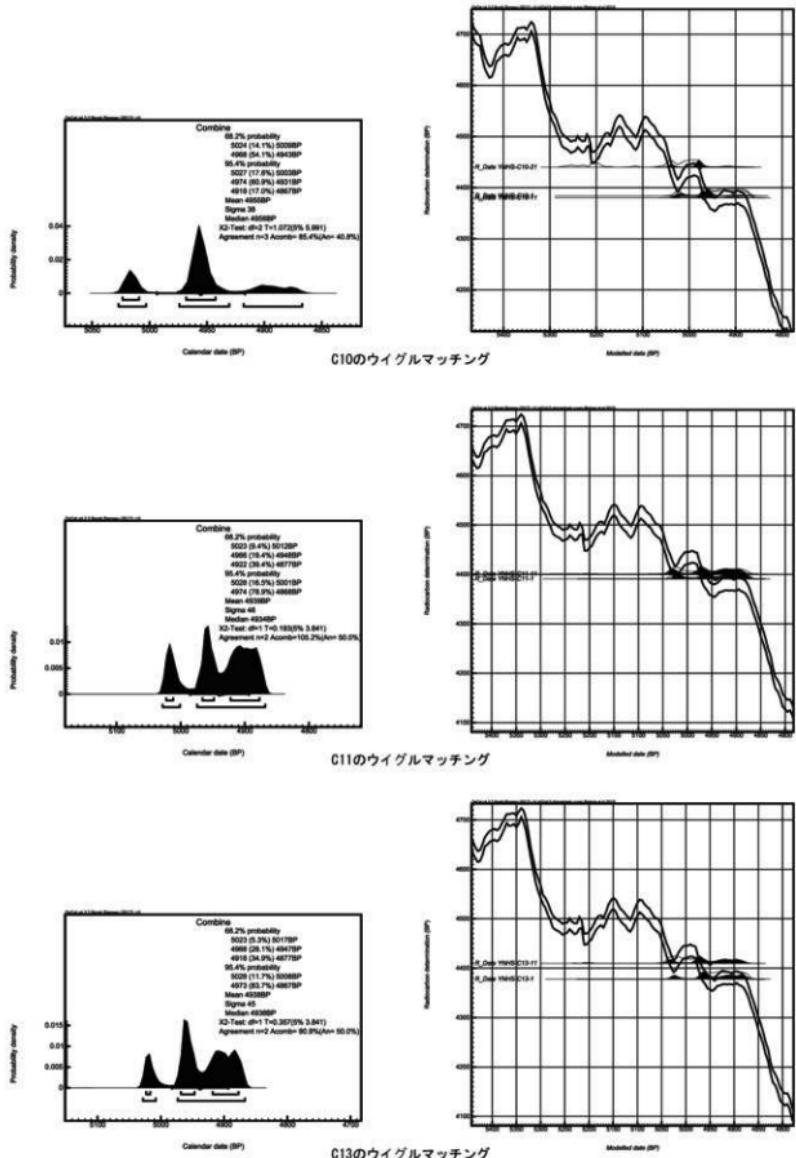
表 5 推定される較正年代と注記 (BC/AD 表記)

資料番号	較正年代 (1SD)	較正年代 (2SD)	較正データ
YMS-C10-1	3018BC (15.2% 3008BC)	3007BC (10.3% 3018BC)	IntCal13
	2992BC (5.3% 2980BC)	3038BC (8.5% 2988BC)	
YMS-C10-11	3018BC (12.3% 3008BC)	3008BC (7.7% 3008BC)	IntCal13
	2992BC (5.5% 2980BC)	3028BC (8.7% 2978BC)	
YMS-C10-21	3264BC (11.8% 3268BC)	3238BC (27.9% 3218BC)	IntCal13
	3101BC (16.7% 3108BC)	3177BC (2.2% 3158BC)	
YMS-C11-1	3072BC (39.7% 3024BC)	3122BC (64.6% 3018BC)	IntCal13
	2978BC (0.4% 2978BC)	3098BC (6.5% 3038BC)	
YMS-C11-11	3028BC (15.0% 3008BC)	3008BC (16.9% 3028BC)	IntCal13
	2990BC (46.6% 2980BC)	3028BC (7.8% 2988BC)	
YMS-C11-11	3096BC (20.2% 3061BC)	3098BC (16.6% 3068BC)	IntCal13
	3038BC (16.6% 3008BC)	3098BC (9.4% 2978BC)	
YMS-C13-1	2964BC (31.3% 2968BC)	3048BC (6.4% 3068BC)	IntCal13
	3018BC (11.8% 3008BC)	3048BC (8.9% 2978BC)	
YMS-C13-11	2990BC (56.4% 2980BC)	3028BC (8.9% 2978BC)	IntCal13
	3098BC (63.5% 3018BC)	3098BC (9.4% 2978BC)	
YMS-C13-11	2978BC (2.7% 2978BC)	3098BC (9.4% 2978BC)	IntCal13
	2949BC (2.0% 2948BC)	3098BC (2.0% 2948BC)	

- Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51(4), 337-360.
- de Vries, H., and G.W. Barendsen (1954). Measurements of age by the carbon-14 technique. Nature 174, 1138-1141.
- Omori, T., Yamazaki, K., Itahashi, Y., Ozaki, H., Yoneda, M. (2017) Development of a simple automated graphitization system for radiocarbon dating at the University of Tokyo. The 14th International Conference on Accelerator Mass Spectrometry.
- Reimer, P.J., E. Bard, A. Bayliss, J.W. Beck, P.G. Blackwell, C. Bronk Ramsey, C.E. Buck, H. Cheng, R.L. Edwards, M. Friedrich, P.M. Grootes, T.P. Guilderson, H. Hajdas, C. Hatte, T.J. Heaton, D.L. Hoffmann, A.G. Hogg, K.A. Hughen, K.F. Kaiser, B. Kromer, S.W. Manning, M. Niu, R.W. Reimer, D.A. Richards, E.M. Scott, J.R. Southon, R.A. Staff, C.S.M. Turney, and J. van der Plicht (2013). IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.
- Stuiver, M., and H.A. Polach (1977). Discussion: Reporting of ^{14}C data. Radiocarbon 19(3), 355-363.



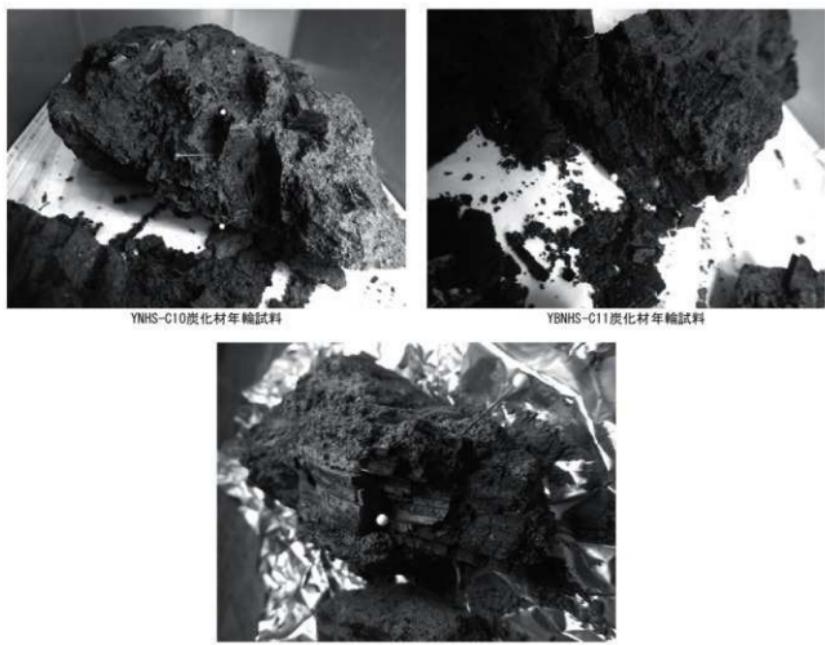
第 119 図 PJ-3 号住居炭化材試料の採取位置



第120図 C10～C13のウイグルマッチング



第 121 図 試料の採取状況



第 122 図 年輪試料サンプリングの状況

第3節 扇状地堆積層出土炭化材の樹種同定と年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

南沢遺跡（山梨県北杜市白州町鳥原南沢に所在）は、神宮川によって形成された扇状地上に位置する。これまでの発掘調査により本遺跡では、縄文時代中期中葉を主体とする堅穴住居等、弥生時代前期、古墳時代、平安時代の遺物が採取されている。今回、縄文時代中期の遺構面から検出された土坑の年代および遺構面を覆う扇状地堆積物の年代を推定するため、炭化物について樹種同定と放射性炭素年代測定を行う。

1. 試料

試料は、DK032号土坑と基本層序から採取されている。DK032号土坑は、縄文時代中期の遺構検出面から検出される不整形土坑で、炭化材がまとまって出土するとされ、他の縄文時代の遺構埋土よりも若干明るい色調のため縄文時代の遺構と異なる可能性もあるとされている（第109図）。埋土から出土した炭化材は、接合関係が認められたことから元来はよい材であったと推定されている。これら採取された炭化材のうち、DK32-1・3・5の3点について炭化材同定を行い、またDK32-3の1点について放射性炭素年代測定を実施する。

一方、基本層序では、縄文時代中期の遺構を覆う約2mの扇状地堆積物が確認されている（第119図）。この扇状地性堆積物に含まれている炭化材が採取され、その内の2層、6層、12層から採取された3点（資料名：CH2-1・CH6-1・CH12-2）について炭化材同定と放射性炭素年代測定を実施する。

2. 分析方法

(1) 炭化材同定

試料観察した後、周囲をトリミングして年代測定用試料とする。樹種同定には、トリミングの際に切り落とした残滓を用いる。剃刀を用いて木口（横断面）・杼目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面を作成し、電子顕微鏡で観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

(2) 放射性炭素年代測定

採取試料の周囲を削り落として試料を調整する。削り落とした部分は樹種同定に用いる。試料は、塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA: Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はelementar社のvario ISOTOPe cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-II）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-06等）、バックグラウンド試料（IAEA-Cl）の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う

(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、Oxcal4.3(Bronk, 2009)、較正曲線は Intcal13 (Reimer et al., 2013) である。

3. 結果

(1) 樹種同定

結果を表1に示す。DK032 号土坑で検出された炭化材 3 点はいずれもケヤキである。

基本層序で採取された炭化材は、CH2-1 と CH6-1 がクリ、CH12-2 がヒノキ科である。

以上、針葉樹 1 種類、広葉樹 2 種類について、検出された種類の形態的特徴を記す。

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型?(保存悪くはつきりしない)。放射組織は単列。1~15細胞高。

・クリ (Castanea crenata Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔團部は 3~4 列、孔團外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1~15細胞高。

・ケヤキ (Zelkova serrata (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔團部は 1~2 列、孔團外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帶状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~6細胞幅、1~50細胞高。

(2) 放射性炭素年代測定

結果は樹種同定結果と合わせて表2、図1に示す。分析試料はいずれも定法での処理を行い、加速器質量分析装置を用いた年代測定に必要な炭素量が回収できている。測定の結果、No. 2(DK32-3) は $2,820 \pm 20$ BP、No. 4(CH2-1) は $1,880 \pm 20$ BP、No. 5(CH6-1) は $2,095 \pm 20$ BP、No. 6(CH12-2) は $3,060 \pm 20$ BP である。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期 (4C の半減期 5,730 ± 40 年) を較正することによって、暦年で近づける手法である。較正用データーセットは、Intcal13 (Reimer et al., 2013) を用いる。2 σ の値は、No. 2(DK32-3) は $2,968 \sim 2,860$ calBP、No. 4(CH2-1) は $1,877 \sim 1,737$ calBP、No. 5(CH6-1) は $2,125 \sim 2,000$ calBP、No. 6(CH12-2) は $3,350 \sim 3,210$ calBP である。

表2. 放射性炭素年代測定結果

試料	性状/ 樹種	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代						Code No.
					年代値				確率 %		
No. 2 (DK32-3)	炭化材 ケヤキ	AAA (IM)	2820 ± 20 (2818 ± 20)	-23.02 ± 0.22	σ 2 σ	cal BC 1001 - cal BC 970 cal BC 962 - cal BC 934 cal BC 1019 - cal BC 911	2950 - 2919 2911 - 2883 2968 - 2860	calBP calBP calBP	36.2 32.0 95.4	YU- pal- 0502	11498
No. 4 (CH2-1)	炭化材 クリ	AAA (IM)	1880 ± 20 (1878 ± 20)	-27.22 ± 0.22	σ 2 σ	cal AD 79 - cal AD 136 cal AD 73 - cal AD 214	1872 - 1815 1877 - 1737	calBP calBP	68.2 95.4	YU- pal- 0504	11499
No. 5 (CH6-1)	炭化材 クリ	AAA (IM)	2095 ± 20 (2096 ± 20)	-24.77 ± 0.25	σ 2 σ	cal BC 164 - cal BC 92 cal BC 69 - cal BC 61 cal BC 176 - cal BC 51	2113 - 2041 2018 - 2010 2125 - 2000	calBP calBP calBP	62.5 5.7 95.4	YU- pal- 0504	11500
No. 6 (CH12-2)	炭化材 ヒノキ科	AAA (IM)	3060 ± 20 (3058 ± 20)	-25.23 ± 0.21	σ 2 σ	cal BC 1385 - cal BC 1340 cal BC 1316 - cal BC 1280 cal BC 1401 - cal BC 1261	3334 - 3289 3285 - 3229 3350 - 3210	calBP calBP calBP	38.6 29.6 95.4	YU- pal- 0505	11501

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。

2) BP 年代値は、1950 年を基点として前年以前であることを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68.2% が入る範囲) を年代値に換算した値。

4) AAA は、院・アルカリ・酸処理を示す。

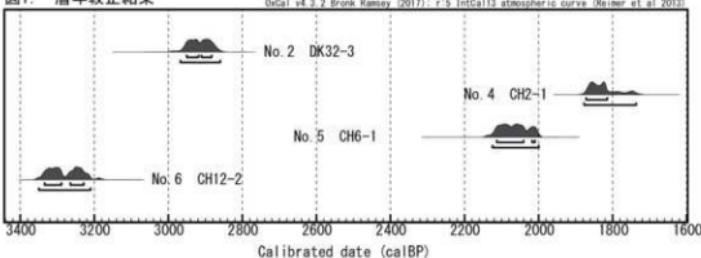
5) 層年の計算には、Oxcal v4.3.2 を使用

6) 層年の計算には、1 新目まで示した年代値を使用

7) 較正データーセットは Intcal13 を使用。

8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 新目を丸めていない。

図1. 厳年校正結果



4. 考察

分析を行った土坑内の木材はケヤキであり同一個体と考えられる所見と矛盾しない。また、年代値は約2,900年前で、遺構確認面の時代観、すなわち縄文時代中期中葉より新しい。ケヤキは落葉樹で谷筋などやや湿った明るい場所を好みが、遺跡の立地環境と矛盾せず、当時近傍に生育していた樹木を使ったことが窺える。

扇状地堆積物の結果は層位的に矛盾せず、下位よりCH12-2が約3,300年前、CH6-1が約2,100年前、CH2-1が約1,800年前である。また縄文時代中期中葉の遺構確認面を覆う扇状地性堆積物に含まれる炭化物とされることから、遺構との時代観とも矛盾しない。樹種は、ヒノキ科とクリである。炭化していることから、人間活動に伴い火熱を受けたものが再堆積したと思われる。いずれも硬く、炭になりやすい樹木であることから、炭化材として残りやすい種類である。また、遺跡の立地環境から、周辺に生育しやすい樹木でもあり、近傍に生育していた樹木を燃焼して使ったことが窺える。

なお、本遺跡から南へ約2km離れた堰口遺跡でも同様に扇状地性堆積物が確認できるとされている。本遺跡で確認される扇状地性堆積物は、年代値などを考慮すると一過性の堆積物でないとみられ、縄文時代後晩期から平安時代以前に生じた複数回に渡る堆積物と考えられる。ところで、約3~2千年前は現在よりも海水準が低下した、いわゆる「弥生の小海退」期にあたる。この時期には、甲府盆地内の練邱部、静岡県の安倍川流域（例えば、財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所, 1993）などでも扇状地が発達することが明らかにされている。したがって、本遺跡周辺でみられる扇状地の発達も涼冷・多雨化など気候変動に伴う関連している可能性もある。今後さらに資料を蓄積して、遺跡を取りまく環境変化とそれに伴う人間活動について明らかにしていく必要があるだろう。

引用文献

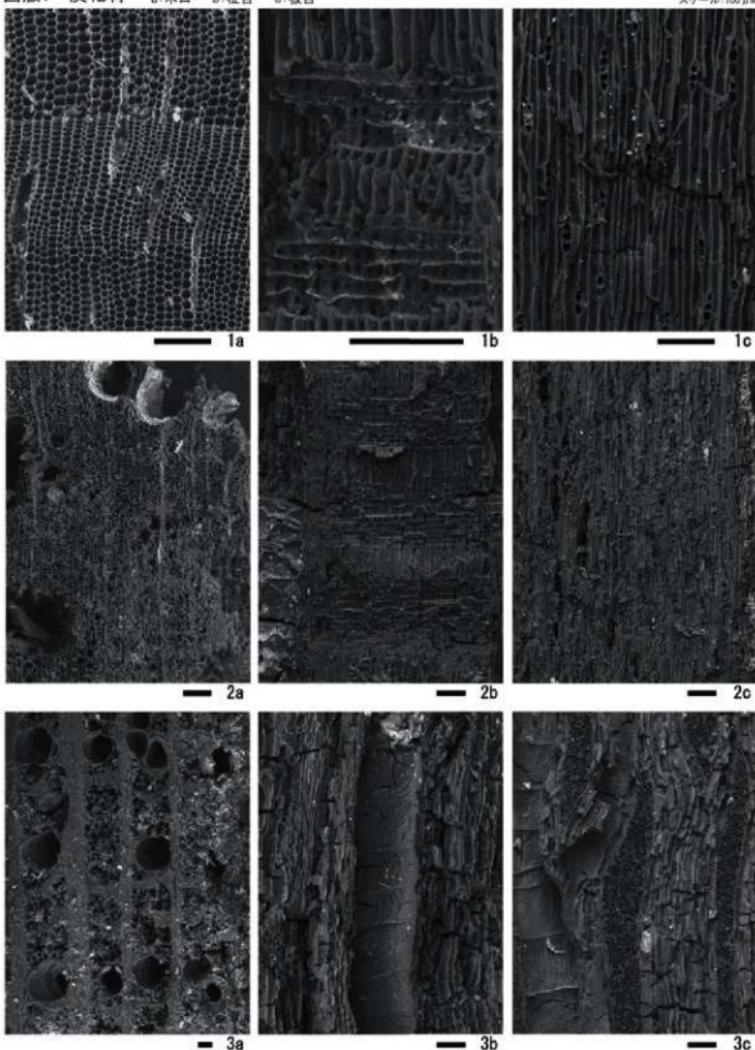
- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.
- 林 昭三, 1991, 日本産木製微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck J.R., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Chen H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Hedges L., Hogg C., Heaton T.J., Hoffmann DL., Hogg MA., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-30,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz L. and Gasson P.E. (編), 2006, 鈴蘭樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語訳監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz L. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 国説木材組織. 地球社, 176p.
- Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of ¹⁴C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯

添(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所, 1993. 静岡県埋蔵文化財調査研究会調査報告書第46集 池ヶ谷遺跡II(自然科学編) 昭和63年度~平成2年度静清バイパス(池ヶ谷地区)埋蔵文化財発掘調査報告書, 296p.

図版1 炭化材 1:ヒノキ科 (No. 6)
a:木口 b:板目 2:クリ (No. 5)
c:板目 3:ケヤキ (No. 2)

スケール: 100 μ m



第4節 種実等の圧痕調査

南沢遺跡の今次発掘調査で出土した土器破片の総量は 269,919g（約 270 kg）で、その大半は縄文時代中期前葉から中葉の土器で、わずかに縄文時代後期から平安時代の土器を含む。これらの土器を対象にして悉皆的な圧痕調査を実施した。その結果は種実等圧痕集計表（第5表）に提示し、第6表圧痕分析一覧表と圧痕レプリカ写真は付属 DVD に収録した。

圧痕調査は土器の注記作業と接合作業の段階で圧痕があるものをすべて抜き出し、圧痕調査に熟練した作業員が圧痕か、単に土器表面の繊、鉱物が脱落した空隙かを判別したのち、なんらかの圧痕と認められる場合にはシリコンゴムでレプリカを作成し、実体顕微鏡、デジタルマイクロスコープ (HIROX 社製 KH-1300)、走査型電子顕微鏡（日本電子 JCM-7000）で観察して同定した。さらに土器表面で確認できない潜在圧痕の有無を確認するために軟 X 線検査装置（ソフテックス社製 M-100・NX-04H）で X 線検査した。なお潜在圧痕については第6表に点数を記載するにとめた。種同定のためには土器を破壊してレプリカを作成するか、もしくは X 線 CT スキャナでモーデリングする必要があるからである。

表出圧痕からレプリカを作成した点数は 573 点でその多くが植物茎、木材片、植物断片などであった。有用植物とされる種はマメ科 4 点（マメ科と思われるものを含む。以下同じ）、ササゲ属 46 点、ダイズ属 23 点、ヤブマメ 1 点、シソ属 21 点、ミズキ 2 点、サンショウ 1 点、アワ 6 点、キビ 4 点である。アワとキビは縄文時代晩期末から弥生時代とみられる土器で検出された。ヤブマメは、マメ科圧痕が多いハケ岳南麓にあって初めて確認された。植物以外ではゾウムシ 1 点が確認された。

同定された種ごとに検出率を算出した。検出率は検出点数 / 土器總重量で算出し、土器 100 kgあたりの検出点数で表した。有用植物ではササゲ属が 17 点 / 100 kg と最多で、ダイズ属 8.5 点 / 100 kg、シソ属 7.7 点 / 100 kg である。マメ科全体の検出率は 27.4 点 / 100 kg で、ハケ岳南麓域の同時期の遺跡と比べると多い（佐野 2018）。ハケ岳南麓の縄文時代中期遺跡でよく検出されるミズキ、サンショウは南沢遺跡では少ない。潜在圧痕が若干数、確認されたもののこれらの検出率に大きく影響する点数ではなかった。

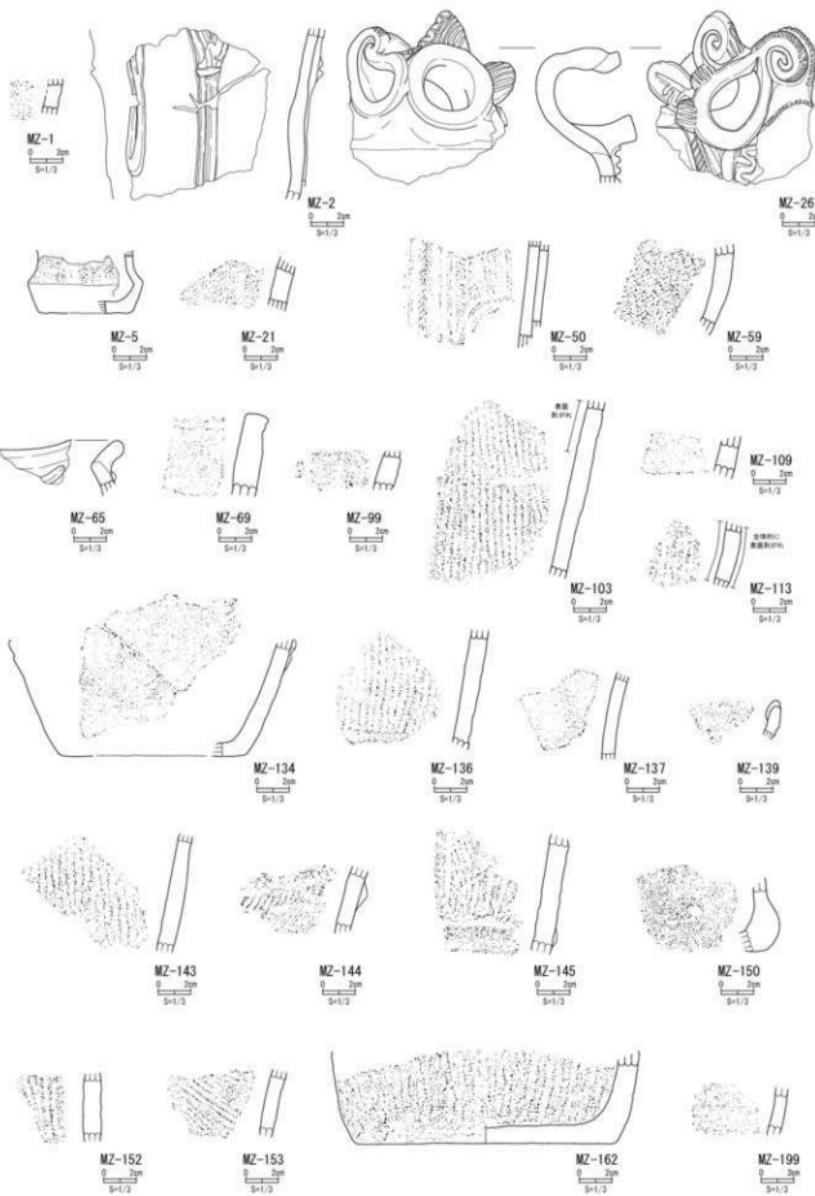
植物茎、木材片、植物片などの塵芥の類が 17 点 / 100 kg から 46 点 / 100 kg と多く検出されている。これら 3 種の塵芥類全体の検出率は 108 点 / 100 kg となる。塵芥類が土器の製作過程で偶発的に混入したものと仮定すると、有用植物の検出率はこれら塵芥類よりも低率であることから、南沢遺跡の有用植物種実は意図的に土器胎土に混入されたものではなく、偶発的に混入した可能性が考えられる。もとより混入した塵芥、種実の大きさの違いなども考慮のうえ検討する必要があるが、このことは南沢遺跡の土器で同じ種類の種実が一個体の土器に多量に混入する例が少ないと整合的である。今次調査で同種多量混入が考えられるのは試料番号 MZ-0177 (PJ-8 号住居出土の土器 111)、試料番号 MZ-0250 (実測図なし) の 2 点の土器に限られる。

土器に混入した有用植物種実は意図的に混入されたのか、偶発的に混入したのかの識別は縄文時代の資源利用における当該植物種の位置づけに係る課題であり、にわかに結論が導き出せないが、今後も悉皆調査に基づく分析を蓄積する必要がある。

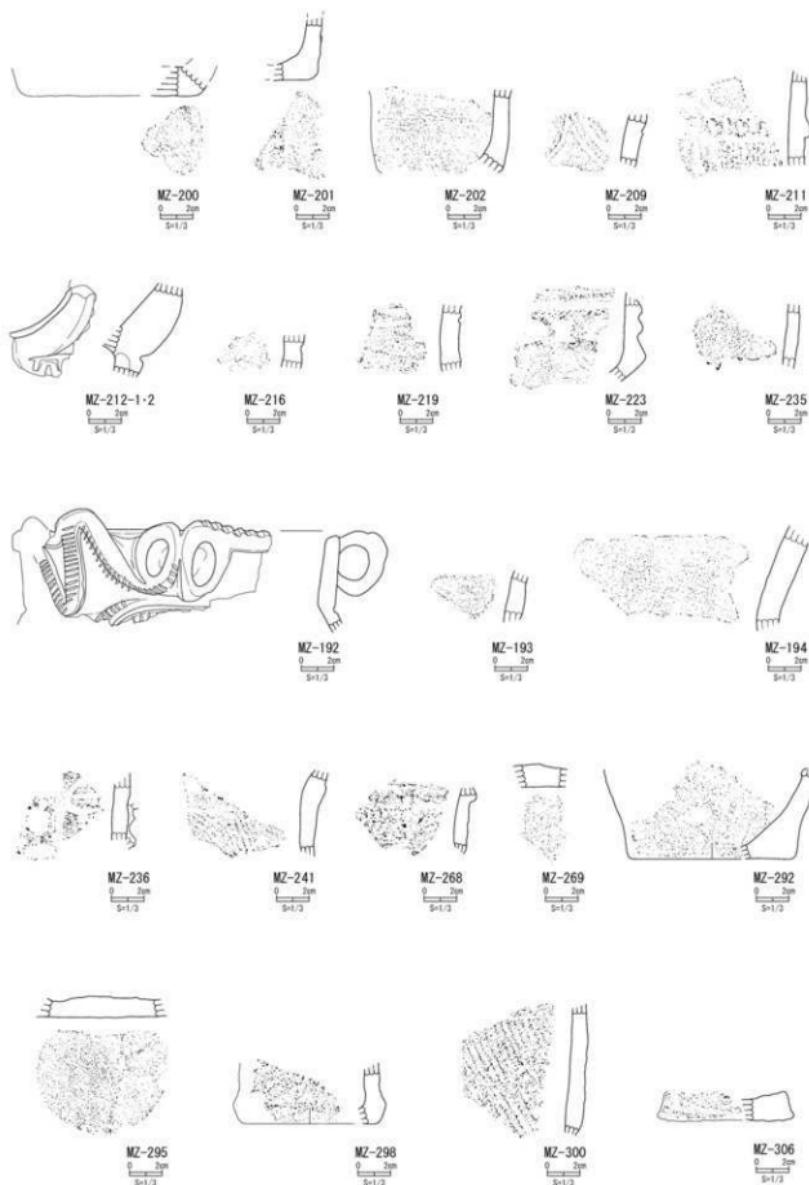
佐野隆 2018 「ハケ岳南麓と周辺地域における堅果類とマメ類利用」『縄文時代の植物資源の利用・管理・栽培を考える 資料集』pp. 33-36 山梨県埋蔵文化財センター

第5表
南沢遺跡の種実等圧痕集計表

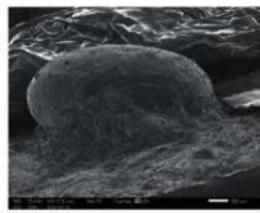
種別	点数	100kgあたり 検出率(点)	備考
マメ科	1	1.482	
マメ科?	3		
ササゲ属	41	17.042	
ササゲ属?	5		
ダイズ属	20	8.521	
ダイズ属?	3		
ヤブマメ	1	0.370	縄文中期中葉
シソ属	20	7.780	
シソ属?	1		
ミズキ	2	0.741	
サンショウ	1	0.370	
アワ	4	1.462	晩期末～弥生
アワ?	2	0.741	晩期末～弥生
キビ	2	0.741	晩期末～弥生
キビ?	2	0.741	晩期末～弥生
種実	2	0.741	
種?	3	1.111	
堅果類	5	1.852	
堅果類?	1	2.223	
植物茎	122	45.199	
植物片	46	17.042	
木材	125	46.310	
茎	3	1.111	
ゾウムシ	1	0.370	縄文中期中葉
不明	125	46.310	
石ほか	27	10.003	
合計	573		



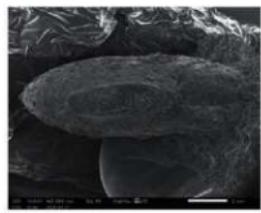
第123図 種実圧痕を検出した土器



第 124 図 種実圧痕を検出した土器



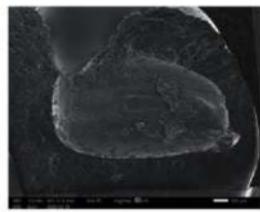
ダイズ属 MZ-0185



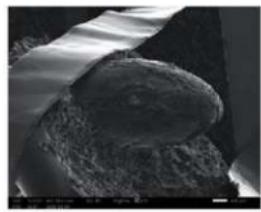
ダイズ属 MZ-0136



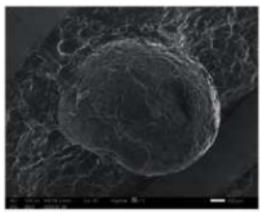
ササゲ属 MZ-0211



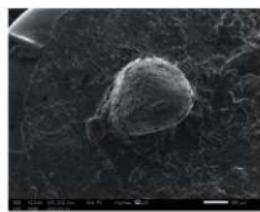
ササゲ属 MZ-0250



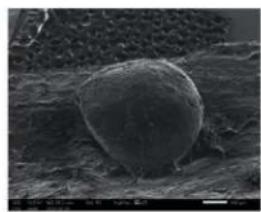
ヤブマメ属 MZ-0219



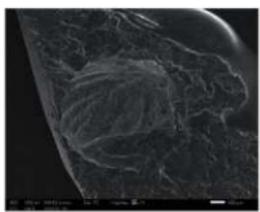
ヤブマメ属 MZ-0219



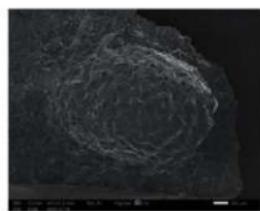
シソ属 MZ-0223



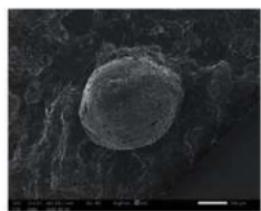
シソ属 MZ-0232



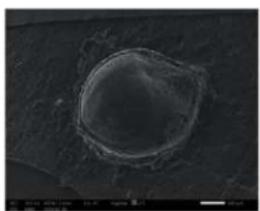
ミズキ MZ-0007



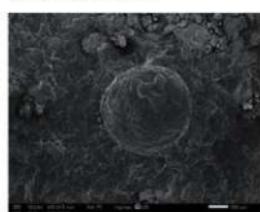
サンショウ属 MZ-0269



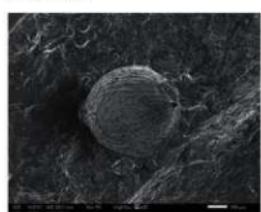
アワ MZ-0012



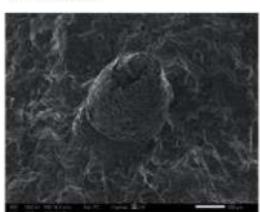
キビ MZ-0235-2



不明種実 MZ-0139



不明種実 MZ-0159-7



ゾウムシ科 MZ-0165-1

第 125 図 種子圧痕写真

調査前の状況

1区を南西から撮影。背景の木立は鳥原地区の諏訪神社。遠景はハケ岳



調査前の状況

2区を南から撮影。木立は鳥原地区の諏訪神社。写真左端の巨摩山地から流れる小河川が南沢遺跡一体の扇状地地形を形成し、厚い扇状地堆積層に土砂を供給したと考えられる。



調査前の状況

2区のさらに南側の農地を北東から撮影。平坦に造成された水田下には谷地形が映出され、遺構確認面までの深さは地表下 3m 以上に達した。
背景は鳥原集落。遠景は巨摩山地と南アルプス





PJ-1 号住居

検出状況（中央）。南西から撮影。
写真左下は PJ-2 号住居、右上は
PJ-6 号住居。

2 軒の住居のあいだでぼんやりと黒く変色した落ち込みを検出し、PJ-1 号住居とした。



PJ-1 号住居

完掘状況。南から撮影。
竪穴は残存せず炉。周溝も検出され
なかった。
ピンボールを立てたビットを柱穴と
判断した。

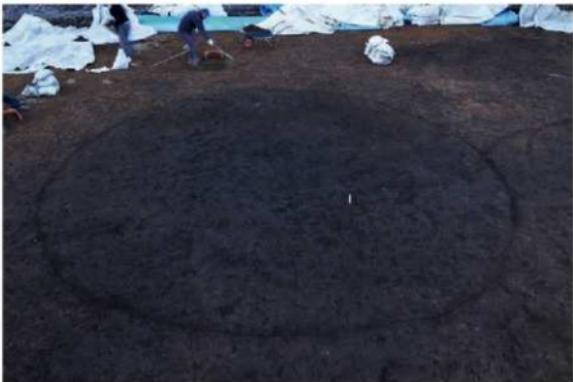


PJ-1 号住居 DK2 号土坑

住居北東角で検出した土坑。PJ-1 号
住居の貯蔵穴と判断した。

PJ-2 号住居

検出状況。南から撮影。写真右側がPJ-1号住居。写真下側まで暗い落ち込みがみえるが遺構ではない。

**PJ-2 号住居**

遺物出土状況。南から撮影。
竪穴の保存状態は不良で浅い。遺物
は床面からやや浮いた埋土下層で出
土した。

**PJ-2 号住居**

埋土断面。北東から撮影。
竪穴は浅く、黒褐色土が堆積してい
た。





PJ-2 号住居

完掘状況。南から撮影。
拡張と建替え（柱の更新）を経て、
周溝と柱穴が多数検出された。



PJ-2 号住居

石圓い埋甕炉。南から撮影。
炉石には風化花崗岩のほか台石と思
われる安山岩の扁平円礎、石棒破片
が転用されていた。



PJ-2 号住居 DK5 号土坑

北壁沿いで検出された土坑。南から
撮影。断面は袋状で住居内の貯蔵穴
と思われる。
打製石斧が底面から出土した。

PJ-2 号住居 DK6 号土坑

北東壁沿いで検出した土坑。南から撮影。断面は袋状で住居内の貯蔵穴と思われる。

土坑内から石椎形の石器、石匙、磨石類などが出土した。

**PJ-2 号住居 PT29 号ピット**

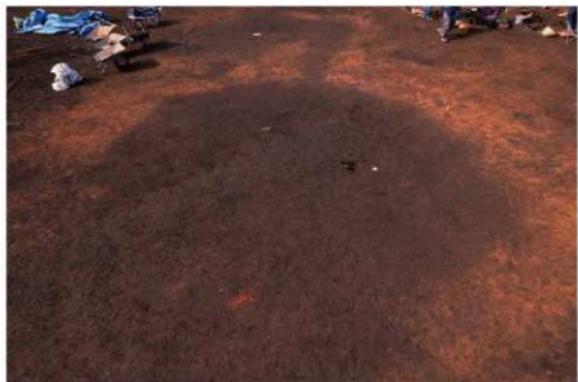
炉の北西側で検出したピット。断面が袋状で住居内の貯蔵穴と思われる。土坑底面近くで未焼成の粘土塊が出土した。

**PJ-2 号住居 PT30 号ピット****PT31 号ピット**

写真右側がPT30号ピット。左側はPT31号ピット。北東から撮影。

PT31号ピットが新しい段階の柱穴、PT30号ピットは旧い段階の柱穴。
どちらからも砂岩の打製石斧、剥片などが出土した。





PJ-3 号住居

検出状況。東から撮影。写真左下の落ち込みは PJ-9 号住居。

検出段階では 1 軒の住居と判断したが発掘調査の結果、PJ-11 号住居が重複していることが分かった。



PJ-3 号住居

遺物と炭化材、焼土の検出状況。南東から撮影。

床面に密着し、あるいはやや浮いて炭化材と焼土が出土した。さらに上位から土器、石器が出土した。

焼土と炭化材は断片的に出土するのみであったが、炭化材が放射状に分布することから焼失住居と判断した。

写真中央やや右寄りに PJ-11 号住居の炉石上面がみえている。



PJ-3 号住居・PJ-11 号住居

完掘状況。南から撮影。写真下側は現状保存した PJ-9 号住居。

PJ-3 号住居、PJ-11 号住居とともに建替えを経て周溝、柱穴が多数検出されたが、炉はそれぞれ 1 基が検出されたのみ。

PJ-3 号住居

炉の検出状況。南から撮影。
炉体土器を埋設し、周囲を扁平礫で
囲む。石皿が炉石に転用されていた。



PJ-3 号住居 PT59 号ピット

北壁沿いで検出された断面窓状の土
坑。北から撮影。住居内の貯蔵穴と
思われる。
土坑底部付近から磨製石斧、滑石製
管玉、剥片などが出土した。



PJ-3 号住居 PT61 号ピット

北西壁沿いで検出された断面窓状の
土坑。南から撮影。住居内の貯蔵穴
と思われる。
土坑底面から磨石類、剥片などが出
土した。





PJ-3号住居 PT75号ビット
南西壁近くで検出された土坑。石皿が出土した。断面は袋状ではないが住居内の貯蔵穴と思われる。



PJ-3号住居 PT93号ビット
南西壁近くで検出された断面袋状の土坑。旧い段階の住居に伴う貯蔵穴であろう。北東から撮影。
埋土中で打製石斧が出土した。



PJ-3号住居 PT94号ビット
炉の西側で検出した断面袋状の土坑。住居内の貯蔵穴と思われる。南から撮影。
土坑確認面には黄褐色粘質の床が貼られていて、旧い段階の住居に伴う貯蔵穴であると推測される。
埋土から小形土器、扁平磚、打製石斧、剝片などが出土した。

PJ-3 号住居 PT97 号ピット

西壁近くで検出された断面袋状の土坑。住居内の貯蔵穴と思われる。東から撮影。

確認面には黄褐色の床が貼られ、古い段階の住居に伴う貯蔵穴とみられる。埋土上層で花崗岩礫が出土した。



PJ-11 号住居

PJ-3 号住居に切られる。完掘状況を南から撮影。写真下方は PJ-9 号住居。



PJ-11 号住居

炉の検出状況を南から撮影。炉体土器を埋設し、石で囲んだ炉。炉内だけでなく周囲の床面も被熱、焼土化していた。





PJ-11 号住居 PT65 号ピット
PJ-11 号住居東壁沿いで検出した断面袋状の土坑。住居内の貯蔵穴と思われる。南から撮影。
埋土中で砂岩剥片が出土した。



PJ-11 号住居 PT96 号ピット
PJ-11 号住居東壁沿いで検出された。断面袋状で貯蔵穴と思われる。北東から撮影。
土坑内で土器破片、剥片が出土した。



PJ-4 号住居
検出状況。南東から撮影。確認面は暗褐色の落ち込みと地山に似た黄褐色土が混じり、住居の輪郭を明瞭に捉えることができなかった。

PJ-4 号住居

完掘状況を南東から撮影。
ピンボールを立てた 4 基のビットが
最新段階の柱穴と思われる。
住居の南壁は擾乱により失われてい
た。



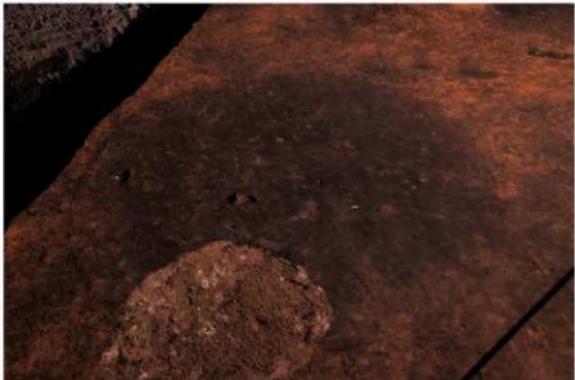
PJ-4 号住居

炉の検出状況。長細い砾、扁平砾を
方形に並べた石囲い炉



PJ-5 号住居

検出状況を南東から撮影。写真下側
の黄灰色円形土坑は後世の擾乱であ
る。





PJ-5 号住居

埋土と遺物の出土状況。北東から撮影。竪穴の保存状態は不良で、遺物はわずかに残る埋土中で出土した。



PJ-5 号住居

完掘状況を南から撮影。炉は原形を
留めず、住居中心からやや北に寄った
位置で浅い凹みが検出されたのみ
であった。

柱穴は 5 基が検出された。



PJ-6 号住居

検出状況を西から撮影。写真上方は
調査区外の農地。

PJ-6 号住居

完掘状況を南西から撮影。



PJ-6 号住居

埋土断面を西から撮影。暗褐色の住居埋土の上位に黄灰色砂質の扇状地堆積層が水平に堆積している。住居埋土の最上部は漸移的で竪穴の掘り込み面は不明瞭であった。

黄灰色砂質層と住居埋土のあいだには人為的な造成、削平の痕跡はうかがえないので、竪穴の保存状態は不良で浅い。扇状地堆積層をもたらした洪水イベントにより削平された可能性もあるう。



PJ-8 号住居

I 区東端で検出した状況を西から撮影。写真上方は調査区外の農地。





PJ-8 号住居

遺物出土状況を北西から撮影。PJ-6号住居の保存状態と同じで、竪穴は浅い。床面からやや浮いて多量の半完形土器、大形破片が出土した。



PJ-8 号住居

多量に出土した土器破片のなかに人面装飾付き土器破片が含まれていた。人面を上に向け、頭部破片の上にやや小ぶりな深鉢形土器が載っていた。西から撮影



PJ-8 号住居

多量に出土した土器の出土状況を北西から撮影。人面装飾付き土器破片の横に「のっぺらぼう」の人面装飾付き土器が出土した。

PJ-8 号住居

埋土断面を北西から撮影。PJ-6 号住居と同様、竪穴埋土と黄灰色砂質層との間は漸移的で、竪穴の掘り込み面は不明瞭である。



PJ-8 号住居

完掘状況。南から撮影。



PJ-10 号住居

I 区で検出され、現状保存した住居（写真中央の落ち込み）。写真上方は PJ-9 号住居と PJ-3 号住居。





PJ-12号住居

2区北東角で検出された住居。南から撮影。



PJ-12号住居

埋土断面を西から撮影。黒褐色土と暗褐色土、黄褐色砂質土がレンズ状に堆積していた。
背後遠景は八ヶ岳



PJ-12号住居

炉体土器の検出状況を東から撮影。
炉体土器の左側には黄褐色粘質土を
貼った床面があり、被熱していた。
貼床下には旧い炉体土器を埋設した
ピットが検出された。

PJ-12 号住居

完掘状況を南から撮影。柱穴は 7 基で建替えが想定される。そのほかのビットは重複する掘立柱建物の柱穴である。



PJ-12 号住居 DK24 号土坑

炉の南西で検出された土坑。断面袋状で住居内の貯蔵穴と思われる。埋土下層は黄褐色土、上層は炭化材混じりの黒色土と黄褐色土の互層が堆積していた。



PJ-12 号住居 DK24 号土坑

土坑底面から土器の大きな破片が出士した。





PJ-13号住居

2区東端でPJ-13号住居など複数の住居が重複して検出された。写真右端の特に暗い落ち込みをPJ-13号住居と命名した。



PJ-15号住居

検出状況を南東から撮影。



PJ-15号住居

遺物の出土状況を南東から撮影。土器、石器は床面から浮いた埋土中で出土した。

PJ-15 号住居

埋土断面を西から撮影。黒褐色土と暗褐色土がレンズ状に堆積する。



PJ-15 号住居

炉の検出状況。炉体土器が埋設され、周囲の床面が弱く被熱、焼土化していた。



PJ-15 号住居

完掘状況を南東から撮影。柱穴は 4 基で貯蔵穴 1 基を伴う。住居の左下部分、やや大きな土坑が貯蔵穴 PT87 号ピット。





PJ-15号住居 PT87号ピット
住居南西角で検出された貯蔵穴と思われる土坑。断面は袋状で、打製石斧、剥片などが出土した。



HO-1号掘立柱建物
2区 PJ-12号住居と重複する掘立柱建物。南から撮影



HO-2号掘立柱建物
2区で検出された掘立柱建物。HO-3号掘立柱建物と重複する。北から撮影

HO-3 号掘立柱建物

2区で検出された掘立柱建物。HO-2号掘立柱建物と重複する。北から撮影



HO-4 号掘立柱建物

2区 PJ-12号住居の南西で検出された
掘立柱建物。南から撮影



HO-5 号掘立柱建物

2区 PJ-12号住居西側で検出された
掘立柱建物。南から撮影





H0-6 号掘立柱建物

2区 PJ-12号住居西側で検出された
掘立柱建物。ピンポールを立てた
ビットは H0-5号掘立柱建物の柱穴。
H0-6号掘立柱建物はやや北側にすれ
ている。



DK12号土坑

2区北東角で検出した土坑。打製石
斧2点が出土した。南から撮影



DK13号土坑

2区北東角で検出した土坑。南から
撮影。貉沢式土器破片が出土した。

DK16 号土坑

2 区 H0-5 号掘立柱建物の南西角に重複する土坑。南から撮影。石匙が出土した。



DK16 号土坑

土坑壁面で石匙が出土した。



DK17 号土坑

2 区の中心からやや北東寄りで検出された。大きな花崗岩礫が底面からやや浮いて出土した。南から撮影。





DK17 号土坑

花崗岩礫の下で打製石斧が出土した。南から撮影。



DK17 号土坑

花崗岩礫を外した状況。南から撮影。粗大な打製石斧は破碎して出土した。



DK19 号土坑

2 区の中心からやや西に寄った位置で検出した。土坑の多くは埋土がぼんやりとした暗褐色土で土坑底面の地山との境界が不明瞭であった。半段階で掘り過ぎてしまうことも多かった。

DK19 号土坑

完掘状況を南から撮影。磨石と礫が出土した。



DK21 号土坑

2 区南西角で検出。南から撮影。



DK21 号土坑

井戸尻式と思われる土器の小片が出土した。南から撮影。





DK23 号土坑

2 区南西角で検出した。土坑は不整形で底面もどこまで発掘してよいやら悩む状況であった。



DK23 号土坑

完掘状況を南から撮影。井戸戻式土器が横倒しになって出土し、傍らから底部のみが出土した。



DK26 号土坑

2 区 PJ-15 号住居北壁で検出した。
住居との新旧関係は不明。

DK26 号土坑

土坑中央、底面からやや浮いて石匙
がまとまって出土した。



DK26 号土坑

石匙は最初 2 点を認め、取り上げた
ところさらに下から 1 点が出土した。



DK27 号土坑検出状況

西から撮影。





DK27 号土坑

2区の中心から北寄りで検出した。
花崗岩礫の横から炭化材、打製石斧、
土器破片などが出土した。北から撮影



DK29 号土坑

2区 PJ-15号住居の西側で検出した。
確認面で粗大な打製石斧が出土した。



DK29 号土坑

完掘状況を南から撮影。

DK31 号土坑

2区西端で検出した不整形土坑。
MZ-1号溝跡、DK32号土坑と重複する。

**DK32 号土坑**

2区西端で検出した不整形土坑。炭化材がまとまって出土した。

**DK32 号土坑**

31号、32号、33号土坑は重複、連結し、
一体の遺構なのか別の遺構なのかす
ら判然としなかった。

多量に出土した炭化材は、樹種同定
したところケヤキと確認され、炭素
14年代法による年代値は縄文時代晚
期前葉から中葉に相当した。





DK33 号土坑

写真中心やや下寄りの深く、影が落ちた箇所が DK32 号土坑。その左側の浅い落ち込みが DK31 号土坑、右側の深い落ち込みが DK33 号土坑。写真的左上から右下にかけての深い落ち込みを MZ-1 号溝跡とした。これらの遺構が一体なのか、別々の遺構なのかすら確認しきれなかったが、炭化材と炭化材粒子、焼土粒子は DK32 号土坑を中心にその周囲の遺構埋土にまで分布していた。



DK34 号土坑

2 区南端で検出した。南から撮影



DK34 号土坑

石皿破片、井戸尻式と思われる土器破片、曾利 II 式土器破片が出土した。

DK38 号土坑

2 区南端で検出した。DK39 号土坑、
DK40 号土坑と重複する。



DK39 号土坑

半蔵状況を南西から撮影。磚がまとまり、黒味がかった埋土が DK39 号
土坑。黄褐色土粒子が目立つ埋土は
DK40 号土坑。



DK39 号土坑

磚の検出状況を北から撮影。磚に混
じって石皿破片、打製石斧、石棒状
磚が出土した。





扇状地堆積層

2区南西端の調査区壁面を撮影。最下部の黄褐色土層が地山と漸移層で、縄文時代中期の遺構はこの層位で確認される。

その上位には黒褐色から暗褐色の砂質土層と黄灰色から灰色の砂層とが交互に堆積する。



扇状地堆積層

同上。耕作土をはぎ取った後でも堆積層は2mに及ぶ。各層位から採取された炭化材を炭素14年代法により年代測定したところ最下位に近い12層黒褐色砂質土層が縄文時代後期後葉、土層中位の6層黄褐色砂層が弥生時代中期後半、上位の2層黄褐色砂層で弥生時代後期後半の年代値が得られた。



試掘トレンチの調査状況

2区北端から、南側の現状保存区域へ発掘したTR32号トレンチの状況。北から撮影。

遺構確認面は南へいくに従って深くなり、背景の鳥原集落手前では3m近い深度となる。

本調査の原因となった圃場整備事業の工事の掘削深度は遺構確認面に達しないことから、工区の大半を現状保存区域とした。

報告書抄録

ふりがな	みなみさわいせき
書名	南沢遺跡
副題	県営耕作放棄地解消・発生防止基盤整備事業白州地区鳥原工区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	北杜市埋蔵文化財調査報告第44集
著者	佐野隆
発行機関	山梨県中北農務事務所 北杜市教育委員会
編集機関	北杜市教育委員会
所在地／電話	山梨県北杜市明野町上手8310番地 0551-42-1375
印刷所	岐北印刷株式会社 山梨県北杜市長坂町長坂上条2313番地
発行日	2020(令和2)年3月31日

ふりがな	やまなしけんほくとしづくしゅうちょうとりはら
所在地	山梨県北杜市白州町鳥原729番地ほか
位置	北緯35°49'53" 東経138°17'48"
調査原因	農業基盤整備事業
調査期間	2017年12月11日～2018年3月30日
調査機関	北杜市教育委員会
調査面積	2,003 m ²
時期	縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代
主な遺構	縄文時代の住居9軒、土坑40基、ピット130基、掘立柱建物跡6棟
主な遺物	縄文時代の土器及び石器
特記事項	現状保存区域あり

北杜市埋蔵文化財調査報告第 44 集

南沢遺跡

県営耕作放棄地解消・発生防止基盤整備事業白州地区烏原工区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2020 年 3 月 27 日印刷

2020 年 3 月 31 日発行

発行 山梨県中北農務事務所

北杜市教育委員会

山梨県北杜市明野町上手 8310 番地

TEL (0551) 42-1375

印刷 峡北印刷株式会社

山梨県北杜市長坂町長坂上条 2313 番地

TEL (0551) 32-3245
